# 北陸新幹線
# 埋蔵文化財発掘調査報告書2

―上田市内・坂城町内―

国分寺周辺遺跡群
上田城跡
風呂川古墳
弥勒堂遺跡
開畝遺跡

1998

日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局
上田市
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

# 北陸新幹線
# 埋蔵文化財発掘調査報告書2

―上田市内・坂城町内―

国分寺周辺遺跡群
上田城跡
風呂川古墳
弥勒堂遺跡
開畝遺跡

1998

日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局
上田市
長野県教育委員会
㈶長野県埋蔵文化財センター

国分寺周辺遺跡群（北より）

国分寺周辺遺跡群（右が北）

国分寺周辺遺跡群（3400号住居跡出土遺物）

国分寺周辺遺跡群（511号住居跡出土遺物）

開畝遺跡（南より）

開畝遺跡（40号土坑）

# 序

長野県下を初めて通る新幹線である北陸新幹線は平成９年10月に開業となりました。翌10年２月には、世界が集った第18回冬季オリンピック長野大会において、東京と長野を結ぶ高速輸送手段として、成功の一翼を担いました。

新幹線軽井沢・長野間の建設は平成３年９月に着工され、㈶長野県埋蔵文化財センターでは建設に先立って、各地で埋蔵文化財の調査を実施してきました。上田市と坂城町でも平成４年から５遺跡が調査されました。

この管内の調査面積は29,290㎡に及び、調査に足かけ４年をかけ、その後の整理作業と合わせますと、６年の歳月を要して、ここに報告書が刊行されました。これは当センター上田調査事務所として調査から報告まで一貫して行われた初めての報告書となりました。

本報告では古墳時代中期の方墳である風呂川古墳や、弥生時代から平安時代までの集落跡が姿を現した国分寺周辺遺跡群、奈良・平安時代の集落跡が見つかった弥勒堂遺跡や聞畝遺跡などについて、調査結果がまとめられています。次に刊行される上信越自動車道関連の報告書と合わせて、今までにない大きな発掘調査の成果として、上田小県地方の古代史研究の上で新たな手掛かりとなる資料を提供できると確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただきました日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局、長野県北陸新幹線局、上田市、坂城町、同教育委員会、地元対策委員会などの関係諸機関、並びにご指導・ご助言をいただいた長野県教育委員会の方々、地域の住民の皆さん、発掘作業や整理作業に従事された多くの皆さん、研究者の皆さん、遺跡見学にお越しいただいた皆さんに対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成10年３月10日

㈶長野県埋蔵文化財センター

理事長　戸田　正明

# 例　言

1　本書は北陸新幹線建設工事にかかわる長野県上田市国分寺崩辺遺跡群（上田市道踏入大屋線建設工事分を含む）・上田城跡・風呂川古墳・弥勒堂遺跡、塩科郡坂城町開畝遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局と上田市の委託を受けた長野県教育委員会が、財団法人 長野県埋蔵文化財センターに委託して実施されたものである。

3　主たる発掘調査および整理作業は、㈲長野県埋蔵文化財センター上田調査事務所で担当した。

4　本書で使用した地図は、日本鉄道建設公団作成の北陸新幹線平面図（1：500）、上田市発行の基本図（1：2,500）・上田市文化財分布図（1：20,000）・上田市地籍図（1：600）、坂城町発行の都市計画図（1：2,500）・遺跡分布図（1：10,000）、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）をもとに作成および複製した。

5　遺跡周辺の地形・地質についての記述は理学博士 山岸猪久馬氏に依頼した。人骨と獣骨の同定記述に際しては京都大学霊長類研究所 茂原信生氏に依頼した。昆虫の同定記述に際しては日本鞘翅学会々員 奥水太仲氏に依頼した。鍛冶関連遺物に際しては国立歴史民俗博物館共同研究員 穴澤義功氏に分類を依頼した。

6　委託関係では、空中写真・測量は株式会社パスコ、株式会社新日本航業、株式会社写真測図、土器の写真実測・一部土器トレースは株式会社こうそく、国分寺周辺の全体図トレースは有限会社佐久マイクロコピーセンター、自然科学分析は株式会社パリノ・サーヴェイ、鍛冶関連遺物の分析鑑定は株式会社川鉄テクノリサーチ 分析・評価センターに依頼した。

7　発掘調査・報告書作成にあたり、多くの方々のご指導・ご協力を得た。本文中にお名前・ご機関名を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。

8　発掘調査および報告書の執筆の担当など本書刊行に関する分担は、第１章に一括掲載してある。

9　本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、長野県立歴史館が保管している。

# 凡　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は原則として次の通りで、該当個所のスケールの上に記してある。
ただし地形図・調査区全体図・遺構配置図などは任意である。

1）主な遺構実測図

竪穴住居跡・掘立柱建物跡　1：80　　住居内施設（炉・カマドほか）　1：40
土　坑　1：40

2）主な遺物実測図

土器拓影　1：3　　土　　器　1：4　　大型土器・瓦　1：6
土　製　品　2：3～1：2　石器・石製品　1：1～1：6　金属製品　1：2～1：3
鍛冶関連遺物　1：2～1：3　銭貨拓影　2：3～1：1　鹿角製品・貝製品　1：2

2　本書に掲載した遺物写真の縮尺は、次の通りである。

土器坏・皿・椀類　1：3　土器甕・壷類　1：4　土製・石製玉類　2：3　銭貨　1：2
その他は原則として実測図と同縮尺

3　遺物の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

**国分寺周辺遺跡群**

観察表に掲載した順に各遺物類ごとに1からの通し番号…土製品、石器・石製品、瓦、金属製品、鍛冶関連遺物、縄文土器

遺構ごとの通し番号　…弥生時代後期～平安時代の土器

**その他の遺跡**

全ての遺物が遺構ごとの通し番号

4　重複遺構については、原則として上端のみを実線で表示している。

5　実測図中のスクリーントーンは以下の事項を表わしている。これら以外の場合は、当該項目中で説明するか、図中に凡例を示した。

1）遺構図

2）遺物図

ア　土器

イ　石器・石製品

ウ　羽口

# 本 文 目 次

**巻頭写真**
**序**
**例言**
**凡例**

**第1章　発掘調査の概要**……1

第1節　調査の経過……1
1　発掘調査に至る経緯……1
2　調査体制と調査期間……1
3　指導者・協力者……4
4　調査参加者……4

第2節　調査の方法……6
1　発掘調査の方法……6
(1)　確認調査と調査範囲（地区）の認定
(2)　調査の方法と手順
(3)　遺跡名称と遺跡記号
(4)　調査区（グリッド）の設定と測量
(5)　遺構記号と遺構番号
2　報告書編集の方法……8
(1)　執筆分担
(2)　写真撮影・焼き付け
(3)　図面の作成
(4)　遺構の記述
(5)　遺物の記述

**第2章　環境**……11

第1節　地形と地質……11
第2節　歴史的環境……19

**第3章　調査**……25

第1節　国分寺周辺遺跡群……25
1　遺跡の概観……25

2　調査の経過と概要……26
3　基本土層……29
4　遺構と遺物……33
(1)　遺構……33
（ｉ）　概観……33
（ii）　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構……40
ア　住居跡　イ　溝跡　ウ　土器・礫集中、石敷遺構（ＳＨ）　エ　土坑
(iii)　古墳時代中期～平安時代の遺構……57
ア　住居跡　イ　掘立柱建物跡　ウ　礎石建物跡　エ　柱穴列（ＳＡ）
オ　土器・礫集中、配石遺構（ＳＨ）　カ　土坑　キ　溝跡　ク　不明遺構（ＳＸ）
(2)　遺物……262
（ｉ）　縄文時代の遺物……262
（ii）　弥生時代後期～古墳時代前期の土器……263
(iii)　古墳時代中・後期の土器……266
(iv)　奈良時代の土器……268
（ｖ）　平安時代の土器……270
(vi)　瓦……276
(vii)　土製品……277
(viii)　石製品・石器……278
(ix)　金属製品……282
（ｘ）　鍛冶関連遺物……284
(xi)　鹿角製品、貝製品……284
5　まとめ……375

第2節　上田城跡……443
1　遺跡の概観……443
2　調査の経過と概要……444
3　基本土層……445
4　まとめ……445

第3節　風呂川古墳……446
1　遺跡の概観……446
2　調査の経過と概要……448
3　基本土層……450
4　古墳の構造と遺物……450
(1)　構造……450
（ｉ）　周溝……450
（ii）　墳丘……454
(2)　土器……454

5　上田市地籍図（旧図）の調査 ……457
6　まとめ ……459

第4節　弥勒堂遺跡 ……461
1　遺跡の概観 ……461
2　調査の経過と概要 ……462
3　基本土層 ……463
4　遺構と遺物 ……465
(1)　平安時代以降の遺構と遺物 ……465
ア　住居跡　イ　鍛冶工房跡　ウ　土坑　エ　土壙墓　オ　自然流路跡
(2)　遺構外出土遺物 ……485
5　まとめ ……487

第5節　開畝遺跡 ……492
1　遺跡の概観 ……492
2　調査の経過と概要 ……494
3　基本土層 ……495
4　遺構と遺物 ……497
(1)　奈良・平安時代 ……497
ア　住居跡　イ　掘立柱建物跡　ウ　土坑
(2)　中世 ……507
ア　土坑
5　まとめ ……510

**付　章　分析と鑑定** ……512

第1節　国分寺周辺遺跡群の自然科学分析・調査 ……512
第2節　国分寺周辺遺跡群出土の土器に付着した昆虫の同定 ……537
第3節　国分寺周辺遺跡群出土の獣骨 ……539
第4節　弥勒堂遺跡出土の人骨および獣骨 ……541
第5節　弥勒堂遺跡出土の鍛冶関連遺物の分析・調査 ……545

**報告書抄録**

# 挿 図 目 次


**調査の概要**

図1　北陸新幹線と遺跡位置
図2　調査区設定（例：周敷遺跡）
図3　カマドの分類

**環境**

図4　塩田平・上田盆地の基盤と盆地の関係
図5　上田盆地の平坦面と段丘面
図6　上田盆地の地質図・地質断面図
図7　千曲川と神川の合流点付近の地形面
図8　染屋層上部の河岸段丘礫層
図9　上田泥流堆積物
図10　周辺遺跡

**国分寺周辺遺跡群**

図11　調査範囲とグリッド・地区の設定
図12　全体図と土層図
図13　遺構配置（1）
図14　遺構配置（2）
図15　遺構配置（3）
図16　遺構配置（4）
図17　遺構配置（5）
図18　遺構配置（6）
図19　弥生後期～古墳前期の遺構分布
図20　313号住居跡
図21　316号・330号住居跡
図22　340号・345号住居跡
図23　457号・529号住居跡
図24　530号・533号住居跡、SH501
図25　303号溝跡
図26　303号溝跡の変遷（案）
図27　304号溝跡
図28　304号溝跡の変遷（案）
図29　SH302（礫、土器の集中）
図30　3419号土坑
図31　301号住居跡
図32　302号住居跡
図33　305号住居跡
図34　306号住居跡
図35　309号住居跡
図36　312号住居跡
図37　317号住居跡
図38　319号住居跡
図39　320号住居跡
図40　321号住居跡
図41　323号住居跡
図42　325号住居跡
図43　326号住居跡
図44　327号住居跡
図45　328号・329号住居跡
図46　331号住居跡
図47　334号住居跡
図48　335号住居跡
図49　336号住居跡
図50　337号住居跡
図51　338号住居跡
図52　339号住居跡
図53　341号住居跡
図54　342号住居跡
図55　343号・344号住居跡
図56　346号住居跡
図57　347号住居跡
図58　350号住居跡
図59　351号・352号住居跡
図60　353号住居跡
図61　354号住居跡
図62　356号住居跡
図63　357号住居跡
図64　358号住居跡
図65　359号住居跡
図66　360号・361号住居跡
図67　362号住居跡
図68　363号住居跡
図69　366号・387号住居跡

図70　367号住居跡
図71　368号住居跡
図72　369号住居跡
図73　370号・371号住居跡
図74　372号住居跡
図75　373号住居跡
図76　374号住居跡
図77　375号住居跡
図78　376号・378号住居跡
図79　379号住居跡
図80　380号住居跡
図81　382号住居跡
図82　383号住居跡
図83　384号住居跡
図84　385号住居跡
図85　391号住居跡
図86　392号・393号住居跡
図87　394号・398号住居跡
図88　395号住居跡
図89　396号・397号住居跡
図90　3400号住居跡（1）
図91　3400号住居跡（2）
図92　401号・402号住居跡
図93　403号住居跡
図94　404号住居跡
図95　407号住居跡
図96　409号住居跡
図97　410号住居跡
図98　411号住居跡
図99　412号住居跡
図100　413号住居跡
図101　414号住居跡
図102　417号住居跡
図103　418号住居跡
図104　419号住居跡
図105　420号住居跡
図106　421号住居跡
図107　423号住居跡
図108　424号住居跡
図109　425号住居跡
図110　426号住居跡
図111　427号住居跡
図112　428号住居跡
図113　429号・430号住居跡
図114　431号住居跡
図115　432号・433号住居跡
図116　434号住居跡
図117　435号住居跡
図118　436号住居跡
図119　437号住居跡
図120　438号・439号・440号住居跡
図121　441号住居跡
図122　442号住居跡
図123　443号住居跡
図124　444号住居跡
図125　445号住居跡
図126　446号住居跡
図127　447号住居跡
図128　448号住居跡（1）
図129　448号住居跡（2）
図130　449号住居跡
図131　450号住居跡
図132　452号・453号住居跡
図133　455号住居跡
図134　458号住居跡
図135　459号住居跡
図136　460号・461号住居跡
図137　462号・463号住居跡
図138　468号・475号住居跡
図139　470号住居跡
図140　472号住居跡
図141　473号住居跡
図142　501号住居跡
図143　502号・503号住居跡
図144　504号住居跡
図145　505号住居跡
図146　506号住居跡
図147　507号・508号住居跡
図148　509号住居跡
図149　510号住居跡

図150　511号住居跡
図151　512号住居跡
図152　514号住居跡
図153　515号住居跡
図154　516号・517号住居跡
図155　520号住居跡
図156　522号・523号住居跡
図157　524号住居跡
図158　525号・526号・527号住居跡
図159　532号住居跡
図160　535号住居跡
図161　536号住居跡
図162　537号住居跡
図163　601号住居跡
図164　602号住居跡
図165　603号・604号住居跡
図166　605号住居跡
図167　606号・607号住居跡
図168　301号建物跡
図169　302号・303号・305号建物跡
図170　306号建物跡
図171　309号建物跡
図172　401号・402号建物跡
図173　403号建物跡
図174　404号建物跡
図175　405号建物跡
図176　406号建物跡
図177　407号・408号建物跡
図178　409号・410号・411号建物跡
図179　412号建物跡
図180　501号建物跡
図181　502号・503号・504号建物跡
図182　505号建物跡
図183　506号建物跡
図184　507号・508号建物跡
図185　308号建物跡（1）
図186　308号建物跡（2）
図187　308号建物跡・ＳＨ３０１（3）
図188　柱穴列（ＳＡ）
図189　土坑（1）
図190　土坑（2）
図191　土坑（3）
図192　土坑（4）
図193　土坑（5）
図194　土坑（6）
図195　土坑（7）
図196　土坑（8）
図197　土坑（9）
図198　土坑（10）
図199　土坑（11）
図200　土坑（12）
図201　土坑（13）
図202　土坑の属性
図203　301号溝跡
図204　302号溝跡
図205　305号溝跡
図206　402号・403号・404号溝跡
図207　501号溝跡
図208　502号溝跡
図209　503号・504号・505号・506号・507号溝跡
図210　508号・509号・601号溝跡
図211　301号・401号不明遺構（ＳＸ）
図212　土器（1）－縄文時代－
図213　土器（2）－縄文時代－
図214　石器1（石鏃、刃器、打製石斧）
図215　石器2（打製石斧）
図216　土器（3）－弥生時代後期～古墳時代前期－
図217　土器（4）－弥生時代後期～古墳時代前期－
図218　土器（5）－弥生時代後期～古墳時代前期－
図219　土器（6）－弥生時代後期～古墳時代前期－
図220　土器（7）－弥生時代後期～古墳時代前期－
図221　土器（8）－弥生時代後期～古墳時代前期－
図222　土器（9）－古墳時代中期～平安時代－
図223　土器（10）－古墳時代中期～平安時代－
図224　土器（11）－古墳時代中期～平安時代－
図225　土器（12）－古墳時代中期～平安時代－
図226　土器（13）－古墳時代中期～平安時代－
図227　土器（14）－古墳時代中期～平安時代－
図228　土器（15）－古墳時代中期～平安時代－
図229　土器（16）－古墳時代中期～平安時代－

図230　土器（17）－古墳時代中期～平安時代－
図231　土器（18）－古墳時代中期～平安時代－
図232　土器（19）－古墳時代中期～平安時代－
図233　土器（20）－古墳時代中期～平安時代－
図234　土器（21）－古墳時代中期～平安時代－
図235　土器（22）－古墳時代中期～平安時代－
図236　土器（23）－古墳時代中期～平安時代－
図237　土器（24）－古墳時代中期～平安時代－
図238　土器（25）－古墳時代中期～平安時代－
図239　土器（26）－古墳時代中期～平安時代－
図240　土器（27）－古墳時代中期～平安時代－
図241　土器（28）－古墳時代中期～平安時代－
図242　土器（29）－古墳時代中期～平安時代－
図243　土器（30）－古墳時代中期～平安時代－
図244　土器（31）－古墳時代中期～平安時代－
図245　土器（32）－古墳時代中期～平安時代－
図246　土器（33）－古墳時代中期～平安時代－
図247　土器（34）－古墳時代中期～平安時代－
図248　土器（35）－古墳時代中期～平安時代－
図249　土器（36）－古墳時代中期～平安時代－
図250　土器（37）－古墳時代中期～平安時代－
図251　土器（38）－古墳時代中期～平安時代－
図252　土器（39）－古墳時代中期～平安時代－
図253　土器（40）－古墳時代中期～平安時代－
図254　土器（41）－古墳時代中期～平安時代－
図255　土器（42）－古墳時代中期～平安時代－
図256　土器（43）－古墳時代中期～平安時代－
図257　土器（44）－古墳時代中期～平安時代－
図258　土器（45）－古墳時代中期～平安時代－
図259　土器（46）－古墳時代中期～平安時代－
図260　土器（47）－古墳時代中期～平安時代－
図261　土器（48）－古墳時代中期～平安時代－
図262　土器（49）－古墳時代中期～平安時代－
図263　土器（50）－古墳時代中期～平安時代－
図264　土器（51）－古墳時代中期～平安時代－
図265　土器（52）－古墳時代中期～平安時代－
図266　土器（53）－古墳時代中期～平安時代－
図267　土器（54）－古墳時代中期～平安時代－
図268　土器（55）－古墳時代中期～平安時代－
図269　土器（56）－古墳時代中期～平安時代－
図270　土器（57）－古墳時代中期～平安時代－
図271　土器（58）－古墳時代中期～平安時代－
図272　瓦　1
図273　瓦　2
図274　瓦　3
図275　瓦　4
図276　土製品1、石器3（砥石等）
図277　石器4（砥石等）、土製品2（玉、土錘、
ミニチュア土器）
図278　土製品3（ミニチュア土器）
図279　土製品4（土器片板）
図280　土製品5
図281　石器5（玉、模造品）
図282　石器6（模造品、石錘、硯、軽石製品）
図283　石器7（軽石製品）
図284　石器8（石錘、砥石）
図285　石器9（砥石）
図286　石器10（砥石）
図287　石器11（砥石、擦石）
図288　石器12（擦石）
図289　石器13（擦石）
図290　石器14（擦石）
図291　石器15（敲石）
図292　石器16（敲石、擦・敲石）
図293　石器17（擦・敲石）
図294　石器18（凹石類）
図295　石器19（凹石類）
図296　石器20（台石）
図297　石器21（台石、カマド材）
図298　金属製品1
図299　金属製品2
図300　金属製品3、鹿角製品、貝製品、
鍛冶関連遺物1
図301　鍛冶関連遺物2
図302　信濃国分寺跡との位置と遺構分布（奈良・平安
時代）

**上田城跡**

図303　遺跡周辺
図304　トレンチ設定と基本土層

風呂川古墳
図305　周辺遺跡
図306　調査範囲と周辺地形
図307　周溝部検出状況
図308　西側周溝部石組と遺物出土状況
図309　出土土器
図310　旧図（小縣郡塩尻村大字狄和之内字風呂川余図）と
　　現況図

**弥勒堂遺跡**

図311　調査範囲と新幹線路線（アミ部分は試掘トレンチ）
図312　基本土層
図313　遺構配置
図314　1号住居跡
図315　3号住居跡
図316　2号住居跡（1）
図317　2号住居跡（2）
図318　2号住居跡（3）
図319　2号住居跡　鍛冶関連遺物出土割合
図320　土坑（1）
図321　土坑（2）
図322　各土坑の分布
図323　土壙墓
図324　自然流路跡
図325　遺構外出土遺物（土師）
図326　遺構外出土遺物（石器、金属製品）

**開鉢遺跡**

図327　周辺遺跡と調査グリッド
図328　基本土層
図329　遺構配置
図330　1号住居跡
図331　2号住居跡
図332　3号住居跡
図333　4号住居跡
図334　5号・6号住居跡
図335　（上）遺構配置、（下）1号建物跡
図336　古代土坑
図337　中世土坑

# 挿 表 目 次


**調査の概要**

表１　北陸新幹線（上田市内・坂城町内）発掘調査工程
　　および面積一覧
表２　遺構記号

**環境**

表３　上田市周辺の地層名・地質年代
表４　遺跡一覧

**国分寺周辺遺跡群**

表５　地区別の遺構数
表６　礫物石の平均値と標準偏差
表７　住居跡一覧（弥生～古墳前期）
表８　住居跡一覧（古墳中期～平安）
表９　建物跡一覧
表10　土器観察表（縄文）
表11　石鏃観察表
表12　刃器観察表
表13　打製石斧観察表
表14　土器観察表（弥生～古墳前期）
表15　土器観察表（古墳中期～平安）
表16　瓦観察表
表17　紡錘車観察表
表18　玉・模造品観察表
表19　土錘観察表
表20　ミニチュア土器観察表
表21　土器片板観察表
表22　その他土製品観察表
表23　軽石製品観察表
表24　石錘（礫物石含む）観察表
表25　砥石観察表
表26　擦石観察表
表27　敲石観察表
表28　擦・敲石観察表
表29　凹石類観察表
表30　台石観察表
表31　その他石器観察表
表32　カマド構築材観察表
表33　鉄製品観察表
表34　銅製品・銭貨観察表
表35　羽口観察表
表36　鍛冶滓観察表
表37　鹿角・貝製品観察表
表38　遺構別遺物一覧

**風呂川古墳**

表39　周辺遺跡一覧
表40　土器観察表

**弥勒堂遺跡**

表41　鍛造剥片計測表
表42　粒状滓計測表
表43　土器観察表（縄文）
表44　土器観察表（弥生～平安）
表45　石器観察表
表46　鉄製品観察表
表47　鉄塊系遺物・鍛冶滓計測表
表48　羽口計測表

**開畝遺跡**

表49　土器観察表

# 写真図版目次


**巻頭図版**

1　国分寺周辺遺跡群（北より）

〃　（右が北）

2　〃　3400号住居跡出土遺物

〃　511号住居跡出土遺物

3　岡畝遺跡（南より）

〃　40号土坑近景・遺物出土状況

**国分寺周辺遺跡群**

PL 1　遺跡遠景

－新幹線路線遠景、④区遠景－

PL 2　③区近景

PL 3　③・④区近景

PL 4　④・⑤区近景

PL 5　⑤・⑥区近景

PL 6　基本層序

－②～⑤区土層、新幹線工事掘削面－

PL 7　住居跡 1（弥生後期～古墳前期）

－313住、同遺物出土状況、同炉－

PL 8　住居跡 2（弥生後期～古墳前期）

－345住、同炉、同遺物出土状況、457住－

PL 9　住居跡 3（古墳中期～平安）

－309住、317住、321住－

PL10　住居跡 4（古墳中期～平安）

－326住、327住、331住－

PL11　住居跡 5（古墳中期～平安）

－331住カマド、335住、336・337住－

PL12　住居跡 6（古墳中期～平安）

－339住、343住－

PL13　住居跡 7（古墳中期～平安）

－347住、354住－

PL14　住居跡 8（古墳中期～平安）

－354住、357住、358住、360住、361住－

PL15　住居跡 9（古墳中期～平安）

－366住、368・369住－

PL16　住居跡10（古墳中期～平安）

－368住、369住、375住－

PL17　住居跡11（古墳中期～平安）

－379住、382住－

PL18　住居跡12（古墳中期～平安）

－383住、385住－

PL19　住居跡13（古墳中期～平安）

－395住、396住－

PL20　住居跡14（古墳中期～平安）

－396住カマド、3400住－

PL21　住居跡15（古墳中期～平安）

－403住、407住－

PL22　住居跡16（古墳中期～平安）

－411住、413住－

PL23　住居跡17（古墳中期～平安）

－413住カマド、414住、419住－

PL24　住居跡18（古墳中期～平安）

－420住、421住－

PL25　住居跡19（古墳中期～平安）

－424住、425住－

PL26　住居跡20（古墳中期～平安）

－434住、435住－

PL27　住居跡21（古墳中期～平安）

－437住、442住、443住－

PL28　住居跡22（古墳中期～平安）

－446住、448住、452住－

PL29　住居跡23（古墳中期～平安）

－455住、461住－

PL30　住居跡24（古墳中期～平安）

－462住、463住－

PL31　住居跡25（古墳中期～平安）

－463住、502住、503住、504住－

PL32　住居跡26（古墳中期～平安）

－506住、511住－

PL33　住居跡27（古墳中期～平安）

－511住、514住、515・516住－

PL34　住居跡28（古墳中期～平安）

－515住カマド、517住、536住－

PL35　住居跡29（古墳中期～平安）
－601住、602住－
PL36　住居跡30（古墳中期～平安）
－603・607住、605住、606住－
PL37　建物跡1
－301建、302建、303建、305建、306建、401・402建、407建－
PL38　建物跡2
－403建、404建－
PL39　建物跡3
－404建、405建、406建、501建－
PL40　建物跡4
－501建、502建、503建、504建、505建－
PL41　建物跡5
－308建－
PL42　建物跡6・SH301
－308建、SH301－
PL43　溝　跡1・柱穴列
－301溝、302溝・SA301－
PL44　溝　跡2
－303溝－
PL45　溝　跡3
－303溝、304溝－
PL46　溝　跡4
－304溝－
PL47　溝　跡5・SH302・SH501
－305溝、SH302、SH501－
PL48　土　坑1
－3002坑、3056坑、3100坑、3205坑、3270坑、3355坑、3379坑、3421坑、456坑、4538坑、4557坑－
PL49　土　坑2
－457坑、4503坑、4507坑、4529坑－
PL50　土　坑3
－501坑、516坑、502・526坑、515坑、549坑、602坑、603坑、610坑、621坑、627坑、639坑－
PL51　土　器1（縄文時代）
PL52　石　器1（縄文・弥生時代）
－石鏃、刃器、打製石斧－
PL53　土　器2（弥生後期～古墳前期）
－313住－
PL54　土　器3（弥生後期～古墳前期）
－313住、316住、330住、345住、457住、467住、529住－
PL55　土　器4（弥生後期～古墳前期）
－530住、533住、303溝－
PL56　土　器5（弥生後期～古墳前期）
－303溝、304溝、SH302、遺構外－
PL57　土　器6（古墳中期～平安）
－301住、306住、302住、309住、317住、312住－
PL58　土　器7（古墳中期～平安）
－321住、325住－
PL59　土　器8（古墳中期～平安）
－326住、327住、331住、334住－
PL60　土　器9（古墳中期～平安）
－336住、337住、338住、339住－
PL61　土　器10（古墳中期～平安）
－339住、341住－
PL62　土　器11（古墳中期～平安）
－343住、344住、347住、351住－
PL63　土　器12（古墳中期～平安）
－353住、354住、356住、359住－
PL64　土　器13（古墳中期～平安）
－362住、363住、366住、367住、368住、369住－
PL65　土　器14（古墳中期～平安）
－369住、370住、371住、372住、373住、376住－
PL66　土　器15（古墳中期～平安）
－375住－
PL67　土　器16（古墳中期～平安）
－375住、379住、383住、388住－
PL68　土　器17（古墳中期～平安）
－384住、385住、392住、393住、395住－
PL69　土　器18（古墳中期～平安）
－396住、398住、3400住－
PL70　土　器19（古墳中期～平安）
－3400住－

PL71 土 器20（古墳中期～平安）
－401住、409住、411住－
PL72 土 器21（古墳中期～平安）
－411住－
PL73 土 器22（古墳中期～平安）
－412住－
PL74 土 器23（古墳中期～平安）
－413住－
PL75 土 器24（古墳中期～平安）
－414住、417住－
PL76 土 器25（古墳中期～平安）
－419住－
PL77 土 器26（古墳中期～平安）
－419住、420住、421住、423住－
PL78 土 器27（古墳中期～平安）
－424住、425住、427住、428住、430住、
431住、432住－
PL79 土 器28（古墳中期～平安）
－433住、434住、439住、438住、443住、
445住－
PL80 土 器29（古墳中期～平安）
－446住、447住、448住－
PL81 土 器30（古墳中期～平安）
－449住、452住、455住、459住、460住、
461住、468住－
PL82 土 器31（古墳中期～平安）
－463住、464住、469住－
PL83 土 器32（古墳中期～平安）
－473住、501住、502住、503住、505住、
506住－
PL84 土 器33（古墳中期～平安）
－506住、508住、509住－
PL85 土 器34（古墳中期～平安）
－510住、511住、514住、515住－
PL86 土 器35（古墳中期～平安）
－517住、520住、522住－
PL87 土 器36（古墳中期～平安）
－523住、524住、525住、532住、535住、
536住－
PL88 土 器37（古墳中期～平安）
－536住、601住、602住－
PL89 土 器38（古墳中期～平安）
－602住、603住－
PL90 土 器39（古墳中期～平安）
－604住、605住、606住、607住、401建、
3079坑、3205坑、457坑、3100坑－
PL91 土 器40（古墳中期～平安）
－4503坑、610坑、638坑、621坑－
PL92 土 器41（古墳中期～平安）
－621坑、639坑、301溝、302溝、305溝－
PL93 土 器42（古墳中期～平安）
－501溝、502溝、601溝、遺構外－
PL94 瓦
PL95 土製品1
－ミニチュア土器他－
PL96 土製品2
－土器片板、土錘、土製円板、勾玉形、人形－
PL97 土製品3・石 器2
－紡錘車、土鈴、玉類－
PL98 石 器3
－模造品、蓄石状石製品、硯、石鍋、
軽石製品－
PL99 石 器4
－石錘、編物石、砥石－
PL100 石 器5
－砥石－
PL101 石 器6
－擦石－
PL102 石 器7
－敲石－
PL103 石 器8
－擦・敲石－
PL104 石 器9
－凹石類－
PL105 石 器10
－台石、カマド構築材－
PL106 金属製品・鹿角製品・貝製品
PL107 鍛冶関連遺物
－羽口、転用羽口、鍛冶滓－

**風呂川古墳**

PL108　調査区近景

－周溝、西側周溝底面石組及び遺物－

PL109　周溝部

－全景、東側周溝、西側周溝、図化作業－

PL110　出土土器

**弥勒堂遺跡**

PL111　遺跡全景・1号住居跡

－調査区遠景、近景、作業風景、1住－

PL112　鍛冶工房跡（2号住居跡）

－2住、土器、羽口、砥石、鉄塊系遺物、鍛冶滓－

PL113　平安の土坑1

－1坑、2坑、土器－

PL114　平安の土坑2・自然流路跡

－6坑、8坑、22・189・191～196坑、土坑出土土器、自然流路跡、ウシ下顎骨－

PL115　土坑墓

－5坑、7坑、9坑、22坑－

PL116　遺構外出土遺物

－縄文土器、古墳前期土器、石器、金属製品、銭貨－

**開畝遺跡**

PL117　遺跡全景

－空中写真－

PL118　1号・2号住居跡

PL119　土坑・建物跡

－土坑群全景、1建、29坑、31坑、1坑、2・7坑－

PL120　古代・中世の遺構

－4住、40坑、31坑、1坑、2坑、7坑－

# 第1章　発掘調査の概要

## 第1節　調査の経過

### 1　発掘調査に至る経緯

本報告書は、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局（以下、鉄建公団）による上田市および坂城町における北陸新幹線建設と、上田市による新幹線沿線国分地籍の市道踏入大屋線（以下、下堀バイパス）建設に伴い消滅してしまう、5カ所の埋蔵文化財包蔵地の記録保存を目的として、発掘調査結果をまとめたものである（図1）。

長野県としては、新幹線に先行して建設された高速道路のように、複数の県、市町村を通過する交通網などの建設に伴う埋蔵文化財保護は広域にわたる統一的措置が求められることから、長野県教育委員会文化財保護課（以下、県教委）が総じて対応してきた。また、その発掘調査については㈱長野県埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が当たってきた。合わせて鋪道やバイパス建設などこれらと一体で行われる開発についても市町村と協議の上、埋文センターが調査を実施することが多い。

新幹線の建設も埋蔵文化財保護の視点からすれば、高速道路と同様の対応が当てはまる。今回の新幹線建設に伴う発掘調査についても、県教委が全て対応している。また、新幹線に並行する下堀バイパスについても、上田市との協議の結果、本線の発掘調査と同様に埋文センターが実施することになった。

今回の調査遺跡のうち、本線建設範囲内にかかるのは国分寺周辺遺跡群と上田城跡の2遺跡である。そのほか、風呂川古墳は五里ケ峯トンネル建設のための工事用道路、弥勒堂遺跡は同トンネル建設の坑外施設、坂城町の開畝遺跡は同トンネル横坑掘削の坑外施設と、いずれも付帯施設建設に伴うものである。

### 2　調査体制と調査期間（表1）

上田市、小県郡東部町、埴科郡坂城町管内における、上信越自動車道と北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財調査は、平成4年4月1日、㈱長野県埋蔵文化財センター上田調査事務所の新設により本格化する。

なお、開設前の3年度調査の上田市弥勒堂遺跡については長野調査事務所で対応し、基礎整理作業から上田調査事務所に引き継がれている。

4年度は所長以下10名の職員で、6名の調査研究員が調査に携わっている。当年度の所全体の調査規模は13遺跡、調査表面積69,500㎡に及ぶが、そのうち、新幹線関連の調査は2遺跡、3,700㎡で、小規模な展開である。

5年度は当初計画から高速道関連の調査の増大が確実視され、所職員は所長以下15名、調査研究員は9名に拡充されている。当年度の本調査規模は19遺跡、調査表面積91,375㎡と膨大であるが、その大半は上信越自動車道建設に関連する調査であり、新幹線建設については確認調査程度の3遺跡、375㎡に過ぎない。しかし確認調査により国分寺周辺遺跡群は、非常に遺構密度が高い遺跡であることが明確となる。

6年度も調査規模は大きく、13遺跡、83,140㎡の調査が実施された。所職員は所長以下20名、調査研究員14名である。新幹線関連の調査も2遺跡、9,290㎡と本格化した。特に国分寺周辺遺跡群は、上田市下堀バイパスも合わせた濃密な集落跡8,590㎡について、9月から1月の短期間に調査研究員14名と上田市からの派遣職員1名を加えた合同調査の総力戦で乗り切った。

7年度は調査以外に、旧佐久調査事務所分と更埴市内の高速道関係を含めた整理作業が当事務所で本格

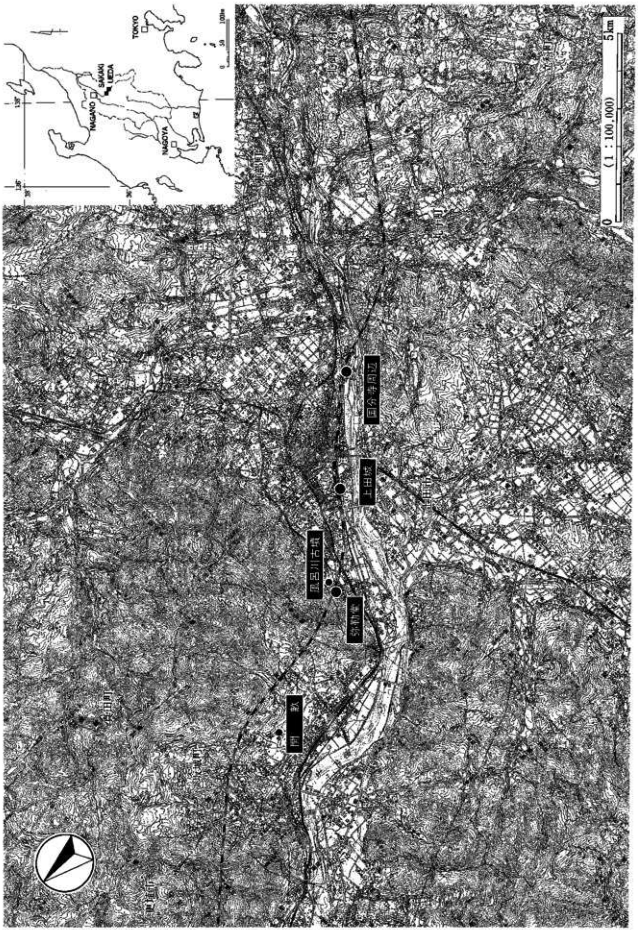



図１　北陸新幹線と遺跡位置

表1　北陸新幹線（上田市内・坂城町内）発掘調査工程および面積一覧

| 所在地 | 遺跡名 | 調査対象面積 ㎡ | 契約面積 ㎡ | 調査延面積㎡ | 調査期間 平成3年度 | 4年度 | 5年度 | 6年度 | 7年度 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上田市 | 国分寺周辺遺跡群 | 7,650 | 6,750 | 6,750 | | | 12.20~12.21 | 9.1~7.1.31 | | |
| | | 2,540 | 2,540 | 2,540 | | | | 9.1~7.1.31 | 8.1~9.29 | 上田市下堀バイパス分 |
| 〃 | 上田城跡 | 5,600 | 800 | 800 | | | 9.29~9.30 | 5.26~9.19 | | |
| 〃 | 鳳凰川古墳 | 200 | 200 | 200 | | 7.10~7.11 | | | | |
| 〃 | 弥勒堂遺跡 | 7,300 | 1,680 | 1,680 | 4.2.17~4.14 | | 12.20~12.21 | | | |
| 坂城町 | 開発遺跡 | 3,500 | 3,500 | 3,500 | | 7.6~7.30 | | | | |
| 合　計 | | 29,290 | 15,470 | 15,470 | 1,500㎡ | 3,700㎡ | 375㎡ | 9,290㎡ | 700㎡ | |

的に開始された。調査は山場を越え、残件の9遺跡、9,500㎡を調査を実施した。そのうち北陸新幹線関連では佐久市内1遺跡を含めた2遺跡3,700㎡について調査が行われた。国分寺周辺遺跡群は、昨年同様の上田市からの派遣職員1名を受けて下堀バイパス分700㎡の調査が行われた。今年度で管内の調査は全て終了した。また報告書刊行に向けての整理作業も開始された。

8年度からは整理作業が本格化し、担当調査研究員1名と整理作業員21名で出土遺物の分類・登録・実測と、図面の整理・作成といった基礎作業を中心に行った。

9年度は報告書刊行年度にあたり、担当1名と整理作業員14名で図面精絵、図版作成、表作成、原稿執筆が行われた。入稿後は校正と並行して、図面と遺物の整理収納を完了した。なお、遺物写真撮影と焼き付けは写真専属の調査研究員1名と整理作業員3名によって実施された。

以下に調査体制を表す。（調査研究員は新幹線関連担当のみ）

## 平成3年度

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 事務局長 | 塚原隆明 | | | |
| 同　総務部長 | 塚田次夫 | | | |
| 同　調査部長 | 小林秀夫 | | | |
| 同　技術参与 | 佐藤今雄 | | | |
| 長野調査事務所長 | 峯村忠司 | | | |
| 同　庶務部長 | 塚田次夫（兼） | | | |
| 同　調査課長 | 百瀬長秀 | | | |
| 調査研究員 | 上田典男 | 西嶋　力 | 廣瀬昭弘 | 川崎　保（弥勒堂遺跡） |
| | （応援職員） | 市川隆之 | 伊藤友久 | 上田　真　　臼居直之 |
| | 大和龍一 | 甲田圭吾 | 田中貴美子 | 寺澤政俊　　西　香子 |
| | 西村正和 | 西山克己 | 野村一寿 | 藤沢袈裟一　本田　真 |
| | 松岡忠一郎 | 宮島義和 | 柳澤　亮 | 若林　卓　　綿田弘実 |

平成4～9年度

| | | |
|---|---|---|
| 事務局長 | 峯村忠司（4～7年度） | 青木　久（8・9年度） |
| 同　参事 | 樋口昇一（4～6年度） | |
| 同　技術参与 | 佐藤今雄（4・5年度） | |
| 同　総務部長 | 神林幹生（4～6年度） | 西尾紀雄（7～9年度） |
| 同　調査部長 | 小林秀夫 | |
| 上田調査事務所長 | 堀内規矩雄（4・5年度） | 宮沼博之（6年度） |
| | 小林秀夫（兼、7～9年度） | |
| 同　庶務課長 | 越　清登（4～6年度） | 山口栄一（7～9年度） |
| 同　調査課長 | 廣瀬昭弘（上田城跡） | |
| 同　調査研究員 | 柳澤　亮（開畝遺跡、国分寺周辺遺跡群、報告書編集） | |
| （担　当） | 大竹憲昭（県文化課、風呂川古墳） | |
| | 上田典男（長野調査事務所、風呂川古墳） | |
| | 川崎　保　井口　章　五十嵐敏秀　田村　彬　和田　進 | |
| | 若林　卓　寺澤政俊　相沢秀樹　町田勝則　柳澤秀一 | |
| | 藤森俊彦　西村正和（以上、6年度国分寺周辺遺跡群） | |
| | 豊田義幸（6・7年度国分寺周辺遺跡群） | |
| 上田市から派遣職員 | 尾見智志（6・7年度国分寺周辺遺跡群） | |

### 3　指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関にご指導ご協力を得た。お名前を記して感謝したい。

穴澤義功　五十嵐幹雄　川上　元　桐原　健　倉沢正幸　黒坂周平　輿水太仲　清水昌昭
白沢勝彦　助川朋広　玉城妙子　宮入　悳　山岸猪久馬　若林勘滋
上田市教育委員会、上田市立信濃国分寺資料館、上田市役所税務課、株式会社 保育社、坂城町教育委員会、長野県立歴史館　（敬称略、五十音順）

### 4　発掘および整理作業参加者（平成4年～9年度）

**弥勒堂遺跡**

池田　輝昭　梅原とし子　太田マリコ　久保田慎行　小池　徳一　小山千恵子　小山浩子　佐々木とき美
島谷　久　高桑　義一　高桑　豊治　滝沢　光樹　立木まき江　玉井　文子　中島勘一郎　中島　靖子
馬場　常雄　古畑　真一　宮下　嘉助　山崎　宣長　松本　欣一　小野澤満美　仲田　毅史　朝日　勉
朝日キミ子　千賀　久男

**開畝遺跡**

青山はつ子　五十嵐信男　池田　輝昭　臼井　かね　小宮山きち　後藤すえの　島谷　久　高橋　和子
玉井　三夫　玉井　文子　中島勘一郎　中島　勘蔵　祢津　光栄　端谷ふで子　堀内　雄一　宮沢　政司
宮原　末子　山崎　善枝

**国分寺周辺遺跡群から整理作業**

赤塚　高子　赤羽　利治　荒井　国嘉　池内　幸吉　井沢サワエ　今井袈裟雄　今井　雅喜　上野　久香
上原　祐子　内堀　武人　内山　重利　大井まき枝　大塚　正枝　大原はるえ　岡田　和夫　尾沢　正江
織田久実子　鹿島すみ江　片桐　信子　金井　定男　金沢修治郎　金子　景子　金子　幸雄　川上　淳子

工藤　和美　工藤　了　久保　努　小合沢昭彦　小合沢千鶴子　小林貫三　小林　良雄　小林　芳治
小松みつ子　小宮山国子　小山　和　小山　洋子　近藤　春子　酒井　禮子　坂田昭二　佐久本真樹子
桜井　重孝　佐藤　昭子　佐藤美枝子　佐藤　弥生　佐野　亥一　佐野　和男　塩川　加実　塩崎　幹
島田タマ江　清水恵美子　清水　正光　清水勇三郎　菅原千賀子　摺田　伸子　瀬田　富夫　相馬　律子
滝沢　歌子　滝沢　織江　滝沢　順子　滝沢富士太郎　滝沢儀武　高桑　豊治　高野浩美　高見沢今佐臣
竹花けい子　田中ひさ子　田中　正美　田村鎌太郎　塚原　和子　伝田　名正　富岡　信夫　中沢由美子
中嶋　啓子　中島　松子　中村　清春　中村徳八郎　成沢　正平　成沢　朝美　成沢　泰一　西沢　勲
西沢　貞雄　花岡　章子　花岡　則長　馬場　玲子　原沢　令子　原田　京子　半田　公子　半田希代子
半田　正美　半田美由紀　東山　唯夫　東山　恒子　樋沢　忠男　菱田よしえ　平石恵美子　布施章三郎
船田　三位　細田万喜治　堀内　通子　堀内　幸伊　松井　礼子　松沢　英樹　丸山　公子　三崎　信好
緑川うめ子　宮沢　博家　宮下　容子　宮本　五郎　武捨　栄徳　村上　一男　村田　宣子　本山　昭二
森井かおる　森角　雅子　森山　稔夫　柳沢　栄治　柳沢　孝子　柳沢　千歳　萩　一義　山浦　久夫
山崎武比古　山崎　昇　山崎美津子　山城　嘉男　山辺　栄子　山辺　久雄　山本　宗一　横井　順子
横井　文代　横尾　一恵　横沢　生枝　横沢　昇　依田千恵子　吉敷美根子　吉敷　良一　和田　和英
渡辺　惇子　渡辺けさ子　渡辺　正芳　渡辺　基予　渡辺　善寿

（平成10年１月撮影）

# 第2節　調査の方法

## 1　発掘調査の方法

### (1) 確認調査と調査範囲（地区）の認定

埋文センターでは、基本的に各建設予定地に県教委またはセンター自体が遺跡確認の目的で試掘調査を行っている。その結果から調査範囲を確定した後、本調査計画を立て、次年度に本調査実施という工程を採っている。しかし、当管内の北陸新幹線関連の調査では、本線内の国分寺周辺遺跡群・上田城跡の調査がその工程を経た以外、確認調査と本調査がほぼ同時あるいは同年度中に実施されている。これはいずれの調査遺跡も本線外付帯施設の建設関連という緊急性に起因している。

なお、各遺跡の状況は「第3章　調査」の各節に記した。

### (2) 調査の方法と手順

本調査の方法については、埋文センターで作成された内部資料「遺跡調査の方法と手順」を基準としている。また各遺跡の性格と状況に応じて、調査方針と計画を立て、発掘調査を行った。

### (3) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、調査時から下記のような略号を用いた。図面や遺物、写真の注記には遺跡名と記号が併用されている。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 国分寺周辺遺跡群 | CKB | 上田城跡 | CUD |
| 風呂川古墳 | CFK | 弥勒堂遺跡 | CMR |
| 開畝遺跡 | BKZ | | |

### (4) 調査区（グリッド）の設定と測量

「調査の方法と手順」にある通り、調査範囲を共通基点を持つ東西南北軸のグリッドで区画している。この方法は、調査の簡便性と迅速性、図化記録の整合性に生かされている。内容は以下の通り（図2）。

1．調査区は、国土地理院の平面直角座標系（当事務所管内では第Ⅷ系X＝0.000、Y＝0.000）を基点に200ｍの倍数値を200×200ｍの区画に設定し、これを「大々地区」とした。大々地区は調査範囲を最大限におさえ、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ…のローマ数字をあたえる。

例　開畝遺跡（BKZ）はX＝＋50,000、Y＝－26,800が大々地区設定の起点となる。

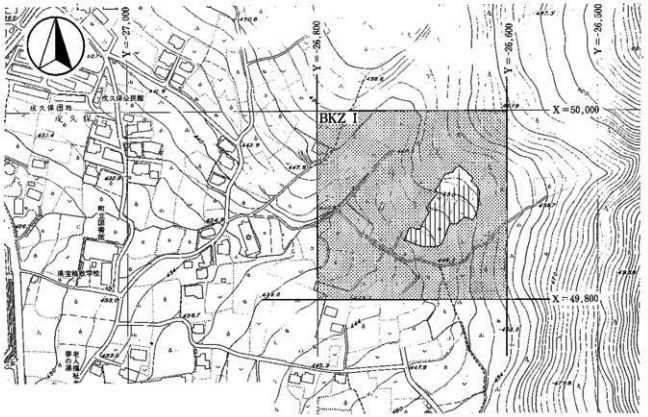
2．大々地区を40×40ｍの25区画に分割し「大地区」とした。大地区は、北西から南東へ順にAからYのアルファベットの大文字をあたえた。

例　「BKZ　Ⅰ」（大々地区）を25区画した大地区のアミ部分は「BKZ　Ⅰ-N」と表記する。

3．大地区を8×8ｍの25区画に分割し「中地区」とした。中地区は、北西から南東へ順に1から25の番号をあたえた。調査地区内にはこの中地区単位の測量杭が打設され、遺構測量の基準とした。

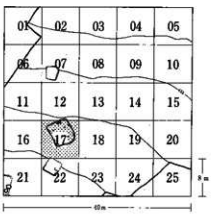
例　「BKZ　Ⅰ-N」（大地区）を25区画した中地区のアミ部分は「BKZ　Ⅰ-N-17」と表記する。

なお、今回の調査では2×2ｍ分割の「小地区」は設定していない。また上田城跡と風呂川古墳の調査では、小範囲の調査地区であるため調査グリッドの設定は行っていない。




大々地区　200×200m（BKZ開畝遺跡 I区）

大地区　40×40m（BKZ I-N区）




中地区　8×8m（BKZ I-N-17区）

図２　調査区設定（例：開畝遺跡）

### (5)　遺構記号と遺構番号

調査から基礎整理まで、各作業の便宜を計るため、遺構には埋文センターで通有する記号を付し、番号は時代に関係なく検出順にあたえた。調査段階では、基本的に検出時に遺構記号を決定するため、必ずしも個々の遺構の性格を示すものではない。また番号も検出時には連番であたえているが、その後の整理作業で遺構と確認されない場合や複数遺構の同一性が明らかになる場合、欠番扱いにされている。また、重複した遺構番号については遺構番号の変更を行っている。

なお、主な遺構記号は本報告時に漢字の名称に振り替えている。本来、その名称と遺構の性格が符号している必要があるが、確実に実行されていない。

以下に記号と本報告で振り替えた名称を記す。

表2　遺構記号

| 遺構記号 | 振替の名称 | 特　　徴 | 遺構の性格 |
|---|---|---|---|
| SB | ～号住居跡、～住 | 2m以上の大きさの方形、円形、楕円形の掘り込み。 | 竪穴住居跡、竪穴遺構 |
| SK | ～号土坑、～坑 | 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSBより小さい掘り込み。 | 土坑、井戸、墓壙 |
| SA | SAのまま | SBより小さな掘り込みや石が、列として配置されるもの。 | 柵、柱穴列 |
| ST | ～号建物跡、～建 | SBより小さな掘り込みや石が一定間隔で方形、円形に配置されるもの。 | 掘立柱建物跡、礎石建物跡 |
| SD | ～号溝跡、～溝 | 帯状の掘り込み。 | 溝、河道 |
| SF | SFのまま | 単独で存在し、火を焚いたあとが面的に広がるもの。 | 火床、炉跡 |
| SH | SHのまま | 石が面的に集中するもの。 | 集石、配石、敷石遺構 |
| SX | SXのまま | 不明遺構。 | |
| P | ピット、P | SB・ST内の掘り込み。 | 柱穴、屋内施設など |

## 2　報告書編集の方法

### (1)　執筆分担

山岸猪久馬　第2章　環境　第1節　地形と地質
廣瀬昭弘　第3章　調査　第2節　上田城跡
川崎　保　第3章　第1節、第4節の縄文土器にかかわる記述・観察表
若林　卓　第3章　調査　第3節　風呂川古墳　4古墳の構造と遺物　(2)土器
柳澤　亮　上記以外

### (2)　写真撮影・焼き付け

遺跡調査時の遺構写真などの撮影は、調査研究員が行った。使用機種はペンタックス6×7とニコンFM2を併用し、フィルムはともにモノクロプリント（ネオパン）とカラーリバーサル（フジクローム）である。また35㎜カラーフィルムも用いた。空中写真は業者に委託した。

報告書用の遺物写真の撮影・焼き付けは、上田調査事務所の写真担当の田村彬（調査研究員）と専属の作業員3名があたった。室内写真の撮影はマミヤRZ67を使用し、フィルムはTMAXを常用とした。

放射線透過写真撮影は県立歴史館白沢勝彦氏に依頼した。

### (3)　図面の作成

遺構の個別図面の修正とトレース、各遺物の実測とトレースは主に編集担当と整理作業員が行った。また大判の全体図、土器トレースの一部は業者に委託した。

### (4) 遺構の記述

#### ア　竪穴住居跡の記述

記載は、原則的に次の順序である。遺構番号、位置、検出（検出面、重複関係、覆土の状況）、構造（形状、規模、床面積、主軸方向、壁、周溝、床、ピット・柱穴、その他施設）、カマド（位置、形状）、遺物、時期、その他所見。

住居構造　主軸方位：カマド中心を通る中軸線を主軸として座標北から東西方向への角度を計測した。カマドを持たない住居跡では長軸を主軸とした。

規　模：主軸上の床面差し渡しを縦軸とし、それと直交方向の床面の差し渡しを横軸として計測した。

床面積：計測にはプラニメーターを用い、カマドを除いた床範囲について3回の計測の平均値を採用した。

深　さ：検出面から床面までの平均的な深さを示す。

床面高：床面の標高を表示する。

柱　穴：ピットのうち、位置や形状、柱痕から柱穴と思われるもの。柱間は柱穴の中心から中心を測る。

カマド　位　置：住居内部から見た位置であり、付設壁は東西南北、壁内のカマド位置は左右方向で示している。

形　状：燃焼部の形状から、5種類に分けた（図3）。

煙道部の長さ：煙出口先端から煙道口下端までの水平距離。

〃　傾き：底面の傾斜線を水平線からの傾斜角度。

煙道口の高さ：火床面から煙道口下端までの垂直距離。

なお、事実記載の数量が膨大になる国分寺周辺遺跡群は、数値などについて一覧表を節末に付し、本文中には記載していない。

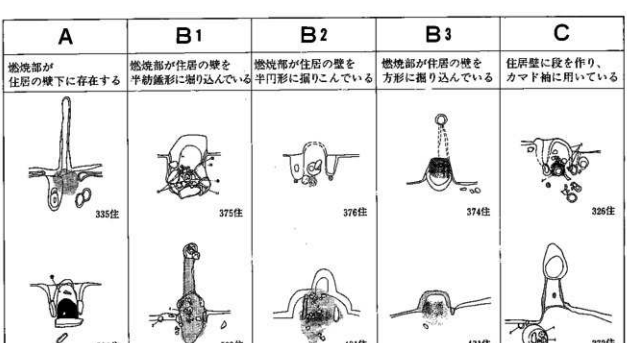



図3　カマドの分類

イ　建物跡

記載は、一部を除いて原則的に竪穴住居跡と同様である。

主軸方位：桁行き方向で推定・計測し、不明なものについては南北棟として推定・計測した。

面　　積：桁行と梁行の積により求めた。

柱間寸法：柱穴の状況により、柱痕・掘り方の芯々間の距離を測り、最小値と最大値を表示した。

柱穴規模：掘り方の長軸の最小値と最大値。

なお、事実記載が膨大な国分寺周辺遺跡群は、竪穴住居跡同様に数値等について一覧表を節末に付した。

**(5)　遺物の記述**

図版に掲載した遺物については、各種類毎に観察表を節末に付している。大きくは土器、土製品、石器（石製品）、金属製品、鍛冶関連遺物（羽口、鉄滓、鉄滓系遺物など）に分けている。遺物には基本的に現在常用される名称をあたえた。

また遺物の膨大な国分寺周辺遺跡群については図版を遺構図版と分け、節末に各遺物種類毎にまとめて記載した。

# 第2章　環境

## 第1節　地形と地質

### 1　地形

今回の調査遺跡は、坂城町開畝遺跡を除いて、図4に示した上田盆地内にあり、この盆地に接して西方に塩田平の盆地がある。これらの盆地は、ともに三角形で、周辺はそれぞれ第三系の基盤に囲まれている。また両盆地の境界を千曲川が北西に流下している。

上田盆地は北方を底辺とする逆三角形で、一辺はほぼ10kmである。北方の基盤は太郎山山地で、南面は急峻な斜面で上田盆地に接している。南西方の基盤は小牧山山地である。東方の高まりは基盤ではなく、第四系の烏帽子岳火山となっている。また盆地の東縁には神川が南西に流下している。

**上田盆地の平坦面および段丘面**

高位からⅠ面（虚空蔵山面）、Ⅱ面（染屋面）、Ⅲ面（上田城面）が主なるもので、さらに低位に千曲川及び神川に沿って、Ⅳ面、Ⅴ面、Ⅵ面がある（図4・図7）。Ⅰ面からⅢ面までは東方に高く、千曲川に向かって傾斜し、また、北方の太郎山山地からは南方に傾斜している。従って現在の上田盆地は上田城を中心とする盆状の地形となっている。

また、Ⅰ面、Ⅱ面は西方に傾斜し、Ⅰ面の勾配は5／100、Ⅱ面の勾配は9／1000で、Ⅲ面はほとんど水平である。すなわち古い面ほど勾配が大きく、これは古い面ほど上部が上昇したことを示している。

なお後述するが、このⅠ面・Ⅱ面は虚空蔵山の東方で神川に切られている。

**Ⅰ面（虚空蔵山面）**

**分　布**：図6の虚空蔵山層の分布域の上面を形成している。東方の岩清水から西方に向かって虚空蔵山から太郎山の麓の大久保に分布する。標高は石清水では770m、大久保で550mである。

**比　高**：Ⅱ面との比高は東方で大きく、石清水付近では約200mであるが、虚空蔵山付近で100m、大久保付近で50mである。

**構成層**：烏帽子火山噴出の溶岩、火砕流堆積物と礫層の互層で、図6の虚空蔵山層である。この面の上部に立山起源のクリスタルアッシュ層[※1]があり、従って形成年代は30～50万年前と考えられる。

**Ⅱ面（染屋面）**

**分　布**：図5及び図6の染屋層上部の分布域の上面を形成している。この面は上田市の染屋台と呼ばれ、西方は上田市の山口から古里、芳田に及び、この面は神川に切られている。標高は東方で高く約580mで、西方の染屋台の崖では約500mである。

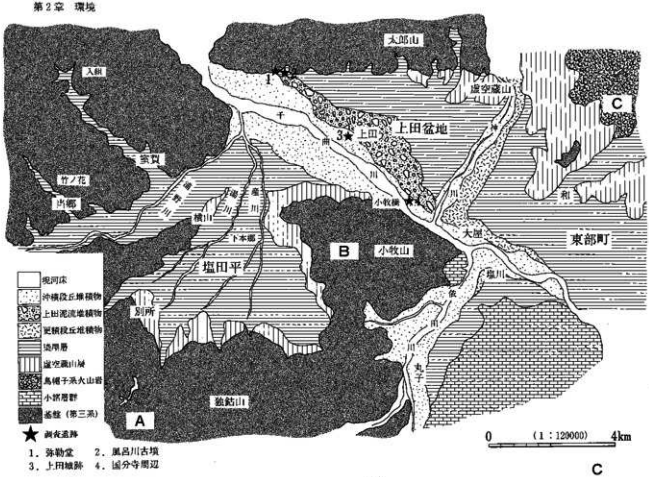
**比　高**：Ⅲ面との比高は染屋の浄水場付近で大きく45mほどであるが、北方の秋和及び南方の国分寺付近では小さく10m以下となる。

**構成層**：主として段丘礫層で分級はよく、砂層を挟む。上部は砂状浮石層（水中堆積の火山灰層）に覆われる。

この層の下底には不整合で上田盆地の湖底堆積層（染屋層下部）がある。しまりのよい礫層・砂層が主体で、神川の河床で観察される（図8）。

**Ⅲ面（上田城面）**

**分　布**：図4・図6の上田泥流堆積物の上面である。上田盆地の中央部に分布し、千曲川河床とⅡ面の



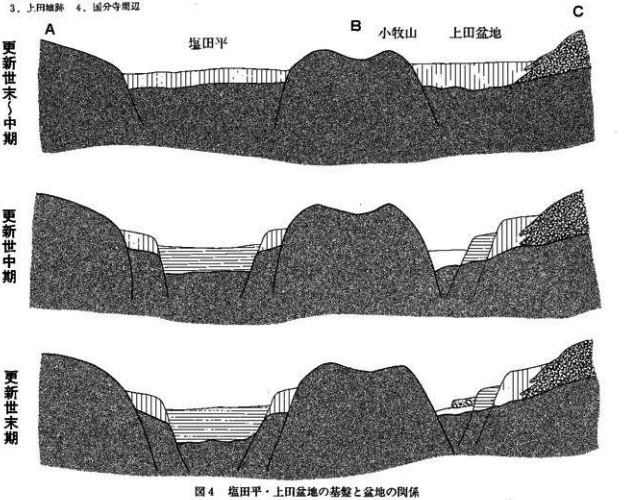




図4　塩田平・上田盆地の基盤と盆地の関係

上：地質図　下：A－B－C（上図左下から右上）の断面図。塩田平・上田盆地の形成経過を示す。

間に存在している。上田泥流は千曲川に添って上流に分布するが、広い面を形成するのはここだけである。この面の分布は上田市に限られている。

**比　高**：上田城付近からこの上流にかけて最も大きく約8～10mであるが、この上流では神川に切られ、下流では秋和付近で小さく1～2mである。

**構成層**：大部分は上田泥流堆積物で、この上位を覆う堆積物はないが、下位には礫層があり、これを不整合に覆っている（図9）。

**Ⅳ面・Ⅴ面・Ⅵ面**

これらはいずれも千曲川及び神川によって形成された段丘面で、堆積物はいずれも砂層を挟む円礫層で、分級及び淘汰はよいが、成層はよくない。

Ⅳ面はさらに標高差により上位よりⅣａ面、Ⅳｂ面、Ⅳｃ面に区分され、またⅥ面もⅥａ面及びⅥｂ面に区分される（図7）。面の境界は明瞭なところがあるが、不明瞭な部分もある。

Ⅳ面は神川沿いを平行に、ＮＥ－ＳＷ方向に分布し、この面はⅠ面（虚空蔵面）及びⅡ面（染屋面）を切っている。このことは神川の形成は染屋面の形成後の比較的新しい時期であることを示している。

また神川はⅢ面（上田泥流堆積物）も切っているが、このことが、即、神川が上田泥流の堆積後に形成されたことを意味していない。神川が流れている時期に上田泥流が発生し、神川を越えて上田盆地に達し、盆地を埋積したが、その後神川が更に上田泥流堆積物を切って流れて現在に至っていると考えられる。

## 2　地質

上田盆地付近の地質は図4及び図6（山岸・宮坂1988）に示されているが、その後の調査で一部改定があり、これは後述する。上田盆地は基盤の第三系が落ち込み、これを埋めて第四系が堆積したものである。また盆地の東方は第四紀の烏帽子岳火山の高まりがある。

### (1)　基盤（第三系）

この付近の第三系は中新世の内村層・別所層・青木層及び鮮新世の小川層である（表3）。これらは本間不二男（1931）により命名された。その後内村地域団体研究グループ（1953）・歌代勤他（1958）・山岸猪久馬（1964）により研究され、上小地域についての詳細は山岸猪久馬（1963）により述べられている。

これらのうち、北方の太郎山山地のものは、大部分は内村層で、この山地の東部の伊勢山付近には別所層が分布する（山岸1964）。太郎山山地のものは、黄金沢でよく観察される。沢の入口付近では緑色凝灰岩と黒色頁岩の互層で、南方に40°ほど傾斜しているが、上流では緑色凝灰岩および緑色化した火山岩を主とする岩層で、垂直に近い傾斜を示している。

山地東部の伊勢山付近の別所層は、黒色頁岩からなり、神川沿いによく露出し、南東に40°～45°傾斜している。

小牧山山地の基盤は青木層及び小川層で、北西部に青木層が、また南東部に小川層が分布している。これらの地層の傾斜は、南西半部は北東に傾斜し、北東半

表3　上田市周辺の地層名・地質年代

| 地質時代 | | | 地層 | | 化石 | 絶対年数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 新生代 | 第四紀 | 完新世 | | | | 1万年前 |
| | | 更新世 | 烏帽子 | （千曲川の時代） | | |
| | | | 浅間火山 | | | |
| | | | 上田盆地湖水堆積物 | | ナウマンゾウ | |
| | | | 塩田平湖水堆積物 | | | |
| | | | 小諸層群 | （湖水の時代） | | |
| | | | 瓜生坂層 | | | 200万年 |
| | | | 布引層 | | | |
| | | | 大坑層 | | アケボノゾウ | |
| | | 鮮新世 | 小川層 | （海の時代） | | 500万年 |
| | 第三紀 | 中新世 | 青木層 | | | |
| | | | 別所層 | | 鯨・イルカ | |
| | | | 内村層 | | | 2200万年 |
| | | 漸新世 | | | | |
| | | 始新世 | | | | |
| | | 暁新世 | | | | 6300万年 |
| 中生代 | | | | | | 2億2500万 |
| 古生代 | | | | | | 6億 |
| 先古生代 | | | | | | 35億 |

図5　上田盆地の平坦面と段丘面

部は南西に傾斜し、向斜の地質構造となっている。青木層は主に礫岩層・砂岩層で泥岩層を挟んでいる。小牧山西部の景勝地「鴻の巣」はこの青木層の礫岩が崩壊した崖である。小川層は礫岩層・砂岩層・泥岩層の互層で、3枚の白色凝灰岩を挟んでいて、20～30cmの亜炭の薄層を1枚挟んでいる。これらの岩層は千曲川の左岸で観察される。

上田盆地の北西部の泉田山塊を形成する基盤は、主に別所層の黒色頁岩であるが、このなかにヒン岩の岩脈が貫入している。半過の「岩鼻」はこのヒン岩が断層で切られてできた大きな崖である。

上田盆地の地下には別所層及び青木層が分布するものと推定される。これは太郎山の内村層と小牧山の青木層の分布地域の間が上田盆地となっているからである。

### (2) 第4系

塩田平・上田盆地の第四系については飯島南海夫他（1969）、山岸猪久馬・宮坂晃（1988）により研究されている。分布及び構成物の概略は図6に示されているが、さらに詳細に述べる。

### A．虚空蔵山層

当知域の最下位層で時代は更新世中期である。太郎山山麓で基盤の内村層緑色凝灰岩及び別所層の黒色頁岩にアバット[注2]している。一方虚空蔵山東方の神川河床では別所層を不整合に覆っている。この地層の年代は、この上部に立山火山起源のクリスタルアッシュ層が挟まれていることから、30～50万年前と推定される。またこの層の下部は更に古く、更新世前期と推定される。

**分　布**：図6のI面（虚空蔵山面）の分布地域で、岩清水、虚空蔵山、太郎山の麓の大久保の尾根を構成して分布する。

**層　厚**：岩清水付近で200ｍ以上であるが下限不明。

**岩　層**：基盤の礫を含む礫層、烏帽子火山噴出物及びその礫を主とする礫岩層である。図6において太郎山付近には基盤の礫を含む礫層が分布し、この東方に烏帽子火山噴出物及びその礫層を主とする礫岩層が分布するように示されているが、その後の調査で前者にも後者が挟まれていること、及び太郎山を刻む黄金沢や大久保の谷にもこの礫岩層が分布することが分かってきたため、この図は訂正し、両層は指交関係とされなければならない。

**基盤の礫を含む礫岩層**

基盤の礫は内村層の緑色凝灰岩及び内村層の黒色頁岩の角礫で、大きさは5～30cm大で不淘汰であり、マトリックスは少なく粗粒砂である。ときに2～3ｍ大の巨礫が含まれており、アバットの縁に堆積している不淘汰礫の特徴を示している。基盤から少し離れる（50～100ｍ）と亜角礫となり、また小さな2～3cm大の円礫が含まれるようになる。

（1997年12月小牧山中腹の尾野山上り口の道路わきで撮影）

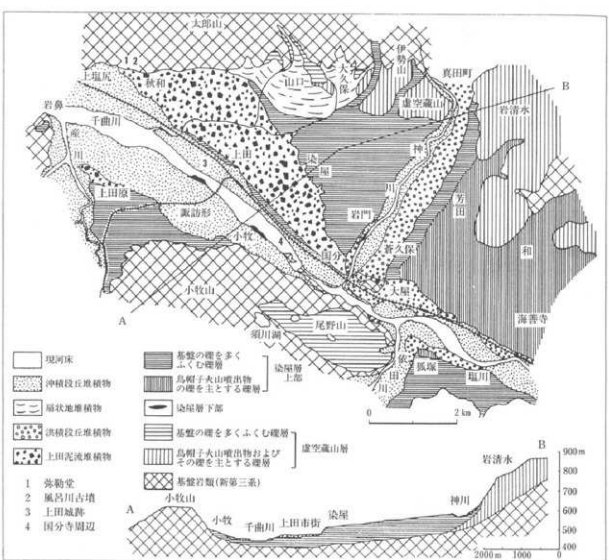



図6　上田盆地の地質図・地質断面図（山岸朗久馬・宮坂晃　1988年）

**鳥帽子火山噴出物及びその礫を主とする礫岩層**

主として安山岩の火砕流堆積物であるが、安山岩の溶岩も2～3枚挟まれている。また安山岩の円礫層も挟まれているが、とくに岩清水付近の下位層にこの礫岩層が多い。

**B．染屋層**

上田市の染屋台の平坦面下を構成する主として礫層よりなる地層で、この層は図6で下部層と上部層に区分されている。

下部層は成層した粘土層及び砂礫層の湖成層で、千曲川や神川の河床に露出しているが、上田盆地一帯に分布する。染屋層下部は染屋層上部の下位層ではあるが、染屋層よりもっと古い層の可能性があるが、まだ明らかではない。

上部層は虚空蔵山層と上田泥流堆積物の分布地域の間に分布し、礫層を主体とし、砂層を挟んでいる。また最上部を砂状浮石層が覆っている。これは浮石が水中堆積したものと考えられる。

この地層は染屋台の崖と、それを切る道路の切り割り、すなわち川原柳から真田への道路、常田池東方の坂道、国分寺東北方の道路によく露出する。また、神川沿いの右岸の段丘崖に好露頭がある（図8）。

この礫層の礫は5～15cm大の円礫で、50cm程の厚さの砂層を挟んでいる。分級ならびに淘汰はよいが、成層はよくない。礫種は大部分は鳥帽子火山の安山岩で、石英閃緑岩及び黒色頁岩を僅かに含んでいる。しかし、先第三紀の粘板岩及びチャートの礫は全く含まれていない。また、インブリケイション[注3]も見られ、東方からの流れの堆積物と推定される。従ってこの層は千曲川だけではなく、鳥帽子火山山系から河川によって運ばれたものと考えられる。なお、前述したように、この頃は神川はまだ形成されていなかったと推定される。

**C．上田泥流堆積物**

千曲川右岸でⅢ面（上田城面）を覆う火山性泥流堆積物である。火山性泥流堆積物は現在の火山学名は「岩屑なだれ」と呼ばれている。

分布は大部分は図4及び図6に示されているように、上田盆地に限られているが、これは千曲川沿いの上流に点々と分布し、小諸懐古園裏の崖から更に上流の塩名田塚原の段丘崖まで追跡される（上田高校地質班1975）。この崖の泥流堆積物は荒牧重雄（1968）によって塚原泥流とされ、またその起源は浅間火山とされていた。従って上田泥流の起源は浅間火山ということになった。

しかし、その後塚原の泥流堆積物について荒牧氏と現地検討した結果、塚原の泥流堆積物は浅間火山起源の泥流堆積物ではないが、上田泥流であることが確認された（河内・荒牧1979）。このことから、上田泥流は塚原まで追跡できたが、今のところ更にその上流では追跡されていない。

好露頭は上田城の下の崖で（図9）、この特徴は千曲川上流の塩名田までずっと同じである。5～20cm大の安山岩の角礫がまばらに火山灰のマトリックス中に存在する。安山岩にはいろいろな種類があり、どの種が多いというのではない。火山岩体の大崩壊によって大規模な泥流が発生し、途中の諸種の火山岩を取り込んだと思われる。特に、2～3ｍ大の巨大岩塊が存在するが（図9の左方20ｍの露頭）、この岩質は崩れそうであるが、崩れないでここまで運ばれてきたということは、この岩塊は流下中にあまり変化を受けなかったのではないかと考えられる。

**註**

1　立山火山起源の更新世中期の火山灰層のうち30～50万年前に活動したもの。白色を呈し、黒雲母を含んでおり、この層に限りこのように呼ばれている。

2　高角不整合ともいう。堆積盆地の堆積物が基盤に急角度で接している不整合で、これは盆地が陥没し、急角度で落ちた壁面に盆地の堆積物が堆積している状況を示す。

3　偏平な礫層が堆積している時、偏平な面が地層面に一定方向に傾斜している状況で、これは傾斜している方向が流れの上流である。図9B下方の礫層にインブリケイションが見えるが、右手が上流である。

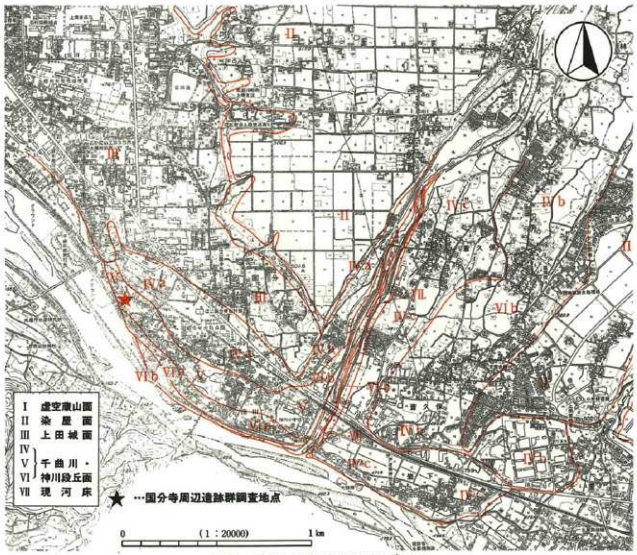



図7　千曲川と神川の合流点付近の地形面

**引用・参考文献**

荒牧重雄　1968「浅間火山の地質」『地質図』45p

飯島南海夫・山辺邦彦・甲田三男・小宮山孝一　1969「千曲川上流地方の第四紀地質（その3）－とくに上小湖成層について－」『地球科学』23　p.63-73

上田高校地質班　1975「上田泥流の起源をもとめて」『科学の実験』75　p.219-224

歌代勤・藤巣明・林等・山岸猪久馬　1958「フォッサ・マグナ帯における内村地域の堆積作用と構造運動」『新生代研究』26　p.579-586

内村団体研究グループ　1953「内村地域の団体研究」『地球化学』14　p.3-8

河内晋平・荒牧重雄　1979「小諸地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1図幅）』地質調査所　39p

本間不二男　1931『信濃中部地質誌』古今書院　331p

山岸猪久馬　1963「第三紀層（中新統）」『上田小県誌』4　p.67-131

山岸いくま　1964「長野県上田市北方の地質－とくに緑色凝灰岩類について－」『地質学雑誌』70　p.315-338

山岸猪久馬・宮坂晃　1988「上田盆地の第四系」『日本の地質4』中部地方I　共立出版　p.152-153

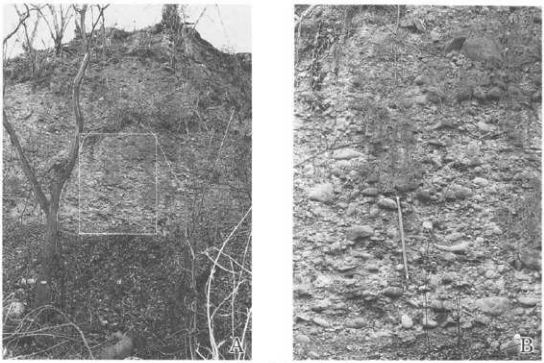



図8　染屋層上部の河岸段丘礫層

神川右岸の岩門南方の露頭、Aは露頭全体でBはその中心部。ピッケルの長さは75cm。

図9　上田泥流堆積物

上田城裏の崖の露頭、崖下は尼ヶ淵と呼ばれ、以前はここまで千曲川の一部が流れ、淵を作っていた。Aは全体を示し、Bはその一部である。上半部は上田泥流堆積物で下半部はインブリケーションを示す礫層（堆積時の流れの上流は右方）。この礫層は染屋層の可能性があるが確認できない。

# 第2節　歴史的環境

**はじめに**　ここでは国分寺周辺の状況をまとめ、他の調査遺跡については各節で触れている。なお、ここで用いる河岸段丘面の呼称は本章第1節に基づいている。

**遺跡名**　国指定史跡としての「信濃国分寺跡」(図10-2)のうち、僧寺と尼寺は、千曲川形成の河岸段丘Ⅳa面上に立地している。史跡範囲では、千曲川側(南西側)はこのⅣa面段丘崖上まで、北側は上位Ⅲ面の現国分寺の所在地まで、東はⅢ面段丘崖上にある国分八幡神社までとしている。

「国分寺周辺遺跡群」(図10-1)とまとめられた名称は、「信濃国分寺跡」と同じ段丘面、あるいは一つ低位のV面に所在する遺跡の総称であり、本来、各遺跡は千曲川上流側から「前田・浦沖・仁王堂・明神前・堰・西沖・道場廃寺」という、主に小字名で呼称された7つの別々の遺跡であった。またそこに現在は、東は神川と千曲川の合流点に当たる「松原」地籍、仁王堂南の「堰東沖」地籍を加えている。このうち今回調査対象になったのは「西沖遺跡」のV面上にあたる部分である。

次に「国分遺跡群」(図10-3)は「瓦窯跡」を除いて現国分寺と同じⅢ面にあり、「上沢沖・古城・堂浦・屋敷・堂西・信濃国分寺瓦窯跡」の同じく小字名を用いた6つの遺跡に「千池」地籍を加えている。どの遺跡も近年考古学的な調査はあまり行われていないが、信濃国分寺研究の現状と合わせて各遺跡の様相をまとめたい。

**明治時代の国分寺周辺**　『復元　信濃國繪圖』(滝澤1994)に掲載されている明治9年作成の國分村の絵図では、国分寺跡一帯の大半が田畑に利用されていて、現国分寺薬師堂と仁王門、千曲川線を走る北国街道などが描かれ、それら周囲を中心に幾つかの集落がかたまっている。信濃国分寺跡付近は、南北に国分寺参道が通過していて、「字仁王堂」の部分には僧寺講堂の基壇跡で、江戸時代終わりまで現国分寺仁王門に利用されていた方形の区画が図示されている。調査地点の西沖遺跡は主に畑地と墓地に利用されたようである。

また明治14年編集の國分村誌(長野縣1936)では、『古跡』として「仁王門」の説明のなかに「(国分寺より南へ距る百二十五間)村の南の方にあり。國分寺の門なり。天正十三年閏八月、徳川氏の軍上田城を攻るの際、兵火に罹り焼亡す(一説に慶長五年九月徳川秀忠、上田城を攻るの際兵火に罹り灰燼となると云ふ)今残礎存す。此地及び隣接の地を穿て布目瓦、土器の類砕けたるを續々と出す。」とあり、古代寺院跡の包蔵地を想起させる文面が残っている。他に「正明寺跡」(字堂西地籍)として「村の西の方にあり。里俗傳に、往國分寺尼寺の跡と云ふ。今地名を正明寺と云ふ。古井あり之を尼井と云ふ。」とあるが、その後の調査では直接尼寺とは関係なく、中世寺院の「正明寺」に関連した井戸と指摘されている(宮下1963)。

**国分寺の研究**　明治時代後半の国分寺建立の研究では、上記の「仁王門(仁王堂)」とする、水田の一角の一段高い部分と、そこにある30数個の大きな礎石群の存在をもって、創建当初の信濃国分寺跡が一帯に埋没している説が一般的となる。そして早くも昭和5(1930)年にはこの範囲を中心に文部省指定史跡となる。しかしこの指定はあくまでも国分僧寺跡としての理解で、僧寺金堂の基壇跡と推定していた。

昭和30年代に入ると、すでに国鉄信越線(現しなの鉄道)と国道18号線に寺域を分断され、周囲の開発も急速に進み、研究者から遺跡の破壊を危惧する声が挙げられる。そこで遺跡保護を前提として、昭和38年から46年にかけて、上田市が8次にわたる学術発掘調査を実施した。調査は期間や予算の関係でトレンチ調査を基本としていて、必要部分を拡張して面調査を行っている。その結果、仁王堂地籍に僧寺の伽藍地の存在が明らかになり、また僧寺西側にあたる字明神前では尼寺の伽藍地が姿を現した。

僧寺の調査では、当初金堂とされた部分は、講堂に当たることが判明した。また南北中軸線上に南から

中門、金堂、講堂が並ぶこと、講堂と中門を結ぶ複廊型式の回廊が見つかり、塔跡が伽藍地の東南隅に認められた。この他に僧坊と推定できる部分と築地塀も確認され、伽藍地は東西176.56m、南北178.05mの規模を有し、中軸線が西に偏した伽藍配置を取っていることが明らかになった。

尼寺は僧寺の西側に近接して発見された。僧寺の南北中軸線が磁北から3度12分東に振れているのに対し、尼寺は5度13分東に振れていて、そこに2度のずれがあった。尼寺の伽藍地には中軸線上に南から中門、金堂、講堂、尼坊、北門が揃って検出されている。また回廊は単廊型式で、中門と講堂を結んでいる。この他に北西隅から経蔵と思われる部分が見つかり、伽藍地の規模は約150m四方と推測され、僧寺よりやや小ぶりである結果が得られた（上田市教委1974b）。

しかし、近年の研究では、現在の伽藍配置では尼坊より僧坊が小さく、僧1人辺りの占有面積が狭いことから、僧寺伽藍地内に少なくとも、もう1棟の坊が存在したのではないかという見方（森1990）や、僧寺の塔跡について、塔心礎がない点や瓦の出土の少ない点、現地点の東に1辺19mの版築状の遺構が存在することなどを挙げて、現地点を塔跡とすべきかどうか疑問視する意見（原田1996）などがあり、いまだ伽藍配置の検討が必要とされている。

また、国分二寺の建立から衰退（廃絶）の時期については、文献からも考古学所見からもはっきりとした見解はない。

今のところ建立時期は、他国の国分寺同様に、天平13（741）年2月14日の聖武天皇の国分寺建立の詔勅以後、数十年経た8世紀末、奈良時代末期頃の完成とするのが有力な説である。

そして廃絶期としては、考古学的な所見では僧寺西回廊跡上部で平安時代末期の火葬骨壺が出土したという報告（上田市教委1974b）、尼寺の築地塀の西側に当たる部分（図10-c）で平安時代後半、11世紀以降の竪穴住居跡が検出したという報告（上田市教委1989）、また尼寺西側の明神前遺跡から発見された10世紀後半から11世前半と想定される竪穴住居跡（図10-a）のカマド芯材に国分寺瓦が利用されていた事例を根拠として、平安時代末には国分二寺いずれも大きな伽藍はほとんど廃絶してしまったとされている。

このうち国分二寺の伽藍地内から平安時代後半の遺構が検出された事例は、国分寺の衰退を示唆すると判断しやすいが、瓦の二次利用については明神前遺跡の8世紀後半とされる竪穴住居跡（図10-b）でも、カマド芯材に国分寺瓦が用いられたという報告（川上他1981）があり、寺の衰退と直接は結び付けにくい。

文献資料では、寺伝に承平8（938）年平将門と平貞盛の軍勢が国分寺周辺で戦い、その兵火で国分寺伽藍も焼失したとある。この記録は「将門記」にもあるが、焼失の記述は明らかではなく、あくまでも推定の域を脱していない。考古学的な調査でも、僧寺では一部に焼けた痕跡はあるが、全域で焼失を実証する所見が得られていない。

さらに、僧寺と尼寺の建立から廃絶における時間差の問題となると、考古学、文献学とも確たる証拠を持っていない。ただ『信濃国分寺一本編一（以下、本編）』（上田市教委1974b）では「十二葉素弁蓮花文」の軒丸瓦が僧寺には出土せず、尼寺と現国分寺から出土する点から、僧寺が平安時代に焼亡、廃寺となってからは現国分寺へ移り、尼寺はそのまま存続していたという見解を示している。しかし反対に僧寺にない多様な瓦を出土する尼寺について、中軸線がずれていることも含めて僧寺より着工時期が早いのではないかという想定や現国分寺出土の瓦の意味を、国分寺造営期に寺に関連した建物、または国府が置かれた可能性として捉える意見も出されている（原田1996）。ただ、伽藍地の大半は史跡公園化され、現国分寺周辺の発掘調査も行われていないため、現時点で出土瓦の意義を検討するのは難しいといえよう。

また伽藍地やその周辺では、近年上田市教委によるトレンチ調査が行われている（図10-d・e）が、遺構などは見つかっていない（上田市教委1993）。

図10　周辺遺跡

表4　遺跡一覧

| 番号 | 遺跡名 | 立地(段丘面) | 時代 | 発掘調査 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 国分寺周辺遺跡群 | | | |
| | 浦沖 | Ⅳa | (縄)中後期・(弥)後期・(古)・(奈)・(平) | ○ |
| | 前田 | Ⅳa・Ⅴ | Ⅳa面／(縄)中期 | |
| | 堰東沖 | Ⅴ | 小片 | ○ |
| | 仁王堂 | Ⅳa | (弥)後期・(古)前期・(奈)・(平) | ○ |
| | 明神前 | Ⅳa・Ⅴ | (縄)前中後期・(弥)後期・(古)・(奈) | ○ |
| | 堰 | Ⅴ | (弥)後期 | |
| | 西沖 | Ⅳa・Ⅴ | Ⅳa面／(弥)後期・(平) | ○ |
| | 道場廃寺跡 | Ⅳa | (古)後期・(中) | ○ |
| 2 | 信濃国分寺跡 | | | |
| | 僧寺跡 | Ⅳa | (奈)・(平) | ○ |
| | 尼寺跡 | Ⅳa | (奈)・(平) | ○ |
| 3 | 国分遺跡群 | | | |
| | 上沢沖 | Ⅲ | (弥)後期・(古)・(奈)・(平) | |
| | 屋敷 | Ⅲ | (古)・(奈)・(平) | |
| | 堂浦 | Ⅲ | (古)・(奈)・(平) | |
| | 古城 | Ⅲ | (古)後期 | |
| | 堂西 | Ⅲ | (縄)石棒・(弥)後期・(古)後期 | |
| | 信濃国分寺瓦窯跡 | Ⅳa | (奈)(平)瓦 | ○ |
| 4 | 常入遺跡群 | 塩之内・上町田・西町田・下町田<br>中村・手筒山・東和田・藤ノ森 | Ⅲ | (弥)後期・(古)・(奈)・(平) |
| 5 | 染屋台条里水田跡 | Ⅱ | 古代？ | ○ |
| 6 | 小牧城跡 | 小牧山の山腹 | | |
| 7 | 六句古墳 | 小牧山の山腹 | 横穴式石室、伝：土器、直刀 | |
| 8 | 板下古墳 | 小牧山の山腹 | 余壊 | |

**国分寺周辺遺跡群**　「国分寺周辺遺跡群」のうち、「浦沖遺跡」は国分寺跡東方に隣接して、段丘面はⅣa面である。ここは昭和23年の国道18号線開設工事中、現場から縄文土器や石器が出土していることを八幡一郎が信越線車窓から発見し、翌24年1月に発掘調査が行われている。その結果、縄文中後期に属すると思われる石囲い炉を持つ住居跡が検出されている（上田・小県誌刊行会1995）。他に加曾利E式期、堰上内式・加曾利B式期の土器や石器、弥生時代後期の箱清水式土器、古墳時代後期から平安時代の土師器や須恵器が多量に出土したとされているが、現在は宅地造成により破壊が進行している。

「前田遺跡」は僧寺跡の南東方の、Ⅳa・Ⅴ面に跨がる千曲川沿いに範囲を持つ。なお『上田市の原始・古代文化（以下、原始古代）』（上田市教委1974a）によると、Ⅳa面上にて縄文時代中期の加曾利E式土器の、摩滅していない破片が出土しているとされている。

「堰東沖」地籍では、Ⅴ面にてトレンチ調査が行われ（図10-f）、東西に走る溝跡が検出されたが、遺物がないため時期は決定できていない（上田市教委1992）。

「仁王堂遺跡」は全てⅣa面上にあり、範囲の大半が僧寺跡と重なり、一部が東南方向に広がる。僧寺発掘調査は遺構の保存を第一にしているため、その下層についてはほとんど調査されていないものの、出土遺物には、弥生時代後期の箱清水式土器や古墳時代前期の所謂S字口縁台付甕（上田市立博物館1992）、古墳時代の土師器や須恵器、金環、また奈良・平安時代の土器などがあり、確実に弥生時代後期から集落が展開していたといえよう。そして僧寺廃絶後には、推定南大門付近に10世紀頃の灰釉陶器と貼り床が検出され（上田市教委1974b）、また前述した平安時代末期の火葬骨壺が出土するなど、新たな集落が構成されていることが分かっている。

「明神前遺跡」はⅣa・Ⅴ面に跨がって所在する。前述した昭和46年の信越線複線化に関連する発掘調査では、尼寺北西（図10-a）から、重複する9基の遺構が検出された（上田市教委1971）。それらはいずれも方形の竪穴遺構で、国分寺の平瓦をカマド材に用いた住居跡が4軒、床面中央に馬蹄形の鍛冶炉を持つ住居跡が1軒、石組カマドを持つ住居跡が1軒、他に重複関係から住居と思われる遺構が3軒報告されている。遺物では、外面に「仙、宝、八千、舟、子、仲、人、講院」などと墨書された土師器坏や皿が13点出土している。これらの遺構は土器の様相から9世紀後半から10世紀前半に収まるとされ、鍛冶工房跡や墨書土器などの出土から国分寺営繕施設の修理院の可能性もある（上田市立信濃国分寺資料館1995）。

その後昭和51年の調査では、46年の調査地点南西（図10-b）から、8世紀後葉の竪穴住居跡を検出した（川上他1981）。この住居のカマドは、芯材に河原礫を用い、その周囲を国分寺平瓦で固めて構築していた。この調査所見から、瓦の二次利用は国分寺創建期から行われていたことを示し、46年調査において瓦の二次利用を平安時代末期に国分寺の廃絶時期を置く根拠としていた説を否定している。なお46・51年とも調査地点はⅣａ面に立地している。

また墨書土器の解釈として、7号遺構の「講院」について、『本編』では僧寺講堂を示す資料としている。これに対し原田は関東地方の国分寺からの出土例と関連させて、延暦14（795）年に国師から改められた「講師」に関係した施設を示すとしている。また、講師と読師制度の変革期を9世紀後半とすることから墨書土器の所属時期も当該期に推定している。さらに信濃以外の国分寺跡では、「講院」墨書土器の出土地点がいずれも僧寺跡であること、また前述した尼寺の先行性を関連させて、今現在認識している信濃国分寺跡の僧寺と尼寺が逆ではないかとの仮説まで発展させている（原田1996）。

次に「堀遺跡」は明神前遺跡の南西方の、Ⅴ面上にある。今まで調査されていないが、弥生時代後期の箱清水式土器や古墳時代後期以降の土器が採集されている。

「西沖遺跡」は国分寺西のⅣａ・Ⅴ面に跨がる範囲に広がる。昭和46年の信越線複線建設時には明神前遺跡と同様「堂西遺跡」と呼称されて、トレンチ調査が行われている。調査地点は段丘面Ⅳａ上であり、その結果、平安時代の住居跡とその内部から仰臥伸展葬の人骨が検出され、またその下層から弥生時代後期の土器が出土した。その他に東西に走る近世の用水路も検出されている（上田市教委1971）。

「道場廃寺跡」は国分寺北西の道場地籍のⅣａ面上に立地する。承応4（1655）年の「國分寺村田畑貢高台帳」には、「正明寺（または勝妙寺とも書く）」とあり、前述した比丘尼井戸などの存在から、発掘調査までは信濃国分尼寺跡推定地として考えられてきた。また学術調査で尼寺が発見される昭和41年から遡ること3年、昭和38年に緊急調査としてこの地点の発掘調査が実施された。その結果、一部に基壇状の配石遺構が見つかり、遺物には古墳後期の土器と共に、灰釉陶器や青磁、天目茶碗、宋銭などが検出され、中世の正明寺の廃寺跡と推定されたため、尼寺跡の可能性は消滅した。

また『原始古代』では、西沖地籍には西沖1・2号墳、道場地籍には道場1・2・3号墳の存在が記されている。西沖1・2号墳はⅣａ面上に並列して立地して、1号墳は信越線敷設時に破壊され、2号墳は径10.6m、高さ1.4mの横穴式石室を持つ円墳で犬井石と側壁が露出していて、直刀が出土したとある。

道場地籍の3基の古墳については、信濃国分寺跡から西方300mのⅢ面段丘崖斜面からⅣａ面上に位置する。3基は標高475mの等高線に沿って、ほぼ20～30mの間隔で並列し、いずれも破壊されるが、西端の1号墳から直刀、2号墳から金環や勾玉などが出土しているという。

**国分遺跡群**　国分八幡神社東方に広がる「上沢神遺跡」は弥生時代後期の箱清水式土器や古墳時代後期以降の土器片が採集されている。なお、現在は田畑が宅地化され、遺跡の破壊が懸念される。

「屋敷遺跡」は現国分寺西方にあたる国分集落内に広がり、古墳時代から平安時代の土器片が出土する。

「堂浦遺跡」は現国分寺の北方に位置し、水田地帯から再建信濃国分寺跡の伽藍と推定される礎石群が認められ、東方の微高地には古墳時代後期以降の土器や施釉陶器の破片が濃密に分布しているという（上田市教委1974a）。

「古城遺跡」は現国分寺東北方、Ⅱ面（染屋面）段丘崖下にあり、古墳時代後期の土器片が出土する。

「堂西遺跡」は現国分寺の北西方にあり、採集遺物には縄文時代の石棒、弥生時代後期の箱清水式土器、古墳時代後期の土器がある。

「信濃国分寺瓦窯跡」は昭和42年に尼寺金堂跡の北東200mの地点、国道18号線北側でⅢ面の崖下から2基並列して検出された。いずれの窯も焚口を南側に向けて構築され、天井部は破壊されていたが、燃焼室

はほぼ現状に近い状態で遺存していた。構造はロストルを持つ平窯で、窯構築材には創建期と考えられる縄目文系平瓦と、平安時代初期の押型文系平瓦の二種類が用いられていた。その内この2基の窯で焼成されたのは、後者の押型文系平瓦の一群であり、平安時代の国分寺の補修用瓦の供給を目的としていたということが分かった。なお、現在は上屋を設けて調査段階の状態で保存され、信濃国分寺資料館の見学施設として一般公開されている。

**遺跡の時代と立地**　以上の調査と研究に今回の調査成果も加えて、時代順に遺跡の立地をまとめる。

まず縄文時代は千曲川と神川によって形成されたⅣａ面には中期後葉から確実に集落が作られ（浦沖・前田）、Ⅲ面にも生活の痕跡が認められる（堂西）。また低位段丘Ⅴ面では今まで縄文時代の遺構や遺物は発見されなかったが、今回、中期から後期の土器や石器が出土して、Ⅴ面まで生活域とされていたことが分かる。また河岸段丘Ⅱ～Ⅴ面までは縄文時代中期以前に形成されていたことは確実で、神川もそれ以前に現河床付近を流れていたことも明らかになった（西沖、新幹線関連調査）。

弥生時代後期の箱清水式期にはⅢ～Ⅴ面まで集落が広り、その範囲は国分寺北西方のⅢ面が拡大する上田市街地にまで及ぶ（図10－4常入遺跡群）。今回の調査からも当時の集落跡が見つかっている。

古墳時代前期はこれまでⅣａ面に僅かに遺物が採集できる程度だったが（仁王堂他）、調査地点のⅤ面から集落跡や方形区画の溝跡など検出された。古墳時代後期になると、Ⅳａ面には古墳群が築造され、集落もまたⅢ・Ⅳａ面を中心に大きく展開する。調査地点でも中後期の集落は非常に重複して検出されている。

奈良時代前半の資料は全体に少なかったが、今回の調査では集落が継続していることが分かっている。そしてⅣａ面に国分寺が造営される奈良時代後半から平安時代にも国分寺周辺には段丘面の制約なく集落が存在していたことは確実であり、それらが国分寺を囲む「寺院地」や「寺地」内に当てはまり、寺を支える役割を果たしていたという可能性もある（須田1994）。

その後中世には現国分寺がⅢ面で造営され、Ⅳａ面に正明寺が存在したとされているが、その他の集落などの実態は掴めていない。

**引用・参考文献**


上田市教育委員会　1971『史跡信濃国分寺跡及び常泗遺跡調査報告書』

上田市教育委員会　1974ａ　『上田市の原始・古代文化』

上田市教育委員会　1974ｂ　『信濃国分寺－本編－』吉川弘文館

上田市教育委員会　1989『史跡信濃国分寺跡』上田市文化財調査報告書第34集

上田市教育委員会　1992『市内遺跡』上田市文化財調査報告書第46集

上田市教育委員会　1993『市内遺跡Ⅱ』上田市文化財調査報告書第48集

上田・小県誌刊行会　1995『上田・小県誌』第六巻歴史篇上ー考古　小県上田教育会

上田市立博物館　1992『発掘された原始・古代』

上田市立信濃国分寺資料館　1988『解説 信濃国分寺跡』

上田市立信濃国分寺資料館　1995「明神前遺跡（上田市）」『東国の国分寺』

川上元・林和男　1981「明神前遺跡と信濃国分寺」『千曲』31号　東信史学会

須田勉　1994「国分寺創建の諸問題」シンポジウム『関東の国分寺』資料編　関東古瓦研究会

滝澤圭祝　1994「国分村」『復元「信濃國繪圖」第一巻　小縣郡篇』長野県地名研究所編

小縣郡役所　1922「第二章　國分寺の建立」『小縣郡史』

長野縣　1936「國分村（神川村）」『長野縣町村誌』第二巻　東信篇

原田和彦　1996「信濃国分寺を巡る諸問題」『信濃』48-5

宮下真澄　1963「信濃国分尼寺址考」『信濃』15-11

森郁夫　1990「古代信濃の寺」『古代の寺院』上田市立信濃国分寺資料館

# 第3章　調　査

## 第1節　国分寺周辺遺跡群（こくぶんじしゅうへんいせきぐん）

### 1　遺跡の概観

**遺跡の立地**　国分寺周辺遺跡群は千曲川右岸、上田市国分地籍に位置する集落遺跡で、名の通り国指定史跡「信濃国分寺跡」と重複、隣接している。遺跡群としているのは、千曲川上流側から「前田・浦沖・堀

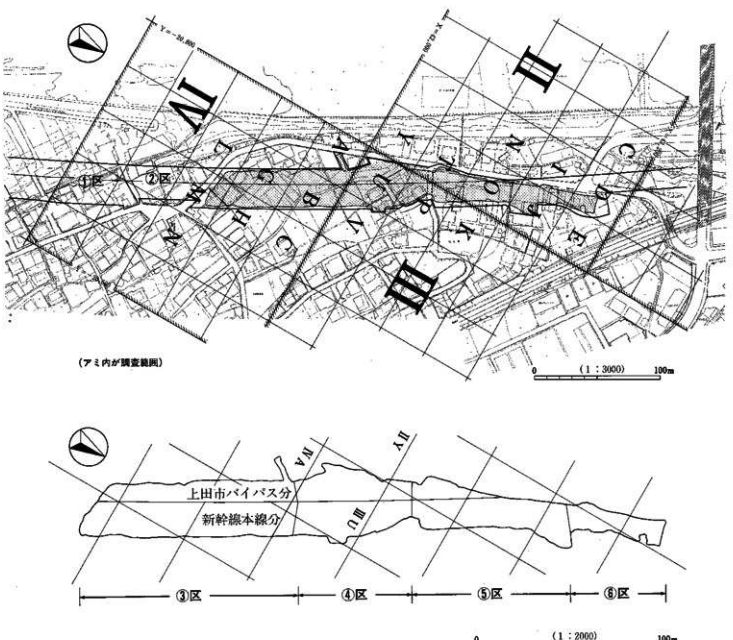



図11　調査範囲とグリッド・地区の設定

・仁王堂・明神前・西沖」の6遺跡の総称としているためである。いずれも小字から付けられた遺跡名で、「信濃国分寺跡」と重複するのはそのうち「仁王堂」と「明神前」である。

今回の調査地区は、「信濃国分寺跡」の河岸段丘面より一つ低い面上に立地し、大字国分字西沖1994番地周辺の旧「西沖遺跡」と呼ばれていた地点にあたる。

本遺跡や周囲の遺跡の状況は本書第2章第2節に記載した。

## 2 調査の経過と概要

**確認調査** 平成5年12月、本線と市道踏入大屋線（以下、下堀バイパス）用地に任意にトレンチを設定して遺構と遺物の確認を行った。その結果試掘調査面積150㎡でありながら、竪穴住居跡24、土坑20、溝跡2と濃密な遺構分布が確認された。これにより、用地内は全域について本調査が必要であることが明らかになった。なお、遺物は平安時代を中心としていて、信濃国分寺跡に関連する集落跡と予想された。

**本線と下堀バイパス** 平成5年度の確認調査時点では、本線内が当センター、本線南側に隣接する下堀バイパスは上田市教委で調査する計画とされていた。

しかし、平成6年度の鉄建公団、上田市、市教委、県教委、当センターによる2回の協議の結果、工事工程上、調査は一体化して実施せざるを得ないと判断され、当センターが合わせて調査することが決定した。なお、本来事業主が違うため下堀バイパスは本線内とは別に、上田市と当センターが直接契約を結ぶこととした。また年度当初の計画を上回る調査面積を抱えるため、人員確保として平成6年9月より上田市教委の職員1名が派遣されることとなった。

**本調査** 調査期間は平成6年9月1日～7年1月31日と、平成7年8月1日～9月29日と二年度にわたっている。調査総面積は9,290㎡に及び、そのうち本線分は6,750㎡で、下堀バイパスは2,540㎡である。平成7年度調査は下堀バイパスの残部700㎡である。この調査では延べ日数134日、作業員の延べ人数7,045人を数える。

**調査区の設定** 範囲内には未撤収の宅地や切り替えの必要な市道、都市ガスなどが密集していて、一遍に調査を進行することは不可能であった。そこで便宜的に南から、①～⑥区の6つの調査区に大別することとした（図11下）。特に⑤・⑥区はそれぞれ南からａ・ｂ区とした。

またセンターの調査法にならったグリッド設定は、測量業者に委託して、各地区の調査面が開いたところから、随時測量杭の打設を行った（図11上、図13～18）。

**6年度調査** 9月1日、調査研究員3名と上田市からの派遣職員1名で、まず⑤区から調査を開始する。黄褐色の砂質シルトⅣ層上面で、全ての遺構が検出され、調査面は1面と判断された。最初に調査を進めた⑤・⑥区は工場による攪乱が大きく、遺構検出は難行するものの、奈良時代から平安時代を中心とした竪穴住居跡などが重複して検出され始めた。9月下旬には平行して③区南側の重機掘削が始まり、10月から遺構調査が本格化する。そこで10月6日から調査研究員3名が増員される。ここは昨年度の確認調査の所見通り、遺構が非常に密集している。また、確認調査では検出されなかった弥生時代後期から古墳時代後期の集落跡の存在が明らかになった。11月には④区の調査も開始され、調査研究員は11名となる。この地区も遺構密度が高く、計画の年内終了は困難な状況となった。また①・②区は確認調査の結果、遺構遺物とも確

認されなかった。12月には今年度分の調査面が全て開いて、同時に複数の調査区を発掘調査する期間が続く。調査研究員15名、派遣職員1名、作業員111名によって、まさに総力戦で調査に臨んだ。しかし、遺構密度と冬期の調査のため、図らずも来年1月まで調査続行が決定した。明くる1月は5日から発掘調査を開始して、凍結や降雪に悩まされながら、残った③・④区を終え、当年度の調査を終了した。

**7年度調査**　8月1日から④区南西側の下堀バイパス分の残部700㎡について、調査研究員2名、派遣職員1名で調査に当たる。現千曲川の段丘崖に接近する地区であるが、遺構は重複して存在し、古代の集落跡が広範囲に及んでいたことが明らかになる。猛暑のなか、9月29日に調査を終え、本遺跡の全調査を終了した。

**空中測量・撮影**　全て測量業者に委託し、調査進行に合わせて、それぞれ計7回実施した。撮影方法はバルーンとラジコンヘリコプターを併用した。またトータルステーションによる地形測量も1回委託した。

**現地説明会**　平成6年12月4日に午前と午後の2回実施した。近隣の住民を中心に196名の見学者を集めた。多数の完形土器を出土した古墳時代の住居跡や大溝などに見学者は集中していた。また信濃国分寺跡との関連性を問う質問も投げ掛けられ、市民の関心の深さを実感する機会であった。

## 調査日誌抄

〈平成6年度〉

9月1日　調査開始。⑤区より表土剥ぎ開始。
2日　501溝確認、精査。
5日　開始式。作業員32名動員。
初の住居跡、501住調査開始。
6日　⑤区壁で基本土層確認。
7日　⑤b区グリッド杭打設。
14日　⑥b区表土剥ぎ開始。
20日　⑥b区検出面「和同開珎」出土。
29日　⑥b区グリッド杭打設。
(作業日数18日。作業員数526名。)

10月3日　上田市国分寺資料館舎沢、桜井両氏見学。
6日　森下遺跡より調査研究員3名合流。
⑤区南側精査。小ピット群検出。
上田市誌編纂室の五十嵐幹雄氏視察。
13日　⑤区グリッド杭打設開始。遺構が重複。
14日　③区住居跡番号付け開始。南側の遺構希薄。
桐原健氏、埋文センター樋口昇一参事視察。
16日　⑥b区調査終了、引き渡し。
19日　④区表土剥ぎ開始。
埼玉県埋蔵文化財事業団理事会の視察。
22日　④区遺構密集部分の調査継続。
(作業日数20日。作業員数1008名。)

11月1日　①区試掘。
2日　④区遺構調査開始。山岸猶久馬氏来訪。
7日　⑥a区表土剥ぎ開始。
10日　作家玉城妙子氏、「歴史と旅」取材。
16日　⑤a区終了。埋戻し。
24日　⑥区空中測量・撮影実施。
②c1トレンチ掘削。遺構遺物なし。埋戻し。
「週間上田」取材。
26日　④区グリッド杭打設。
27日　⑤a区空中測量・撮影実施。
28日　⑤a区西（北国街道下）表土剥ぎ開始。
「信濃毎日新聞」和同開珎の取材。
29日　⑥a区終了。
大日ノ木遺跡より調査研究員2名合流。
(作業日数19日。作業員数1191名。)

12月1日　③区東の空中測量・撮影実施。
⑤a区西グリッド杭打設。
4日　現地説明会開催。見学者196名。
5日　304溝を初めて確認する。
8日　調査研究員2名、宮平遺跡より合流。
9日　鉄塔、上田市と調査進行の協議（現地）。
13日　⑤a区南遺構検出。
16日　③・④区遺構の最密集地区の調査難行。
宮平遺跡より調査研究員3名合流。
17日　④区空中測量・撮影実施。
26日　作業員111名動員。調査期間で最高数。
27日　③区道路分の空中測量・撮影実施。
作業員仕事納め。
28日　遺構測量など残務、職員仕事納め。
(作業日数17日。作業員数1703名。)

平成7年
1月5日　調査再開。④区拡張部分面剥ぎ開始。
13日　午後、降雪で作業休止。
24日　③・④区空中測量・撮影実施。
30日　作業員終了式。
31日　③区終了。本年度調査完了。
(作業日数18日。作業員数1728名。)
作業日数延べ92日。作業員数延べ6156名。

〈平成7年度〉

8月1日　開始式。重機による表土剥ぎ。
3日　県文化課視察。
4日　近世墓より遺骨取り上げ。一時保管。
7日　グリッド杭打設。作業員24名動員。
8日　遺構検出。昨年度同様、遺構密度は高い。
地元児童の夏休みの考古学教室6名。
10日　遺構調査小休化。継続調査する遺構確認。
24日　昨夜の雨水で一部水没。排水作業。
29日　継続調査303溝の上層の突き合わせ。
9月1日　重機による掘削終了。掃土整備。
25日　303溝の平面実測作業。
29日　全調査を終了。撤収。
(作業日数延べ42日。作業員数延べ895名。)

**整理作業**　平成6年度は2月から遺物の洗浄や注記、一次原図の整理と修正に終始した。平成7年度の前半は前年度の作業継続と遺物登録や二次原図作成を開始する。また後半には土器復元や遺物実測が始まり、全体図の作成や遺物写真撮影も実施された。大型の弥生後期土器については業者委託の写真実測を行った。

**報告書編集・刊行**　本格的な作業は平成8年度からである。図面トレース、写真レイアウト、原稿執筆、観察表作成などを調査研究員1名、整理作業員14名で行った。また土器と全体図のトレースは一部業者に委託している。

### 3　基本土層（図12、ＰＬ６）

本遺跡は、主に千曲川によって形成された河岸段丘面上に立地していて、「第２章第１節　地形と地質」によれば、Ｖ面上にあたる。千曲川右岸段丘では、かなり低位の段丘であり、堆積物は基本的に現在の千曲川水系に沿う作用で堆積した泥（シルト）や砂、礫などで構成されている。

調査では遺構検出面まで掘削した際、表土から検出面までの土層を観察して、色調や構成物などから分層を試み、それらを図化記録した。調査地区が長大であるため全ての土層断面について分層や記録は実施していないが、幾つかの地点毎に記録した土層区分を対照して、共通する土層名を設定した。なお、確認調査で終了した①・②区については、段丘面が１つ下がりつつある傾斜地ということもあって、③～⑥区と対照できていない。

遺構の調査された③～⑥区では、最終的にⅠ～Ⅲ層まで分層した。そのうち遺構調査に関連する部分はⅣ層までであり、それより下位の層については、検出面下位の状況確認と土壌分析を実施することを目的として、③・④区の境の２地点（Ｅ・Ｆ地点）を深く掘り下げた際の分層であるため、遺跡全体に一様に堆積した層であるかどうかは明らかにされていない。以下に層毎の性状をまとめる。また各層について実施した土壌分析の詳細な結果は「付章　第１節」で報告されている。

Ⅰ層は現表土であり、現在の土地利用に大きく影響されている。基本的には砂質シルトで、宅地や畑地にあたる部分は褐色に近い色調を示すが、水田にあたる部分ではグライ化作用を受けて、やや還元気味で灰色がかっている。

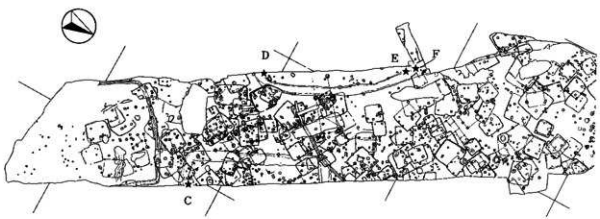
Ⅱ層は暗褐色の砂質シルトであり、粘性はあまりなく、しまりは比較的良い。部分的に１㎝以下の円礫を僅かに含んでいて、下位のⅢａ層との層界では、Ⅲａ層起因の円礫が混在している。

Ⅲ層は、上下２層に分けられている。上位Ⅲａ層は粘土質シルトに円礫を多く含み、強い流水作用で堆積したといえ、一方、下位のⅢｂ層は比較的安定した黒褐色から黒色の粘土質シルトであり、２層は全く堆積成因が違うが、２つの層相を混在させた部分が多く確認されていたため、調査段階から大きくⅢ層として括られていた。混乱を避けるため、本報告まで層名を振り替えずに用いている。

Ⅲａ層は粘土質シルトに５㎝以下の円礫を多く含む性状で、特に北側の⑤・⑥区に安定して確認され、南側の③区では礫の密度が薄くなる。礫は烏帽子岳山塊の安山岩に酷似していて、走行は確認できていないものの、同じ安山岩主体の円礫によって埋没した501溝（１地点）が南東から北西に傾斜していることから、千曲川だけではなく、神川起源の堆積である可能性を持っている[※1]。また、その堆積成因は極めて短時間に流出した洪水のような状態であると推定される。更に本層は平安時代後半の511住の覆土に入り込んでいることが確認されていることから、平安の集落の廃絶の１つの要因であるか、或いは集落が廃絶された後、余り時間差を持たない時点で堆積したものといえる。

Ⅲｂ層はほぼ遺跡全体を覆っている粘土質シルトであり、色調は黒色から黒褐色で、しまりは余り良くなく、土壌化の進んだ性状である。遺物包含層でもあり、本来の生活面（遺構掘り込み面）はこの層に包括されるか、それより上位に求められるであろう。事実、304溝は調査地区際の壁面観察ではⅢｂ層を掘り込んでいる状況が認められている（Ｃ地点）。

Ⅳ層は、主に色調は黄褐色で、部分的に土壌化が進行して暗褐色になる部分がある。性状は細～中粒砂と粘土質シルトが混在していて、粘性は少ない。この上面が遺構検出面にあたり、主に遺構はⅣ層にⅢｂ層起因の遺構覆土が陥ち込んだ状態で検出される。例外的に前述したⅢａ層を覆土とした平安時代後半の遺構もあるが、Ⅲ層内では遺構が把握できないため、弥生時代後期から平安時代までを同一のⅣ層上面で検出する結果となっている。そのため、本来の生活面が最も上位であったと考えられる平安時代の遺構は非常に検出状況が悪いことが多い。



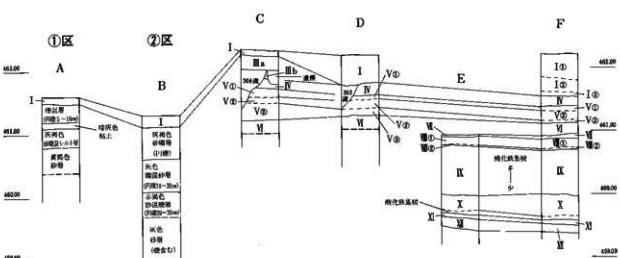
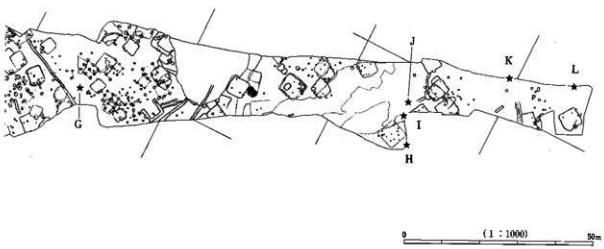
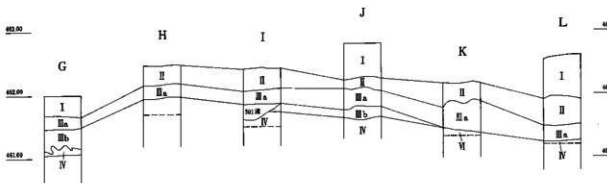




図12 全体図と土層図




Ⅰ　：灰褐色～灰黄褐色土（表土、一部水田耕作でグライ化する。）
Ⅱ　：暗褐色土（砂質シルト、粘性あまりなし、しまりやや良い。１cm以下の円礫を僅かに含む。Ⅲａ層との漸移は互層が混在する。）
Ⅲａ：黒褐色～黒色土（粘土質シルトに５cm以下の円礫が多く混入する複層。）
Ⅲｂ：黒褐色～黒色土（粘土質シルト、粘性ややあり、しまりはあまり良くない。④区では４cm以下の円礫が散在し、③区では礫の混入が少ない。）
Ⅳ　：暗褐色～黒褐色土（細～中粒砂と粘土質シルトが混在。下部では黒褐色シルト粒が増す。）
Ⅴ　：暗褐色～黒褐色土（粘土質シルト、一部土壌化（漿土化）した可能性を持つ。）
Ⅵ　：褐色土（細～中粒砂。１cm以どの小礫を疎かに含む。10cm以下の円礫が下方に点在。）
Ⅶ　：暗褐色土（中粒砂と６cm以下の円礫から成る。シルト土は斑状になる。酸化鉄の集積。）
Ⅷ　：灰褐色～灰黄褐色土（中～粗粒砂。下部に酸化鉄の集積。）
Ⅸ　：橙色～にぶい黄褐色土（中粒砂土。酸化鉄の集積顕著。）
Ⅹ　：灰黄褐色土（細～中粒砂。均質でしまりの悪い砂層。酸化鉄が斑状に発達）
ⅩⅠ：黒色土（粘性シルト。細粒砂強じる。しまり弱い。腐食土）
ⅩⅡ：褐灰色土（礫と粗粒砂の混在する層。礫は６～20cmと下方に向かって大型化する。しまり非常に悪い。）

V層は暗褐色から黒褐色の粘土質シルトで、比較的土壌化した状況があり、弥生時代以前の生活層とも考えられたが、遺物や遺構の痕跡は検出されていない。また土壌分析の結果、ヨシ属の優占する植物珪酸体組成が見られるため、一時的に湿潤な場所になった可能性を持っている。なお、酸化鉄の斑状分布の濃淡から上位より①（淡）～③（濃）に分けている。

VI層よりX層は細～粗粒砂が構成物の主体を占める堆積層であり、砂の粒径や円礫、粘土質シルトなどの混合物から分層している。

この部分の土壌分析ではVI～VII層は珪酸化石の少ない土層で、基本的に流水性の堆積物と考えられる。VIII層のうち、上位の酸化鉄の少ないVIII①層では陸性珪藻が優占しているが、層相から流水性の堆積物と考えられるだろう。またIX層～X層では珪藻は流水性種が増加していて、氾濫性の堆積環境が推定される。なおX層はXI層が陸化傾向を示している影響から陸性珪藻も検出されるが、その数は少ない。

XI層は黒色の粘性シルトで、土壌化が進行している様相である。土壌分析でも流水性の珪藻が減少して、耐乾性の強い陸性珪藻の化石が増加している傾向であり、層相とも合わせて考えると、周囲の乾いた場所から土壌と共に陸性珪藻が二次的に混入したといえそうで、陸化傾向を示している。

XII層は今回確認できる最下位層で、礫と粗粒砂が混在している。新幹線工事の掘削面を観察すると、少なくとも現地表下2.5mから4.5mまで続いている（PL6）。礫は偏平な亜円形で、径は上部では径6cm程が主体であるが、下部では30cm以上もある大礫を含んでいて、下方に向かうに従って大形化していく。土壌分析では好流水性種、中～下流性河川指標種群、上流性河川指標種群の珪藻化石が検出されている。層相と分析結果から、川のような流水域で堆積した堆積物、ここでは千曲川や神川の洪水性の堆積物と考えられる。

こうしてみると、大きな流水により堆積したXII層以後、一端陸化傾向を示したが、また流水の影響を受ける環境が、VI層あたりまで続き、V層から徐々に水位が低下したのか、沼地のような湿潤な堆積環境に変化しているようである。その後遺跡が広がるIV・IIIb層では、完全に陸化して乾燥した居住に適した環境が、少なくとも縄文時代中期から平安時代後半まで安定して継続するようである。その後、また大きな流水の影響を受けてIIIa層の礫が覆い、一旦居住が途絶えた後、また現在まで安定した居住環境が保たれていたようである。

また、地形が傾斜していく部分の①・②区では、砂と礫が堆積物の主体を成していて、常に流水の影響を受けていたといえるだろう。特に下方に向かうに従って礫径が大きくなり、20～30cm程になるところはXII層によく似ている。

**註**

1 発掘調査を視察された際、山岸猪久馬氏のご教示による。

## 4　遺構と遺物

### (1)　遺構

#### (i)　概観

本調査区は全長312mに及び、便宜的に南から①~⑥区に調査区を大別して、調査している（図13~18）。複数の地区を同時に調査する場面があるため、遺構番号は各調査区毎に付した。

当初は地区内で各遺構の総数が100を越えないと判断し、有の単位に1~6の地区No.を振った。

（例）　SB301（③区の1番目にナンバリングした住居跡）……301号住居跡（本報告）

しかし遺構数の膨大な③区では住居跡と土坑の総数が100を越え、住居跡では399住の次に3400住が存在し、土坑については全て千の単位に区の番号を振り替えた。この他④区の土坑は401~499、4500~、⑤区は501~599、5001~と変則的に番号を付す結果となった。この段階で遺物取り上げ、図面記録は進行していたため、番号変更による混乱を避けるため、本報告についてもこの番号を用いた。

また各地区毎の遺構出土数は以下の通り。

表5　地区別の遺構数

| 遺構種＼地区名 | | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | 総　数 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 住居跡 | 弥生時代後期 | 2 | 2 | 3 | 0 | 7 | 206 |
| | 古墳時代前期 | 3 | 0 | 0 | 0 | 3 | |
| | 古墳時代中・後期 | 72 | 48 | 7 | 3 | 130 | |
| | 奈良時代 | 10 | 14 | 9 | 2 | 35 | |
| | 平安時代 | 2 | 8 | 15 | 2 | 27 | |
| | 不明 | 1 | 2 | 1 | 0 | 4 | |
| 建物跡 | | 7 | 12 | 8 | 0 | 27 | |
| 柱穴列跡（SA） | | 4 | 4 | 0 | 0 | 8 | |
| 土器・礫集中（SH） | | 2 | 0 | 1 | 0 | 3 | |
| 土坑 | | 377 | 177 | 114 | 39 | 707 | |
| 溝跡 | | 8 | 2 | 8 | 2 | 20 | |
| 不明遺構 | | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | |

どの時期の遺構も、Ⅳ層上面で検出されているが、本来生活面はⅢb層以上に求められるといえる。また時代を経る毎に検出状況が悪くなり、床面高も高くなる傾向があることから、遺構の埋没と共に生活面も高くなっていたといえる。しかし生活面の変化を土層観察から明確にすることはできていない。

各時代の遺構は重複して調査地区全体に分布しているが、特に③区から⑤区の重複の仕方は著しい。

縄文時代の遺構はないが、中期から後期の土器片と石器などの遺物が一定量出土している。また弥生時代後期の遺構は散漫で、大きな溝跡（303溝）が調査区南西辺を走っている。古墳時代前期には③区北東辺に方形区画の溝跡（304溝）があり、僅かに住居跡も分布している。

古墳時代中期後半から後期には遺構の密度が最も高まり、特に③・④区に集中している。住居の建て替えやカマドの付け替えなどが行われ、安定した生活域として占地していたことが伺える。

奈良時代も比較的住居跡は分布し、特に③・⑤・⑥区に分布の集中が見られる。平安時代に入ると遺構の分布は④~⑥区に限られ、検出状況は悪く、床面付近のみ調査する住居跡が多い。また11世紀後半以降の遺構や遺物がなく、501溝のような大きな流水を示す痕跡も見られることから、集落の最終的な廃絶時期を平安時代終わりに求められる。

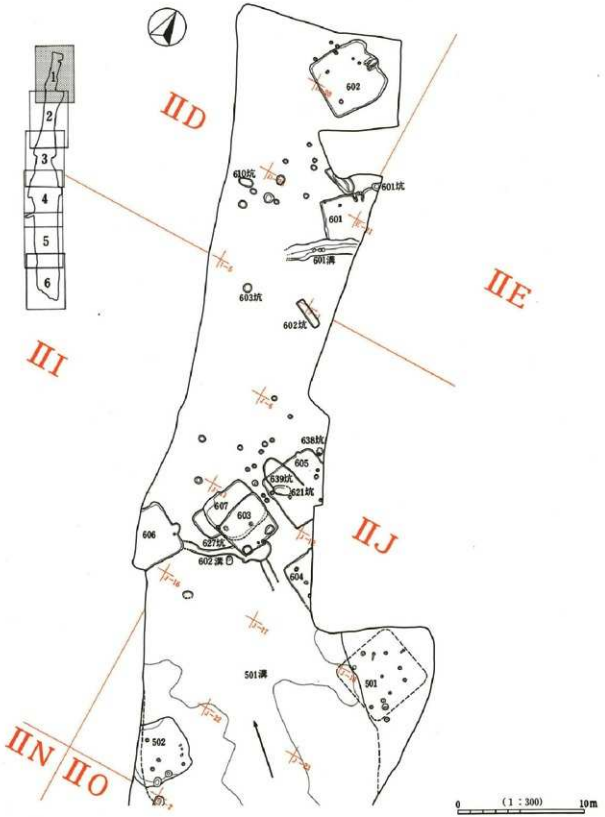

1
2
3
4
5
6
IID
IIE
III
IIJ
IIN
IIO
602
610坑
601坑
601
601溝
603坑
602坑
638坑
605
639坑
621坑
607
603
606
627坑
602溝
604
501溝
501
502
0
(1:300)
10m

図13 遺構配置（1）

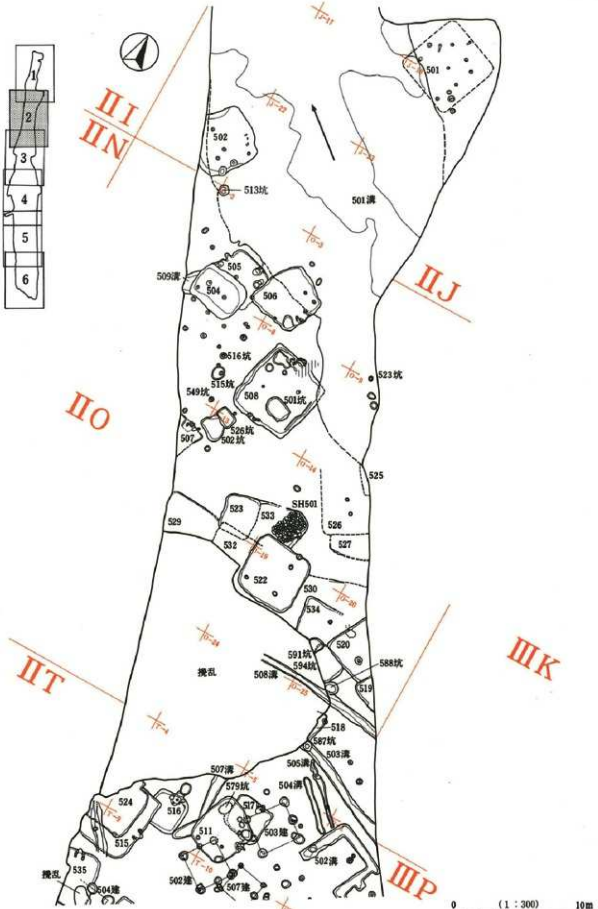

1
2
3
4
5
6
ⅡI
ⅡN
ⅡJ
ⅡO
ⅡT
ⅢK
ⅢP
501
502
513坑
501溝
509溝
505
504
506
516坑
515坑
549坑
508
501坑
523坑
526坑
507
502坑
525
SH501
523
533
529
526
532
527
522
530
534
S20
591坑
594坑
588坑
519
撹乱
508溝
518
587坑
503溝
505溝
507溝
579坑
504溝
524
516
517
511
503堆
515
502溝
撹乱
535
504堆
502堆
507堆
0
(1：300)
10m

図14　遺構配置（2）

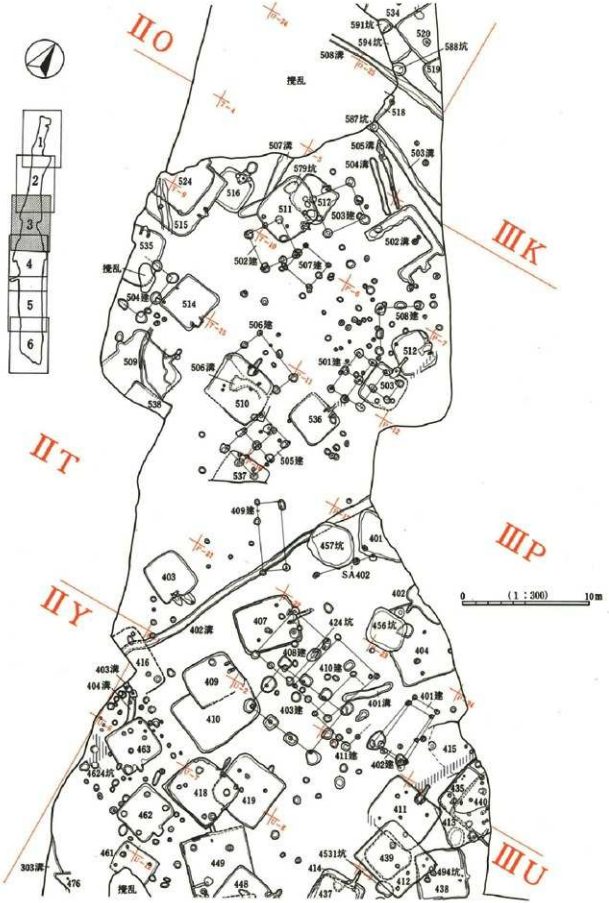

ⅡO
ⅢK
ⅡT
ⅢP
ⅡY
ⅢU
0 (1：300) 10m
撹乱
534
591坑
594坑
508溝
588坑
519
518
587坑
507溝
505溝
503溝
504溝
579坑
524
516
512
511
503建
515
535
502溝
502建
507建
504建
514
508建
506建
512
509
506溝
501建
503
538
510
536
505建
537
409建
457坑
401
SA402
403
402
407
424坑
456坑
402溝
404
408建
410建
403溝
416
409
401溝
401建
404溝
410
403建
463
411建
415
402建
4624坑
418
419
435
440
462
411
413
461
4531坑
439
303溝
449
414
412
494坑
476
448
437
438

図15 遺構配置（3）

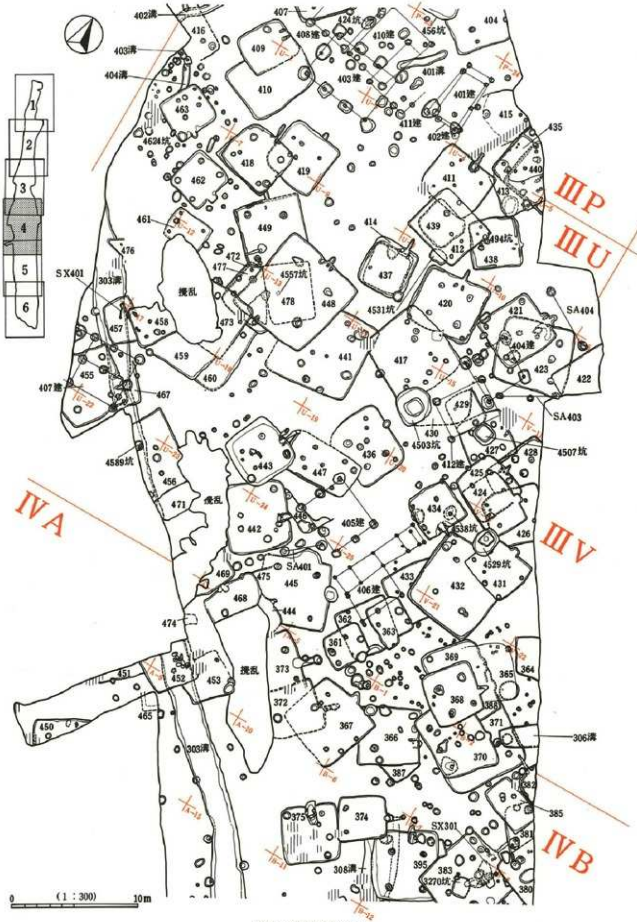

402溝
403溝
404溝
407
408竪
424坑
410竪
456坑
404
409
410
403竪
401溝
401竪
411竪
402竪
415
435
462
463
4624坑
418
419
462
411
440
ⅢP
ⅢU
461
449
414
439
4494坑
412
438
476
SX401
303溝
472
477
4557坑
437
攪乱
478
448
420
421
SA404
457
458
473
4531坑
404竪
459
441
417
423
422
455
460
407竪
467
429
SA403
430
4503坑
427
428
4507坑
4589坑
456
443
436
447
412竪
425
424
ⅣA
471
攪乱
434
4538坑
426
ⅢV
442
405竪
SA401
469
475
445
4529坑
406竪
433
432
431
468
444
474
362
361
363
451
452
453
攪乱
373
369
365
364
372
368
363
371
450
465
367
366
306溝
303溝
370
387
382
385
375
374
SX301
381
ⅣB
395
383
270坑
380
306溝
0　(1：300)　10m

図16　遺構配置（4）

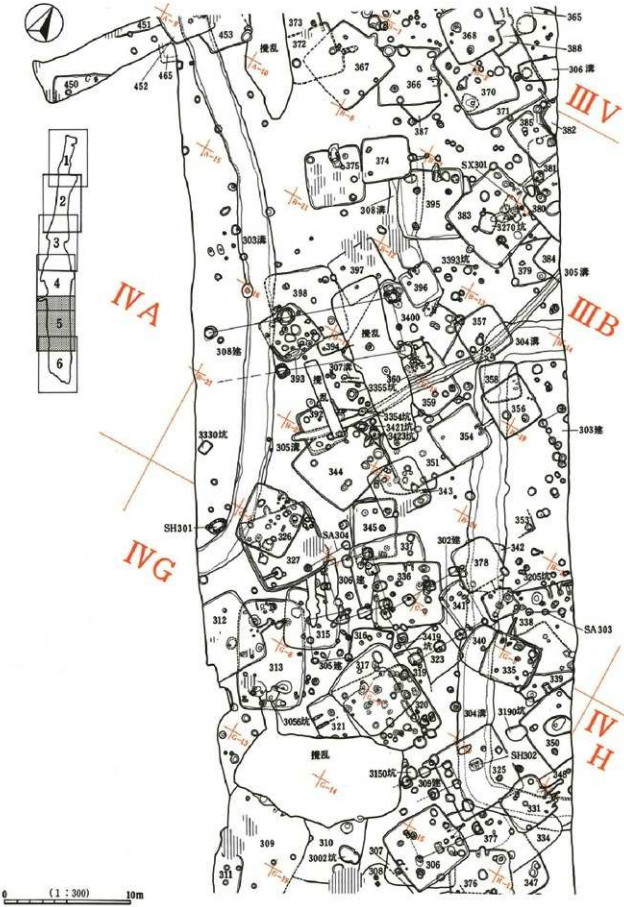

IVA
IVG
IIIV
IIIB
IVH
SX301
SH301
SA304
SA303
SH302
0 (1：300) 10m

図17 遺構配置（5）

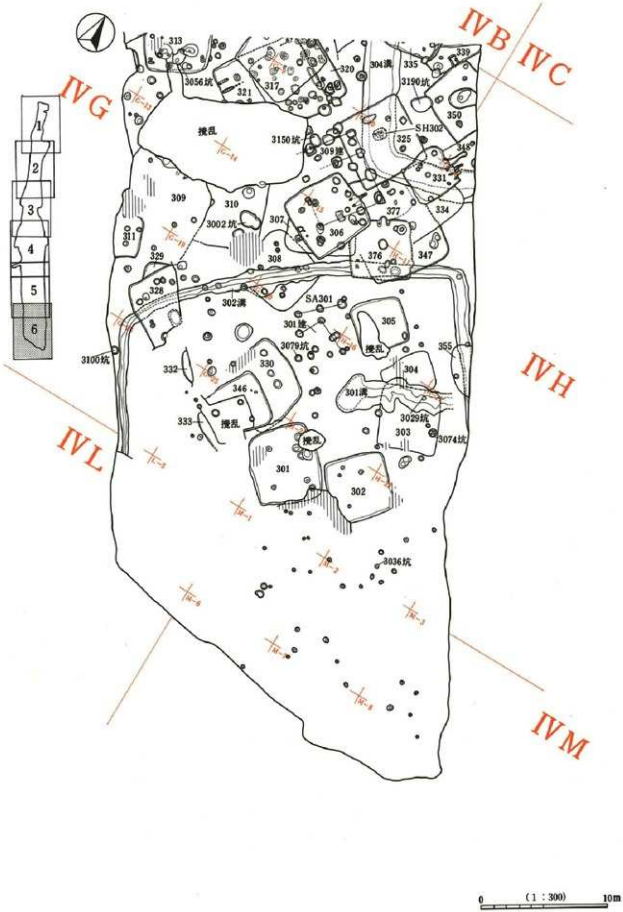

IVB
IVC
IVG
IVH
IVL
IVM
1
2
3
4
5
6
313
3056坑
321
317
320
304溝
335
339
3190坑
350
SH302
325
348
331
3150坑
309
310
3002坑
307
306
377
334
311
329
308
376
347
328
302溝
SA301
305
301坑
3079坑
355
3100坑
332
330
304
346
301溝
3029坑
333
303
3074坑
301
302
3036坑
0
(1：300)
10m

図18　遺構配置（6）

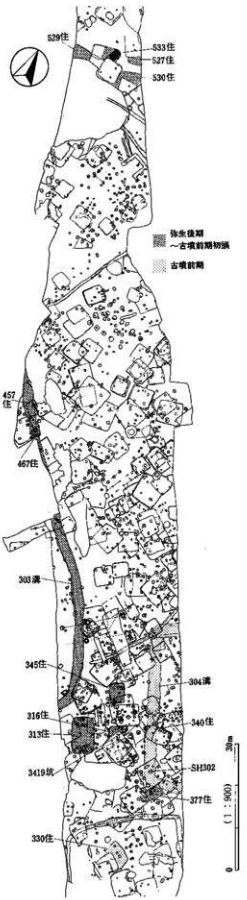



図19　弥生後期～古墳前期の遺構分布

（ii）　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構（図19）

当該期の遺構は、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の時期と古墳時代前期の2時期に大別される。

弥生時代後期から古墳時代前期初頭は、所謂箱清水式土器が土器組成の主体、あるいは一構成に組み入れられる時期であり、住居跡が10軒、溝跡が1条、土坑が1基検出されている。

住居跡の分布は調査区北の⑤区と、④区の303溝上、③区の三カ所に分けられる。⑤区の住居跡は検出状況が悪く、形状などが明確ではない。④区の住居跡2軒も303号溝跡や上部の遺構との重複で、全体形は求められない。③区の住居跡は、比較的床面が深く検出状況が安定している。

その③区では大型の313住と小型の316・345住が近接していて、平面形態はいずれも北北西に長軸を持つ隅丸気味の長方形に共通する。

303溝は調査区の南西際を③区から④区に向かって走っている。調査は断続的であり、上部が古墳時代以後の遺構に切られていることから、溝全体を見ることはできなかったが、調査地点毎の土層観察などから何回か埋戻されながらも使用されていて、人為的な溝の可能性が高い所見が得られた。その覆土は自然科学分析も実施されている。

古墳時代前期に入ると住居跡は僅か1軒しかない。しかし③区東側では、方形に区画した304溝の西辺とその屈曲部が検出されている。上面は古墳時代中期以後の遺構に大きく切られているが、深く掘り込まれている溝であるため、遺存状態は良好である。その土層観察の結果、埋戻しや掘り返しを何回か繰り返した様子が窺え、土壌の自然科学分析から、覆土下位ほど流水の影響が考えられ、覆土上位ではほとんど被水した状況はなかったといえる。

本調査区でこの区画溝跡に囲まれる検出面からは同時期の遺構や遺物は全く検出されていないため、溝に囲まれた施設の本体は東側の調査地区外に埋没していると推定される。

なお、以下には各遺構の調査所見を記すが、前述した二時期に区別せず、番号順に則った。

また遺物の説明と時期の項目に、どの時期に対応する遺構かを示している。

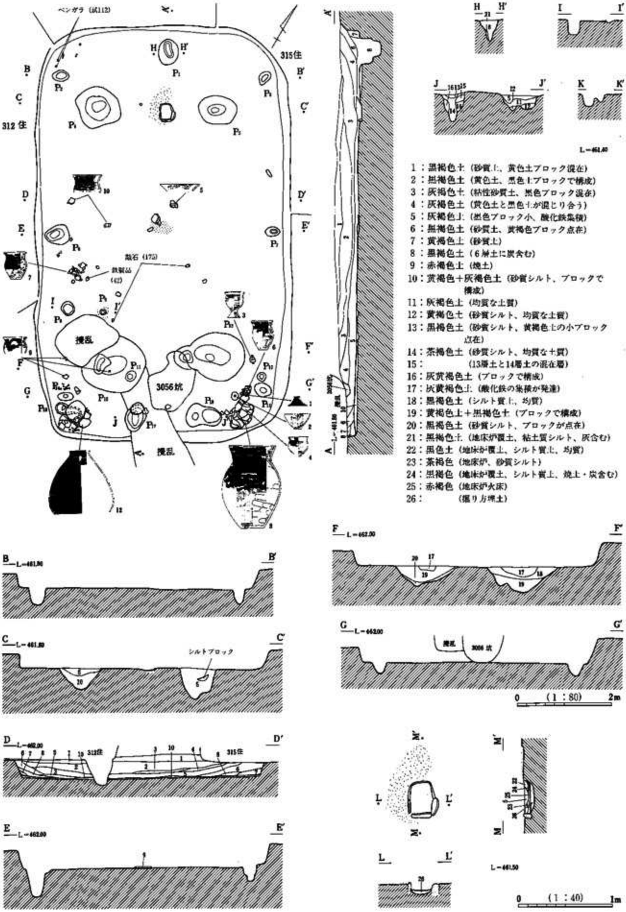

ベンガラ（試112）
315住
312住
敲石（175）
鉄製品（42）
撹乱
3056坑
1：黒褐色土（砂質土、黄色土ブロック混在）
2：黒褐色土（黄色土、黒色土ブロックで構成）
3：灰褐色土（粘性砂質土、黒色ブロック混在）
4：灰褐色土（黄色土と黒色土が混じり合う）
5：灰褐色土（黒色ブロック小、酸化鉄集積）
6：黒褐色土（砂質土、黄褐色ブロック点在）
7：黄褐色土（砂質土）
8：黒褐色土（6層土に炭含む）
9：赤褐色土（焼土）
10：黄褐色＋灰褐色土（砂質シルト、ブロックで構成）
11：灰褐色土（均質な土質）
12：黄褐色土（砂質シルト、均質な土質）
13：黒褐色土（砂質シルト、黄褐色土の小ブロック点在）
14：茶褐色土（砂質シルト、均質な土質）
15：（13層土と14層土の混在層）
16：灰黄褐色土（ブロックで構成）
17：灰黄褐色土（酸化鉄の集積が発達）
18：黒褐色土（シルト質土、均質）
19：黄褐色土＋黒褐色土（ブロックで構成）
20：黒褐色土（砂質シルト、ブロックが点在）
21：黒褐色土（地床炉覆土、粘土質シルト、灰含む）
22：黒色土（地床炉覆土、シルト質土、均質）
23：茶褐色（地床炉、砂質シルト）
24：黒褐色（地床炉覆土、シルト質土、焼土・炭含む）
25：赤褐色（地床炉火床）
26：（掘り方埋土）
L＝461.80
シルトブロック
L＝462.00
L＝461.50
0 （1：80） 2m
0 （1：40） 1m

図20　313号住居跡

ア 住居跡

**313号住居跡**（図20、PL7） 位置 G－8

**検 出** Ⅳ層上面にて、312・315住、3053・3056・3406坑に切られる状況で検出される。覆土は8層に分かれ、断面観察ではレンズ状堆積であるが、壁際の7層土以外はいずれの層もその土質は均質ではなく、ブロック状に複数の土質が混在する様相であり、何らかの人為的な埋め戻しを示唆するといえる。また5層土中に酸化鉄の集積が認められることから、埋没する段階で、流水の影響などからこの層まで被水した経過を窺える。

**構 造** 非常に大きな隅丸長方形の平面形態を呈し、その規模は8.42×5.08mを測る。壁面は深さ45cm程残り、やや斜めに立ち上っていて北西の一部には崩落部分がある。床面は全体に貼り床が広がり、酸化鉄の集積と混在する部分もあるが、堅緻な面を形成していたといえる。

ピットは18基検出され、このうち主柱穴としてP4・5・10・12があり、いずれも40～60cmと深く、断面すり鉢状に掘り窪められている。また側柱穴としてP1・2・3・6・7・8・13・14・15・16が考えられ、いずれも壁際に規則的に配列している。入口施設（梯子）の柱穴にはP17・18が考えられ、P17の覆土では柱痕が認められる。

**炉** 北側の主柱穴P4・5の間に1基の地床炉がある。平面長方形で、規模40×25×8cmを測る。南側の縁にはコの字状に3点の河原礫が横位に据えられ、使用時から炉縁石はこの3点のみ配置していたと考えられる。炉内には灰や焼土を含む土が堆積して、その下には全体に良く被熱した地山起因の火床が認められる。

**遺 物** 弥生時代後期の箱清水期の土器が床面直上で、比較的完形で出土している。特に南側床面に集中する傾向がある。また軽石製品（47）、砥石（126）、敲石（175）の石器類、板状の鉄製品（42）や骨片も床面付近で出土している。他にも北西隅の床面やや上位ではベンガラが検出されている（付章参照）。

**時 期** 土器の様相から、弥生時代後期の箱清水期に位置づける。

**316号住居跡**（図21） 位置 G－3

**検 出** 検出面はⅣ層上面だが、本来Ⅲb層まで立ち上がると思われる。本跡が検出される範囲は切り合い関係が激しい状態にあり、直接的に317・321住と305建に切られる。覆土は均質な黒褐色土の単層である。しかし覆土の厚さは5cm程しか残らないため、埋没過程は不明である。

**構 造** 南側が317住に大きく切られるため、形状を明確にしにくいが、平面形態は長方形を呈すると考えられる。残る北壁、東西壁の各辺は直線的で、隅も直角に近い。壁面は、その立ち上がりが数cmしか残存していない。床面は水平で、堅くはないが明確であり、周溝はない。5基検出されるピットのうち、柱穴はP1・2・5と思われる。特にP1・5は類似性が強く、主柱穴と想定する。その配置から、本跡は二本主柱の上屋構造を持つ可能性があろう。またP4は北東隅に位置し、他のピットに比べて大型で、浅めである。貯蔵穴の性格を想定しておきたい。炉やカマドは検出されない。

**遺 物** 遺物量は少なく、確実に本跡使用時に伴う遺物はない。土器は覆土中や床面から破片で出土している。廃絶以後に流入あるいは投棄されたような状況である。

**時 期** 出土した土器から、古墳時代前期初頭と考えたい。

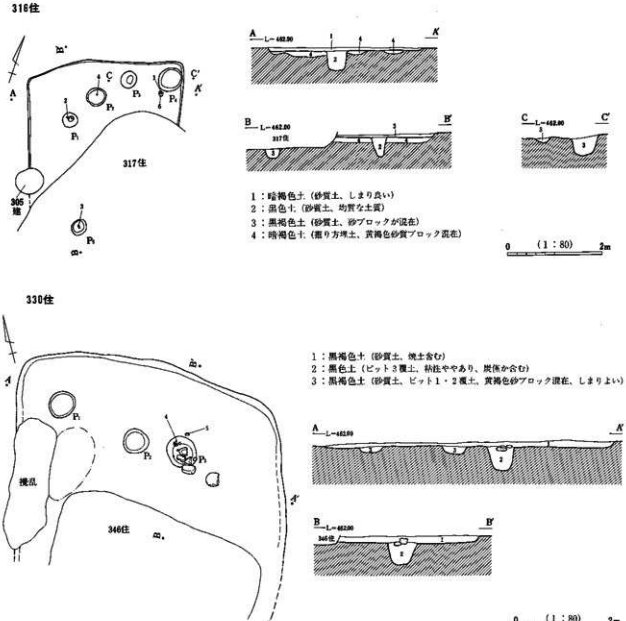



図21　316号・330号住居跡

**330号住居跡**（図21）　　位置　G－20

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、撹乱や削平の影響を大きく受けている。南側を346住に切られ、その周辺も撹乱を受けている。覆土は黒褐色土の単層で自然埋没と思われる。

**構　造**　現状では不整な隅丸方形の平面形態と推定される。壁は比較的残りの良い北側では緩い傾斜である。床面は西側に堅緻な部分があるほかは軟弱である。ピットは3基確認する。P1・2は浅いが、P3は比較的深く、上部には細長い礫や土器片、炭片などが堆積している。カマド・炉は確認できない。

**遺　物**　P3内から土師器の壺片、そのほかに床面付近から土師器の高杯や台付甕片、また高杯型のミニチュア土器（17）が出土している。いずれも細かく割れた破片である。

**時　期**　土器の状況から古墳時代前期後半と考える。

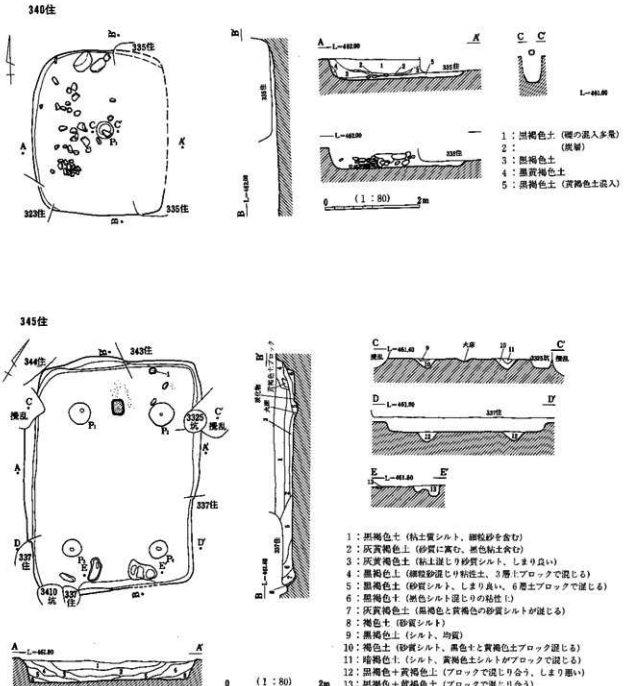



図22 340号・345号住居跡

**340号住居跡**（図22） 位置 G－5

**検 出** 323・335・341住の下から、炭と焼土の分布を確認。なお本跡は304溝上部に構築される。覆土は黒褐色土（3層）、炭・焼土（2層）、河原礫を多く含む黒褐色土（1層）が堆積している。

**構 造** 平面形は隅丸の長方形で、各辺はやや外側に膨らむ。壁面は西側で残りが良く、深さ40cm程を測り、やや傾斜している。床面は軟弱で、中央にある円柱状に深いＰ１を主柱穴とすれば、１本柱の上屋構造を推定できる。炉やカマドは認められない。

**遺 物** 非常に少なく、土器は覆土中から破片で出土している。

**時 期** 根拠に乏しいが、出土土器と切り合い関係から古墳時代前期頃と思われる。

**345号住居跡**（図22、ＰＬ８）　位置　Ｂ－23

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。他の弥生時代の住居跡同様、深く掘り込まれ、覆土は全体にブロック土を多く含み、人為的な埋戻しの可能性がある。しかし土層の堆積状況はレンズ状であり、埋没過程は決めかねる。337・343・344住、306建、3325・3372・3410坑に切られるが、本跡の床面までが深いため、壁や覆土を切る状態に止まる遺構が多い。

**構　造**　平面形態はやや不整な長方形を呈する。壁の上部は崩落のためかやや緩い立ち上がりであり、壁面中位に緩い屈曲線を持つ場合がある。下部は比較的急角度に掘り込まれている。床面には酸化鉄の集積が顕著であり、その結果非常に堅緻な状況を示しているが、これらは覆土堆積後の被水などに由来する水酸化鉄の沈殿物と考えられる。実際の床は直接地山Ⅳ層を平坦にならした状態である。Ｐ１～４が方形配列の主柱穴と考えられ、いずれも平面円形ですり鉢状の断面形状を呈する。これは313住とも共通する特徴である。また南東壁際にある２カ所の陥ち込みは、入口施設（梯子など）に関わるものと考えられる。

**炉**　主柱穴Ｐ１・２の中間の位置に１基付設される。規模は30×25cmの平面長方形、深さ５cm弱である。底部と壁面が被熱して赤化する。また縁辺部と周囲に炭化物が薄く広がる。

**遺　物**　北西壁直下、炉の北側に赤彩の片口鉢が１点出土している。それ以外は櫛描波状文の甕の破片などが僅かに出土している。

**時　期**　遺物から弥生時代後期、箱清水式期に当てはまる。

**377号住居跡**　位置　Ｇ－10

**検　出**　Ⅳ層において、古墳時代前期の304溝に切られる状態で検出する。また306・376住、309建に切られている。覆土は３層に分け、いずれも砂質シルトで、壁際には砂質ブロックを多く含む。

**構　造**　平面形態は残存部分から隅丸の長方形と思われる。壁は北西部分で深さ10～20cm測り、ほぼ垂直気味に掘られている。床は全体に貼り床があり、その下の層（４層）を下げると、新たな堅緻な面が検出できる。構築前の敲き締めた跡か、旧床面であるかは不明である。ピットは４基確認され、北側のＰ２、南側のＰ４が主柱穴と考えられる。炉は見つからない。

**遺　物**　遺物は弥生時代後期箱清水式期の甕と壺の小片である。

**時　期**　304溝に切られることと、出土遺物から弥生時代後期、箱清水式期といえる。

**457号住居跡**（図23、ＰＬ８）　位置　Ｕ－16

**検　出**　Ⅳ層上面で、黒褐色土の陥ち込みとして検出。303溝が床下から検出され、458住、ＳＸ401に切られる。覆土は黒褐色のシルト質土の単層である。

**構　造**　平面形態は不整であるが、小型の長方形である。壁は傾斜を持って掘り込まれている。深さは20cm程を測る。床は貼り床であるが、全体に堅緻ではない。ピットや炉は確認できない。

**遺　物**　出土量は少ない。擦石（147）、擦・敲石（196）と土器片が出土している。１は浅い鉢であろうか。外面がよく磨かれている。２は櫛描波状文の小型甕で、頸部には簾状文が巡る。弥生時代後期箱清水式期の傾向が強い。

**時　期**　土器の様相と303溝を切ることから、弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭とする。

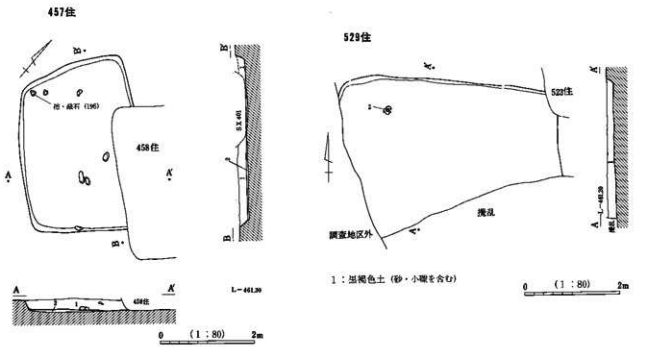



図23　457号・529号住居跡

**467号住居跡**　　位置　U－17

**検　出**　IV層上面で検出する。303溝を切り、455住、407建、4580坑に切られる。覆土は黒褐色土の単層で、重複する遺構の覆土とは色調の濃淡程度の差しかない。

**構　造**　削平と上部遺構の影響で、全体形は摑みにくいが、小型の長方形と推定する。壁は浅く残るだけである。床は軟弱で、検出しづらい状態である。

**炉**　南東壁付近に焼土が分布しているため、地床炉の可能性がある。

**遺　物**　覆土から赤彩鉢（1）、横描波状文の小型の甕（2～3）、軽石製品（58）が出土している。

**時　期**　土器の様相と重複関係から弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭とする。

**527号住居跡**（図158）　　位置　O－14

**検　出**　525・526住と同位置で確認される。

**構　造**　平面的にはほとんど調査できず、平面形態は不明である。壁は浅く残り、傾斜している。床は削られていて、不明である。

**炉**　図示できないが、地床炉と思われる痕跡が526号住との重複部分に存在する。

**遺　物**　検出段階から弥生時代後期、箱清水式期の土器片が出土している。図化資料はない。

**時　期**　重複関係と土器片から弥生時代後期と思われる。

**529号住居跡**（図23）　　位置　O－13

**検　出**　IV層上面で、黒褐色土の陥ち込みとして検出する。523住に切られる。また削平と撹乱、一部が調査地区外に出る等、調査状況は良くない。覆土は黒褐色土の単層である。

**構　造**　北壁と北西隅が僅かに見える状況で、平面形態は分からない。壁は削平を受けて、浅く残るだけである。床は自然面を平坦に掘り均している。ピットは確認できない。

**炉**　調査範囲には見つからない。
**遺　物**　床面から笠状に開く器形の蓋（2）が出土している。他に赤彩の鉢底部（1）、口縁部に最大径を持ち、撫で肩の小型波状文甕上半部（3）、同じく撫で肩の波状文甕の体部上部分（4）が出土している。
**時　期**　土器の様相から、弥生時代後期、箱清水式期に相当すると思われる。

**530号住居跡**（図24）　　位置　O－15
**検　出**　Ⅳ層上面で精査したところ、土器片と焼土が散在する地点を検出する。削平が激しく、遺構の構造ははっきりしないが、住居跡と認定した。520・522・534住に切られる。覆土はほとんど残らない。
**構　造**　平面形態は不明である。壁の掘り込みもはっきりしない。床は軟弱で、自然面を掘り均した状態である。ピットは確認できない。
**炉**　焼土の分布があり、地床炉と思われる。炉を中心に人頭大の礫と土器片が出土している。これは住居廃絶後に入り込んだと思われる。
**遺　物**　炉の上から、箱清水式期の坏部を持つ赤彩の高坏（1）、蓋（2）、広口の赤彩の小型壺（3）、口縁部が大きく開く赤彩の大型壺（4～6）、撫で肩の波状文甕（8）がある。また球胴でハケ目調整の施された甕（7）は時期が他より新しい様相である。
**時　期**　大半の土器が弥生時代後期箱清水式期に当てはまるため、本跡の時期も同じ頃としたい。

**533号住居跡**（図24）　　位置　O－13
**検　出**　Ⅳ層上面の検出で、複数の遺構と重複して検出する。522・523・532住、ＳＨ501（石敷遺構）に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

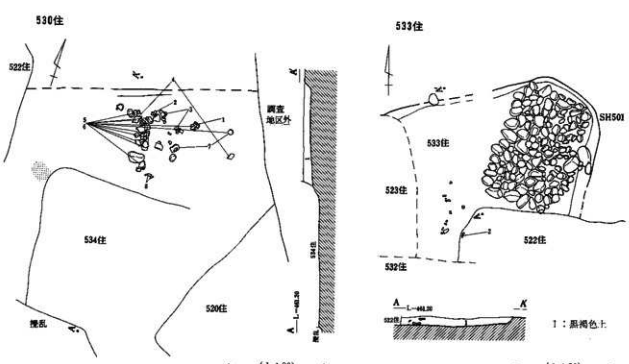



図24　530号・533号住居跡、ＳＨ501

**構 造** 北壁が僅かに残る状態で、平面形態は分からない。壁は浅く残り、傾斜している。床は自然面を掘り均して、砂礫が多く軟弱である。ピットは見つからない。

**炉** 調査範囲にはない。

**遺 物** 床面付近に土器片が散在する。その内訳は赤彩の高坏（1）、小型の台付甕（2）、赤彩の鉢（3）、大型の赤彩の壺（4－7）である。石器では台石（223）が出土している。

**時 期** 土器の様相から弥生時代後期、箱清水式期と思われる。

イ 溝跡

**303号溝跡**（図25、PL44・45） 位置 ⅢU-11・16・17・22・23、ⅣA-4・9・10・15、B-11・16・21・22、G-1・2

**検 出** 面的な調査では、Ⅳ層上面から検出する。しかし南側の調査区境の壁（図25G－G'）では、更にその上層のⅢb層まで立ち上りは求められそうである。また長大な溝跡であるため、断続的に南側から調査を進めて、北側3分の1は7年度調査で検出され、重複する全ての遺構に切られる。

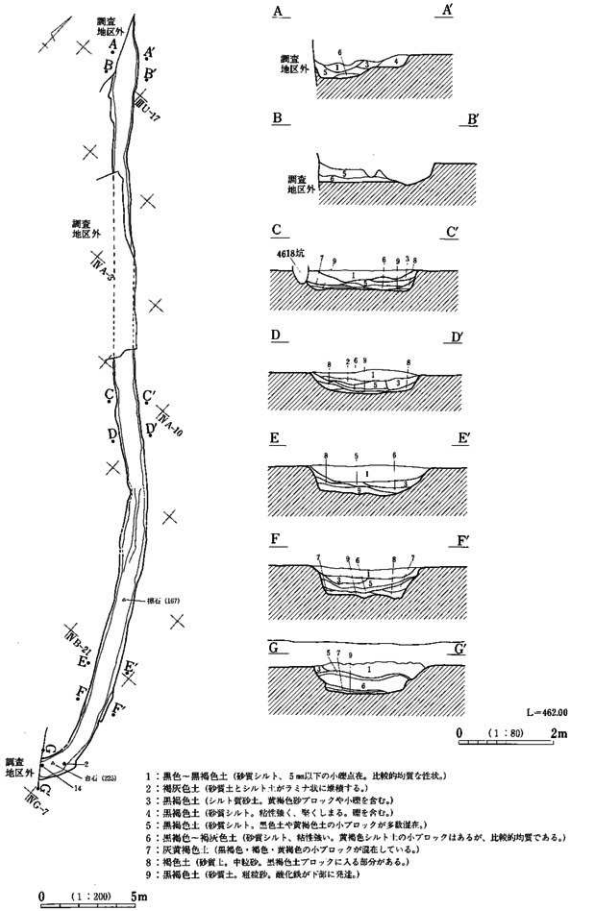
**構 造** 完掘した状態では、最大延長は42.4m、幅は上端線間で2.0～2.5m、深さは30～60cm程を測る。しかし、両端部とも調査地区外に出てしまうため全容は摑めない。また④区から③区のA－10グリッドまでは北西から南西にほぼ直線的に伸びているが、A－15グリッド辺りからやや向きを南南東に変えて、更に調査地区外の直前では大きく南南西に曲がっている。底部の標高は北上するに従って徐々に低くなっていて、もし流水があるとすれば、南から北へ、現千曲川と同方向であったと考えられる。

**埋没と再構築** 計7カ所の横断面の土層観察では、覆土は9層に分けられる。1層は黒色から黒褐色の砂質シルトで撹乱を受けた北側以外、最上部を覆っている。比較的均質な性状である。2層は中央付近で確認され、褐灰色で砂質土とシルト土がラミナ状に堆積していて、この堆積土は僅かな流水に起因すると考えられる。3層は黒褐色のシルト質の砂土で黄褐色砂ブロックや小礫を含み、ほぼ溝全体の覆土中位に堆積している。4層は黒褐色の砂質シルトで最北側だけで確認される。粘性が強く、堅く締まっていて礫を含んでいる。他の土質と異なる性状である。5層は黒褐色砂質シルトで黒色土や黄褐色土の小ブロックが多く混じっている。ほぼ全体に堆積している。埋戻された土の可能性がある。6層は黒褐色から褐灰色の砂質シルトで、粘性が強い。僅かに黄褐色シルトの小ブロックは含むが、全体に均質な性状で、全体に堆積している。南側では覆土中位であるが、北側では最下位に堆積している。7層は黒褐色、褐色、黄褐色の小ブロックが混在して構成している。比較的南側の下位付近にある。埋戻した土と思われる。また8層は褐色の中粒砂で、黒褐色土のブロックが入る部分もある。これは壁際に堆積していることから、埋没時の崩土と考えられる。最下層の9層は黒褐色の粗粒砂で、酸化鉄が下部に発達している。この酸化鉄は埋没後の被水によって形成されたと考えられる。これらの堆積状況から自然埋没と人為埋没が交互に行われていることが分かる。そこからこの溝が開口している時期を4段階に分けてみたい（図26）。

［1段階］は、溝が構築された段階である。ほぼ逆台形に掘り込んで、底部はほぼ平坦に均している。目的は不明であるが、南側に屈曲部を持って北西に向かっている。

［2段階］は、自然埋没（8・9層）と上部が人的に埋められた（7層）後、断面がやや不整な逆台形に掘り込んで溝を最構築した段階である。この状況はC－C'やF－F'などで、6層下面が7・8層を切っていることから明らかである。

［3段階］では、また自然埋没（6層）と人的な埋戻し（5層）があった後、やや幅を細めた台形に掘り起こしている。断面状況から類推してその流路を平面に起こすと（図26中央）、南側の屈曲部では北側を掘り込まれ、直線的な部分では、最も東寄りを通っている。




1：黒色～黒褐色土（砂質シルト、5mm以下の小礫含有。比較的均質な性状。）
2：褐灰色土（砂質土とシルト土がラミナ状に堆積する。）
3：黒褐色土（シルト質砂土。黄褐色砂ブロックや小礫を含む。）
4：黒褐色土（砂質シルト。粘性強く、堅くしまる。礫を含む。）
5：黒褐色土（砂質シルト。黒色土や黄褐色土の小ブロックが多数混在。）
6：黒褐色～褐灰色土（砂質シルト、粘性強い。黄褐色シルト土の小ブロックはあるが、比較的均質である。）
7：灰黄褐色土（黒褐色・褐色・黄褐色の小ブロックが混在している。）
8：褐色土（砂質土、中粒砂。黒褐色土ブロックに入る部分がある。）
9：黒褐色土（砂質土。粗粒砂。酸化鉄が下部に発達。）

図25　303号溝跡

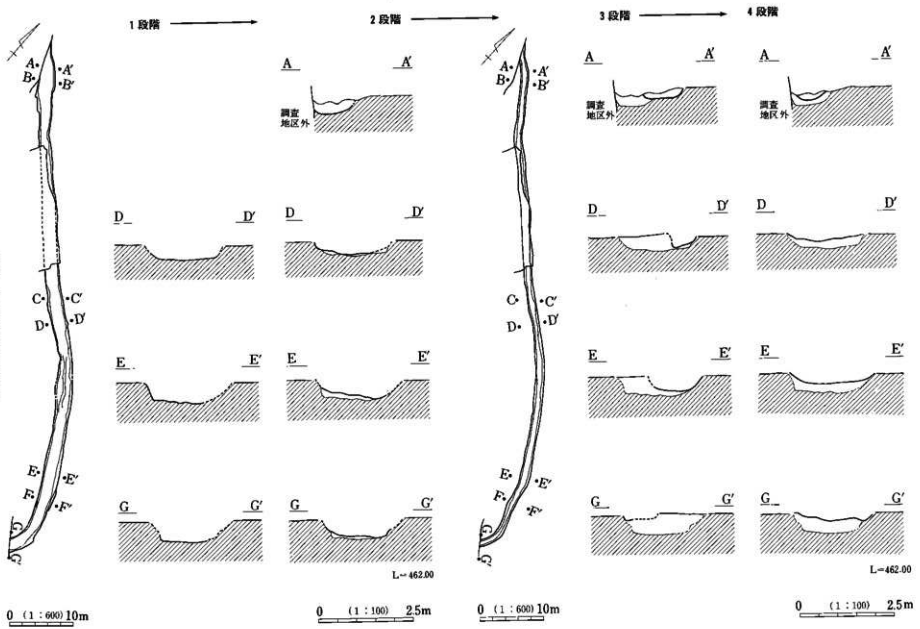



図26 303号遺構の変遷（案）

［4段階］では堆積状況の不明な3・4層で埋められた溝をもう一度、1・2段階の幅まで拡幅する。しかしその深度は浅く、断面形も皿状で安定していない。また北側では非常に細くなっている。

**遺　物**　それ程出土量はない。土器では鉢形の大型の甑（2）とS字口縁台付甕の口縁部（14）が南側屈曲部から出土している。他に赤彩高坏の脚部（1）、有段口縁壺（3・4）、片口の赤彩鉢（5）、甑（6）、装飾壺または器台の体部下半（7）、頸部にU字状と簾状の櫛描文のある壺（8）、大型の壺（9・12）、赤彩の広口壺（10）、無赤彩で頸部にT字文がある壺（11）、ハケ調整の壺（13）、台付甕（15）、波状文の甕（16～18）がある。ミニチュア土器（34）も出土しているが、出土位置が不明確であるため、埋没過程と土器がうまく符合できない。石器では紡錘車（5）、擦石（167）、台石（225）、鉄製品では刀子（22）がある。

**時　期**　土器の様相と、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の住居跡に切られることから、この溝も当該期に構築、埋没したと判断する。

**化学分析**　覆土から層序を確認しながら、土壌試料を採取して、珪藻分析と花粉分析、植物珪酸体分析を行った（付章第1節参照）。その所見では下部の7・9層は珪藻化石が少ない。これは堆積しないで流下してしまった可能性を持っている。6層には好流水性の珪藻が優占していて、土層の性状からも流水性の堆積物と考えられる。その上位の5層と1層では流水性種は減少して、陸性珪藻が優占するようになる。このことから徐々に流水は少なくなったと考えられる。また植物珪酸体の組成からも7・9層の頃にはヨシ属やウシクサ族の割合が高く、5層と1層では乾いた土壌の混入に伴ってタケ亜科が増加した様相である。この所見は7層の土層観察が埋戻し土とした以外、全体に考古学的所見と合致する部分が多い。

**304号溝跡**（図27、PL45・46）　**位置**　ⅢB－8・9・13・14・18・19・24、G－4・5・10、H－6

**検　出**　面的調査ではⅣ層上面で検出するが、調査区壁の土層観察ではⅢb層上面から掘り込まれていた様相が窺え、溝上部はⅢa層の礫が覆っている。また最も遺構が密集する部分で、当初は本跡を検出できなかったが、明確に形状が定まらない黒褐色土の陥ち込みを追ううちに、非常に大きな溝跡であることが判明した。また溝跡は弥生時代後期の377住だけを切り、その他の重複するいずれの遺構にも切られる。

**構　造**　もっとも長い辺を「西辺」、北側を「北辺」、南側を「南辺」と呼称して整理したい。西辺は北北西から南南東に直線的に伸び、外側の上端線で直線距離38.4mを測る。その南北端は、いずれもほぼ直角に屈曲して、南北辺を持って調査地区外に出る。この「コ」字状の溝跡の延長距離は約49mを測り、幅は北辺では3.2m、西辺では3.0m、南辺では2.8mが最大である。掘り込みの形状は、北辺では主に逆台形であるが、中位に段を持ち、底面中央にも浅い溝が残る。西辺北は北辺と同様であるが、中央では底部の両側に高さ20cm程の張り出しのような掘り残しがある。それは北辺から12m付近と16～24m付近に分かれて存在する。西辺南側では逆台形の断面形状で、南辺では上端線が外側に張り出したようになり、底面には高さ15cm程の張り出しがある。

また各辺の底部の標高は北辺が460.60m、西辺の北側460.70m・中央460.81m・南側461.06m、南辺は461.20mである。この標高差から少なくとも調査区内では南から北へ傾斜している。溝本来の深さははっきりしないが、唯一北辺の土層断面A－A′において、Ⅲa礫層下から最深部で1.36mを測る。

**埋没と再構築**　覆土は11層に分けられる。堆積順に下から、土質の性状と堆積状態をまとめてみる。最下層の10・11層は西辺と南辺に合せて堆積している。いずれも黄白色砂と黒色土が相互に水平堆積している状態で、11層はその層厚が1～2cmと薄く、10層は2～4cmとやや厚めである。また11層の方がより黄白色砂の割合が多い。8・9層は掘り込みの底部から中位に堆積して、8層は黒色土と黄白色砂、灰褐色砂の5cm程の大きなブロックからなり、西辺と南辺の内側中位に堆積している。9層は黄褐色砂や灰褐色砂、黒色土のブロック土で、ブロック径は小さく、底部付近に見られる。4～7層は8・9層や10・11層

を切って、溝中央にレンズ状に堆積する。4層は黒色から黒灰褐色の砂質シルトで粘性があり、炭粒が散見され、西辺から南辺の中位に堆積している。5層は黒灰色のシルト質土で、4層下位に堆積する。6層は黒褐色から暗褐灰色の砂質土で5層土との層界に、黄褐色砂を挟んでいる。7層は黒褐色から暗褐灰色の砂質シルトで、ラミナ状に堆積している。底部の堆積形状も乱れて、流水や滞水の影響が見られる。1～3層は北辺の調査区境、最も堆積土が残存する部分の上位に認められる。1層は黒褐色の砂質土で、北辺のⅢa層下に堆積し、底部には炭化材や焼土ブロックが水平に分布する。2層は黄白色の砂質土で、Ⅳ層の崩土である。北辺に堆積している3層は暗褐色の細粒砂で、底部は波状に乱れている。

この様相から、堆積原因が流水または溝内への土砂の流れ込みや崩落といった自然堆積と、明らかに人為的な埋戻しによる状況と、大きく二分できる。それを整理すると、溝は形成後少なくとも3回は再構築されていることが分かる。形成段階も含めて1～4の段階設定をして、この溝の形状変化を考えてみたい。

[1段階] 方形区画を意識して、断面逆台形の溝を構築している。底面の張り出し部はすでに作り出されていたと思われる。また中央の細い溝は、この段階にはなかったかも知れない。

[2段階] 自然堆積した10・11層を掘り直して構築している。規模は北辺では変わらないが、西辺では内側寄りに構築されて、主に底部幅が細くなる。南辺は溝自体浅くなる。

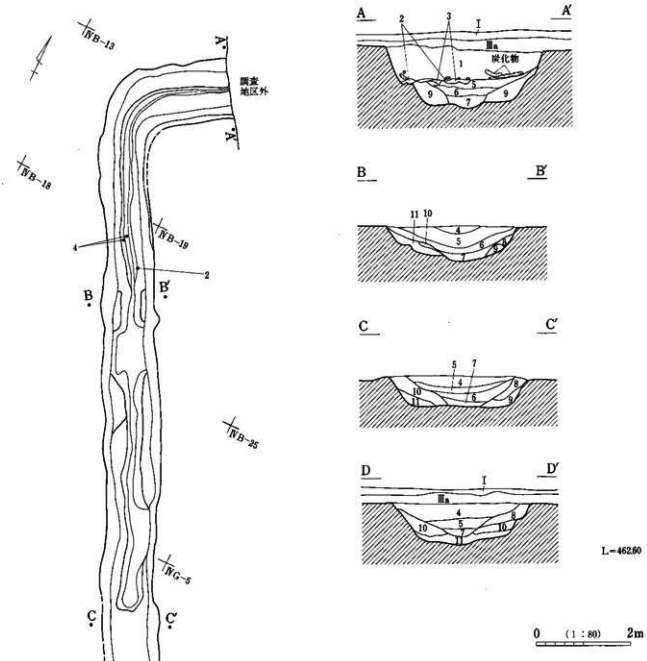
[3段階] 自然埋没した10・11層と人為的な埋戻し土の8・9層によりほぼ埋没した溝を改めて掘り直している。その掘り込みの形状は、V字状に近く、1段階の溝の中央付近を底部まで掘り込んでいる。特に北辺では以前の溝の底面を掘り抜いて中央の細い溝ができる要因となっている。

[4段階] 3段階の溝が4～6層によって自然埋没した後、更に断面逆台形に再構築している。ただこの段階の溝は北辺の調査地区外の土層観察でのみ確認されている。他の辺では確認されないため、どの規模で構築されたのか不明である。またその底面には炭化材や焼土が分布して火を焚いた状況が残っている。

**遺 物** 出土量は少ない。出土位置の明確な遺物では西辺の中央部覆土中位から下位、3段階の溝の覆土と思われる土中から赤彩の高坏脚部（2・4）が出土している。グリッド内の取り上げの分布では西辺北の屈曲部のB－13上位からハケ甕（17）、B－18の上位から鉢（9）、B－19の上位からハケ甕（18）、高坏（3）、中位から甑（12）、甕（14）、下位から台付甕（22）、甕（11）、またB－24の下位から壺（7）、ヒサゴ壺（13）、G－5の上位から小形甕（18）、上～中位から小型壺（15）、下位から片口の小型鉢（8）、有稜の赤彩高坏（1）、3単位の円形スカシを持つ高坏（5）、台付甕（17）などが出土している。こうすると、西辺の中央から北側にかけて土器が分布している。比較的弥生時代後期の様相の赤彩高坏が下位から、古墳時代前期の甕などが上位から出土している状況があるが、4段階に渡って溝を構築していることから、上下関係と遺物時期は符合していない。石器では軽石製品（60）、砥石（111）も出土している。

**時 期** 遺物の量が少ないことと、層位的に遺物を取り上げていないことからはっきりとしないが、弥生時代後期の住居跡を切ること、土器の様相から広く古墳時代前期としておきたい。

**化学分析** 覆土から層序を確認しながら、土壌試料を採取して、珪藻分析と花粉分析、植物珪酸体分析を行った（付章第1節参照）。その所見から、第1段階の溝の埋没土11層は、流水性種の珪藻化石が検出されるが、303溝より少なく、構築当時流水はあったものの、303溝より流れは弱かったといえる。また好汚濁性種の珪藻化石も多産することから、水質は弱アルカリ性の富栄養であったと考えられる。第3段階の溝最下位の7層も同様の結果が得られている。また1層では止水性の珪藻と陸性珪藻が増加する。陸性珪藻は流れ込みの可能性が高いことから、1層は流れの弱い環境で水成堆積したと考えられ、溝内には引き続き水域が存在したと考えられる。植物珪酸体の産状からも、11層の流水のあった頃には湿潤な場所に生育するヨシ属の生育割合が増し、1層の流水の少なくなった段階ではウシクサ族やタケ亜科の割合が増加している。




1：黒褐色土（砂質土。礫層の下に厚く堆積する。底部には炭化材が水平に分布し、地土ブロックを見られる。）
2：黄白色土（砂質土。Ⅳ層土の流れ込み。ブロック状に堆積。）
3：暗褐色土（砂質土。細粒砂。底部は波状を呈する。）
4：黒色～黒灰褐色土（砂質シルト。粘性あり。炭粒が上部に散見。）
5：黒灰色土（シルト質土。砂粒少ない。）
6：黒褐色～暗褐色土（砂質｜。5層土との層界に黄褐色砂が薄く堆積。）
7：黒褐色～暗褐灰色土（砂質シルト。暗褐色シルト質土と黒色・灰色・黄白色の砂がラミナ状に堆積する。底部形状もやや乱れていて、水流や湧水の影響が見られる。）
8：黒色土（黒色土と黄白色砂、灰褐色砂のブロック土。ブロックは5cmほどと大きい。水平堆積は見られない。）
9：黄褐色～黒色土（黄褐色砂・灰褐色砂・黒色土のブロック｜。ブロック径は小さいが水平堆積は見られない。）
10：黒色土（黒色土と黄白色砂、灰褐色砂が2～4cm厚の薄層で堆積。）
11：黒色～黄白色土（10層土より黄白色砂の割合が多い。1～2cm厚の薄層で堆積する。）

図27　304号溝跡

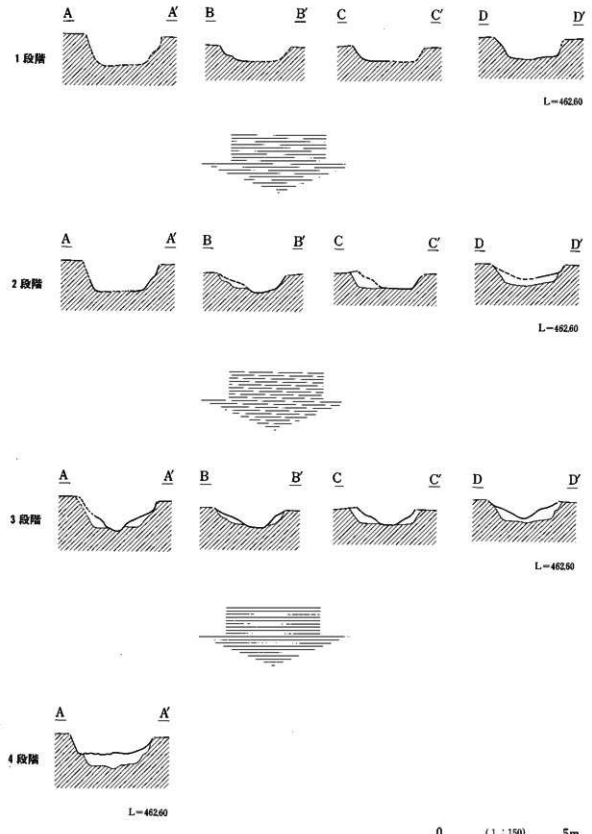



図28 304号溝跡の変遷（案）

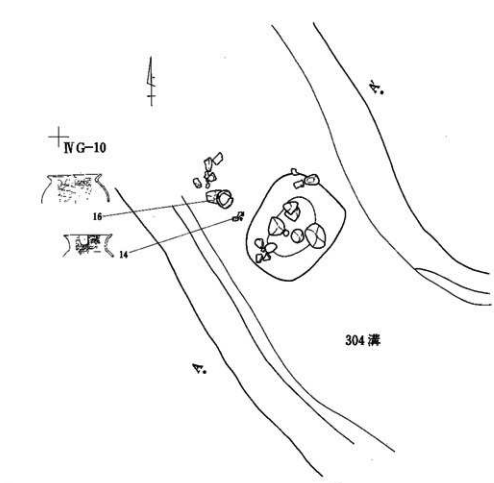



図29　SH302（礫、土器の集中）

ウ　土器・礫集中、石敷遺構（SH）

**SH302**（図29、PL47）　位置　G－10

**検　出**　304溝を調査中、その西辺の南側の覆土中に、ほぼ1ｍ四方に渡って10～30cmの礫が集中している部分が確認され、礫付近から比較的大きな土器片も出土した。またこの礫群の下には、粘性を帯びた土の陥ち込みも認められた。それら全てをまとめてSH302と呼称する。覆土は2層に分けられ、いずれも暗褐色の粘性の強いシルトである。304号溝を切り、325号住に切られる。

**構　造**　土坑状の陥ち込みは、楕円形で108×84cmの規模で深さは20cmと浅く、断面は皿状である。底面の標高は461.48ｍである。その内部と周囲に、円礫や角礫、土器片が投棄されるような状態で出土する。

**遺　物**　出土位置の分かる壺（14）と甕（16）はいずれも陥ち込みの北西方向の304号溝覆土内から見つかっている。他には、小型鉢（1）、高坏（2）、パレススタイルの可能性のある壺（3）、高坏・器台（4～7・9）、壺（8・12）、甕（10・11・13・15・16・18）、台付甕（17・19～21）と多様である。

**所 見** 調査段階では、304溝と分けているが、この古墳時代前期の遺構が少ないこと、溝跡の覆土内に全て収まることから、本来304溝の埋没と再構築に関連する特殊な遺構と考えたい。

**時 期** 13の土器は、弥生時代後期の様相であるが、他の土器から古墳前期といえる。

**SH501**（図24、PL47） 位置 O－14

**検 出** Ⅳ層上面にて、本跡の西に隣接する533住を掘り下げた段階で河原礫が敷かれた状態で検出する。533住を切り、522住に切られる。覆土はほとんど検出できない。

**構 造** 石敷の長軸は北北東にあり、規模は300×230cmを測る。また壁は北東隅付近に残っていて、浅く傾斜を持つ。533住の壁と重複する部分がある。

石敷の方法は、竪穴状に掘り込んで、底面を均したところに、人頭大の河原礫を敷きつめている。そして隙間には拳大の河原礫を詰めている。ピットや炉等はない。

**遺 物** 非常に僅か、弥生時代後期の土器片が出土している。

**時 期** 用途不明の遺構で、検出状況もよくないため決定できないが、遺物と検出状態から、533住と同様に弥生時代後期頃としたい。

エ 土坑

**3419号土坑**（図30） 位置 G－4

**検 出** Ⅳ層上面で検出され、重複関係はない。覆土は黒褐色の砂質土で、粘性は弱く、しまりは良好である。

**構 造** 平面円形で、断面は鉢状である。

**規 模** 40×36×18cm。

**遺 物** 覆土内から、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の甕（1）が出土している。

**時 期** 土器から、弥生時代後期～古墳時代前期初頭としたい。

**所 見** 性格は不明。平面位置は弥生後期の313住と、古墳前期の304溝の中間にある。

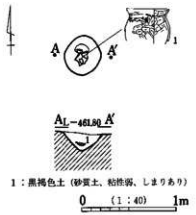



図30 3419号土坑

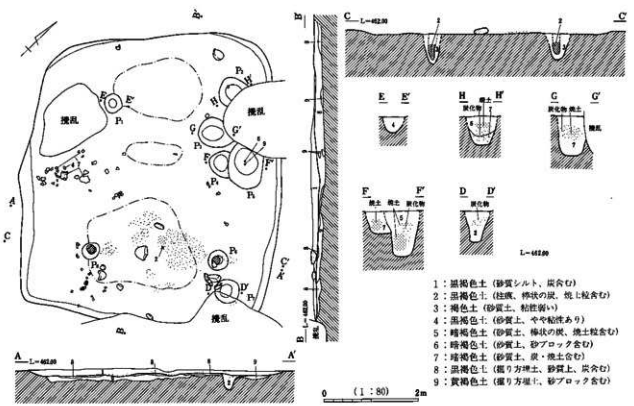



図31　301号住居跡

### (iii)　古墳時代中期～平安時代の遺構

#### ア　住居跡

**301号住居跡**（図31）　　位置　H－21

**検　出**　調査区の南端付近のIV層上面で検出する。南側と東側の一部が撹乱を受けている。切り合いはない。床面上部やピット覆土より、炭化物が顕著に堆積・包含されることから、本跡の廃絶過程で火災を受けている可能性がある。その後、黒褐色の砂質シルトが自然堆積した様相を示している。

**構　造**　平面形態はやや不整な隅丸の長方形で、壁面は不明確で緩く傾斜している。床面は中央の3ケ所に堅緻な部分があり、それらは断面観察から、貼り床と推定される。ピットは8基検出され、柱穴は柱痕を残すP6・8とP1・3が考えられる。他のピットも比較的円柱状に深い形状である。

**遺　物**　西側の床面から高坏（4）と小型甕（5）、甕（7）、貼り床の焼土範囲から坏（2）、P5内から壺（6）と甑（9）が出土している。坏は椀形で口縁部が短く外反する器形で、壺は口縁部が直線的に立つ器形である。また甕は長胴形で、体部下半に最大径を持つ。

**時　期**　土器の様相から古墳時代5世紀末から6世紀初めと位置づける。

**302号住居跡**（図32）　　位置　H－21

**検　出**　IV層上面で検出。全体に削平が進み、壁の立ち上がりは極めて浅い。覆土は黒褐色の粘性シルトの単層で自然堆積である。北壁と南壁付近は撹乱を受け、原形を止めていない。切り合いはない。

**構　造**　ほぼ方形の平面形態である。床面は平坦であるが、特に堅緻な部分はない。ピットは3基検出され、いずれも柱穴と考えられる。P1はやや大形であるが、P2・3は非常に小形で深い。

**カマド**　北東壁中央に1基検出されるが、火床とそれに伴う焼土と炭化物が認められるのみである。

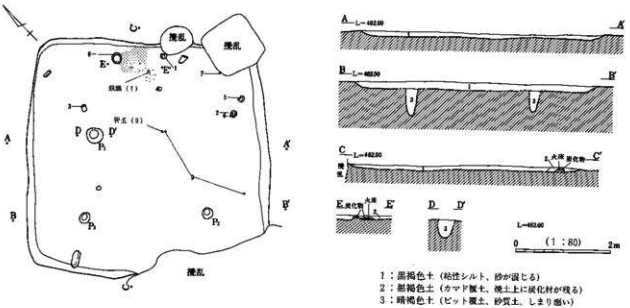



図32 302号住居跡

**遺 物** カマド東側でほぼ完形の内黒坏（1）や長頸鏃（1）などが出土し、西側には底部が欠損した長胴甕（8）が伏せた状態で検出されている。また西隅の床面では完形の内黒坏が4点（2・4・5・7）まとまって出土していて、そのうち2点（2・4）は正位で重ねられている状態である。また竈（9）も床面から破片で出土している。中央付近の床面では石製管玉（9）が出土している。坏は浅い半球形の内黒坏が大半を占め、甕は撫で肩の器形となる。竈（9）は球胴で口縁部が直立気味で、端部が面取りされた器形である。

**時 期** 土器の様相から6世紀中頃と考えられる。

**303号住居跡** 位置 H－17

**検 出** Ⅳ層上面で確認。削平の影響強く、覆土や壁面の残りは非常に悪い。覆土は暗褐色の砂質土である。北側は301溝に切られる。3046・3073・3074坑に切られる。304住、3029坑を切る。

**構 造** ほぼ方形の平面形態と考えられる。壁面は全く残存せず、床面も安定していない。ピットは確認できない。

**カマド** 301溝に切られる北側部分、北壁中央やや右寄りの床面より10cm低い位置に焼土や土器片、被熱した礫が散らばっている。状況から本跡のカマドであると思われるが、詳細は不明である。

**遺 物** 図化資料はない。坏や内黒坏の器形では浅い半球形が目立つ。

**時 期** 重複関係と土器から7世紀後半頃と考えたい。

**304号住居跡** 位置 H－11

**検 出** Ⅵ層上面にて、黒褐色土の浅い広がりとして検出。壁面はほとんど残存していない。南側部分は303住、301溝の順に切られる。

**構 造** 僅かな覆土の状況などから、長方形の平面形態といえる。明瞭な床面は残らない。ピット、カマドともに検出されない。

**遺 物** 北隅の床面付近に土師器の小破片が散在。

**時 期** 出土した土器からは、7世紀後半以前といえる。

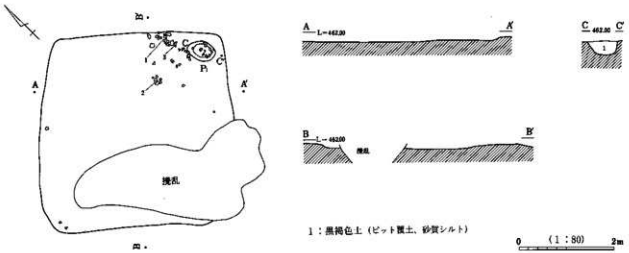



図33　305号住居跡

**305号住居跡**（図33）　　位置　H－11

**検　出**　覆土と壁の大半が残らない状態で検出。南側が大きく撹乱を受けて原形を止めない。切り合いはない。

**構　造**　ほぼ方形の平面形態である。壁はほとんど検出できていない。床面は平坦であるが、堅緻ではない。ピットは東隅に1基あり、60×40cm、深さ30cmの規模を呈する。覆土から土器の小片が多量に出土している。炉・カマドは検出されない。

**遺　物**　P1内とその周辺の床面に土師器片が集中して出土している。P1内の土器片には図化できる資料はない。床面の坏3点（1～3）を図化している。坏は深い半球形が主体である。

**時　期**　土器の様相から5世紀後葉に位置づける。

**308号住居跡**（図34）　　位置　G－10

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で、自然堆積と考えられる。307・376・377住、3153坑を切り、309建に切られる。

**構　造**　ほぼ方形の平面形態である。壁面は北西側がほぼ垂直に掘り込まれ、南東側はやや傾斜している。床面は基本的に堅くしまる貼り床だが、南側は貼り床がなく比較的柔らかい。ピットは計19基検出されて、主柱穴はP4・7・11・16と考えられ、特にP11とP16には柱痕が残る。またP8・9・10は入口部の施設跡と思われる。カマド周辺のP1・18・19は浅く、性格は不明である。P2・3・17は副柱穴とも推定される。

**カマド**　北壁の中央に1基ある。袖の構築材として両袖の最前部に1対の河原礫が据えられた状態で残る。その断面観察から礫は地山を掘り窪めて据えている様相を示す。それ以外に構築に関連するものは残らない。火床は明確でなく、焚き出し部には焼土と灰・炭化物が堆積している。煙道部は下部が僅かに残り、現存で60cmほどの長さで、壁から外へ伸びている。

**遺　物**　P5内からほぼ完形の内黒高杯（4）が出土している。また、P19から内黒坏（2）、床面から内黒坏（3）、鉢（5）、小型壺（6）が出土している。他に中央床面から石製臼玉（13）が出土している。

**時　期**　土器の様相から、6世紀中頃～後葉と考えられる。

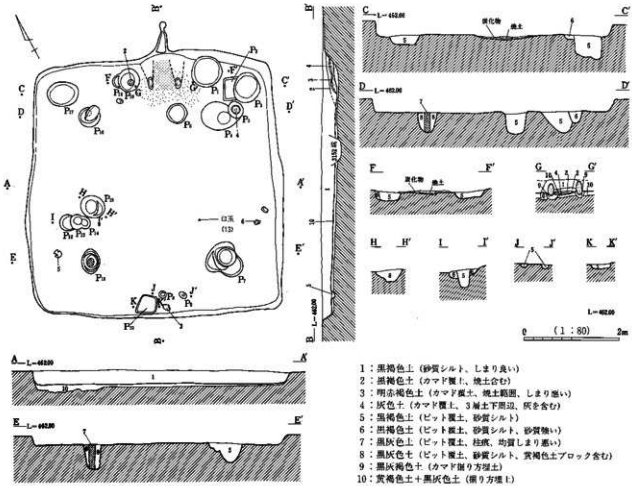



図34　306号住居跡

**307号住居跡**　　位置　G－15

**検　出**　Ⅳ層上面で、306住に大半を切られる状態で検出される。南隅と南東隅を残しているが、削平の影響も強く、壁の立ち上がりはほとんど確認できない。また308・376住を切る。

**構　造**　残存する部分から方形の平面形態を推定する。床面は軟弱であり、ピットは2基検出される。いずれも位置から柱穴と考えられ、床面から深さ30cm程まで半ば円柱形に明確に掘られている。カマドは確認しない。

**遺　物**　覆土内から土師器片が少量と、土師器の土器片板（41）が出土している。

**時　期**　重複関係から、7世紀前半以前と考えられる。

**308号住居跡**　　位置　G－15

**検　出**　Ⅳ層上面で黒色土の覆土と一部床面を検出する。307住、302溝に切られる。

**構　造**　残る床面の広がりから、平面形態は隅丸方形と推定する。壁は削平のために残らない。床は全体に平坦であり、南側は堅緻な貼床が確認されるが、北側には認められない。ピット9基はいずれも床面下の調査で検出される。P1～6・8・9は柱穴と考えられ、P1・3・6・8が1組の方形の柱穴の組み合わせを作り、その内側にP2・4・5・9が同形で小さな方形の柱穴の組み合わせを作ると思われる。どのピットも床面下60cm程と深く、特にP1・2・3・5・6・9は柱穴底面の一部が更に凹む有段の断面形状を呈している。また南壁側床面にあるP7は入口施設に関連する柱穴と考えられる。

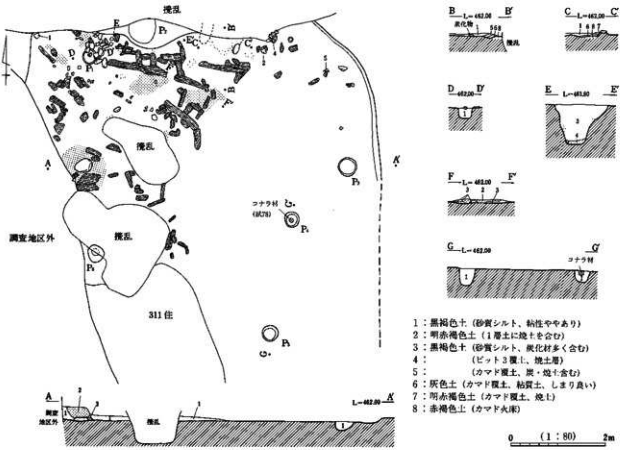



図35　309号住居跡

**カマド**　北壁中央際に焼土が拡がる。火床面の残存の可能性を示す。
**遺　物**　非常に少ない。
**時　期**　重複関係から7世紀以前、土器の破片から6世紀中頃と考えられる。

**309号住居跡**（図35、PL9）　位置　G－13
**検　出**　Ⅳ層上面にて、焼土と炭化材を多く含む黒褐色土の広がりとして検出する。北壁際と西側の床面が大きく撹乱を受けている。310住を切り、311住に切られる。また西側は調査地区外に出る。
**構　造**　比較的大きな方形様の平面形態であると推測するが、埋没後の変容が著しく確定はできない。壁も東辺に僅かな立ち上がりを残すのみである。床面は地山を平坦にならした状態で、一部堅緻な部分はあるがほとんどが軟弱である。ピットは6基確認され、そのうち柱穴としてP4・5・6が考えられる。特にP4は覆土中央に炭化した柱材を残している。またカマド左横にあるP2は深さが82cmと深く、焼土や炭化材を多く含んでいる。
**カマド**　北壁やや右寄りに1基検出される。しかし撹乱によりそのほとんどは残らず、火床部の南半分と左袖構築材の河原礫が1点だけ確認される。
**遺　物**　カマド右側の床面直上から坏（2）や高坏脚部（5）、小型甕（4）が出土している。それらの出土した高さは炭化材とほぼ同水準にあたる。坏は深い半球形が主体で、高坏脚部は裾部が強く屈曲して開く器形である。他に覆土から棒状土製品（67）が出土している。

**炭化材の状況** おもに北西側の床面部分から、炭化材と焼土が多量に検出される。炭化材には燃焼前の形状を明瞭に残すものが多く、なかには一定方向に横たわるような出土状況を示す部分もみられる。また炭化材の上に焼土が堆積する部分があり、燃焼時またはその前後に木材を覆った土であることが分かる。これらの状況から、この炭化材はＰ４内の炭化した柱材などと含めて、この住居跡の上屋の部材にあたると考えられ、何らかの状況によって埋没以前に燃焼したものであると考えられる。また、やや根拠に乏しいが炭化材上部の焼土は土塀の残骸の可能性を持っている。なお炭化材の一部を分析した結果、樹種はコナラと同定された（付章第１節参照）。

**時 期** 重複関係と土器の様相から５世紀後葉と位置づける。

**310号住居跡** 位置 Ｇ－14

**検 出** Ⅳ層上面で不定形な黒色に変色する広がりとして検出。攪乱の影響と切り合いが激しく、309住と3002坑に切られて、南北の両側は攪乱を受け、床面まで壊されている。覆土は削平によりほとんど残っていない。

**構 造** 東側の床面はやや直線状に残るものの、他は壊されているため、平面形態は不明である。床面は平坦であり、西側の一部には堅緻な部分が認められるが、それ以外は軟弱である。４基検出されたピットのうちＰ１は浅く皿状である。Ｐ２は底部に２カ所の小穴を持ち、覆土から土器片が出土している。Ｐ３は攪乱を受けるものの、床面下90cmと非常に深く、円柱状にしっかりと掘り込まれている。Ｐ４は浅い皿状であり、覆土には形状を残す炭化材を多く含んでいる。

**炉・カマド** 検出部分にはない。

**遺 物** 僅かな土器片が出土するが時期を決定できない。また南西側の床面で石製の臼玉（14）が出土している。

**時 期** 重複関係から５世紀後葉以前と思われる。

**311号住居跡** 位置 Ｇ－18

**検 出** 調査区西のⅣ層上面で検出。その西側は調査地区外に広がる。削平と攪乱の影響を強く受けている。309住を切っている。覆土は黒褐色の砂質土の単層であり、自然堆積と考えられる。

**構 造** 調査地区内の形状からは、方形から長方形の平面形態を想定できる。壁面は全体に浅いが、ほぼ垂直で床面は全体に軟弱である。ピットは４基検出されている。そのうちＰ２・４は位置から柱穴と思われる。いずれも円柱状であり、Ｐ１は深さ10cmと浅く、Ｐ２～４は20～30cmと比較的深い。カマドは確認できていない。

**遺 物** 土師器甕の破片が僅かに出土している。

**時 期** 重複関係から５世紀後葉以後とする。

**312号住居跡**（図36） 位置 Ｇ－７

**検 出** Ⅳ層上面にて多数の切り合い関係を持つ遺構のうちから、その全て（313住、3065坑）を切る遺構として検出される。なお、南西側は調査地区外に出る。覆土の状況は削平の影響からか検出段階で床面が露出するような部分があり、黒褐色土の単層が浅く堆積しているのみである。しかしその土質は均質ではなく、黄褐色砂質土のブロックが点在することから人為的な埋め戻しの可能性を持つ。

**構 造** 調査した部分から、隅丸の方形の平面形態と考えられる。壁面は全体に浅いが、北西壁は斜めに掘り込まれていることが明確に認められる。床面は全体に軟弱であり、覆土との境界すら見分けが困難な

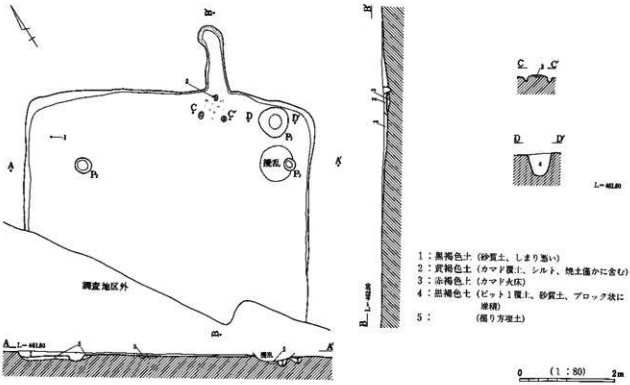



図36　312号住居跡

状況である。これは本跡が他の遺構の埋没した上に構築された理由からだろうか。ピットは3基検出される。そのうちP2・3が柱穴と考えられ、P1はカマド右横に位置するピットである。

**カマド**　北東壁のやや東寄りに1基検出される。削平により袖部や天井部は不明である。燃焼部には袖石と支脚石の抜き跡が見られる。火床はその支脚石の手前に良好に残り、煙道部もほぼ水平に長く認められる。煙道の煙出し口の地山は被熱している。

**遺　物**　カマド火床から長胴甕（2）、床面から坏（1）が出土している。出土量は少ない。

**時　期**　重複関係と土器の様相から、6世紀前葉頃と考えられる。

**314号住居跡**　欠番

**315号住居跡**　　位置　G－3

**検　出**　弥生時代後期の313住の調査後にその北東側に確認する。撹乱がひどいが、住居跡の痕跡を止める。覆土は暗褐色の砂混りの粘性シルトの単層であり、複数の土質がブロック状に入るため、人為的な埋め戻しを想定できる。313住を切り、305建、SA304、3386坑に切られる。

**構　造**　不整な方形の平面形態を呈する。壁は残りが悪く、緩やかに立ち上がる。床面は撹乱により不明確である。ピットは6基確認する。P4には柱痕が残る。それ以外は円柱状に掘り窪められている。配置が不規則で、柱穴と判断しにくい。

**カマド・炉**　確認できない。

**遺　物**　覆土から土師器片が少量出土している。小型甕（1）や直線的に開く壺口縁部（2）は古墳時代中期的な様相と思われる。またミニチュア土器（14）も出土する。

**時　期**　広く古墳時代中期と想定する。

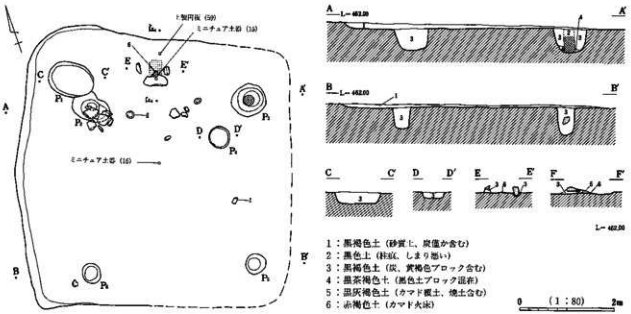



図37 317号住居跡

**317号住居跡**（図37、ＰＬ９） 位置 Ｇ－４

**検 出** 検出面はⅣ層上面だが、本来Ⅲｂ層まで立ち上がると思われる。本跡の周辺は５軒の住居跡が切り合い、本跡は316・319・320・321住を切り、3440坑に切られている。覆土は黒褐色土の単層で、自然埋没と思われる。

**構 造** 東・南壁がほとんど残らないが、ほぼ正方形の平面形態を想定する。壁の深さは、最大で14cm程である。床面は水平であまり堅くない。床土は黒色土と黄褐色土のブロック土である。主柱穴はＰ２・３・５・６といえ、Ｐ３の覆土には柱痕が認められ、その太さは20cmを測る。

**カマド** 北壁中央に１基付設される。天井、袖とも残存しない。ただし、右袖材と思われる据え方を持つ河原礫が１点立っている。その左前面に天井石らしき平坦な河原礫が残されている。支脚は残らない。火床は平坦で住居床面と同水準である。煙道部は確認できない。

**遺 物** カマドから甕（６）とともに、ミニチュア土器（15）、土製円板（59）が出土している。火床よりやや浮くものも含むが、カマド廃絶時の祭祀に伴う遺物であろう。また床面西側から須恵坏（１）、中央付近からミニチュア土器（16）が出土している。

**時 期** 須恵坏はＴＫ43段階と考えられ、また他の土器の様相と重複関係も合わせて、６世紀後葉に位置づける。

**318号住居跡** 欠番

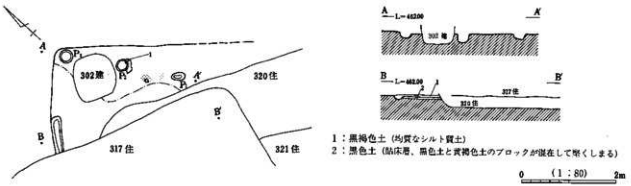



図38　319号住居跡

**319号住居跡**（図38）　　位置　G－4

**検　出**　検出面はⅣ層上面だがⅢｂ層まで立ち上がると思われる。重複関係が激しく、本跡は323住を切り、317・320・321住、302建に切られる。覆土は黒褐色土の単層で、埋没過程は不明である。

**構　造**　方形の平面形態を想定する。以下残存部の調査に限って報告する。壁はほとんど残らないが、周溝が西壁際にある。床面は水平で堅くしまる。ピットは３基検出したが、その性格は不明である。カマドや炉は検出されない。

**遺　物**　有稜部を持つ高坏（１）が出土している。

**時　期**　切り合い関係から５世紀中頃から末葉以前に属すると考える。

**320号住居跡**（図39）　　位置　G－4

**検　出**　検出面はⅣ層上面だがⅢｂ層まで立ち上がると思われる。本跡は319住を切り、317・321住、また3147・3148・3149・3167・3168・3177・3431・3440坑に切られる。覆土は黄褐色土ブロックを含まない１層とそれを含む２層に分けられるが、どちらとも淘汰的な性状で、自然堆積と考えられる。

**構　造**　平面は正方形の形態である。壁は大部分が他遺構に切り取られ、北壁を残すのみである。周溝はない。床はほぼ水平であり、堅くしまる。貼り床層（９層）は黒色土と黄褐色土のブロック土で、ブロック径は２～３㎝と大きい。ピットは計14基確認する。そのうち主柱穴はＰ１・３・５・７であり、方形配列の４本主柱となる。Ｐ３・５の覆土には柱痕があり、太さは径20㎝弱を測る。その他のピットは他遺構の見落としの可能性もあり、積極的に評価しにくい。

**カマド・炉**　検出されないが、西壁際１ｍのところに被熱した部分がある。この部分がカマドや炉の痕跡である可能性はある。

**遺　物**　土器は全て土師器片であり、床面から有段部をもつ高坏（２）と、口縁部が直線的に外反して体部下半が膨らむ甕（５）、Ｐ３から同器形の甕（３）が出土している。また覆土中から石製の紡錘車（１）と模造品の勾玉（36）が出土している。貼り床層からは砥石（106）も検出されている。

**時　期**　重複関係と土器の様相から、５世紀後葉と考えられる。

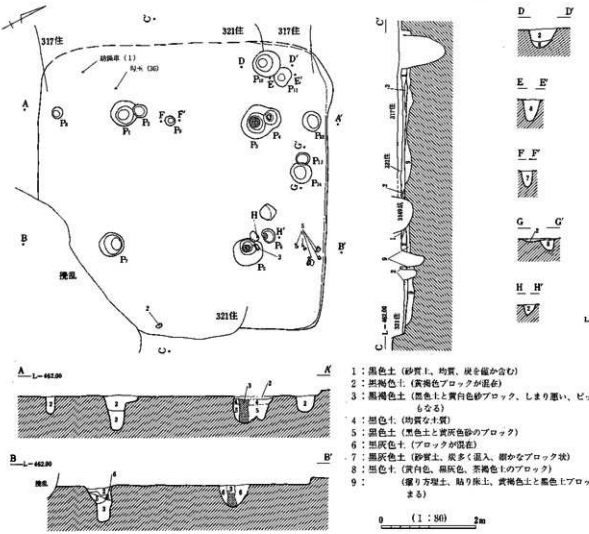



図39 320号住居跡

**321号住居跡**（図40、PL9） 位置 G－9

**検 出** 検出面はⅣ層上面だがⅢb層まで立ち上がると思われる。本跡は316・319・320住を切り、317住また3144・3145・3148・3149・3177坑にも切られる。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆没した性状を示している。

**構 造** 僅かに長方形の平面形態を呈している。壁は最大で12cm残存している。周溝はない。床は壁際から中央に向かって僅かに低くなっているが、ほぼ水平である。堅くしまる貼り床層は、黒色土と黄褐色土の細かなブロック土である。北東部では10cm程の厚さを持つが、中央部から南東部にかけて床土はほとんど残存していない。主柱穴はP5・8・18であろう。南東部の攪乱により1基欠くものの、方形配列の4本主柱と考えて間違いないだろう。3基ともに直径50cm以上、深さ60cm以上としっかりした柱穴である。P18には柱痕を確認した。その他にピットは18基検出している。そのうちP7・15・16・19は主柱穴間にある柱穴と考えられる。P7・16には柱痕が確認できる。また南壁際に壁に直交するように浅い溝状のピット（P20・21）が2本並列している。溝底には約20cm間隔に深く窪む部分がある。さらにP21の軸上にやはり20cm間隔で小さく浅いピット3基が縦列する。これもP21に含まれる可能性が高い。この2基の性格は不明である。

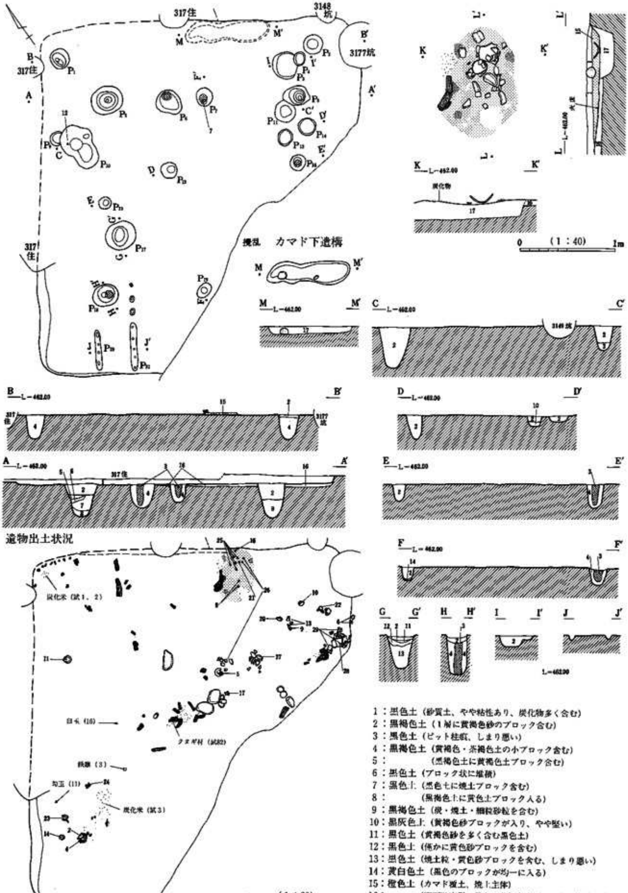

317住
3148坑
3177坑
撹乱　カマド下遺構
遺物出土状況
炭化米（試1、2）
臼玉（16）
クヌギ材（試82）
鉄鏃（3）
勾玉（11）
炭化米（試3）
炭化物
L=462.00
0　(1：40)　1m
0　(1：80)　2m
1：黒色土（砂質土、やや粘性あり、炭化物多く含む）
2：黒褐色土（1層に黄褐色砂のブロック含む）
3：黒色土（ピット柱痕、しまり悪い）
4：黒褐色土（黄褐色・茶褐色土の小ブロック含む）
5：　　　　（黒褐色土に黄褐色土ブロック含む）
6：黒色土（ブロック状に堆積）
7：黒色土（黒色土に焼土ブロック含む）
8：　　　　（黒褐色土に黄色土ブロック入る）
9：黒褐色土（炭・焼土・細粒砂粒を含む）
10：黒灰色土（黄褐色砂ブロックが入り、やや堅い）
11：黒色土（黄褐色砂を多く含む黒色土）
12：黒色土（僅かに黄色砂ブロックを含む）
13：黒色土（焼土粒・黄色砂ブロックを含む、しまり悪い）
14：黄白色土（黒色のブロックが均一に入る）
15：橙色土（カマド覆土、焼土主体）
16：　　　　（床下貼床層、黒色・黄褐色土ブロック、堅くしまる）
17：黒色土（カマド下層、しまり悪い）

図40　321号住居跡

**カマド** 北壁右寄りに1基付設されている。構造としては火床面が一部残るのみである。カマド部分はやや掘り窪めたようになっていて、焼土粒を多く含む層（15層）に覆われている。この覆土中から土師器甕の大型破片、層上部には完形の小型壺や支脚石と思われる円柱状の河原礫が出土している。なお、黄白色粘土の小塊が散っており、袖材の遺存とも思われる。その様相から以下のようにカマド廃絶の工程を想像してみる。

①カマド本体（天井部・袖部）を解体する。

②支脚石を抜き取り、火床を削り込んでカマドを完全に破壊する。

③このカマドで使っていた土師器の甕・壺類を割って撒き、火床の土などで覆って封鎖する。

④その上に小型壺、支脚石を置く。

⑤解体の際に出た土石を片付け、住居外に捨てる。これは③以前の段階に為されたかもしれない。

また、カマドの直下には北壁に沿った長さ1.6m、幅40cm、深さ15cm程の溝状の掘り込みがある。床土を切り、かつカマド覆土に覆われる。カマド構築前の地形なのか、防湿施設や廃絶行為に関わるものか、その性格は不明である。

**遺 物** カマドから坏（8）、小型壺（16）、壺（21）、甕（25）、甑（26）が出土している。他に土器は北東部の主柱穴の周りに分布の集中が見られる。なお、覆土からMT10段階の須恵坏が出土している。また勾玉（11）や石製の臼玉（15・16）、模造品の管玉（34）、鉄鏃（3）、刀子（11）など多種類の遺物が、床直上から覆土に渡って出土している。

**科学分析** 床面や覆土には炭化材や炭化種子が多く認められ、同定した炭化材は全てコナラであり、北西隅及びP18付近に集中する粒状の炭化物はいずれも稲籾と鑑定されている（付章第1節参照）。そのうち北西隅の稲籾は袋か容器に納められていたかのように一塊になって出土している。

**時 期** 土器の様相から5世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

### 322号住居跡 欠番

### 323号住居跡（図41） 位置 G－4

**検 出** 検出面はⅣ層上面だが、本来、Ⅲb層まで立ち上がると考えられる。削平と検出時の表土の除去により、覆土と床面を失い、本跡の形状と規模の確認は掘り方の残存から行う。304溝・340住を切る。319・336住、302建に切られる。

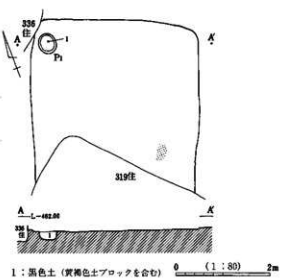



図41 323号住居跡

**構 造** 南部分を切られていて、全体は確認できないが、やや不整な長方形を呈していると考える。壁、床面は残っていない。ピットは北隅に1基確認する。カマドや炉と判断できる施設はない。東壁付近にある焼土範囲は床土内に焼土が混入した状態である。

**遺 物** 出土量は極めて少ない。P1から内面黒色坏（1）が出土している。

**時 期** 切り合い関係から304溝埋没時期の古墳時代前期以降、319住の構築時期5世紀末以前の間に含まれると考えられる。

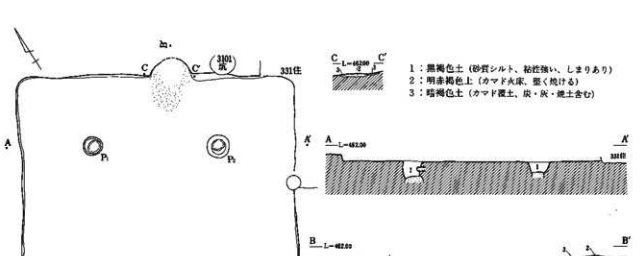



図42　325号住居跡

**324号住居跡**　欠番

**325号住居跡**（図42）　　位置　G－10

**検　出**　Ⅳ層上面にて確認。検出段階で覆土は欠如している。377住、304溝、3188坑、ＳＨ302を切る。331住、309建、3101・3104・3105・3171・3172・3187坑に切られる。

**構　造**　平面形態は方形を呈する。壁はほとんど残らない。床面は平坦で、全体に堅くしまる。２基のピットはいずれも主柱穴と考えられる。Ｐ１・２はカマドの付設される北壁に近く、壁面に平行に並ぶ。その底部にはいずれも平坦な河原礫を持つ。

**カマド**　北東壁中央やや右寄りに１基付設される。そのほとんどの構造は削平されて不明であるが、住居壁から半円形に突出して掘り込んだ部分に火床面を持ち、その前庭部に灰や焼土の広がりが見られる。

**遺　物**　覆土が欠如していて、出土量は少ない。須恵器の横瓶１個体が床面から床下で出土している。

**時　期**　重複関係と出土土器から５世紀後葉～６世紀初頭と考えられる。

**326号住居跡**（図43、ＰＬ10）　位置　Ｂ－22

**検　出**　Ⅳ層上面で確認。覆土は黒褐色の砂質シルトで自然埋没と考えられる。303溝・327住を切る。

**構　造**　北壁面の線がカマドの左右でややずれるものの、全体では、隅丸の長方形の平面形態を呈している。壁は斜めに立ち上がる。床面は地山を直接掘り込み、カマド付近は堅緻であるが、他遺構覆土内を掘り込んでいる範囲では軟弱である。検出したピット４基はいずれも主柱穴と考える。方形配列の４本主柱であり、それぞれのピットは円柱形に深く掘り込まれている。

**カマド**　北壁中央やや右寄りに１基付設される。天井部は欠如して、袖部は一部構築土が残り、その先端には構築材（礫）の抜き取り跡と思われる小ピットがある。支脚の抜き取り跡も確認され、その前部に火床面がある。また構築材らしき河原礫はカマド付近の床面に散乱している状況である。

**遺　物**　カマドや床面から内黒坏（１・３）や長胴甕（７）、擦石（134・135）、擦・敲石（187）などが出土

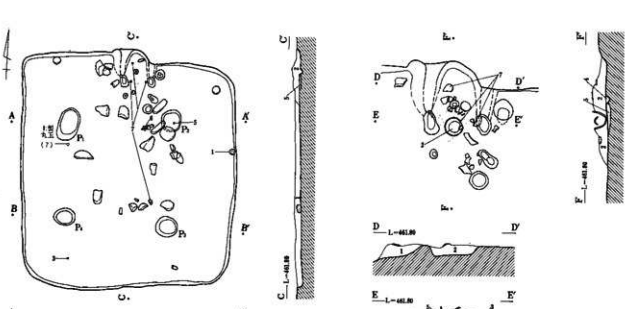



図43 326号住居跡

し、またP1付近床上から土製丸玉（7）も出土している。なお内黒坏には有段口縁坏（1）がある。

**時 期** 出土土器から7世紀初頭～前葉と考えられる。

**327号住居跡**（図44、PL10） 位置 G－2

**検 出** Ⅳ層上面で検出。303溝を切り、326住、3322坑に切られる。覆土は黒褐色土の砂質シルトの単層で、自然堆積と考えられる。

**構 造** 僅かに横長の方形の平面形態であるが、東隅がやや丸みを持つ。壁は全体に浅く10cm程しか残らない。カマドを付設する北西壁以外には壁直下に周溝を持つ。周溝は断面U字形で、深さは床面から10cm程である。また南西壁周溝から直角にP4につながる間仕切り様の溝が検出されている。床面は貼り床ではないが、堅緻である。ピットは大小23基確認され、そのうち主柱穴はP1・2・3・4と考えられる。攪乱を受けたP3以外はいずれも上部が広く、下部が細く深い構造で柱痕も認められている。それ以外のピットはいずれも規模が小さく用途は不明である。

**カマド** 北西壁のほぼ中央に1基付設する。構築材らしき河原礫が付近に散乱するが、カマド本体には残らない。煙道は火床部からそのまま水平に伸びて、焼土が残っている。火床部には焼土と円形の火床が認められる。カマド周囲のP6・7・8はカマド構築材の掘り方である可能性を持つ。

**床下構造** 断面観察から、壁際には幅150cm、深さ床面下20cmの掘り方が全周している。その底部は波打っていて、埋土には黒色砂質シルトに黄褐色砂質土ブロックがやや混じる状態である。

**遺 物** カマド付近と南東壁際の床面で土器が出土している。また北東壁際床面では編物石（65～73）が9点まとまって出土している。他に覆土から軽石製品（49）、擦・敲石（188）、鍛冶滓（16）も確認されている。土師坏には須恵坏模倣の器形（2）や半球形のもの（3・9）、体部が大きく開く器形（4・6・7）

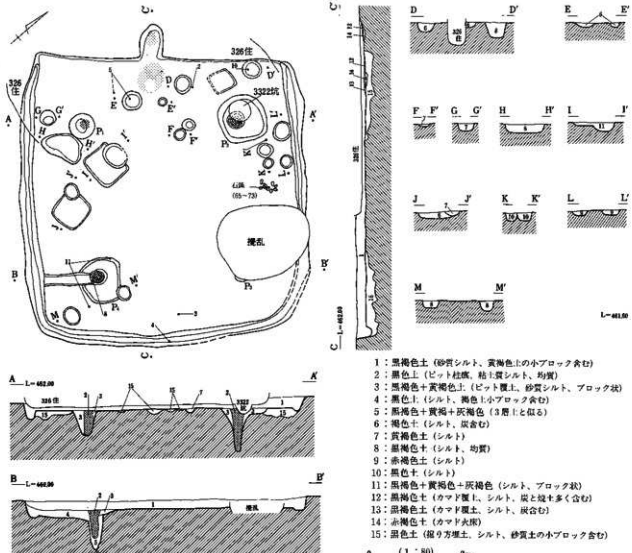



図44　327号住居跡

があり、球胴形の壺も伴う（10・11）。なお覆土からＴＫ43段階の須恵坏が出土しているが、堆没時の混入と考えたい。

**時　期**　重複関係と出土土器から５世紀末～６世紀前葉と考える。

**328号住居跡**（図45）　　位置　Ｇ－19

**検　出**　調査区西壁際で、北東部が大きく撹乱を受けて検出され、329住、302溝、3107・3213坑を切る。覆土は黒色の砂質シルトの単層で、自然堆没と考える。

**構　造**　残る部分から方形の平面形態を推定する。壁は深さ16cm程と浅く、残る部分では垂直である。床面では南東壁際に６cm程高まる不整台形のベッド状遺構が確認されている。床面はその部分のみブロック土が貼られ、堅く敲き締められている。ピットは８基検出し、そのうち主柱穴はＰ１・２・３であり、撹乱部分にもう１基あるとすれば、４本柱の方形配列と考えられる。３基とも深く掘り込まれ、柱痕を残している。

**カマド**　確認できない。

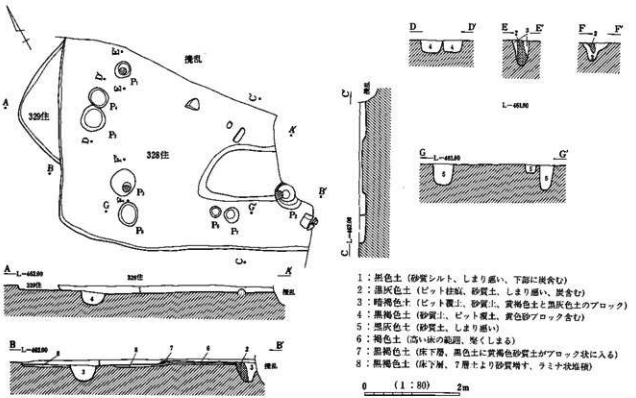



図45 328号・329号住居跡

**遺 物** 非常に少なく、覆土から須恵器高台坏（1）や平瓦（1）が出土している。

**時 期** 僅かな遺物から、8世紀後葉と考える。

**329号住居跡**（図45） 位置 G－19

**検 出** 328住に大半を切られる状況で検出する。覆土は黄褐色砂が混じる黒褐色土の単層であり、自然埋没と考えられる。

**構 造** 確認できる西隅部分は、やや丸みをおびる直角であり、方形の平面形態を推定する。壁は残りが悪く非常に浅い。床面は全体に軟弱であり、ピットなどの付属施設は認められない。

**遺 物** 出土していない。

**時 期** 重複関係から8世紀以前と考える。

**331号住居跡**（図46、PL10・11） 位置 G－10

**検 出** Ⅳ層上面で確認する。325・334・347・348住、304溝を切り、覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で、自然埋没と考える。

**構 造** ほぼ方形の平面形態であるが、東隅と南隅は直角気味であるものの、北隅は丸みを持ってやや突出し、また西壁は歪んで内側に入り込む状態を呈していて、全体に不整である。壁面は急角度に傾斜している。特にカマド側は明確に残るが、反対側の南壁は浅く残りが悪い。床面はカマド周辺が堅緻で、それ以外は軟弱である。掘り方はない。ピットは8基確認する。いずれも円柱状に掘り込まれているが、明確に柱穴と考えられる位置関係にはない。あえて考えればP1・2・3・8の4本柱と中央のP4辺りを柱穴と見る。

**カマド** 北東壁の右寄りに3基が並列して付設される特殊な状況を示している。ここで仮に左からカマド

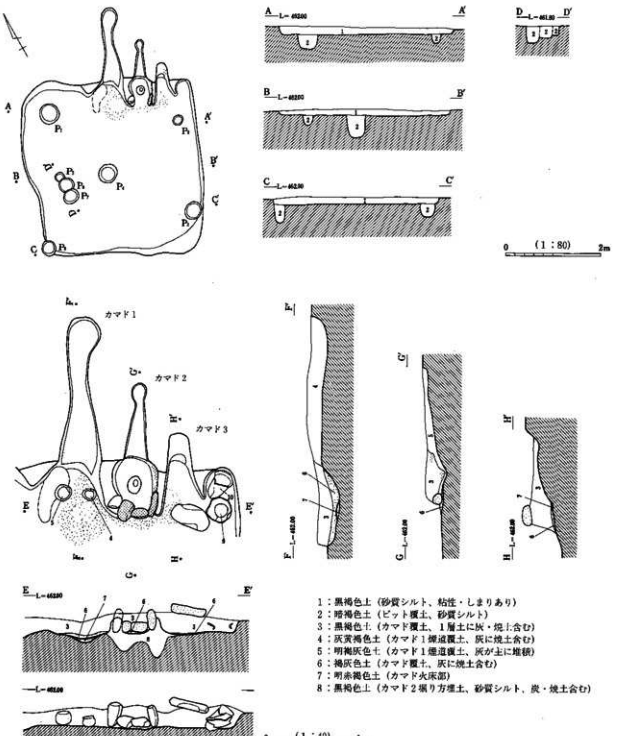



図46　331号住居跡

1、2、3と呼ぶこととする。カマド1は最も煙道部が長いカマドであり、140cmを測る。燃焼部の袖などはほとんど残っていないが、火床部のやや奥に土師器の鉢（4・5）が並べて置かれた状態で出土している。また全体に灰と焼土を含む土に覆われている。カマド2は中央にあり、1・2に比して規模は中程度である。煙道部は緩やかな傾斜で昇り、長さは80cm程である。両袖部は比較的遺存状況が良好で、カマド掘り方埋土同質の砂質シルトと河原礫で形成された状況を残している。火床部中央には支脚石の抜け跡と思われる小ピットも認められる。またカマド部材の河原礫2点が、カマド口を閉じるように置かれてい

る。カマド3は東隅に位置し、最も小振りで、煙道部は25cm程水平に伸びている。全体に残りは悪いが、右袖とカマド2と共用する左袖があり、内部は全体に被熱し、火床らしき跡も見られる。また焚出部の上部にはカマド天井材らしい扁平な河原礫が浮いた状態で検出されている。このカマドの右側の住居跡東隅には土師器の大型壺（9）の口縁部から肩部が逆位に置かれ、その奥に長胴甕（10）が置かれている。この3基のカマド付設の時間差は調査の時点では把握できていない。あえて推察すればカマド2のみ袖部の遺存状態が良好であることから、もっとも最終時まで、カマド2を用いていたことが考えられる。しかし、その状況だけでは3基のカマドの時間差あるいは同時性を論じられない。またカマド3基と住居床面積の狭さという不均衡な状況からすると、この住居跡自体が特殊性を持つ遺構と考えられる。

**遺　物**　上記したカマド1内の鉢（4・5）はカマド廃絶時に置かれたものだろうか。またカマド3右の住居跡東隅の壺（9）と甕（10）の出土状況は壺を甕のゴトクに転用していた様相とも推測できる。他に土錘（10）が出土している。

**時　期**　主な土器の様相は7世紀前葉頃とする。9の壺は古い様相であるが、転用品と理解しておきたい。

**332号住居跡**　　位置　G－24

**検　出**　Ⅳ層上面で、住居跡の一部らしい陥ち込みとして検出する。ほとんどが削平され、南西部分が細長く残っている状態である。

**構　造**　壁はほとんどなく、床面も平坦であるが軟弱である。ピットやカマド、炉などは認められない。

**遺　物**　わずかに土師器の破片が出土している。

**時　期**　土師器の坏や高杯の小片から古墳時代後期の6世紀代と推測する。

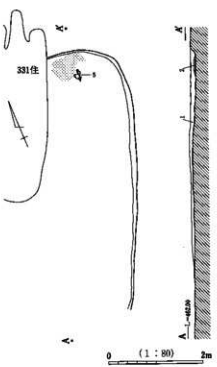



図47　334号住居跡

**333号住居跡**　　位置　G－25

**検　出**　Ⅳ層上面で確認するが、削平と攪乱の激しい部分であり、北西側の床面と一部立ち上がりを残すだけである。覆土は薄く黒褐色の砂質土の単層であり、自然埋没と考える。

**構　造**　壁は非常に浅く、床面も平坦であるが軟弱である。ピットやカマド、炉などは検出されていない。遺物も出土していない。

**時　期**　検出状況が悪く、遺物の出土もないことから不明である。

**334号住居跡**（図47）　　位置　H－6

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、削平と切り合いから遺存状況は極めて悪い。347・348住、304溝を切り、331住に切られる。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層である。

**構　造**　東壁と北東隅のみ残る。壁は非常に浅く、床面も軟弱である。

**カマド**　検出できないが、北東隅から北壁際の床面に焼土があり、そこから長胴甕（5）が出土している。

**遺　物**　5は口縁部が強く外反する長胴甕である。他に須恵高

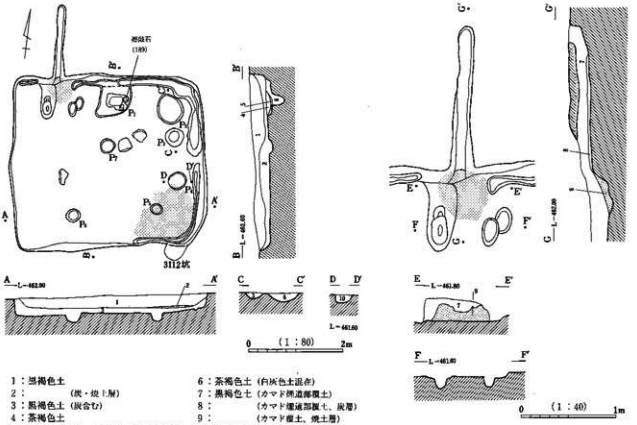



図48　335号住居跡

坏（1）、内黒坏（2）、球胴の小型甕（3）がある。

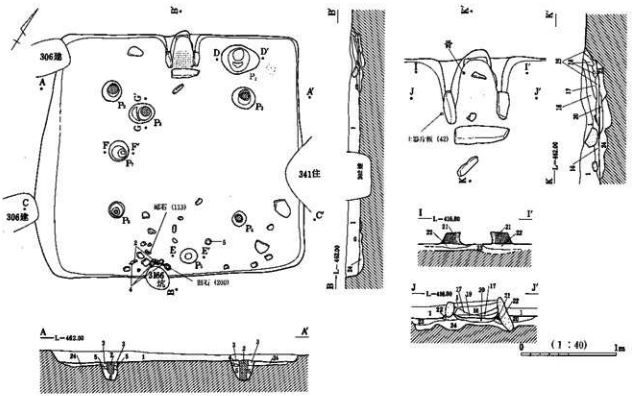
**時　期**　切り合いと出土遺物から古墳時代後期、7世紀初頭～前葉と考える。

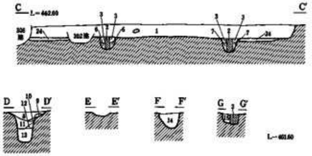
**335号住居跡**（図48、PL11）　位置　G－5

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。338・339・340住を切り、3112坑に切られる。覆土は大きくは2層（1・3層）に区分され、その状況は自然埋没と考えられる。南東隅部分では3層上面に炭・焼土層（2層）が入り、1層と3層の間に時間差があることを示している。

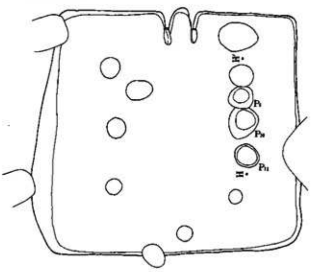
**構　造**　平面形態は横長の長方形である。西側の二隅は直角気味であるが、東側の隅は丸みを持つ。壁は深く残り、南壁以外は垂直に近い角度で掘り込まれている。また北と東壁、南東隅の壁直下には浅い周溝が巡る。周溝は一連ではなく、カマド部分と東壁中央付近の2カ所で一旦途切れている。床面は平坦で堅緻である。確認されたピット7基のうち、P5・6が位置関係から柱穴と考えやすい。P2～4、P7のなかにも柱穴と成り得るピットがあるかもしれないが、いずれも皿状に浅く、確定できない。P1は北壁中央のカマド右側にあり、不整な長方形の平面形で断面形は有段状で一旦浅い平坦部を作り、更に角柱状に掘り込まれている。覆土には炭・焼土層（5層）が薄く堆積している。

**カマド**　北壁左隅に1基付設される。燃焼部の上部構造はほとんど残らないが、両袖部分の床面に楕円形の小ピットが2基ずつあり、芯材として礫を据えていたと考えられる。火床は確認できないが、燃焼部奥壁付近に焼土が厚く堆積している。煙道は地山を直接掘り込んだ状態で検出される。燃焼部から20cm高い位置から平行に170cm程伸びる。煙道上部の地山は赤褐色に酸化して、底面には炭層が堆積している。




床下検出状況



1：黒色土（砂質土、砂粒含む）
2：黒色土（ピット柱痕、しまり悪い）
3：黄褐色土（ピット覆土、砂とシルトの小ブロック）
4：黄褐色土（ピット覆土、細粒砂）
5：黄褐色土（ピット覆土、ブロックに堆積）
6：黄褐色土（ピット覆土、ブロック堆積、しまり悪い）
7：暗褐色土（ピット覆土、細かなブロックの堆積）
8：黒褐色土（ピット覆土、均質な土質）
9：黄褐色土（ピット覆土、細かな砂ブロック）
10：　　　　（ピット覆土、黄褐色土と黒色土ブロック）
11：黒褐色土（ピット覆土、焼土含む）
12：黒茶褐色土（ピット覆土、砂ブロック僅かに含む）
13：黒褐色土（ピット覆土、しまり悪い）
14：灰黒褐色土（ピット覆土、黄褐色砂ブロック含む）
15：灰黒褐色土（ピット覆土、黄褐色砂ブロック含む）
16：黒色土（カマド覆土、1層土に焼土含む）
17：　　　　（カマド覆土、焼土と黒色土がブロック状に堆積）
18：明橙色土（カマド覆土、焼土）
19：　　　　（カマド覆土、灰・炭・焼土の堆積）
20：　　　　（カマド火床）
21：黒灰褐色土（カマド袖構築土、しまり良い）
22：黒色土（カマド袖下土、炭・焼土含む）
23：黒色土（カマド袖下土、黄褐色砂ブロック含む）
24：　　　　（掘り方埋土、黒色土と茶褐色土混在）
25：焦茶色土（床下ピット覆土、灰・焼土含む）
26：焦茶色土（床下ピット覆土、25層上に黄褐色土混じる）
27：黒褐色土（床下ピット覆土、焼土含む）
28：　　　　（床下ピット覆土、ブロック状に堆積、焼土）

図49　336号住居跡

**遺　物**　P1から擦・敲石（189）が出土している。また覆土から石錘2点（62・63）と鍛冶滓（17）が出土している。土器はいずれも小片である。

**時　期**　重複関係を中心に、大きく6世紀前葉以前と考える。

**338号住居跡**（図49、PL11）　位置　B－23

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。検出段階で北壁中央にカマドの両袖石と天井石らしい河原礫がコの字状に並んで露出している。337住を切り、341住、302・306建、3124・3166坑に切られる。3417・3418坑との切り合いは判然としない。覆土は黒褐色土の単層の自然埋没と思われる。

**構　造**　平面形態は、南西部がやや膨らむものの、ほぼ正方形を呈している。西壁を除く各壁は直線的で隅も直角気味に鋭い。壁は深さ最大30cmを残存している。壁の傾斜角度は70～80°である。床は水平で堅いが叩き締めた状態ではない。掘り方は幅100～150cm程の浅い溝が壁沿いに全周している。床の構築は、この掘り方四部を黒色土と黄褐色土の細かなブロック土で埋め戻し、中央部は床土を敷かずに地山を平坦に削り出している。

ピットは床上で8基確認されている。そのうちP2・3・4・6は方形配列を示す主柱穴であり、カマド側に位置するP2・3は他の2基より大型である。4基何れも覆土の土層に柱痕があらわれているが、柱痕もP2・3の方が太い。その他のP1はカマド右の大形のピットであり、P5は南壁際の入口部施設に伴う可能性を持つ小ピットである。P8はP2の内側に位置し、土層には柱痕が残っている。

**カマド**　北西壁中央僅かに右寄りに1基付設される。燃焼部の天井は残らない。高さ15cm程残る両袖は、奥半部を黒褐色粘質土で築き、前半部には河原礫を一枚ずつ立てている。袖石の内側基部にも黒褐色粘質土を貼り付けている。焚出部上部にある平石は袖石上に架してあった天井石をカマド廃絶時にこの位置においたと考えられる。袖の内壁はやや傾斜して、強く被熱する。また火床は平坦で住居床面と同レベルである。カマドは掘り方などを持たず、床面形成と一連の作業工程のなかで構築されていることを示す。

煙道部は底部の燃焼部奥壁に接続する部分が僅かに10cm程残っている。70°強の急角度で立ち上がる燃焼部奥壁から煙道部底は30°の緩い傾斜をもって始まる。その先は削平により検出されないが、この傾斜角度が一定であるとすると、長大な煙道は想定できない。

**床下施設**　P9・10・11のピット3基が検出される。床上のP3・4を結ぶ直線状に並ぶ。P9・10は一部重なっているが切り合いは不明である。またP10・11の覆土には土器片、礫、焼土粒、灰を含んでいる。これらのピットは本跡構築時の祭祀行為に関連する遺構とも考えられる。

**遺　物**　土器は床面南東部から坏（2・4）と甕口縁部（6）が出土している。他に覆土からTK208型式の特徴を持つ須恵坏（1）が出土しているが、床面出土の土師器とは時期差があると考えられ、周囲の5世紀後葉の住居跡に伴う混入品と思われる。南壁付近の床面から10cm程浮いた位置に河原礫の集中範囲があり、それに混じって砥石（113）と凹石（200）が出土している。他にミニチュア土器（19）と土器片板（42）が出土し、カマドからはイノシシ（ブタ）の被熱した骨片が出土している。

**化学分析**　カマド内の灰を同定した結果、イネ属やススキ属の組織片が検出された（付章第1節参照）。

**時　期**　重複関係と床面出土の土師器（2・4）の特徴から6世紀中葉～後葉と考えたい。

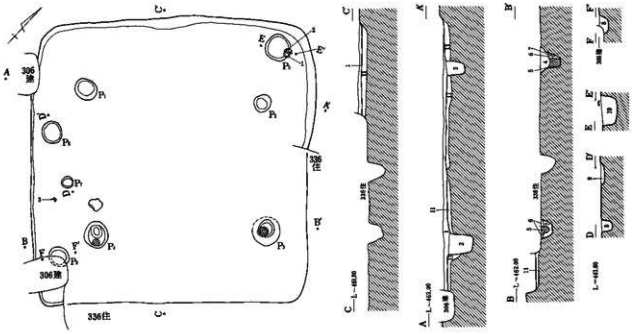



図50　337号住居跡

**337号住居跡**（図50、ＰＬ11）　位置　Ｂ－23

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。切り合いが多く、北から西側がコの字状に残っている状態である。345住、3410坑を切り、336住、306建、ＳＡ304、3411坑に切られる。覆土は薄く黒褐色土の単層である。

**構　造**　ほぼ方形を呈すると考えられる。壁は非常に浅く、床面からはやや傾斜を持って立ち上がる。床は掘り方埋土を均して、平坦であるが軟弱である。ピットはＰ１～４が方形配列の主柱穴であり、Ｐ３・４の土層には柱痕も認められる。Ｐ５は北隅にあり内部から土師器坏や炭、焼土などが出土している。Ｐ６は北西壁際にあり、浅い皿状を呈する。覆土には炭や焼土ブロックが混在し、本跡構築前に掘り込まれたピットとも考えられる。

**カマド**　確認できないが、336住に切られる部分に存在していた可能性がある。

**遺　物**　上記したＰ５上から半球形の坏（１・２）、北側床面から甕の口縁部（３）が出土している。土器以外では覆土から羽口（１）も出土している。

**時　期**　重複関係と出土土器から５世紀末～６世紀前葉としたい。

**338号住居跡**（図51）　位置　Ｂ－25

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。東側は調査地区外に出ているため、全体形は把握できない。339住を切り、335住と3114・3116・3205坑、ＳＡ303に切られる。覆土は砂質の黒褐色土の単層であり、調査地区外の壁面の観察では、この覆土上部は基本層序のⅡ層土が堆積している。

**構　造**　明確に残る壁はないが、ほぼ正方形の平面形と推定する。壁は比較的深く残り、床面まで50cmを測る部分もある。壁の傾斜はきつく、真直ぐに掘り込まれている。また北西壁のカマド右側には浅い周溝

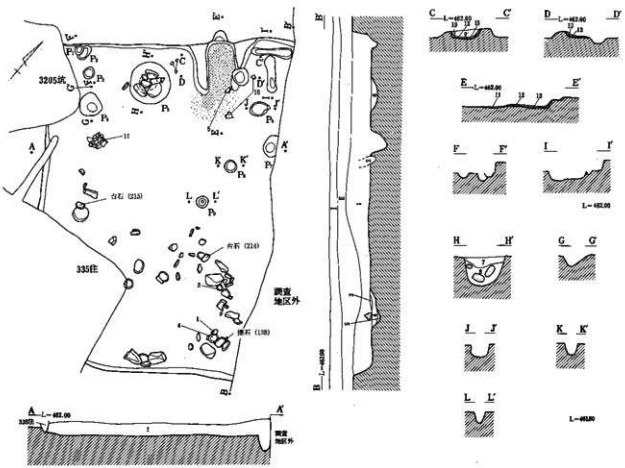



図51　338号住居跡

が壁沿いに認められる。床は平坦であり、堅い。ピットは大小9基検出するが、規模や位置から主柱穴と考えられるピットはない。P5はカマド左側に位置し、比較的大形の円形のピットで覆土内には人頭大の河原礫が8点ほど入っている。

**カマド**　北壁の中央と考えられる位置に1基付設される。カマドは全体的に大形で、両袖部は100cm程の長さがある。燃焼部には焼土、灰、炭層が下から順に薄く堆積している。煙道部は僅かに燃焼部より15cm高く、20cm程認められる。その傾斜角度から推測すると、それほど長大な煙道ではないと考えられる。

**遺　物**　土器はカマドから坏（5）、床面から坏（1・3・4）、小型甕（9）、甑（10）、甕（11）が出土している。いずれも破片や一部潰れた状況である。坏には浅い半球形と須恵坏模倣の器形があり、甕は体部のやや下半に最大形を持つ長胴形である。また南東壁付近には河原礫が散乱して、そのうちから擦石（136～138）や台石（213～215）も混在して出土する。

**時　期**　重複関係と出土土器から、5世紀後葉～6世紀初頭と思われる。

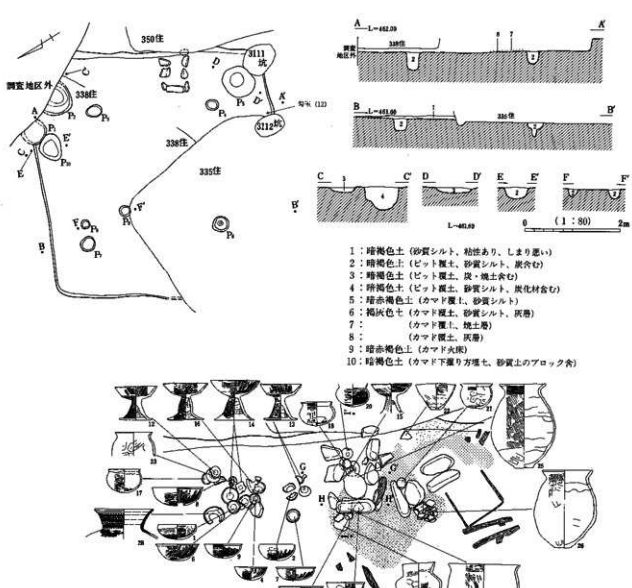



図52 339号住居跡

**339号住居跡**（図52、PL12） 位置 B－25

**検 出** 検出面はⅣ層上面である。本跡は335・338・350住、3111・3112坑に切られ、また東隅は調査地区外に出てしまい、遺存状況はあまり良くない。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層である。

**構 造** 比較的残りの良い、カマドを持つ南東壁と北隅付近からほぼ方形の平面形態を推定する。壁はほとんど残らない。床はカマド周辺に貼り床らしい部分があるが軟弱である。ピットは大小10基検出され、そのうち主柱穴は方形配列に組むP3・4・6・7と考えられる。P6は断面有段状であり、それ以外の3基は円柱形を成す。

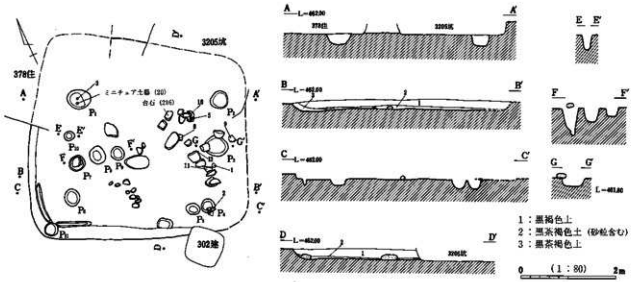



図53　341号住居跡

**カマド**　南東壁の中央から右寄りに1基付設される。両袖の構築材である河原礫がむき出しのまま並列して立ち、その袖の手前の袖石の上に平坦な河原礫を天井石として架したままの状態で検出される。袖石は地山に埋められてやや内傾するように据えられている。支脚は見つからない。火床は天井石の直下からやや奥側に不整な円形で強く被熱している。また焚出部からカマド右側の床面には灰や炭、焼土が多数の土器とともに広がっている。

**遺　物**　カマド内部とその周辺床面から多数の完形に近い土師器、須恵器が一括出土している。その分布状況は、カマド内部には甕や甑など煮沸具が多く、カマド左側床面には坏や高坏などの食器や須恵器壺といった貯蔵具がまとまる傾向にある。しかしこれらは使用時の状況ではなく、カマド廃絶時にある程度整然と廃棄した状態と考えるべきだろう。またカマド構築材の一部らしい河原礫もカマド右側床面に廃棄されているため、カマド自体も単に廃棄後の一つの状況を示しているに過ぎないはずである。なおこの他に北東壁際床直から石製の勾玉（12）が出土している。

坏は浅い半球形で口縁部がやや立ち上がる器形（1・2・5）と口縁部が強く明瞭に外反する器形（3・4・6～11）があり、いずれも内外面をよく磨いている。高坏は坏部が有稜で、脚部の裾が短く屈折する器形（12・13）と坏部の稜が不明瞭あるいは無く、脚部が曲線的に開く器形（13・14）、脚部が柱状で中央が膨らみ、裾が強く屈曲する器形（16）に分かれる。甕は体部下半に最大径を持つ平底の器形（25・26）が主体で、広口の甕（27）、体部中央が膨らむ丸底で偏平な鉢（17・18）などがある。他に勾玉（12）、擦・敲石（190）がある。

**時　期**　出土した土器の様相から、5世紀中葉～後葉と考えられる。

**341号住居跡**（図53）　　位置　B－24

**検　出**　Ⅳ層上面で、東側は304溝覆土上部にて検出する。336・340住、304溝を切り、378住、3205坑に切られる。覆土は3層に分けられ、いずれも自然堆積で、上部ほど黒色が強まる色調である。

**構　造**　残る部分から隅丸の方形の平面形態と思われる。壁は緩やかな傾斜で掘り込まれている。南西隅には壁の直下に周溝を持つ。床は304溝の覆土上に構築されたためか、非常に軟弱である。柱穴はP1～4・6・7の6基が考えられ、方形配列で並ぶ。炉やカマドに関する施設などは認められない。

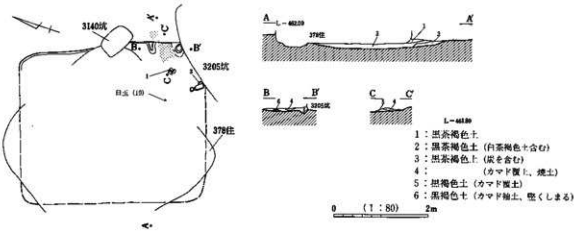



図54 342号住居跡

**遺 物** 南東側の床面に河原礫と共に大形破片が廃棄されている。その器種は内黒坏（1）、坏（2）、内黒高坏（4・5）、小型鉢（6）、小型壺（7）、甑（8・9）、小型甕（10・11）、広口壺（12）、甕（13）と多様である。P1内からは坏（3）とミニチュア土器（20）が出土している。他に台石（216）と鉄鏃（5）がある。

**時 期** 出土土器と重複関係から、古墳時代後期の6世紀中頃～後葉に属すると考えられる。

**342号住居跡**（図54） 位置 B－24

**検 出** ほぼ304溝覆土上部に重なる位置にあり、378住に大半を切られている。また3140・3205坑にも切られる。覆土は3層に分層され、いずれも自然堆積と考えられる。

**構 造** 遺存する部分から、やや隅丸の長方形の平面形態と思われる。壁は浅く残るのみで、床面は溝跡覆土上のためか軟弱である。ピットは確認できない。

**カマド** 東壁の右寄りに1基付設される。左袖の構築土の一部と右袖の構築材を掘えた跡のピットが認められる。また燃焼部の覆土には焼土が散見される。

**遺 物** カマド付近の床面から坏（1）と広口甕（3）と、臼玉（18・19）が出土している。

**時 期** 1と2から6世紀中葉～後葉と考えられる。なお3は本跡を切る378住遺物の混入としたい。

**343号住居跡**（図55、PL12） 位置 B－18

**検 出** Ⅳ層上面で検出するが、切り合いが激しく、火床部位置から平面形を推定する部分もある。344・345・351・352住を切る。覆土はほとんど残らない。

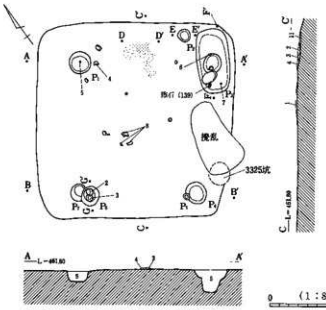
**構 造** やや隅丸で方形の平面形態を呈する。壁はほとんど残らず、床も火床手前から西寄りにかけてやや堅めの床面が残るほかは遺存状況が悪く把握できない。7基検出するピットのうち、主柱穴は方形配列に並ぶP1・3・4・7と考えられる。P3は長方形の大型のピットと円柱形のピットが重なる特殊な形状を示す。またP7を切るP6の底部からほぼ完形の坏（2）と内黒坏（3）が出土している。

**火 床** 北東壁の中央に床面が被熱する部分と焼土や炭、灰の分布がみられる。この状況は通常カマドの痕跡と考えるが、この火床覆土や住居覆土から鍛冶関連の羽口（2）や鍛冶滓（18－20）が出土していることからすると、鍛冶炉の可能性がある。

**遺 物** P6以外にもP3の長方形の部分から小型甕（6）と甕（7）や擦石（139）が出土している。また床面には土師器の破片が僅かに散らばる。

**時 期** 出土土器には密な重複関係から、古い様相の土器（5・8）が床面出土として混入しているが、ここでは完形の坏類を中心として、6世紀前葉～中葉とする。

343住




344住

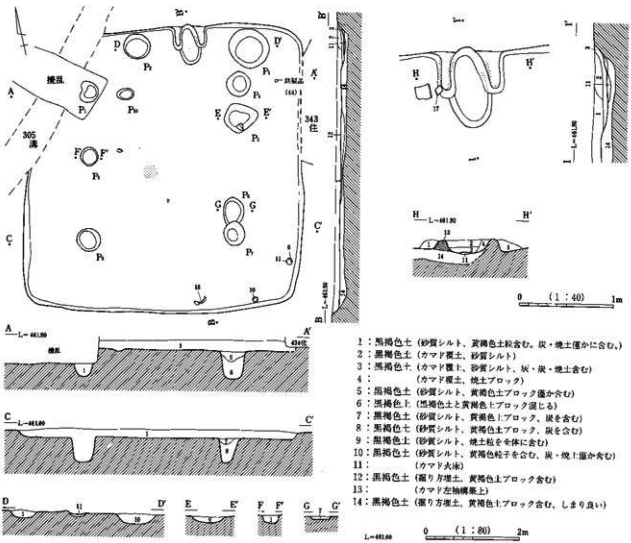



図55　343号・344号住居跡

**344号住居跡**（図55）　　位置　B－22

**検　出**　隣接遺構との切り合いや撹乱で、検出は難行した。検出面はⅣ層上面である。345・351・352・392住を切り、343住、305溝、3436・3437坑に切られる。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層であるが、埋没過程は不明である。

**構　造**　平面形態は隅丸の方形で、壁は深さ10～20cm程残り、全体にやや傾きのある掘り込みである。床は浅い掘り方に黄褐色の砂質土を敷いて敲いた状態の貼り床が認められる。ピットは10基確認され、主柱穴は方形配列に並ぶP１・４・７・８と考えられる。そのほかのピットは全体に平面円形で皿状に浅い形状であり、性格は不明である。

**カマド**　北壁の中央からやや右寄りに１基付設される。両袖部のうち、右袖は地山Ⅳ層土を掘り残して利用し、左袖は掘り方埋土上部に構築土を乗せて形成している。袖内部は被熱し、火床部は袖前半部中央にあり、左袖は外面まで被熱赤化する。カマド掘り方には灰や焼土が分布する状況が確認されるが、これらが構築時の一工程から成るのか、カマドの作り替えがあった結果なのかは不明である。

**遺　物**　カマドから長胴甕（17）、床面から坏（６）、内黒坏（10）、坏（11）、甕（18）が出土している。床下から口縁部が強く外反する坏（２・３）と壺（15）が出土するが、本跡に切られる352住に伴うと考えられる。また覆土からＴＫ47型式からＭＴ15型式の特徴を持つ須恵坏蓋の小片（１・７）が出土している。

**時　期**　遺構の重複が激しく、本跡の所属時期を判断するのは難しいが、完形に近い坏類を中心に考えると、受部の稜が不明瞭な須恵器坏蓋を模倣した13や底部内面に屈曲部を持つ平底気味の内黒坏（８～９）の状況から６世紀後葉～末葉と考えられる。

**346号住居跡**（図56）　　位置　G－20

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、撹乱と削平の影響を大きく受けている。330住を切る。覆土は２層に分けられ、いずれも砂質土である。

**構　造**　南側は大きく削平されるが、それ以外の部分からは非常に不整な方形といえる。隅は丸みを持っている。壁はほとんど残らない。床はややしまった砂質土である。ピットは確認されない。カマドは明確に認められないが、北東壁際に据置した河原礫２点と焼土ブロックの散らばりがあり、その近くに土師器片が集中することから、この位置にカマドを付設している可能性がある。

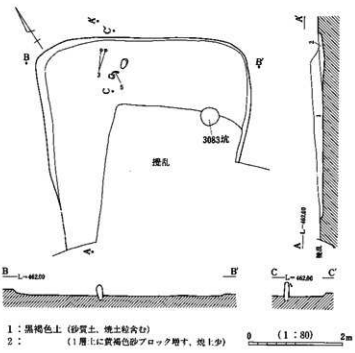



図56　346号住居跡

**遺　物**　床面から坏（３）と甕（５）が出土している。他に覆土から坏（１・２）と広口の甕（４）が出土する。

**時　期**　半球形の坏（２・３）と口縁部が屈曲する坏（１）、また体部が間延びした球形になる甕（５）の様相から、古墳時代後期初頭、５世紀後葉～６世紀初頭と考えられる。

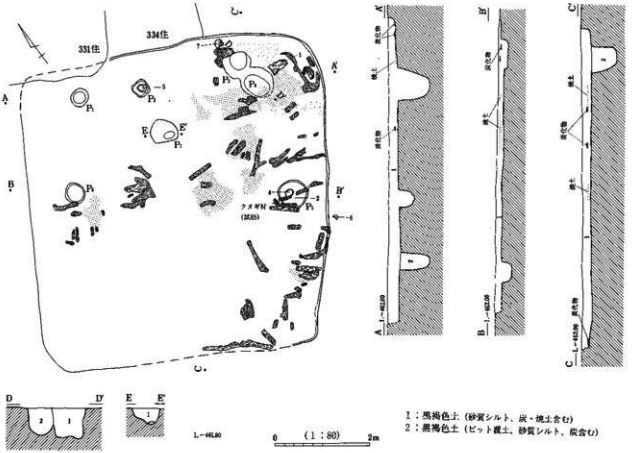



図57　347号住居跡

**347号住居跡**（図57、PL13）　位置　G－10

**検　出**　Ⅳ層上面で隣接遺構と切り合う状況で検出され、376住を切り、331・334住、302溝に切られる。覆土は黒褐色土の単層であり、床面には住居構築材と思われる炭化材と焼土が分布する。炭化材の分布状態は明確に構築状況を示していないが、広く分布することから、ある程度構築材が組まれている段階で燃焼した状態とも考えられる。

**構　造**　比較的残りの良い、南側から考えると、方形の平面形態であると考えられる。壁は全体に浅いものの、ほぼ垂直に立ち上がる。床は全体に平坦であるが、貼り床や堅緻な部分は見られない。ピットは7基確認し、そのうち柱穴としてP1・3・4がその可能性を持ち、P3・4は重なり、P4が切っている。

**カマド**　確認できない。

**遺　物**　P2から小型甕（5）、P5から土師器坏（2・4）、東壁際の床面から甕（1）と甑（7）が出土している。特に1は潰れた状態で出土している。ミニチュア土器（18）も出土した。

**科学分析**　床面にある炭化材を同定した結果、コナラとクヌギであることが判明した（付章第1節参照）。

**時　期**　重複関係が激しいため、本跡より古い376住の土器（2・3・6？）がピット覆土として混入している。そのため比較的完形の床面出土の1・4・5・7の様相と重複関係から本跡の時期を考えると、6世紀中葉～後葉としたい。

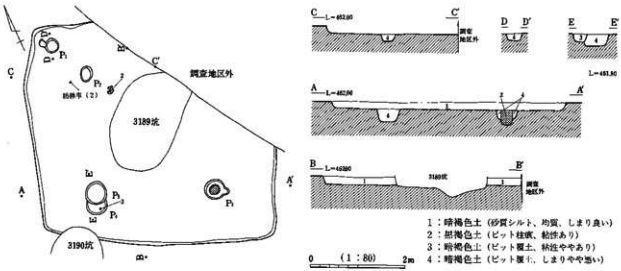



図58 350号住居跡

**348号住居跡** 位置 H－1

**検 出** Ⅳ層上面で検出するが、南西側が331・334住に大きく切られ、西側が調査地区外に出ている状況で、全容を掴めない。また北壁側を350住に切られている。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層である。

**構 造** 明確に把握できないが、残っている北西壁と南東壁がほぼ平行する直線であることからすれば、平面形態は方形の可能性が高いだろう。壁面はほとんど残らない。床は平坦で全体に堅い。確認したピット2基は浅い円形である。

**カマド** 確認できない。

**遺 物** 床面に土師器片が僅かに分布している。

**時 期** 明確ではないが、重複関係を中心に考え、6世紀後葉と考えられる。

**349号住居跡** 欠番

**350号住居跡**（図58） 位置 G－5

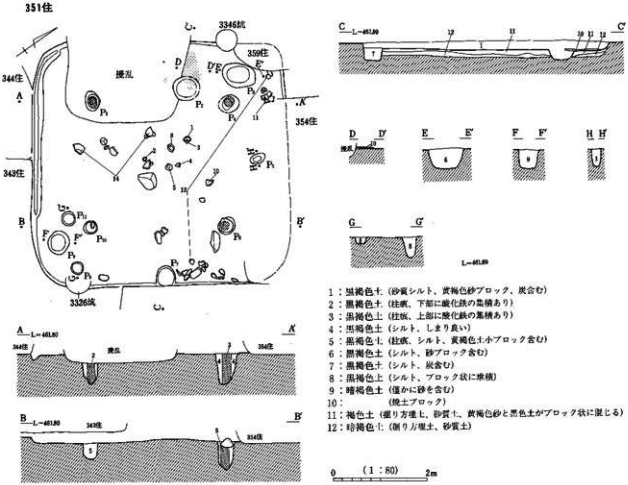
**検 出** Ⅳ層上面にて、調査地区外に北東隅が出る状態で検出する。339・348住を切り、3189・3190坑に切られる。覆土は暗褐色の均質な砂質シルトの単層であり、自然埋没と考えられる。

**構 造** 方形の平面形態であり、隅はやや丸みを帯びる。壁はやや急角度に掘り込まれている。床は平坦であるが貼り床ではない。ピットは5基確認し、そのうち主柱穴はP2・3・5と考えられ、調査地区外にもう1基を持つ方形配列であろう。またP4はP5を切り、土師器坏片が覆土から出土している。

**カマド** 確認されないが、位置からすると、調査地区外の東壁にある可能性が高い。

**遺 物** 床面から坏（1）、P4から小型甕（3）が破片で出土している。他に石製の紡錘車（2）が出土している。また覆土には古墳時代前期や平安時代の土師器も紛れ込んでいる状況である。

**時 期** 出土土器から古墳時代後期、6世紀前葉～中葉頃と考えられる。



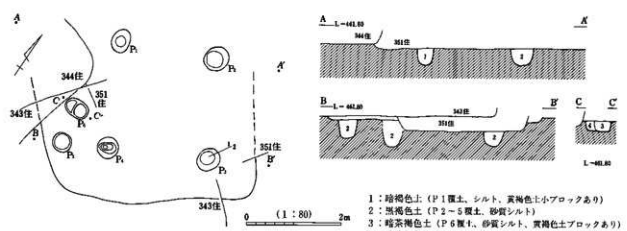




図59　351号・352号住居跡

**351号住居跡**（図59）　　位置　B－18

**検　出**　Ⅳ層上面にて隣接遺構と覆土が連なる状況で検出。本跡は352住を切り、343・344・354・359住、3326・3346坑に切られる。覆土は黒褐色の砂質シルトで、黄褐色土ブロックと炭化物を少量含んでいる。

**構　造**　平面形態は隅丸の方形で、壁は残りの良い部分で深さ15～20cmある。南西壁、南東壁はほぼ垂直に掘り込まれている。また周溝が南西壁下にのみ認められる。深さは10cm程で、西隅まで伸びる。床は平坦で、やや堅緻な状況である。主柱穴はP1・4・6・10と考えられ、それらは方形配列に並ぶ。またP

1・4・6は覆土に柱痕が残り、南東壁際の中央にあるP7は入口施設のためのピットだろうか。

**カマド**　北西壁の中央付近の床面に焼土が広がり、付近にカマドが付設されていた可能性がある。

**遺　物**　床面から小型鉢（1）、小型内黒鉢（2）、内黒坏（3）、坏（4・5）、内黒鉢（8）、壺（9）、甑（10）、甕（11・12）などが出土している。

**時　期**　出土土器から考えると、坏類は丸底で口縁部に向かって外反あるいは直立する器形が中心で、甕には体部下半が膨らむ器形（12・13）と撫で肩の長胴甕（11）が供伴していることから5世紀後葉～6世紀初頭と考えたい。なお重複関係が密なため、6の内黒坏などの本跡より新しい様相の土器の混入も見られる。

**352号住居跡**（図59）　　位置　B－18

**検　出**　多くの遺構に切られる状態で、Ⅳ層上面で検出する。343・344・351住、3176坑に切られる。覆土は黒色に近い黒褐色の砂質シルトの単層である。

**構　造**　平面形態は隅丸方形を呈する。壁は浅く、深さ5㎝程しか残らない。床は平坦であるが、堅緻ではない。ピットは6基検出し、主柱穴として、やや歪む方形配列で並ぶP1～4を考える。いずれのピットも円柱状に深く掘り込まれいる。

**遺　物**　床面からの出土はない。P3から坏（1・2）が出土している。

**時　期**　出土土器から、5世紀後葉と思われる。

**353号住居跡**（図60）　　位置　B－19

**検　出**　Ⅳ層上面にて、住居跡の東隅と思われる部分のみ検出する。本跡は304溝を切っている。覆土は黒褐色土の単層で、白色土ブロックを含む。

**構　造**　東隅が直角気味であることから、平面形態は方形、長方形であると推測する。壁はやや傾斜して掘り込まれている。床は炭や焼土に覆われていて、軟弱である。また東隅にP1が検出される。

**遺　物**　P1とその周辺から、土師器が比較的個体別の大きな破片で出土している。器種は坏（1・4）、甕（5～9）、壺（2）、甑（3）と多様である。

**時　期**　出土土器から、古墳時代5世紀中葉～後葉と考える。

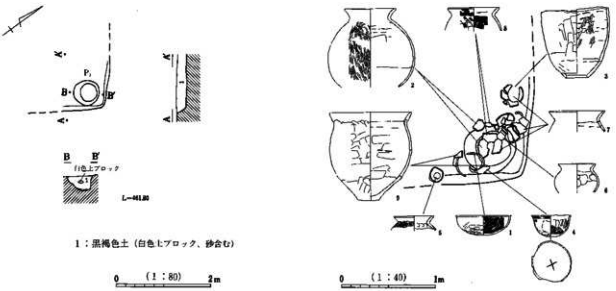
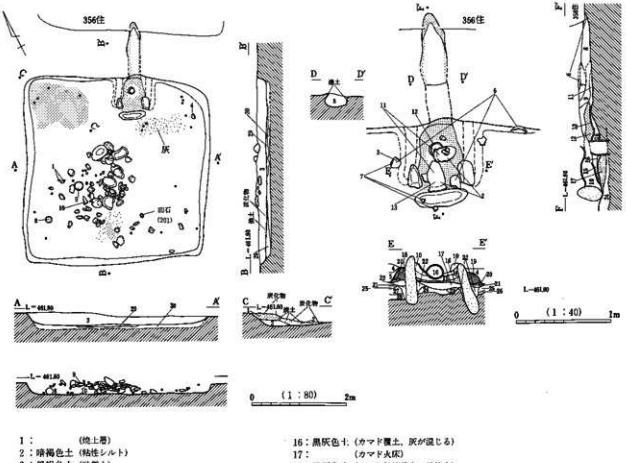



図60　353号住居跡




1：　　(焼土層)
2：暗褐色土（粘性シルト）
3：黒褐色土（砂質土）
4：黒灰色土（炭・焼土含む）
5：黒灰色土（4層より焼土増す）
6：　　(カマド煙道部、焼山焼焼土)
7：黒色土（カマド覆土、焼土塊含む）
8：黒色土（カマド煙道部覆土、焼土ブロック含む）
9：黒色土（カマド煙道部覆土、焼土大ブロック含む）
10：黒色土（カマド覆土、焼土混じる）
11：黒橙褐色土（カマド覆土、焼土の多い層）
12：明橙褐色土（カマド覆土、焼土の堆積層）
13：　　(カマド覆土、灰層)
14：明橙褐色土（カマド覆土、焼土ブロックの堆積）
15：明橙褐色土（カマド覆土、焼土と黒色土がブロックで堆積）
16：黒灰色土（カマド覆土、灰が混じる）
17：　　(カマド火床)
18：黒灰色土（カマド袖構築土、粘性土）
19：暗黄灰褐色土（カマド袖構築土、18層土に黄褐色土混じる）
20：黒色土（カマド袖構築土、均質な粘性土）
21：黒灰褐色土（カマド下層土、黄褐色土ブロック混）
22：黒灰色土（カマド袖構築埋土）
23：黄灰褐色土（カマド下埋土、砂ブロック含む）
24：黒褐色土（カマド下埋土、砂質土）
25：黒色土（掘り方埋土、粘性あり、均質）
26：暗褐灰色土（掘り方埋土）
27：暗褐灰色土（掘り方埋土、黒色ブロック多）
28：黒褐色土（掘り方埋土、砂質土、均質）
29：暗褐色土（掘り方埋土、砂質土）
30：褐色土（掘り方埋土）

図61　354号住居跡

**354号住居跡**（図61、PL13・14）　位置　B－18

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。他遺構との重複が顕著な状態で概形を確認する。351住、304溝を切って、356住に切られる。覆土には河原礫が多く含まれる。特に本跡中央付近の床面から浮いた位置に集中し、土師器の破片も同様の位置から混在して出土していることから、人為的な投げ込みと考えられる。そのほかに北隅の床面から浮いた位置に焼土が分布するが、これも埋没過程で覆土内に投げこまれたものと理解する。また、カマド周辺と南西側の床面には灰や炭が広がる部分がある。

**構　造**　方形の平面形態であるが、東隅のみやや丸みを持ち歪んでいる。壁は北側が垂直気味に、南側が傾斜を持って掘り込まれている。これは他遺構と重複する部分の多い南側の検出過程で、厳密な調査が不可能であった点に由来するかもしれない。床は埋土を均して平坦であるが、貼り床状に堅緻ではない。またピットは確認できない。

**カマド**　北東壁の中央右寄りに1基付設される。遺存状況は良好である。燃焼部のうち、両袖には最も手前に河原礫を火床部に傾くように据え立てられている。また扁平で横長な天井石が焚出部の床面にあり、これが袖石に架けられていたと推測できる。火床のすぐ奥に、長胴甕を地山まで掘り込んで逆位に立て、支脚に転用している。検出時には底部が欠損していたが、整理によって完形に復元され、使用時は完形の状態であったと見られる。火床部全体が掘り方を持ち、一旦黒褐色土を埋め均して形成されたことを示している。火床部全体を覆う焼土は燃焼部の構築土の被熱した部分が崩落したと考えられる。煙道部は火床部から緩い傾斜でつながり、110cm程の長さで真直ぐ水平に掘り込まれ、内部壁は被熱赤化している。

**遺　物**　カマド周辺および内部に土師器類が集中している。特に長胴甕は支脚転用甕（12）の上部（11）や手前に潰れた状態（13）で出土している。いずれもカマド廃棄の段階で、敢えて土器を置いていった状況と捉えられる。坏類は丸底気味で口縁部まで曲線的に開く浅い器形（1・4・5）と深い器形（2）があり、甕は寸胴形の長胴甕（11~12）が主体である。また底部多孔小型甑（6）や鉢類（7・8）、石器では砥石（114）、擦・敲石（191）、凹石（201）も出土している。

**時　期**　土器の様相から、6世紀中葉と考えられる。

### 355号住居跡　　位置　H－12

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。その大半は調査地区外に出ている。302溝を切る。

**構　造**　不整な楕円形に近いような方形と考えられる。壁は浅く、緩やかに掘り込まれている。床面は安定しない。南西壁際のＰ１はほぼ円柱形を呈する。

**カマド**　確認できない。

**遺　物**　出土はない。

**時　期**　302溝を切ることから、古墳時代後期以降としか言えない。

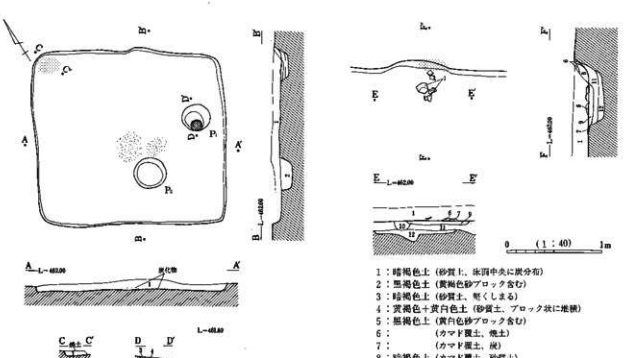



図62　356号住居跡

**356号住居跡**（図62）　　位置　B－13

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、北西側は358住や304溝を切って覆土上に構築されている。また354住の煙道先端部を切っている。覆土は暗褐色土の単層（2層）であり、自然埋没と考えられる。また本跡北隅では、この覆土2層上部10cm辺りで、焼土ブロックが確認される。これは埋没過程の産物であり、本跡とは直接関連性はないと思われる。

**構　造**　方形に近い長方形である。壁は比較的垂直に掘り込まれている。床は全体に堅緻であり、その中央付近には炭がうすく広がる。2基検出されたピットのうち、P1は断面が有段状に掘り込まれ、覆土にも柱痕が残るため柱穴と思われる。P2はやや浅く、性格は不明である。

**カマド**　北東壁中央やや右に1基付設される。しかし遺存状態は悪く、火床と壁がやや突出する点以外には確認できない。

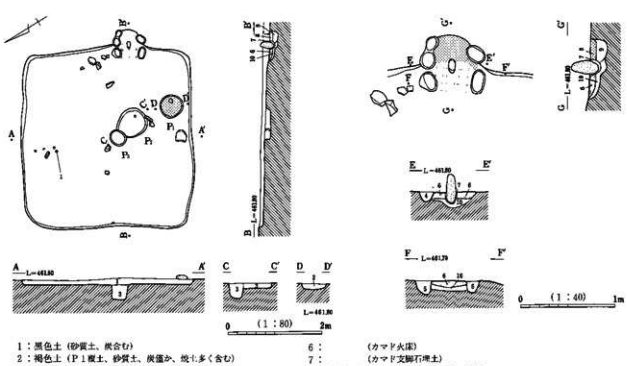
**遺　物**　カマド内から須恵高台坏（1）が出土している。全体量は少ない。

**時　期**　出土遺物から8世紀代と考えられる。

**357号住居跡**（図63）　　位置　B－13

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。304・305溝、3382・3455坑を切る。覆土は黒色の砂質土の単層であり、炭を僅かに含んでいる。

**構　造**　平面は方形に近い長方形である。壁は残りが悪いが、垂直気味に掘り込まれている。床は堅緻であり、覆土と明確に分層できる。ピットは3基あり、いずれも南側に直列する。P1は円形で、深さ10cmであり、覆土には3～5cm程の焼土ブロックが多く含まれる。炭も散在している。またP3はP2を切るように掘られている。この2基はP3を主柱穴として、P2を補助的なピットとしたと考えられる。




1：黒色土（砂質土、炭含む）
2：褐色土（P1覆土、砂質土、炭混み、焼土多く含む）
3：黒褐色土（P2、3覆土、砂質土、焼土含む）
4：　（カマド袖材抜け跡覆土、焼土多）
5：暗褐色土（カマド袖材抜け跡覆土、砂質土、炭・焼土あり）
6：　（カマド火床）
7：　（カマド支脚石埋土）
8：暗褐色土（カマド燃焼部下部埋土、焼土）
9：暗褐色土（カマド下埋土、焼土ブロック含む）
10：黒褐色土（カマド下埋土、砂質土、均質）

**図63　357号住居跡**

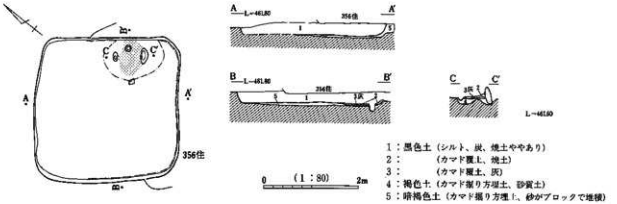



図64　358号住居跡

**カマド**　南東壁の中央から右寄りの位置に1基付設される。燃焼部は平面形が卵形で、奥半分が壁から突出するように掘られている。火床は前半部に横楕円形にあり、その奥に河原礫の支脚石が立つ。袖部分には袖石の抜き跡が左側3カ所、右側2カ所燃焼部の形に沿って残る。燃焼部奥壁には焼土が厚く堆積している。またカマド北側の床面には被熱痕のある礫が点在し、カマド構築材の廃棄の可能性を示す。

**遺　物**　出土量は少ない。床面から須恵坏蓋（1）が出土している他、須恵坏（2）、須恵広口甕（3）がある。

**時　期**　出土土器から奈良時代、8世紀に属すると考えられる。

**358号住居跡**（図64、PL14）　位置　B－13

**検　出**　Ⅳ層上面、304溝の覆土上に重なるように検出される。356住に切られる。覆土は黒色のシルト質土の単層である。

**構　造**　やや不整で隅丸気味の方形である。壁は急角度に掘り込まれいる。床は全体に堅緻であり、砂ブロックを含む掘り方埋土（5層）を敲き締めた貼り床と考えられる。ピットは検出されない。

**カマド**　北東壁の中央から右寄りに1基付設される。右袖石が使用時の位置に立地し、火床部には焼土が堆積する。また燃焼部全体は卵形で、僅かに住居壁から突出して作られている。左袖部分には右袖石と対応する位置に抜き跡が1カ所ある。支脚石の抜け跡も火床部中央奥に1カ所残っている。またカマド下部は掘り方を持ち、特に左袖石部分は掘り込んで据えた状態が分かる。

**遺　物**　小片の土器や土器片版（60）が僅かに出土している。確実に本跡生活時に伴う遺物はない。

**時　期**　僅かな土器片と重複関係から、古墳時代後期、6世紀前半頃と考える。

**359号住居跡**（図65）　位置　B－13

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。351住と3346坑を切り、360住と305溝に切られる。覆土は2層に分層し、床面に褐色の砂質土が断続的に薄く堆積し、その上部を黒褐色の砂質土が厚く覆う状況である。

**構　造**　西側が攪乱を受けているが、南東壁がやや膨らみ、南隅が隅丸気味のほぼ長方形を呈すると考えられる。壁は全体に斜めに掘り込まれていて、床は平坦であるが、軟弱である。掘り方は住居跡下全体に深さ15～20cm程である。その埋土はしまりの悪い黒褐色の砂質シルトである。ピットは東隅の床面に3基検出される。そのうちP1は有段状に深く掘り込まれていて、柱穴の可能性が高い。そのほかのピットは比較的浅く、性格は不明である。

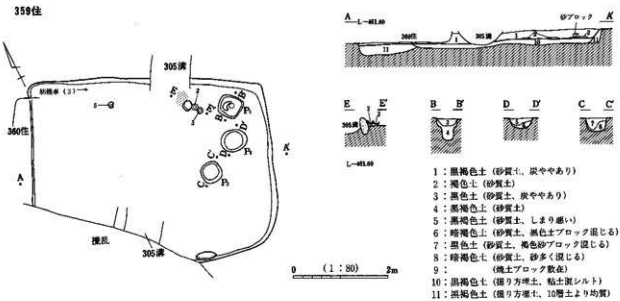



図65　359号住居跡

**カマド**　北東壁の中央右寄りに1基確認できる。遺存状況は悪く、焼土とその右側に袖石と思われる、直立する河原礫がある。またその礫の右横の床面には内黒坏（1・2）が完形で並んで置かれている。

**遺　物**　カマド付近以外では北側床面に土師器の完形の坏（5）と石製の紡錘車（3）が出土している。また、床下からミニチュア土器（21）と土器片板（44）が出土して興味深い。

**時　期**　重複関係と坏類や甕の様相から、6世紀後葉～末葉頃と考えたい。

**360号住居跡**（図66、PL14）　位置B－12

**検　出**　Ⅳ層上面にてカマドの袖石と焼土から、本跡を検出。359・3400住を切り、308建に切られる。また南西壁付近は攪乱を受け、消滅している。覆土は単層で、黒褐色の砂質土である。

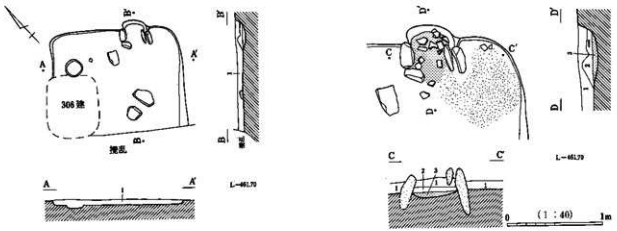
**構　造**　現存の形状から、平面形態は方形を推定する。残っている北隅は直角気味であり、東隅は丸みを持っている。壁は全体に緩やかに掘り込まれ、床は全体に平坦でやや堅緻であるが、貼り床はない。ピットは北隅付近の床面に1基確認され、深さがあまりなく、柱穴とは決めにくい。

**カマド**　北東壁の中央右寄りに1基付設される。両袖に原位置を保つと思われる扁平な河原礫3点が据え立てられている。また燃焼部は平面楕円形で、住居壁より僅かに突出するように掘られる。その内部には焼土ブロックなどとともに土器片が多数捨てられ、カマド右側の床面には灰の分布が見られる。天井部や煙道は確認できない。

**遺　物**　主にカマド内から土器片が出土するほか、目立った遺物の出土はない。須恵坏（1）は底部回転糸切り未調整、須恵高台坏（3）は高台の断面四角形で、内面で立地する器形である。5・6の甕は器厚が薄くケズリ調整が施されている。

**時　期**　須恵器坏類と甕の様相から、奈良時代、8世紀後半と考えられる。

360住




361住

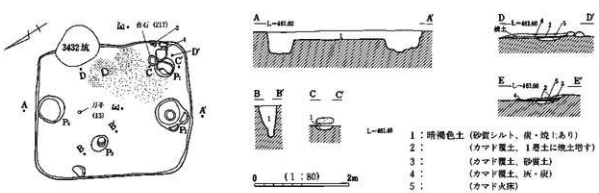



図66 360号・361号住居跡

**361号住居跡**（図66、PL14） 位置 U－25

**検 出** Ⅳ層上面で検出。362住を切り、3432坑に切られる。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層であり、焼土や炭化物の粒子を含んでいる。

**構 造** 隅丸長方形の平面形態である。壁は垂直気味に掘り込まれている。床面は軟弱で、カマド周辺の灰の分布の状態で床面を検出する状態である。ピットは4基確認する。そのうち主柱穴は長軸上の壁際にあるP2・4と考えられる。またP3も有段状で、非常に深く掘り込まれていて、柱穴の可能性が高い。P1はカマドの右にあり、非常に浅いピットで、カマドに関係すると考えられる。

**カマド** 南東壁の中央やや右寄りに1基付設されていると推定する。火床面と焼土や炭・灰が分布するだけで、明確にカマドの遺存状況とはいいにくい。しかし周囲の床面から構築材らしき河原礫も出土していることから、カマドと見ている。

**遺 物** カマド右側の床面から内黒坏（2・4）や台石（217）、また床面中央から刀子（13）も出土している。坏類は底部糸切り未調整で、1だけ土師器であり、他は内黒坏である。

**化学分析** カマド周囲の灰を同定した結果、イネ属やススキ属の組織片が認められた（付章第1節参照）。

**時 期** 出土土器から平安時代、9世紀中葉と考える。

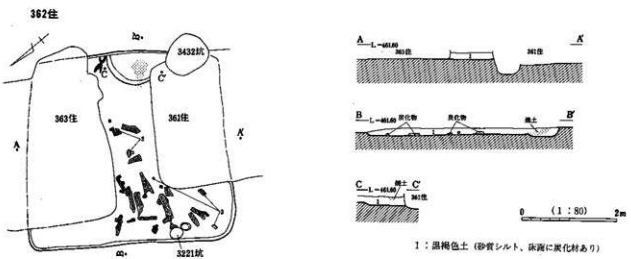



図67　362号住居跡

**362号住居跡**（図67）　　位置　U－25

**検　出**　Ⅳ層で検出。361・363住、406建、3221坑に切られる。覆土には棒状に炭化した住居構築材が多く含まれるが、焼土は少なく焼失家屋であるかは不明である。

**構　造**　平面形態は方形を呈する。壁の残りは浅いが、ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は軟弱で、明確に検出できない。ピットは検出できる床面では確認できない。

**カマド**　南東壁の中央やや右寄りに１基付設されていたと推測する。その部分は半円形に床面よりやや窪んだ状態で、焼土が堆積している。使用時の状態は全く残っていない。

**遺　物**　炭化材と共に高坏（２）や甕（３）が出土している。坏（１）は浅い半球形でやや内弯気味の器形で、高坏（２）は坏部に僅かな稜を残す、短脚の器形である。甕（３）は短く外反する口縁部で、やや肩の張る器形である。

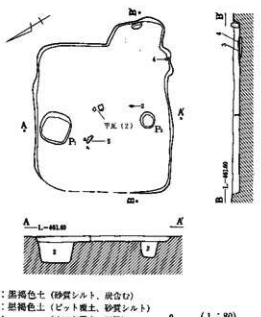



図68　363号住居跡

**時　期**　土器の様相から、６世紀前葉頃と考えられる。

**363号住居跡**（図68）　　位置　U－25

**検　出**　Ⅳ層上面で他遺構と切り合う状態で検出。362・433住を切り、406建、3222・3223坑に切られる。覆土は黒褐色の砂質シルトで、炭化物が全体に混入している。

**構　造**　隅丸の長方形が平面形態の基本であるが、南東壁南隅にカマド部分が不整な長方形に大きく突出している。残りの良い南北の壁は急角度に掘り込まれている。床は軟弱で、安定した検出はできない。ピットは２基検出する。それらは南北の壁際の長軸にほぼ対応する位置にあり、２本柱の主柱穴と考えられる。Ｐ１は円形でやや小型であり、Ｐ２は方形で大型である。

**カマド** 南東壁の右隅に長方形の掘り込みで突出している。その中央に床面と同じ高さで火床があり、その上に炭が分布している。また奥壁には扁平な礫が置かれている。

**遺 物** 床面からやや浮いた位置から、須恵高台坏（2）、小型甕（3）、甕（4）や瓦片が分布している。須恵坏は浅く開く器形で、須恵高台坏はやや屈曲した高台部を持つ。また3の小型甕は口縁端部が短く内側に屈曲している須恵器甕模倣と思われる器形を呈している。4の甕は口縁部がくの字に屈曲して器壁が薄く、内外面がヘラケズリ調整された、東信型甕の粗形と考えられる。この他に床直で平瓦（2）が出土している。

**時 期** 土器の様相から、奈良時代、8世紀前葉～中葉と位置づける。

**364号住居跡** 位置 V－17

**検 出** 調査区東際、Ⅳ層上面で検出する。全体形は北東側調査地区外で出ているため不明である。重複関係はない。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層であり、炭化物を粒子で含む。

**構 造** 残存する部分から不整な方形の平面形態を推定する。壁は比較的残りが良く、垂直気味に掘り込まれている。床は不安定で、遺物の分布状況から床面を推定した状態である。柱穴や炉、カマドは確認できない。南東壁際の床面に焼土が堆積している。

**遺 物** 床面全体から、土師器の小片が出土するが、出土量は少なく、図化できる資料もない。

**時 期** 出土土器から古墳時代後期、6世紀前半頃と推定する。

**365号住居跡** 位置 V－21

**検 出** Ⅳ層上面で検出。火床部分と焼土の分布、堅緻な床面と想定する範囲から住居跡の残存と判断する。これらの分布範囲の下から、368・369・388住、3228～3232・3244・3245坑を検出したため、それら遺構全てを切っていると判断する。覆土はほとんど残っていない。

**構 造** 壁などが残らないため、形状・規模ともに不明である。床面は比較的堅緻であり、その上面に火床（燃焼）部分や焼土の分布がある。柱穴はない。

**カマド** 明確に確認できないが、北東部分の火床範囲がカマドの痕跡とも考えられる。

**遺 物** 床面から土器の小片が僅かに出土している。

**時 期** 極めて出土遺物が少ないため確定できないが、8世紀末～9世紀初頭頃としておく。

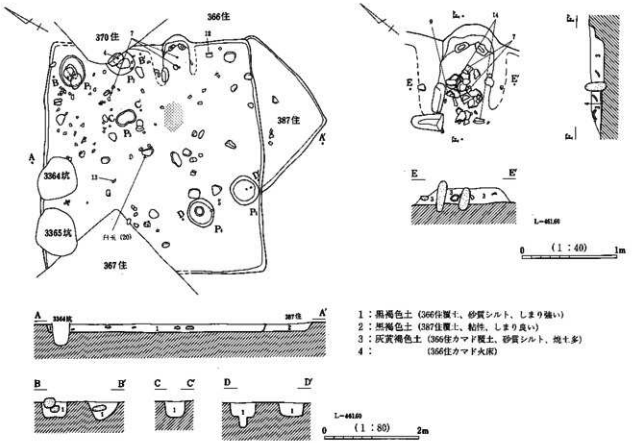



図69　366号・387号住居跡

**366号住居跡**（図69、PL15）　位置　B－1

**検　出**　Ⅳ層上面にて、他遺構と重複して検出する。387住を切り、367・371住、3364・3365坑に切られる。覆土は河原礫を含む黒褐色土の砂質シルトの単層である。

**構　造**　平面形態は方形を呈する。壁は残りの良い南西壁の観察では、急角度で掘り込まれている。床は軟弱で安定した面を検出できない。ピットは5基確認し、そのうちP1とP4が柱穴の可能性が高いが、明確な配列は認められない。

**カマド**　北東壁中央右寄りに1基付設される。左袖の一番手前には河原礫が据えられたままになる。また支脚石も火床奥に接するように据えられいる。燃焼部の奥壁際には楕円形の小ピットが1対あり、そこから直立気味に奥壁は立ち上がり、一旦段を形成しつつ、煙道部の残存部につながっている。また焚出部手前の床面には焼土が分布している。

**遺　物**　カマドの火床から支脚石周辺に高坏（7・9）、甕（14）、床面から小型甕（13）、P2から内黒坏（4）が出土している。また床面中央からは白玉（20）が出土している。覆土の土器も含めて、坏類は半球形が主体で、口縁部が内弯して丸く終わる器形（1）、短く外反して、内面に明瞭な面を持つ器形（4～6）、短く強く外反する器形（2・3）がある。また4は内面黒色処理されている。高坏（7～8）は坏部の稜は不明瞭で、脚部はハの字に広がり、裾がやや折れる器形である。壺（10・11）はやや内弯気味に立ち上がる口縁部から肩が張る体部を持つ。器面調整はあまり精緻ではない。小型甕にはやや体部の長い器形（12）と球形（13）があり、甕（14）は肩が張り、やや体部が伸びる器形である。ほかに壺（15）、ミニチュア土器（22）がある。

**時　期**　土器の状況から、5世紀中葉～後葉頃と考えられる。

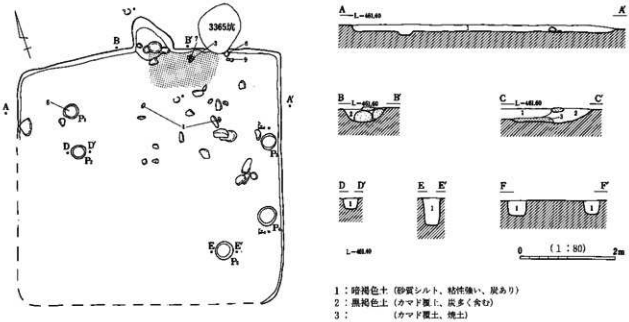



図70 367号住居跡

**367号住居跡**（図70） 位置 B－1

**検 出** Ⅳ層上面で検出するが、南西側が攪乱の影響で消失している。366・372住を切り、3365坑に切られる。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層であり、河原礫や土器片が混入している。

**構 造** 平面形態はやや不整な方形を呈すると推定する。壁は残りが悪いが、全体に急角度に傾斜して掘り込まれている。床面は軟弱で、明確に検出できない。ピットは5基確認して、そのうち形状や規模、位置からP5が主柱穴の可能性を持つが、それ以外で対応するピットは見つからない。P3・4は東壁際に沿うように並び、比較的深いピットであることから、副次的な柱穴とも考えられる。P1・2はいずれも浅いピットである。

**カマド** 北壁の中央に1基付設される。その形態は不整な半卵形の燃焼部（及び煙道部）自体が、壁から突出するように掘り込まれているものである。袖や火床は残らないが、カマド焚出部からその右側床面に焼土が分布している。

カマドの廃棄の状況として、燃焼部手前を塞ぐようにカマド構築材と思われる扁平な河原礫を横並び2点並べて、その上にもう1点の河原礫を積むといった特殊な様相を示している。

**遺 物** カマド付近の床面から須恵坏蓋（1）、須恵坏（3・4）、内黒坏（7）、小型甕（9）が出土している。P1覆土内からも須恵坏（5）が出土する。

須恵坏蓋（1）は大型で口縁部は明瞭な稜を持って屈曲する。須恵坏は底部ヘラ調整が主体で、回転糸切り未調整は5だけである。また9の小型甕は口縁部は厚く、直立気味に立ち上がり、体部は薄くケズリ調整されている。

**時 期** 出土した土器、特に須恵器坏と坏蓋の様相から奈良時代、8世紀中葉～後葉といえる。

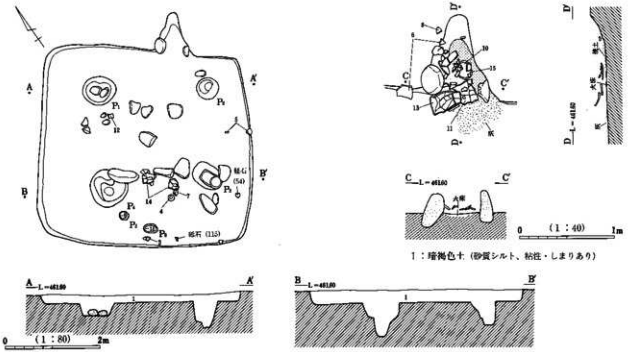



図71　368号住居跡

**368号住居跡**（図71、PL15・16）　位置　V－2I

**検　出**　Ⅳ層上面にて、369～371・388住を切る状況で検出する。また365住に切られていると考えられる。覆土は、暗褐色の砂質シルトの単層であり、全体に炭化物を含んでいる。また床面付近には、河原礫が放意に投げ込まれているように多数散らばり、大きな土器片も含まれている。

**構　造**　ほぼ方形の平面形態であるが、北と西隅が丸みを持ち、カマドを持つ北東壁と南西壁がやや膨らんでいる。壁の深さは14～30cm程で、垂直気味に掘り込まれている。床面はあまり明確ではない。確認されたピット6基のうち、主柱穴は4本柱の方形配列で並ぶP1～4と考えられる。方形配列の軸は住居の軸よりやや西に傾いている。P2～4は有段状に深く掘り込まれているが、P1は比較的浅く断面逆台形を呈し、底部に河原礫2点が置かれている特殊な状況である。また、P5・6は小ピットで、カマド壁と反対側の南西壁際に近いことから、入口施設に伴うピットである可能性を持っている。

**カマド**　北東壁の中央右寄りに1基付設されている。それは燃焼部自体が住居壁から突出するように掘り込まれている状態で、そこから更に繋がるように緩やかな傾斜を持つ煙道部が残っている。燃焼部は床面と同じ高さであり、火床はその最も手前に円形に残っている。また両袖の構築材である河原礫1対は、その火床を挟むように燃焼部掘り込み部分と住居壁が接する位置にそれぞれが据えられたまま残っている。カマド覆土には、焼土のブロックや土師器甕4個体分の破片（10・11・13・15）が含まれ、焚出部付近には炭の分布がある。

**遺　物**　カマド付近には甕の他、内黒坏（6）、内黒鉢（7）が出土している。また床面全体から、河原礫と混ざって内黒坏（3～5・7）、甕（12・14）や砥石（115）、軽石製品（54）が出土している。また覆土からミニチュア土器が3点（23～25）出土する。須恵坏（1）は小型で底部ヘラ調整である。内黒坏は体部内面に屈曲を持ち、丸底または平底気味の器形が主体（3～7）で、2の器形は古い様相を示していて、覆土内への混入と理解する。また甕は肩の張らない長胴甕（10～15）であり、把手の付いた甑（16）もある。

**時　期**　土器の様相から古墳時代後期、7世紀初頭～前葉頃と判断する。

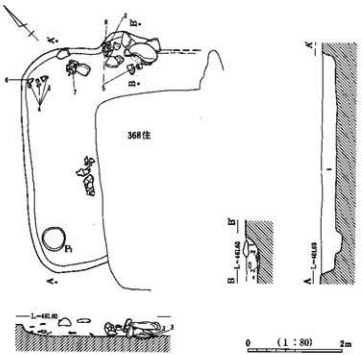



図72 369号住居跡

**369号住居跡**（図72、PL15・16）

位置 V−21

**検 出** 全体形の南側のほとんどを368住に切られる状態で検出される。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層である。

**構 造** 残る北側部分から平面形態は隅丸方形であると推定する。残りの良い北西と南西の壁は急角度に掘り込まれて深さは30cm程である。床は安定した状態で検出できない。ピットは西隅際の床面に1基確認したが、非常に浅く柱穴とは確定できない。

**カマド** 北東壁の中央付近と思われる位置に1基付設される。住居壁から浅い半円形に突出するように掘り込まれた形態で、火床はその掘り込みの中心から右側にずれた住居床面上にある。また、構築材と考えられる河原礫がカマド付近や住居北隅に集中して分布している。火床上部にある天井石と思われる最も大きな礫やその付近に立地する袖石らしき礫は比較的原位置に近い状態にあると考えられるが、いずれの礫も確実に使用時の状況を示してはなく、廃棄の一形態と考える。

**遺 物** カマド内から坏（2）、小型甕（5）、甕（8）が出土して、その左側から甕（7）、また坏（4）、壺（6）が出土している。なおカマド出土の平瓦（3）は混入と考える。坏は半球形が主体で口縁部が強く屈曲する器形（2・3）と内弯して終わる器形（4）がある。ミガキは精緻ではない。甕は体部中央付近に最大径を持つ平底で、口縁部は厚く、短く外反している。外面調整にはヘラケズリ（7）とミガキ（8）がある。

**時 期** 出土遺物から、5世紀中葉〜後葉と考える。

**370号住居跡**（図73） 位置 B−2

**検 出** Ⅳ層上面にて、371住と重なる状態で検出する。調査を進めるうちに366・371・388住を切り、368住に切られると判断した。覆土は黒褐色土の単層である。

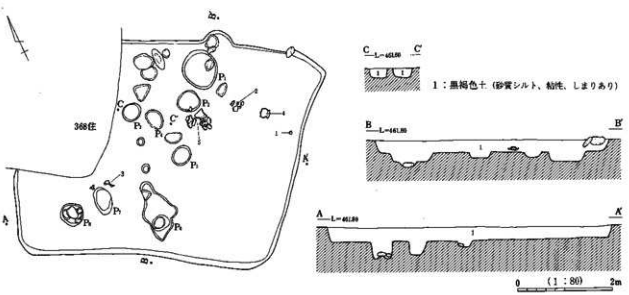
**構 造** 平面形態は横長の台形を呈しているが、南東壁は371住との検出が不明瞭で土質の違いで検出したため、本来は横長の長方形である可能性を残している。壁は深さ30cm程で、急角度に掘り込まれる部分が多い。床は黄褐色の砂質土を均した状態で、若干硬化した部分がある。ピットは8基確認し、P6〜8は比較的深いが明確に柱穴とは決めかねる。そのほかのピットは全体に浅く、本跡の柱穴配列は不明である。

**カマド** 北東壁の中央から右寄りに住居壁から半円形に突出する掘り込み部分があり、その覆土や左側の床面に、カマド構築材らしい河原礫がまとまって出土していることから、この部分をカマドの残存範囲と考える。しかし、燃焼部や火床などは全く残らない。

**遺　物**　床面付近から坏（1）、小型鉢（2）、甕（3・4）、壺（5）が大破片で、ある程度個体毎にまとまって出土している。坏は深い半球形で、甕は短い口縁部からやや開延びして、下半に最大径をもつ体部を持つ。壺は口縁部が僅かに有段状であり、甕より器壁が薄く、体部中央が膨らみ、底部はやや突出気味の平底である。調整は体部外面の上部がミガキ、下半がケズリ、内面はハケ調整である。他にモモの種子も出土した。

**時　期**　重複関係と土器の様相から、5世紀後葉～末葉頃と考えられる。

370住




371住

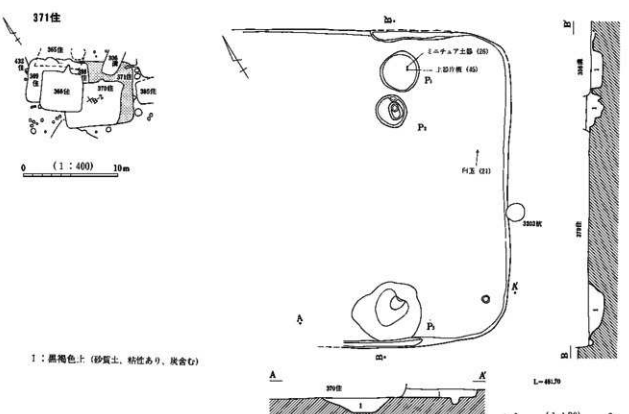



図73　370号・371号住居跡

**371号住居跡**（図73）　　位置　V－22

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、他遺構との切り合いが密接で、本跡の外形確認に難行する。最終的には365・368・370・382・388住、306溝、3202・3446坑といった全ての遺構に切られていると認識した。覆土は黒褐色土の単層であり、全体に若干の炭化物を含んでいる。

**構　造**　隅丸の方形或いは長方形と推定する。壁は南東部分では急角度に掘り込まれ、北東と南西壁の一部の際沿いに深さ10cm程の周溝が残っている。床は北から北東側に非常に良好な硬化面が認められる。ピット3基のうち、P1は浅い円柱形であり、その覆土から土器片板（26）、ミニチュア土器（27）が出土している。P2は底部の凹凸が激しい。またP3は直径が大きく浅いすり鉢状の断面形態を呈している。

**カマド**　残存する範囲では確認できない。

**遺　物**　南東壁際の床面にミニチュア土器（27）、土器片板（46～49）、臼玉（21・22）等特殊な遺物が集中している住居跡である。土器には半球形の坏（1）、球形で口縁部が短く外反する鉢（2）がある。

**時　期**　重複関係と土器の様相から5世紀後葉と考えられる。

**372号住居跡**（図74）　　位置　A－5

**検　出**　Ⅳ層上面にて他遺構と重なり、南西部分を削平される状態で検出する。367・373住に切られ、3312坑との重複関係は不明である。覆土は暗褐色の単層である。

**構　造**　残る部分から推定すると、平面形態はほぼ長方形を呈すると考えられるが、北東壁のカマド右側部分が外側に開いて、左側の定格的な壁線とは食い違っている。壁は垂直に近い状態に掘り込まれている。床は不明瞭で軟弱である。ピットはカマド手前左側の壁際に1基確認する。断面台形の円形ピットで、覆土から土師器片と縄文時代の打製石斧が出土している。

**カマド**　北東壁中央右寄りに1基付設される。燃焼部は残らないが、カマド左側の住居壁が直角気味に突出する部分と、カマド右側の住居壁に繋がる部分の壁面が被熱して赤化していることから、ここに燃焼部

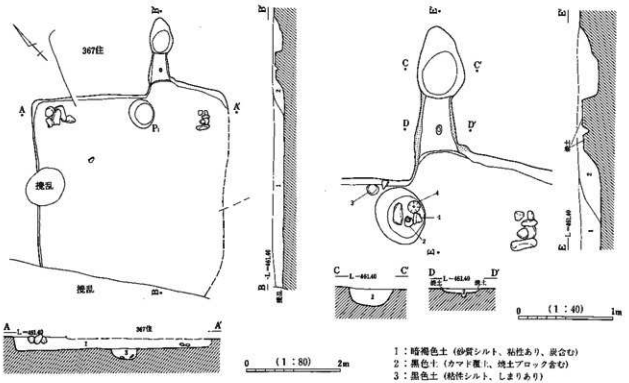



図74　372号住居跡

があったと推定する。右袖は突出部分の壁面を直接利用していた可能性がある。煙道部は斜めに立ち上がるカマド奥壁からほぼ水平に断面逆台形に浅く真直ぐ伸びて、そこから繋がる煙出口は平面楕円形のピット状に陥ち込んでいる。カマド構築材らしき河原礫が住居の北隅と東隅の床面にまとめて置かれている。

**遺　物**　P1内から大型坏（1）、小型壺（2）、高坏（4）、またその横の床面から内黒小型甕（3）が出土している。坏は大型で口縁部が短く外反している。また高坏は体部の稜が比較的残り、外面のミガキ、内面のハケ調整とも精緻である。

**時　期**　土器の様相から5世紀後葉とする。

**373号住居跡**（図75）　　位置　A－5

**検　出**　Ⅳ層上面にて、372住を切る状況で検出されるが、その重複部分の壁面は不明瞭である。またカマド煙道の一部は3404坑に切られている。後世の削平は南西側部分半ばまで及び、近世墓の影響も壁面や覆土に受けている。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層である。

**構　造**　残る部分からは方形または長方形であろうと考えられる。最も残りの良い北東壁はやや膨らみ気味の曲線を呈していて、急角度に掘り込まれている。床面はあまり明確ではない。2基のピットのうち、カマド左側のP2は円形で非常に浅く、扁平な河原礫が底部に置かれている。P1はカマド右側にあり、平面円形で有段状に深く掘り込まれていて、柱穴と考えられる。

**カマド**　北東壁の中央付近と思われる位置に1基付設される。袖は全く残存しないが、火床部が住居床面と同じ高さで強く被熱して不整楕円形に残っている。火床部は炭層に覆われ、その上には構築材と思われる河原礫2点が置かれている。煙道部は僅かに火床面から高い位置から住居壁に直角に伸び、その壁面は強く被熱している。煙出口は不整円形のピット状に掘り込まれ、底部中央が僅かに窪んでいる。

**遺　物**　全体量は少なく、P1付近の床面から須恵坏（1）、須恵高台坏（2）、坏（3）が出土している。また、覆土から土製の紡錘車（1）が出土している。須恵坏は底部ヘラケズリ未調整であり、高台坏は浅く大形である。土師坏は浅い半球形を呈している。また甕（4）は器壁が薄く、口縁部がくの字に屈曲する器形で東侭型甕の初源期の様相である。

**時　期**　出土土器から、奈良時代8世紀中葉～後葉と考えられる。

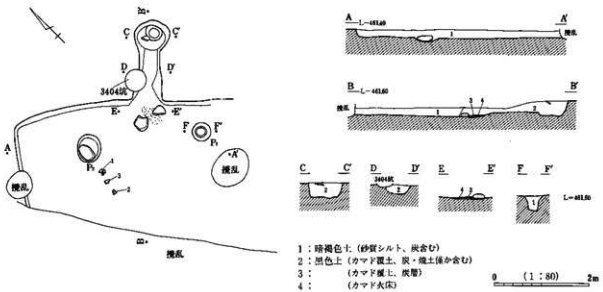



図75　373号住居跡

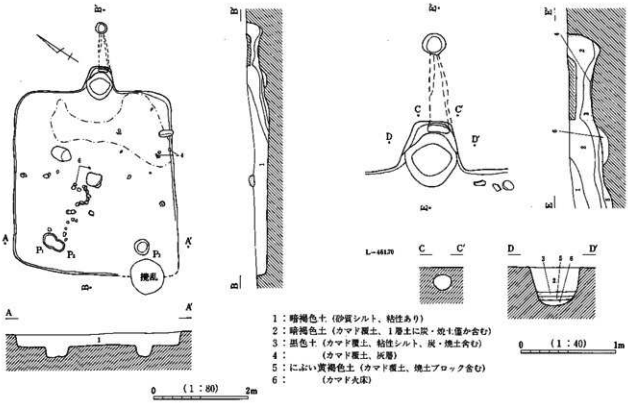



図76 374号住居跡

**374号住居跡**（図76） 位置 B－6

**検 出** Ⅳ層上面で検出する。375・395住、3400坑を切る。覆土は暗褐色砂質シルトの単層であるが、床面には扁平で大きな火床礫や拳大の亜円礫がややまとまって出土している。

**構 造** 長方形の平面形態を呈するが、南西壁線は短軸線から南にやや傾いている。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床はカマド周辺に明確な硬化面を残している。またピットは西隅床面に2基とそれに対応する南隅床面に1基検出される。西隅のP1・2の切り合いは不明であるが、3基とも円柱状に掘り込まれ、主柱穴と考える。しかし北側には対応するようなピットは見つからない。

**カマド** 北東壁の中央やや右寄りに1基付設される。燃焼部は平面台形に住居壁から突出して掘り込まれている。火床部分は住居床面からやや高まり、そこから浅い皿状に窪まっていて、奥壁部分は強く被熱している。また、その上部は焼土ブロックを含むにぶい黄褐色土が覆っている。袖は明確に検出できないが、突出部の壁面を利用した可能性もある。煙道部は掘り込み式で、断面円形のトンネル状に検出される。内部壁は赤化して、煙道内には炭・焼土を含む黒色土が充満している。煙出口はパイプ状にやや膨らみ、底部も浅く掘り込まれいる。開口部は円形で輪郭部分が被熱している。

**遺 物** 確実に使用時に属する遺物は出土していない。床面には小型鉢（4）や内黒坏（6）の小片が出土し、覆土からは須恵器坏（1・2）、石製の白玉（23）と小玉（33）が出土している。須恵坏はTK209型式からTK217型式の特徴を持ち、1は底部外面が手持ちヘラケズリ調整されている。坏類の全体形は掴めないが、口縁部は直立気味の器形（3・5）とハの字に開く器形（6・7）がある。

**時 期** 出土土器から7世紀初頭～前葉と考えられる。

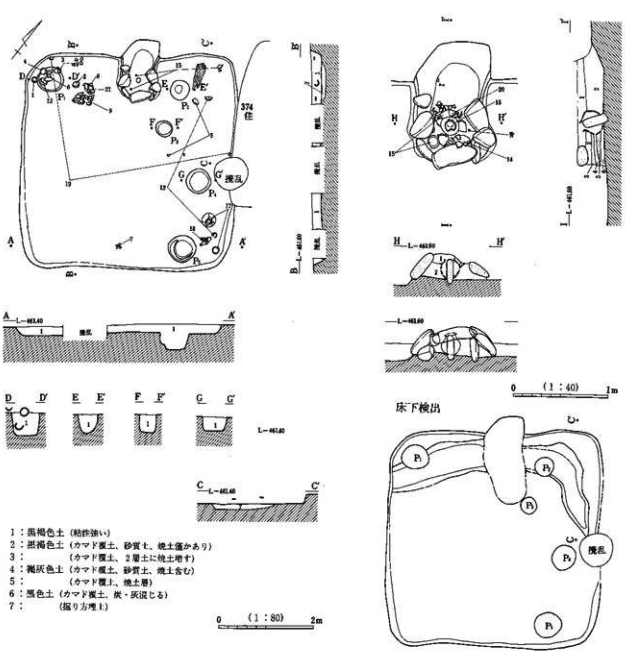



図77　375号住居跡

**375号住居跡**（図77、PL16）　位置　B－6

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、多数の近世の土壙墓に床面まで攪乱を受けている。また374住に北東壁を僅かに切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

**構　造**　平面形態は隅丸で方形に近い長方形を呈する。壁はやや斜めに掘り込まれている。床には僅かに硬化部分がある。ピットは5基確認し、いずれも深く掘り込まれ、柱穴の可能性がある。配列からすればP1・2・5が主柱穴と考えやすいものの、P1からは完形に近い坏（4・13）と高坏（6）、その上部床面からも坏（1・3）が出土しているため、柱穴以外のピットとも考えられ、確定できない。

**床下の構造**　カマド側北西壁際沿いから北隅と南東壁際沿い中ほどまでの溝が検出される。カマド下部分は未調査で不明であるが、繋がる状態と推定する。その形状は不整なL字状の平面形で、南西壁に直結して、反対側の先端は細まって消滅している。深さは床下10cm程で、幅は70cm程を測り、断面形態は逆台形

である。底部の高さはほぼ均一であり、流水などの所見は得られない。

**カマド**　北西壁のほぼ中央に1基付設される。非常に遺存状況が良好である。袖部分では構築材である河原礫が左右3点ずつ並列して残る。特にその最も手前の1対の袖石はほぼ原位置を保って据えられた状態であり、その上に横長で扁平な河原礫の天井石が架けられたままになっている。不整な楕円形の燃焼部は住居壁から不整半円形に掘り込むように一部突出していて、その床面の中央には支脚石の角礫が直立して据えられている。そこには小型甕（14）、甑（15）、甕（16・20）がほぼ完形の状態で捨てられ、特に16の甕は正位のままで支脚石に貫かれるように出土している。また骨片も数点検出されている。なお煙道部は確認できない。

**遺　物**　カマドやP1以外にも床面から完形やそれに近い破片として、多数の土師器が出土している。またカマド右側、P2付近の床面から形状を残した柱状の炭化材が出土している。坏は半球形で口縁部が丸く終わる器形（1）と短く外反する器形（3・4・13）、外反して内面に面を持つ器形（2）がある。高坏（6・7）は内弯気味で僅かに稜を持つ坏部からハの字に開く脚部が付く器形であるが、7は脚部がやや細く、柱状に近い。小型鉢は球形で強く口縁部が外反する器形（9・12）と偏平な器形（8）がある。坏と高坏、小型鉢はいずれもミガキなどの調整が濃密に施されている。甑（15）は大形で底部のない器形であり、甕は長胴気味の器形（16・19）と体部中央に最大径を持つ球形を意識した器形（17・20・21）がある。

**時　期**　出土土器から、5世紀中葉から後葉とする。

**376号住居跡**（図78）　　位置　G－15

**検　出**　Ⅳ層上面で多くの遺構と切り合って検出する。調査の結果、377住を切り、306・307・347住、302溝に切られると判明する。覆土は単層で、暗褐色土の砂質シルトである。土層内にはⅣ層ブロックや炭を含んでいる。

**構　造**　平面形態は方形であり、3カ所残る住居隅のうちカマド右側の北隅が丸みを持ち、他の2カ所は比較的直角気味である。壁は南側が深く、30cm程を測る。全体に垂直に近い角度で掘り窪められている。床は平坦であるが、堅緻でない。ピットは9基認められ、そのうちP2は深く、底部に扁平な河原礫が置かれ、柱穴と考えられる。またP6も大形で、柱穴の可能性がある。P6の西側のP7も深く掘り窪められている。しかし配列が不明確で、主柱穴と決められるピットはない。その他にP3は床のほぼ中央にあり、皿状に浅く掘られている。南隅に並ぶP8・9は、小型であるが非常に深く真直ぐに掘られ、柱穴とも考えられる。

**カマド**　北西壁中央に1基付設される。燃焼部の中央が半円形に住居壁より突出して掘られている。袖は粘土質シルトの構築材で作られている。その両袖の手前すぐに小ピットがある。袖石は認められない。燃焼部の火床は袖部より床面中央側でⅣ層が直接被熱した状態で残り、比較的堅緻である。火床奥に隣接して、支脚石の抜き跡といえる小ピットがある。煙道部は確認されないが、突出部を利用していたとも考えられる。また、カマド左側床面にまとまってある大小の扁平な河原礫はカマド構築材の可能性がある。

**遺　物**　少ないが、P6内から坏（1）、床面から坏（4）や甕（5・7）が比較的大きな破片で出土している。3の内黒坏は床上出土ながら、やや新しい様相とみられ、重複関係が濃密である結果と思われる。他の坏類は浅い半球形（1・2）と深い半球形（4）があり、1は口縁部の屈曲する幅が広い。甕は体部下半に最大径を持ち、底部が上げ底気味の平底である。小型壺（6）は平底で偏平な球形の体部から直線的な口縁部が立ち上がる器形で、内外面ともミガキが精緻である。石器には擦・敲石（192）がある。

**時　期**　土器の様相と重複関係から5世紀後葉～6世紀初頭と思われる。

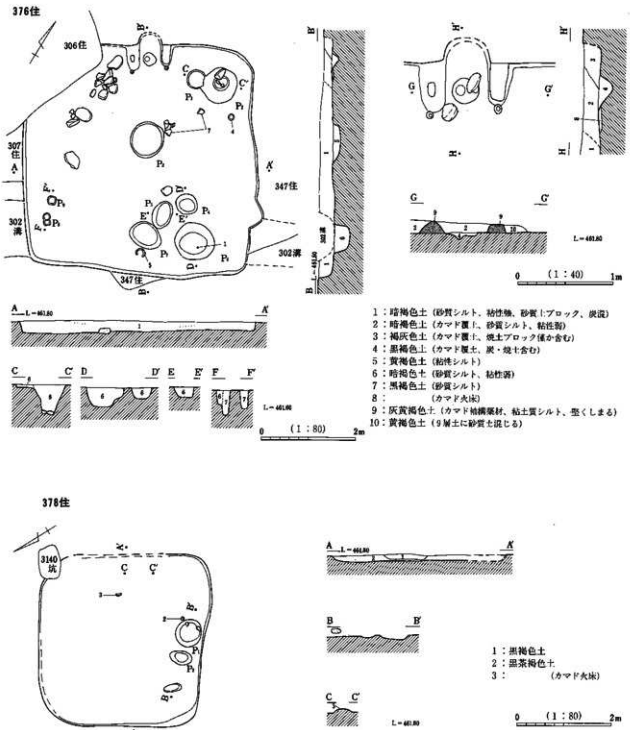



図78　376号・378号住居跡

**378号住居跡**（図78）　　位置　B－24

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、ほとんど304溝覆土に重なる状況で確認される。また341・342住、302建を切り、3140坑に切られる。覆土は2層に分けられ、黒茶褐色土（2層）が全体を覆った後、中央部分に黒褐色土（1層）が堆積している。

**構　造**　平面形態はほぼ方形に近い台形を呈している。残りの良い南と西側の部分では傾斜を持っている。床は軟弱である。ピットは南壁際に2基確認するが、非常に浅く柱穴とは考えにくい。

**カマド**　南東壁中央やや右寄りに、床面が楕円形に被熱した部分があり、ここを火床跡と考える。他に痕跡は残らない。

**遺　物**　床面から内黒坏（2）と甕（3）の小片が出土している状況である。3は古い様相で混入と考える。1の須恵坏、2の内黒坏ともに底部回転糸切り未調整である。いずれも非常に外傾する器形である。

**時　期**　土器から平安時代9世紀中頃と考えられる。

**379号住居跡**（図79、PL17）　位置　B－8

**検　出**　Ⅳ層上面で、383・384住、3127・3273坑に切られて検出される。覆土は2層に分けられ、2層土は南側に堆積している。床面から2層土中までに、土器片や礫、炭化材が散乱している。焼土がない状況から投棄の可能性が高い。また1層土は自然埋没であろう。

**構　造**　残る部分から長方形を呈すると考えられる。住居隅の形状は切られて不明である。壁はほぼ垂直で、床は平坦である。ピットは3基検出され、P1・2辺りが柱穴と考えられる。P3は南東壁際中央にある大きなピットで、覆土には扁平な台石（218）や砥石（127）、小型短頸壺（2）、甕（4）が投棄されている。床下には深さ20cm程の掘り方を持ち、その底部は凹凸を持っている。

**カマド**　北西壁の中央右寄りに1基付設される。住居壁から半円形に張り出して掘られた部分を持つ。燃焼部の残存状態は悪く、右袖部にある袖石の抜き跡、火床部を覆う炭と焼土からなる6層土が痕跡といえる。また煙道部には半円形の突出部分があたる可能性がある。

**遺　物**　上記した床面南側の投棄部分には小型甕（3）、甕（5・6）などが大破片でまとまって出土している。P3には土器や砥石（127）や台石（218）といった遺物が投棄された状況と窺える。坏は深い半球形で緩やかに口縁部がが外反していて、調整は不良である。甕には長胴気味の器形（5・6）と体部に最大径を持つ球形の器形（4）がある。

**化学分析**　床面の炭化材は、同定の結果、クヌギと同定された（付章第1節参照）。

**時　期**　土器と重複関係から5世紀後葉～6世紀初頭とする。

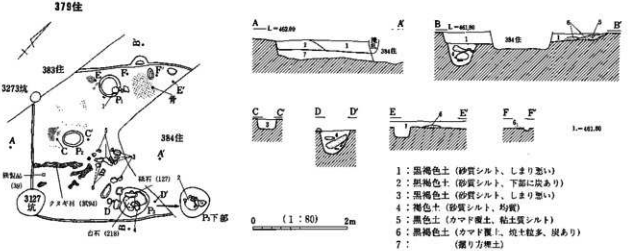



図79　379号住居跡

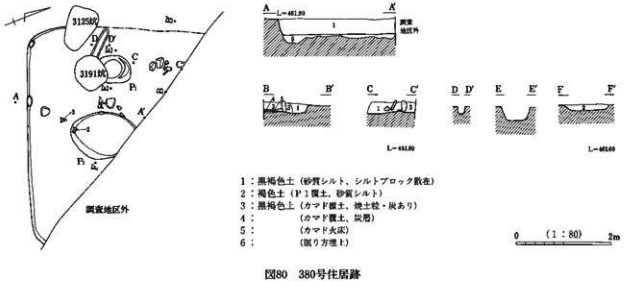



図80　380号住居跡

**380号住居跡**（図80）　　位置

**検　出**　Ⅳ層上面にて、調査地区外に北東側の一部が出る状態で検出される。381・383・384住を切り、3125・3191坑に切られる。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で、黄褐色シルトの小ブロックが散在する。

**構　造**　隅丸方形の平面形態を想定する。壁は急角度に傾斜している。床は貼り床ではないが、明瞭に検出できる状態である。ピットは2基検出し、P1はやや深く柱穴の可能性を持ち、P2は住居中央やや南寄りにあり、大型で皿状に掘り込まれている。また、西壁際から斜めに溝が伸びる。南東側先端は3191号土坑に切られ不明である。床下には深さ5～15cmの掘り方があり、住居の外周側程深くなる傾向にある。

**カマド**　北西壁の中央右寄りと考えられる部分に痕跡が残る。しかし住居検出に問題があったのか、カマド全体が壁から離れて、住居中央寄りにある。火床は一部が調査地区外に出る状況で厚く被熱して残り、その奥に支脚石が接するように据置されている。また火床左側には構築材の河原礫がまとまって出土している。

**遺　物**　P2付近から高坏脚部（2・3）が出土している他、カマドや床面から土器片が僅かに出土している。須恵高台坏（1）は高台が底部内面に付く器形である。2は内黒高坏の短脚形で3は土師高坏長脚形である。どちらも上半部は比較的細く裾部で広がる器形である。内面が横ケズリ調整を残している。

**時　期**　土器の様相から8世紀後葉と考えられる。

**381号住居跡**　　位置　B－2

**検　出**　調査区の北東壁際で、Ⅳ層上面で他遺構と重複して検出する。380・385住、3316坑に切られる。383住の煙道部との重複は不明である。覆土は黒褐色の砂質土の単層であり、ラミナ状の堆積からなる自然堆積土である。

**構　造**　方形の平面形態を想定する。壁は南西側に残り、緩やかな傾斜で掘り込まれている。床は全体の4分の1程が残り、厚さ5cm程の堅緻な貼り床で構築されている。ピットや炉・カマドは確認されない。

**遺　物**　覆土中から土器の小片が出土している。

**時　期**　重複関係と僅かな土器から、古墳時代後期、6世紀中頃以前と考える。

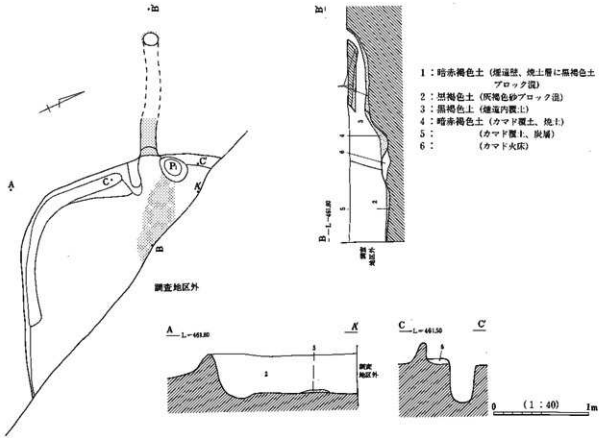



図81 382号住居跡

**382号住居跡**（図81、PL17） 位置 B－2

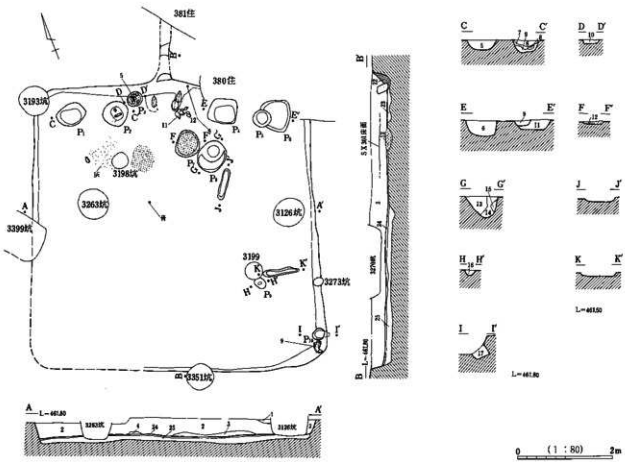
**検 出** Ⅳ層上面で、住居のほとんどが調査地区外にある状態で検出する。本跡のカマド煙道部分が371住を切る。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層で、灰褐色の砂ブロックが混入している。

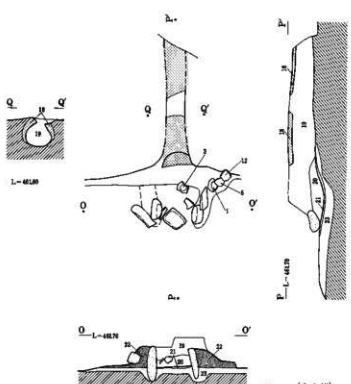
**構 造** カマド付近のみ残存するために詳細は不明だが、隅丸長方形の平面形態を呈すると推定する。カマドのある北西壁はカマド部分を頂部にして緩やかに膨らんでいる。壁は急角度に掘り込まれ、北西壁のカマド右側から南西壁の途中までの壁際には、半ばLの字状に周溝がある。幅10cmで深さ5cmの浅い周溝である。ピットはカマド火床右側の壁際に密接して1基検出する。円柱状に深く掘り込まれるピットで、カマド火床に密接することから、カマドの構築に関わる可能性がある。

**カマド** 北西壁のほぼ中央に1基確認する。燃焼部の左袖がやや高まる状況で残り、右袖部分には上記のP1が掘られていて、関連性が想定される。火床部には奥壁際に楕円形の火床が残り、その上面から手前の床面にはカマドから掻き出した炭化物と焼土が広がる。煙道部は掘り込み式の長大なタイプで、斜めに掘り込まれた奥壁の、火床面から高さ18cm程の位置で、断面円形の横穴を掘り込んでいる。長さ70cm程水平に掘り込んでから緩やかな傾斜で上方に向かい、検出面に開口している。総じて長さ140cm程、最大幅20cmを測る。内部の壁面は暗赤褐色に被熱している。

**遺 物** 覆土中から僅かに土器片が出土している。

**時 期** 重複関係と遺物から、7世紀中頃以降と考える。




1：黒褐色土（シルト、黄褐色土ブロック散在）
2：黒褐色土（シルト、炭・焼土点在）
3：黒褐色土（1層土と似る）
4：黄褐色土（砂質土、堅くしまる）
5：褐色土（粘性シルト）
6：黒褐色土（粘性シルト、褐色土ブロック混）
7：黄褐色土（シルト、焼土僅かあり）
8：　　（炭・灰あり、しまりあり）
9：褐色十（焼土点在）
10：黄褐色土（炭・焼土混じる）
11：黒褐色土（砂質シルト、しまり悪い）
12：　　（炭・焼土）
13：黒褐色土（砂質シルト、炭・焼土点在）
14：褐色土（砂質土、焼土点在）
15：灰黄色土（砂質土）
16：黒褐色土（シルト質土、均質）
17：黒褐色土（砂質シルト、褐色砂質ブロック混）
18：　　（カマド煙道部粘土）
19：黒褐色土（カマド袖土、粘土質シルト、焼土含む）
20：暗赤褐色土（カマド袖土、粘土質シルト、焼土・炭多）
21：　　（カマド火床）
22：黒褐色土（カマド袖構築材、粘土質シルト）
23：　　（カマド掘り方）
24：　　（貼り床層）
25：　　（掘り方埋土）

図82　383号住居跡

**383号住居跡**（図82、ＰＬ18）　位置　Ｂ－７

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。遺構密度高く、多くの遺構と重複している。379・395住、3318・3319坑を切り、380住、3126・3193・3198・3199・3200・3263・3265・3269・3270・3273・3351・3399坑、ＳＸ301に切られる。覆土は大旨単層で、均質な黒褐色のシルト土である。また381住との重複関係は不明である。

**構　造**　平面形態は方形を呈する。壁は垂直に近い急角度に掘り込まれる。床は全体に堅緻な貼り床で、カマド手前には灰や炭化物が広がる。ピットは10基検出するが、柱穴と断定できるものはない。ただカマドのある北壁に２基ずつ並ぶＰ１・２とＰ４・６が規則的であり、柱穴と想定できるかもしれない。またＰ10は東壁の南東隅際に斜めに掘り込まれている状態で、支柱穴と思われる。その他に床面には２本の直線的な溝が検出される。いずれも規模は長さ70cm程で幅10cm、深さ８cm程である。Ｐ８付近とＰ９付近にあり、方向に共通性はないが、間仕切りの一種であろうか。

**カマド**　北壁のほぼ中央に１基付設される。比較的遺存状態が良好である。左右の袖部には扁平な河原礫が並列して据えられていて、その外側を粘土質シルトの構築土が固めている。火床部は横に狭く縦長であり、火床は袖の手前から奥壁まで強く被熱していて、中央がやや窪む形状である。煙道は火床から20cm程高まった位置から水平に掘り込まれている。その断面は径25cm程の亜円形である。煙道の上壁は被熱して赤化している。煙出口は381号住居跡に切られて不明であるが、現存長で120cmと長大な煙道である。

**遺　物**　カマドから坏（１・３）、内黒坏（６）、甕（12）、カマド付近床面から甕（11・12）、Ｐ３から内黒坏（５）が出土している。他に北側壁際に壺（９）がある。坏には須恵坏模倣（２）と須恵坏蓋模倣（１）と半球形の浅い器形（３）がある。内黒坏は平底気味で、身部が開く５・６と外面にやや稜を持つ４がある。壺は肩が張る球形で、口縁部が直線的に開く器形が主体である。甕はやや体部が膨らむ11と寸胴な12とがある。この他に土製勾玉（８）と軽石製品（55）が出土する。

**時　期**　土器の様相から、６世紀前葉～中葉と考えられる。

**384号住居跡**（図83）　　位置　Ｂ－８

**検　出**　Ⅳ層上面で、全体形のほとんどが調査地区外にある状況で検出する。379住を切り、380住と305溝に切られる。覆土は２層に分けるが、床面を覆う２層土は炭や焼土からなる燃焼跡であり、実質的な覆土は１層土で、黄褐色土ブロックが混入していて人為的な埋め戻し土と考えられる。

**構　造**　隅丸方形の平面形態を想定する。壁は急角度に掘り込まれている。床は平坦でやや堅い状態である。ピットはない。なお、床面に被熱した範囲と礫の集合があり、炭化物の広がりもあったが、炉やカマドとする根拠に欠け、性格は不明。

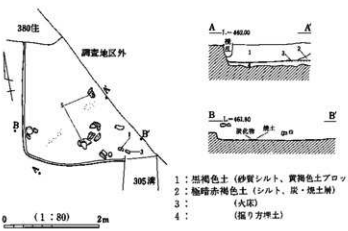



図83　384号住居跡

**遺　物**　出土量は少ない。床面から黒色坏（１・３）、壺（５）が出土する。１・２は須恵器坏模倣の器形である。３・４は平底気味の底部から浅く開く器形で、３は底部外面に稜を残している。５は球形胴の壺で、外面下半までミガキ調整が施され、底部は内面から打ち欠かれていて、甑等への転用が推測される。

**時　期**　土器、特に坏の特徴から、古墳時代後期、６世紀中葉～後葉と考えられる。

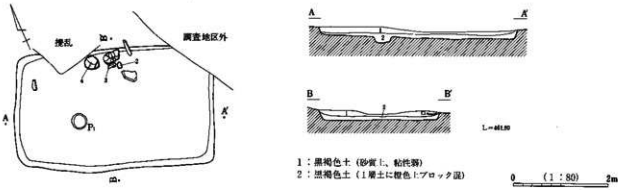



図84　385号住居跡

**385号住居跡**（図84、PL18）　位置　B－2

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。南東隅は調査地区外であり、一部調査できない部分が残る。381住、3203・3337～3339坑を切る。覆土は自然埋没からなるレンズ状堆積で2層に分ける。いずれも黒褐色の砂質土であるが、下部の2層土には橙色の砂質ブロックが入る。

**構　造**　隅丸の長方形である。壁は斜めに掘り込まれ、床は地山を均して敲き締めた状態である。1基のみ検出されたP1は円柱形のピットで、これを柱穴とすれば1本柱の上屋構造を想定するものである。炉やカマドは検出されない。

**遺　物**　北壁際の床面に小型甕（2）、甕（3・4）がまとまって出土している。内黒坏（1）は浅く開く器形で、甕は口縁部が強く長く外反する器形（2・3）と体部中央が膨らみ、口縁部が僅かに立ち上がる器形（4）がある。

**時　期**　土器の様相と重複関係から、6世紀中葉と考える。

**386号住居跡**　欠番

**387号住居跡**（図69）　位置　B－1

**検　出**　Ⅳ層上面で、366住に全体形のほとんどを切られる状態で検出。覆土は黒褐色の単層であり、366住覆土より黒みが薄い。

**構　造**　小規模な方形あるいは長方形の平面形態であると推定される。壁はやや斜めに掘り込まれいる。床は不明確であるが、一部に硬化な部分が見られる。柱穴や炉・カマドは検出されない。

**遺　物**　覆土から僅かに土師器片が出土している。

**時　期**　重複関係と土器から、5世紀中葉頃と推定する。

**388号住居跡**　位置　V－22

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、遺構の重複が多く、全体形を調査できない。371住を切り、368・369・370住に切られる。また覆土上部には365住が乗っている。覆土は黒褐色土の単層である。

**構　造**　平面形態は不整な方形であろう。壁はやや斜めに掘り込まれる。床は平坦であるが軟弱である。ピットはない。カマドは不明確で、北東壁の中央に浅い半円形の突出部があり、その痕跡の可能性があるが、炭化物や焼土などは検出されていない。

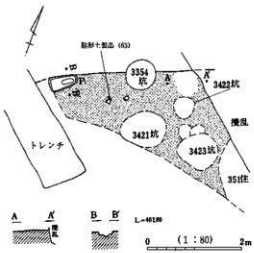



図85 391号住居跡

**遺 物** 土器の1は厚手で口縁部がやや直立気味に外反して、あまり肩が張らない器形の甕である。

**時 期** 重複関係と土器から、5世紀後葉と想定する。

**389号住居跡** 欠番

**390号住居跡** 欠番

**391号住居跡**（図85） 位置 B－17

**検 出** Ⅳ層上面にて、他遺構と重複して、焼土と炭の分布状況から住居跡として検出する。非常に検出状態が悪く、明確に切り合いが判断できるのは392住、305溝を切り、335坑に切られることだけで、その他の351住、3421～3423坑については新旧関係が不明である。

**構 造** 平面形、規模共に不明である。壁もほとんど残らない。床は平坦に均した状態で、その上部は焼土と炭に覆われいる。ピットは北西壁に1基ある。平面隅丸長方形で、断面は有段形である。

**カマド** 北西壁際に火床部分のみ見つかる。

**遺 物** 床面に土器片が僅かに出土し、覆土には匙型土製品（63）と鍛冶滓（21）が出土していて、床面の焼土の堆積との関連を持つ可能性がある。

**時 期** 重複関係と土器から、7世紀代と思われる。

**392号住居跡**（図86） 位置 B－17

**検 出** 試掘時にトレンチ調査で黒褐色土の陥ち込みを確認し、本調査でⅣ層上面にて住居跡として検出する。344・391住、305溝、3374・3436・3437坑に切られる。覆土の堆積状況は、床面を3層土が覆った後、一旦火が焚かれて2層土（焼土）が広がり、最終的に1層土に覆われる。

**構 造** 平面形態はほぼ方形といえる。壁は西側は急角度であり、東側は残りが悪いためか緩やかな傾斜で掘り込まれている。カマドのない3辺の南側の壁際にはコの字状に巡る周溝がある。全体に幅、深さ共に5～10cmである。床は堅緻であるが、敲き締めている様子ではない。ピットは4基確認されるが、いずれも皿状に浅い形状である。P1・2辺りが位置からすれば柱穴の可能性は残る。床下に掘り方を持つ部分があるが、断面観察だけであり詳細は不明である。

**カマド** トレンチと305溝にほとんどが壊されていて、残りは悪い。住居壁から半円形に突出して掘られている。この部分が燃焼部であるか煙道部であるかは不明である。また袖部には構築土が貼られている。礫は見つからない。横断面の観察では、小範囲の火床の下には灰の混じる砂質シルトが堆積している。

**遺 物** 床面からは長胴甕（6）が出土している。また重複関係が多様なことから、坏（2）と壺（5）は古い時期の混入と考えられる。6の甕は比較的薄手で、口縁部が強く外反している。他に釘（31）が出土している。

**時 期** 土器の様相と重複関係から6世紀中葉～後葉頃と考えられる。

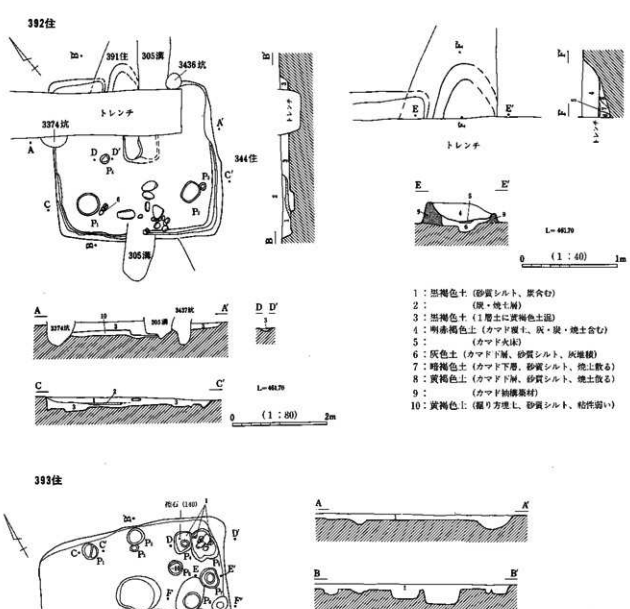



図86　392号・393号住居跡

**393号住居跡**（図86）　　位置　B－16

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。394・398住、303溝を切り、308建、3433・3434坑に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。

**構　造**　平面形態は不整な方形といえる。北東壁が南西壁とやや平行ではない。また南北壁隅は丸みを持ち、東西隅は比較的鋭角である。南隅にはLの字状に周溝がある。南東壁側は幅が広く、南西壁側は細くなっている。床は明瞭でなく軟弱である。ピットは非常に多く、計20基検出される。形状や配置から明確に柱穴と判断できるピットはないが、P4・7・12・16辺りが可能性がある。またP11には床面の焼土が

覆土内に入り込んでいて、特殊な構築・埋没状況が考えられる。

**カマド・炉** カマドは確認できない。P11に隣接する焼土は炉床の可能性がある。

**遺 物** P4から擦石（140）、P5から内黒坏（1）が出土している。その他の遺物は覆土内からの出土である。坏類は中期的な半球形の器形（3・4）と須恵坏蓋模倣の器形（2）がある。1の内黒坏は、やや底部外面に稜を持ち、身部は直線的に開く。またミガキの密な異形な高坏脚部（5）と内黒の直口壺（6）がある。この他に土製円板（61）もある。

**時 期** 土器の様相と重複関係から5世紀後葉～6世紀初頭と考える。

**394号住居跡**（図87） 位置 B－16

**検 出** Ⅳ層で検出するが、そのほとんどが393住と攪乱に切られている状態で確認する。また本跡が398・3400住を切っている。覆土は黒茶褐色土の単層である。

**構 造** 平面形態は僅かに残る南隅付近から隅丸の方形であろうと推定する。床は堅緻な面が398住の覆土上面まで広がる。ピットは南隅床面に1基検出する。柱穴であるかは不明である。炉やカマドは確認できない。

**遺 物** ほとんど出土していない。

**時 期** 重複関係から、5世紀末～6世紀初頭と考える。

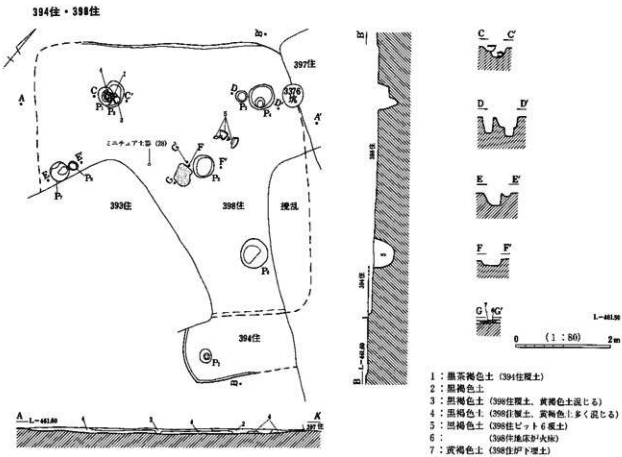



図87 394号・398号住居跡

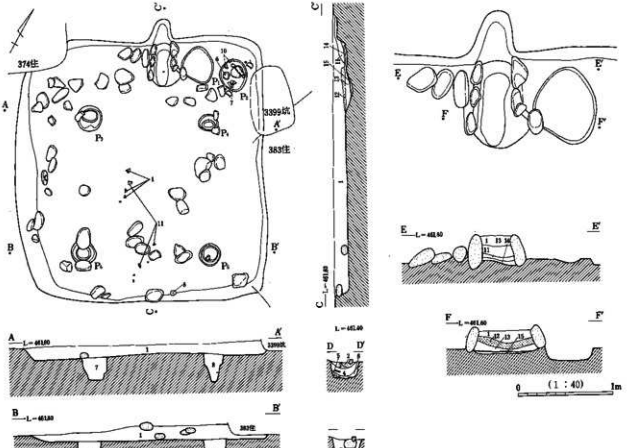



図88　395号住居跡

**395号住居跡**（図88、PL19）　位置　B－7

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。308溝、3400坑を切り、374・383住、3399坑に切られる。覆土は黒色土の単層である。

**構　造**　平面形態は方形に近い長方形を呈する。南北の住居隅の壁はやや丸みを持っている。壁は斜めに掘り込まれている。深さは30～40cm程と比較的良く残っている。床面は堅緻であるが、貼り床は認められない。ピットは6基あり、主柱穴はP3～6の4基で、方形配列を呈している。いずれの柱穴も有段状に深く掘り込まれている。またP1はカマド右際にある皿状のピットで、P2は北隅床面にはあって、覆土下部には焼土や灰、坏（6～10）、上部には扁平な河原礫などが混入している。

**カマド**　北西壁中央右寄りに1基付設される。袖には芯材として扁平な河原礫を右側に3点、左側には4点ほぼ並列させて据えられているままになっている。また左袖の左横には、扁平な河原礫が3点置かれていて、天井石の可能性がある。火床は袖部の手前付近にあり、強く被熱している。また火床部はやや窪んだ形状であり、覆土は下から焼土混土、炭・灰混土の順に堆積している。煙道部は火床面から30cm程の高

さから50cm程水平に伸びて、底面が斜めに立ち上がる部分で消失している。

**遺 物** 床面より10cm程浮いた覆土内に、河原礫と共にTK47型式の特徴を持っている須恵坏（1）、甑（11）、内黒高坏（8）が出土している。P2内出土坏とやや時期差を持つことから、住居廃絶後ある程度時間差を持って投棄された可能性がある。坏体部は半球形が主体で、内弯して丸く収まる器形（1）、口縁部が外反して面を持つ器形（7・10）と面を持たない器形（9）、僅かに外反気味の器形（5・6）がある。石器には砥石（107）や門石（202）がある。

**時 期** 土器の様相から5世紀後葉と考える。

**396号住居跡**（図89、PL19・20） 位置 B－7

**検 出** Ⅳ層上面で、3400住を切る状態で検出する。また3389坑には切られている。覆土は床面を黒褐色土（4層）が覆った後、炭化物の混じる焼土（3層）が広がる部分があり、それを砂ブロックを含む黒褐色土（2層）、比較的均質な黒褐色土（1層）が覆っている。

**構 造** ほぼ長方形の平面形態である。住居隅は丸みを持ち、特に南北の隅は丸みが強い。壁は全体に傾斜しているが、特に北東壁はなだらかな傾斜で掘り込まれいる。深さは40cm程である。床は掘り方埋土上面を固めた貼り床が、西隅付近を除いてほぼ全体に広がる。ピットは西側床面に1基検出される。円柱状で柱穴と考えられる。

**カマド** 北西壁中央に1基付設されている。左右の袖に芯材の河原礫1対が原位置に据置されている。袖外部は構築材で固められている。またこの両袖石に架かっていた天井石が燃焼部内に落ちている。火床はそれ程被熱していないが、天井石の真下に横長楕円形で残る。支脚石は燃焼部の右奥に立っているが、掘り込まれていないため、原位置を保つ状態か不明である。またその支脚石が刺さるように長胴甕が直立して出土している。燃焼部内には灰・炭層（6層）、焼土混層（5層）が堆積している。煙道部は火床から高さ20cmにあり、底面は水平に伸びるが、途中から3389号土坑に切られて残存していない。

**遺 物** カマド内から内黒坏（3）、甕（5・7）が出土している。特に7の長胴甕は支脚石に底部を貫かれるような状態で出土している。また東側床面から編物石（74～78）がまとまって出土している。

内黒坏は平底気味で、底部内面にやや屈曲部を持って内湾して立ち上がる。甕は長胴で体部上半に最大形を持つ突出した平底（7）で、5の底部は平底成形の後、ヘラ状工具で外面中央部を上げ底状に削り取っている。1・2の坏は本跡が切る3400号住からの混入と思われる。他に砥石（107）がある。

**時 期** 内黒坏や甕の特徴と重複関係から、7世紀前半頃と思われる。

**397号住居跡**（図89） 位置 B－11

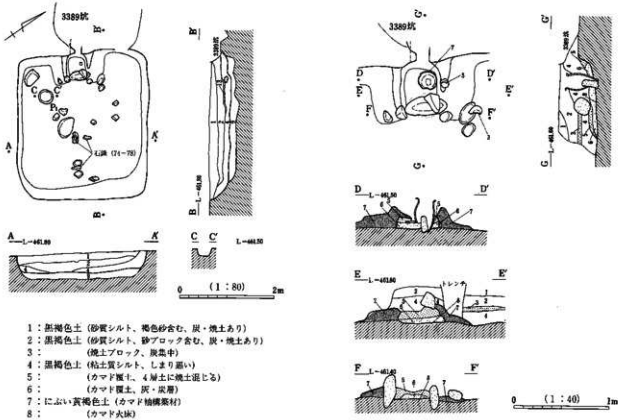
**検 出** Ⅳ層上面で検出するが、3400住、3376坑や近世墓に切られていて、遺存状態は良くない。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層である。

**構 造** 平面形態は長方形である。壁は深さ10cm程残り、斜めに掘り込まれている。床は北東側3分の1程残り、平坦であるが軟弱である。掘り方埋土の黒褐色砂質シルトを均して形成している。ピットは3基検出した。P1は有段状に掘り込まれ、P2・3は試掘トレンチに土部を削られた状態で検出されている。その位置から4本柱の方形配列の主柱穴と考える。もう1つは近世墓によって消失している。

**カマド** 北東壁中央に焼土が広がり、ここに付設されていたと推定する。しかしそれ以外の痕跡は無い。

**遺 物** 床面から僅かに土師器片が出土しているのみである。壺（1）は撫で肩の体部にやや外反する口縁部が付く器形で色調は橙色で、内外面ともよく磨かれている。

**時 期** 重複関係と土器から、5世紀後葉頃と考えられる。



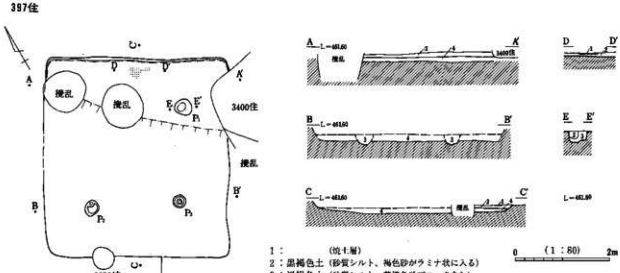




図89　396号・397号住居跡

**398号住居跡**（図87）　　位置　B－11

**検　出**　Ⅳ層上面で確認されるが、削平などの影響で検出状態は悪い。394住、303溝を切り、393・397・3376・3435坑に切られる。覆土は2層に分かれ、下層程黄褐色土ブロックが多く入る。

**構　造**　ほぼ隅丸方形の平面形態と思われるが、立ち上がりなど不明な部分が多い。壁は僅かに残る程度で、床はあまりはっきりせず、軟弱である。ピットは8基検出し、主柱穴としてP2・4・6を考え、4

本柱の方形配列のうちの3基と推定する。残る1基は393住に切られて検出できない。

**炉** 住居床面中央に地床炉を1基持つ。不整な楕円形様の平面形態で掘り方埋土が被熱している。その横にP5があるが関係は不明である。

**遺 物** P2から坏(1)、小型壺(3)、甑(4)が出土している。また床面から壺(5)やミニチュア土器(28)が出土している。坏は小振りで深めの半球形を呈する。1は口縁部が丸く終わる器形、2は口縁部が短く外反する器形である。3の壺は作りが粗雑で、口縁部が不揃いである。4は大型で口縁部が屈曲する甑で、内外面ともミガキが緻密である。5の壺はやや長胴化した体部から口縁部が段を持って立ち上がる器形である。外面と口縁部内面のミガキは緻密である。

**時 期** 出土土器と炉を持つ住居形態から古墳時代中期、5世紀前葉～中葉と考えたい。

**399号住居跡** 欠番

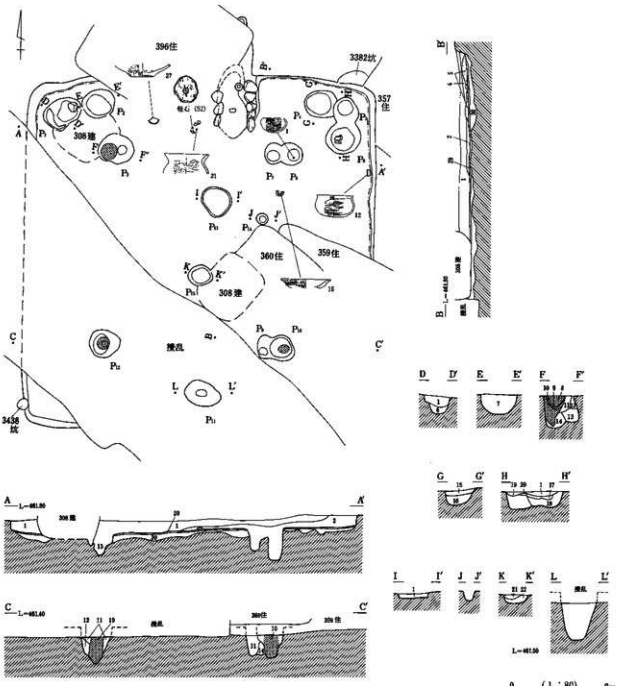
**3400号住居跡** (図90・91、PL20) 位置 B－12

**検 出** Ⅳ層上面で検出される。396住に切られる煙道部分が見つかり、また攪乱部分(試掘調査トレンチ)の断面観察でも貼り床層が明らかになり住居跡と認識した。397住を切り、357・359・360・394・396住、308建、3382坑に切られる。覆土は大きく2つに分け、主に住居の周囲床面を覆う炭や焼土を含む粘性のある黒褐色土(2層)の堆積の後、褐色砂ブロックの含む黒褐色の砂質シルト(1層)が全体を覆うように堆積している。

**構 造** 1辺7.4mを測る正方形を呈する、大きな竪穴住居跡である。壁は比較的残りの良い北側ではほぼ垂直に掘り込まれている。深さは20～30cm程である。床は掘り方埋土上面を貼り床状に堅緻に敲いている。ほぼ平坦であるが、西側に向かって5cm程傾斜している。ピットは15基検出し、主柱穴はP3・8・10・12の方形配列の4本柱である。P3・10・12覆土には柱痕が認められる。またP8西にP7、P10西にP9が密接していて、支柱穴的な役割が考えられる。P11はカマド壁反対側の南壁中央際にある深いピットで、入口施設(梯子など)に伴う役割が推測できる。カマド壁の両隅にある5基のピットは、カマドを挟んで対応する位置にあるが、性格は不明である。

**カマド** 北壁の中央右寄りに1基付設される。燃焼部が長さ120cm程ある長大なカマドで、袖部には右側に5点、左側に3点の縦長の河原礫が並列して、やや燃焼部に内傾する状態に据えられたままで検出される。天井石は焚口付近と煙道部付近の燃焼部上部にそれぞれ斜めに置かれている。そのうち焚口側の天井石は長さ70cm程で、裏側が被熱している。支脚石は中央より焚口寄りに火床から10cm程掘り込められて残る。また、奥には支脚石抜け跡らしい小ピットがあり、もう1つ支脚を持つカマドと考えられる。火床は薄く焼けている程度で明確に残らない。煙道部は切り合いにより一部が残るのみである。長さは110cm程で、やや幅の広い煙道であると推測される。カマド燃焼部内には、天井部の崩落土と思われる堅く被熱した焼土層と共に、多くの土師器が投棄されている。

**遺 物** カマド内とその右側の床面付近に土師器などが一括して出土している。カマド内からは煮沸具である甕が主に破片の状態で折り重なるように出土している。カマド右側の床面からは食器の坏や高坏がほぼ完形の状態で出土して、一緒にミニチュア土器(29)や軽石製品(50)、擦石(141)も出土している。この状況から、カマドの廃棄と同時に、その内部に甕類を割り入れ、その脇には坏や高杯を使用時のまま、あるいは敢えて完形のまま廃棄していった様相が想起される。この他に土製紡錘車(2)、土器片板(50～52)、匙型土製品(64)、臼玉(17)、双孔剣(38)、軽石製品(51・52)、砥石(79～83)、砥石(128)など、床面から覆土にかけて多彩な遺物が出土している。




1：黒褐色土（砂質シルト、褐色砂ブロック含む）
2：黒褐色土（1層土粘性あり、炭・焼土含む）
3：黒褐色土（かマド覆土、2層土に焼土ブロック散在）
4：にぶい黄褐色土（砂質シルト、焼土ブロック・炭あり）
5：黒褐色土（シルト質土、炭多、焼土・灰含む）
6：黒褐色土（砂質シルト、褐色砂ブロックで多く含む）
7：黒褐色土（砂質シルト、砂ブロック含む）
8：黒褐色土（柱痕？、しまり悪い）
9：暗褐色土（柱痕？砂質ブロック多く含む）
10：黒褐色土（柱痕？砂質シルト）
11：にぶい黄褐色・黒褐色（黄褐色砂と黒褐色シルトが縞状に堆積）
12：黒色土（シルト、均質な性状）
13：黒褐色土（砂質シルト、砂が僅かにブロック状に入る）
14：　　（黄褐色砂と黒褐色シルトが混じる）
15：灰黄褐色土（細砂砂、粘性、しまりともなし）
16：黒褐色土（砂質シルト、灰・焼土ブロック・褐色砂多）
17：黒褐色土（粘性質砂混じりシルト、焼土ブロックあり）
18：暗赤褐色土（砂質シルト、焼土塊ブロックに含む）
19：暗褐色土（砂質粘土混じりシルト）
20：　　（シルト質粘土、炭・焼土含む）
21：黒褐色土（砂混じりシルト、炭・灰多く含む）
22：暗褐色土（砂質シルト、炭・砂ブロックをやや含む）
23：にぶい黄褐色土（かマド覆土、砂とシルト混じる、焼土多）
24：　　（かマド覆土、焼土密、しまり悪い）
25：　　（かマド覆土、炭・灰層）
26：　　（かマド覆土、焼土層）
27：にぶい黄褐色土（かマド構築材、粘土質シルト、炭・焼土・砂混）
28：にぶい黄褐色土（かマド袖構築材、しまりよし）
29：　　（貼り床部分）
30：　　（掘り方埋土）

図90　3400号住居跡（1）

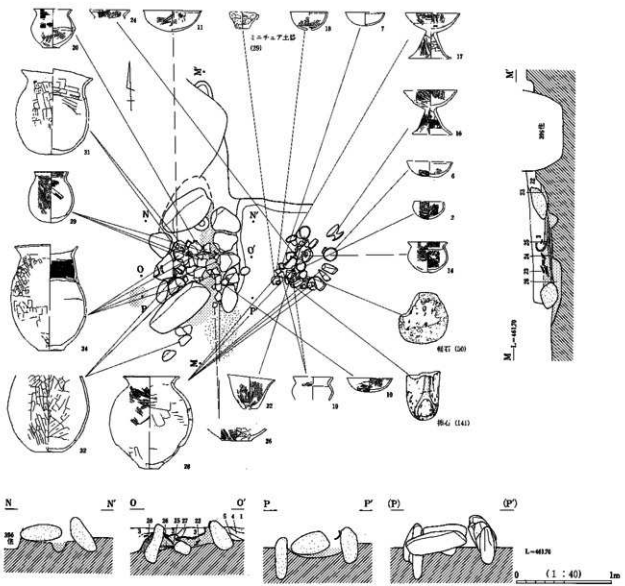
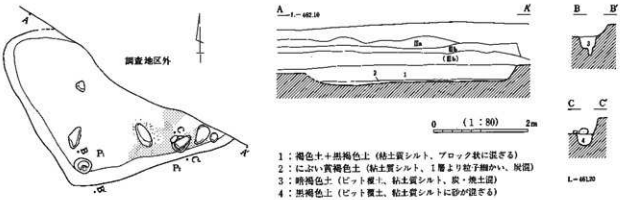



図91 3400号住居跡（2）

坏と鉢は半球形が主体で、坏では小型で内弯する器形（1・2）、浅い半球形で内弯する器形（3・4）、また口縁部内面が屈曲する器形（5～8）と口縁部外面も屈曲する器形（9～11）、偏球形（12）、鉢は丸底で口縁部が緩やかに外反する内面黒色処理されたもの（13）、上げ底状の小型の平底で口縁部が直線的に外反する器形（14）がある。高坏には坏部が有稜で外面に暗文ミガキが施されたもの（15）、稜が不明瞭で脚部がハの字状に開く器形（16・17）である。また坏、高坏、鉢の内外面のミガキは緻密である。小型甕（19～21）は体部中央が強く張る偏平な器形である。甑は小型の単孔の器形である。他に坏転用（18）と壺転用（26）がある。壺は上げ底状の平底で口縁部は直線的な器形である（25・26・27・28）。28は体部上3分の2と底部部分とが器壁が異なり、薄手の底部に厚手の体上部を接合している。甕には大小の法量があって、全体に長胴傾向を示し、底部が丸底のもの（29・31・32）と平底のもの（30・33・34）がある。34は器形や調整が異なる口辺部と体下部を接合して作られている。

**時 期** 出土土器と重複関係から5世紀中葉～後葉とする。

401住




402住

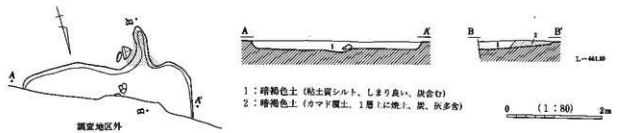



図92　401号・402号住居跡

**401号住居跡**（図92）　　位置　P－17

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。本跡北東側は調査地区外のため、調査は住居面積のほぼ2分の1にしか至らない。南壁が458坑を切る。覆土は2層に分かれ、にぶい黄褐色の粘土質シルトの2層土上に、褐色土と黒褐色土がブロックで混ざる1層土が堆積している。埋没過程は不明である。

**構　造**　南西側部分からは不整な四角形の平面形態を推定せざるを得ない。しかし北側隅の調査が不完全であるため、明確な形状は確定できない。壁は20～30cmの深さで、なだらかに傾斜している。床は軟弱であり安定しない。ピットは2基確認し、P1は南隅、P2はカマドの痕跡部分にある。P1は断面有段状で柱穴の可能性がある。P2はカマドに関連するピットだろうか。

**カマド**　南壁の調査地区際の床面に河原礫の集中と焼土層や炭層の分布があり、これをカマドの痕跡と考える。河原礫の中には被熱したものもあってカマド芯材の可能性が高いものの、床面に火床面などの痕跡はないため、この部分がカマドであるとは確証できない。痕跡という所見に止める。

**遺　物**　床上から覆土に土師器が出土している。内黒坏（1・2）は浅い半球形で口縁部がやや開き気味である。また小形甕（3・4）は長胴甕が短くなったような器形である。

**時　期**　土器の様相から、7世紀中葉～8世紀初頭と思われる。

**402号住居跡**（図92）　　位置　P－18

**検　出**　Ⅳ層上面で検出するが、カマド壁付近のみ調査し、残りは調査地区外のため未確認である。404住を切る。覆土は暗褐色で炭混じりの粘土質シルトである。

**構　造**　平面形態は隅丸気味の方形を呈すると推定するが、カマドのある南壁はカマドの両側共に外にやや膨らむ曲線を成している。壁は緩い傾斜で深さは15cm程である。床ははっきりしないが、掘り方はな

い。柱穴は不明である。

**カマド**　南壁の右側端に付設され、袖など燃焼部は残らない。煙道部は底部が残存し、焼土が分布する。

**遺　物**　出土量が少なく、図化できない。

**時　期**　重複関係から6世紀以降と思われる。

**403号住居跡**（図93、PL21）　**位置**　P－21

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。覆土の広がりと共に焼土とカマド石組みが見つかる。切り合いはない。覆土は黄褐色の粘土質シルトの単層である。

**構　造**　平面形態は隅丸の長方形を呈する。壁の南側は傾斜をもった掘り込みであり、北側は比較的垂直気味である。床は平坦で堅緻であり、掘り方はない。ピットは検出できない。

**カマド**　南東壁の中央に1基と、その右側に1基の計2基が検出される。中央の1基は煙道部のみ残り、そこに焼土が分布している。燃焼部は全く残らない。これに対して右側の1基は使用時の状態を良く残している。袖部は2対の河原礫を掘り込められていて、その最前の礫上に架けられた状態の天井石がある。火床部は天井石下からその手前部分にあり、支脚石はその火床奥に直立している。また煙道は中央のカマド煙道よりやや低位置に水平に掘られて、底部のみ残る。この2基のカマドの遺存状況は、中央カマド廃棄後、右側カマドを構築、使用した新旧関係を示す状態と理解したい。

**遺　物**　出土量は少ない。甕（1）は口縁部が短く外反して、体部の膨らむ器形と思われる。また体部の器壁は薄く削られている。

**時　期**　東信型の甕の初源期と思われる甕から7世紀後葉～8世紀初頭頃と考える。

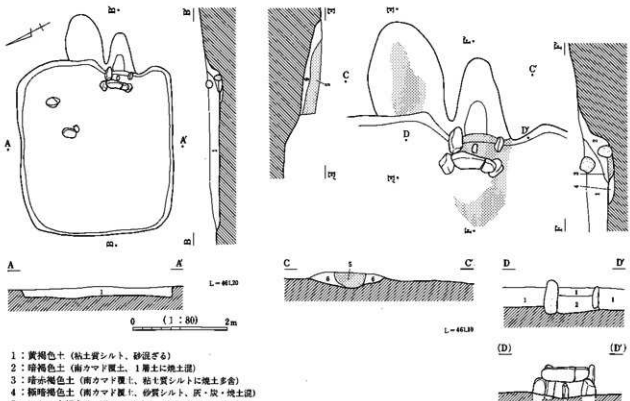



図93　403号住居跡

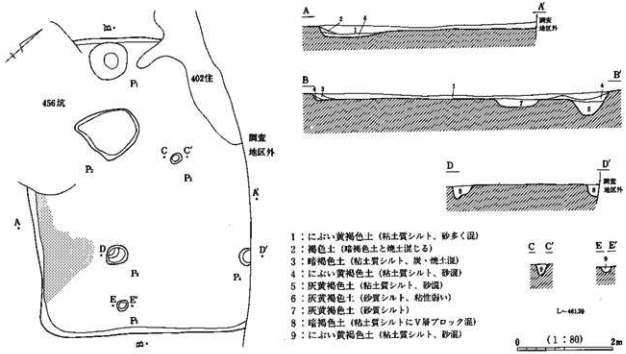



図94　404号住居跡

**404号住居跡**（図94）　　位置　P－18

**検　出**　Ⅳ層で、他遺構と重複する状態で検出する。また北東側は調査地区外のため未確認である。402住、456坑に切られている。覆土の埋没状況として、南東壁際に焼土が分布し、その後に住居全体を黄褐色土が覆っている。これは、住居廃絶前後に何らかの燃焼があったと想定する状態である。

**構　造**　平面形態は長方形である。壁は10cm程と浅く、不明である。床は平坦であるが、明確さを欠いている。ピットは6基確認し、そのうち主柱穴はP4・6と考えられる。またP1はすり鉢状のピットで北西壁中央際にあり、P2は皿状で床面北西側にある。性格は明確ではない。調査部分ではカマドは確認できない。

**遺　物**　出土量は少なく、図化資料はない。

**時　期**　重複関係と僅かな土器片から、6世紀前半頃とする。

**405号住居跡**　　欠番

**406号住居跡**　　欠番

**407号住居跡**（図95、PL21）　位置P－21

**検　出**　Ⅳ層上面で、覆土の広がりと、カマド煙出口を確認する。408建、486・487・489坑に切られる。覆土の状況として、床面直上に粘性を持つしまりの悪いシルトが全体に堆積して、その上にかたくしまる砂質シルトが覆う。その様相は住居廃絶後、風化作用以外に、浸水などの影響で、ゆっくりと泥が流れ込んだ状況を示していると想定できないだろうか。また床面上には酸化鉄の集積も見られる。

**構　造**　平面形態は隅丸長方形である。壁はほぼ垂直に掘り込まれる。残りは良く壁高は20～30cmを測る。周溝はカマド付近を除いた壁の直下に全周している。断面V字上で幅10cm、深さ6cmほどである。床

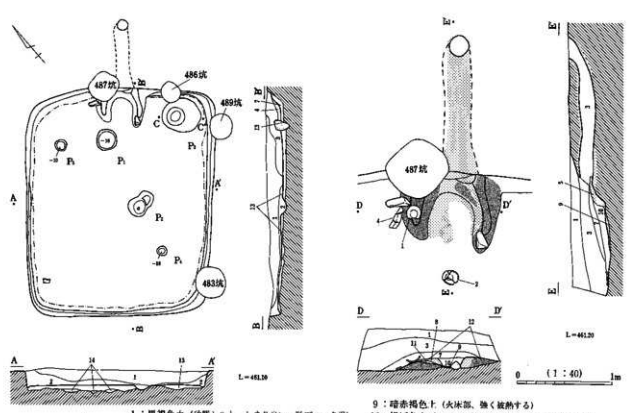



図95 407号住居跡

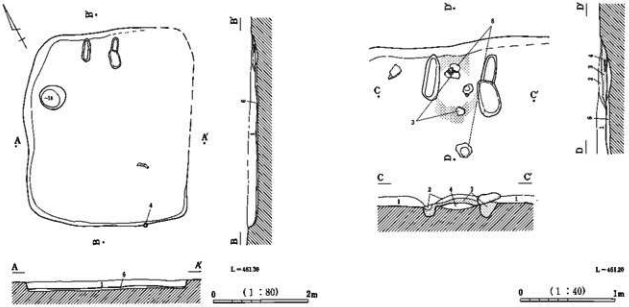
は砂質シルトを貼って敲き締めている。その状況は周溝際まで全体に広がる。ピットは5基検出されたが、明確に配置される柱穴はない。P3はカマド東にあり、覆土には土器片を多く含み、底面は床状に堅緻であるため、貯蔵穴としての使用が示唆される。住居床下は部分的に掘り込まれ、一部に焼土も見られる。その上に貼り床層を全体に乗せて整地している。

**カマド** 北東壁の中央に1基付設されている。袖部の残りは悪いが、粘土と細粒砂を混ぜた土と河原礫を構築材としたと推定される。火床部は長さ30cmの不整楕円形で煙道付近まで残る。全体に赤褐色に酸化している。煙道は火床面から10cm程の部分を水平に100cm掘り込み、そこから緩やかに上部に傾斜して、壁から160cmのところで煙出口となる。煙道断面はやや丸みを帯びた方形で、内幅14cm程、煙出口は20cmの円形である。また煙道付近の住居壁、煙道内、煙出口の地山は赤く酸化している。

**遺 物** カマド付近の床面から内黒坏（1）と高坏（2）、甕（4）出土している。この他に床面の遺物は少ない。内黒坏と高坏は坏部が浅い半球形である。また4は長胴形で口縁端部が面取りされている甕である。頸部に横ヘラ調整が施されている。3の甕は体部中央が張る器形で、覆土への混入と考えられる。

**時 期** 坏類と甕の状況から、7世紀前葉頃と考えられる。

**408号住居跡** 欠番




1：暗褐色土（砂混じりの粘土質シルト、土器片多く含む、焼土・礫僅か含む）
2：にぶい黄色褐色土（カマド覆土、堅くしまる砂質シルト、焼土多く含む、構築土崩落か）
3：明赤褐色土（カマド覆土、焼土、天井部の崩落）
4：明褐色（カマド火床、堅くしまる）
5：暗褐色土（ピット覆土、砂質シルト）
6：灰黄褐色土（掘り方埋土、シルト、堅くしまる、礫・炭・焼土含む）

図96　409号住居跡

**409号住居跡**（図96）　　位置　U－1

**検　出**　Ⅳ層上面にて、他遺構と重複して検出する。調査の結果、410住との重複関係を確認したが、やや不明確であった。覆土は暗褐色の粘土質シルトの単層である。覆土内には土器片が含まれる。

**構　造**　平面形態は不整な隅丸長方形である。壁は残りの良い南西壁で垂直に近く掘り込まれる。壁高10cm程である。床は軟弱な貼り床で、掘り方にシルト質土を貼って敲き締めている様子である。ピットはカマド西側の壁際に1基確認する。径50cmの円形で、深さ18cmを測るピットで、柱穴とも考えられる。

**カマド**　北東壁の中央左寄りに1基付設される。両袖部分には長楕円形の袖石の抜き跡が1対見られ、右袖跡の上には芯材の河原礫が横たわる。また両袖の間には円形の火床部が残る。火床部上部には土師器坏片があり、更に天井構築材らしき被熱した砂質シルトが覆っている。

**遺　物**　カマドから高坏（3）と甕（8）、南壁際から内黒高坏（4）などが出土する。坏は浅い半球形が主体で、口縁部が直立する小形のもの（1）もある。甕には平底で体部がやや膨らんだ器形（8）と口縁部が僅かに外反し、長胴の器形（6）がある。

**時　期**　坏と甕の様相から6世紀後葉とする。

**410号住居跡**（図97）　　位置　U－2

**検　出**　Ⅳ層上面で検出する。重複する409住との新旧関係は不明確である。403建に切られる。覆土は暗褐色の砂質シルトの単層であり、河原礫が含まれる。床面付近には焼土が散っている。

**構　造**　不整で隅丸気味の長方形の平面形態である。壁は残りの良い南側で深さ10cm程に緩やかに掘り込まれ、床は平坦であるが堅緻ではない。床面上には僅かに焼土が散っている。付属施設は検出されない。

**遺　物**　覆土から須恵坏（1）が出土しているが、409住との重複が不明確で、調査段階では本跡が古いと判断している。とすれば混入ともいえる土器である。

**時　期**　重複関係と遺物からも明確な時期は設定できないが、古墳時代中後期に収まる。

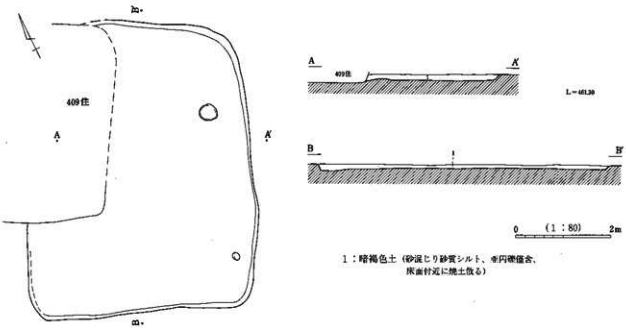



図97 410号住居跡

**411号住居跡**（図98、PL22） 位置 U－4

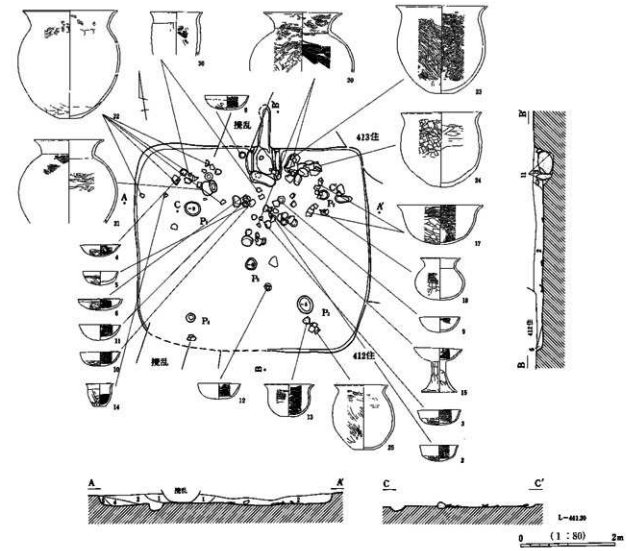
**検 出** Ⅳ層上面にて、覆土の広がりと共に、カマドに据えられた甕2点など多量の土器が検出される。412・413住に切られている。またカマドから南壁に向かって攪乱溝が走る。覆土は5層に分けられ、自然埋没と考えられる。そのうち2層土には炭化物や河原礫と共に大量の土器が含まれている。

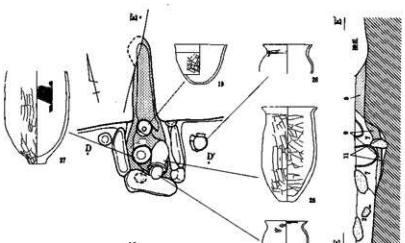
**構 造** やや不整で、横長の長方形の平面形態である。壁は垂直に近く掘り込まれる。深さは10～15cm程を測る。床は自然面を平坦にして、敲き締めている。P1～4が主柱穴と思われるが、いずれも小型で浅い。P5は床面中央にあり、形状は同じである。

**カマド** 北壁の中央やや右寄りに1基付設される。左右袖の芯材は扁平な河原礫が原位置を保っている。構築用の粘土（10層）は右袖外側に残り、被熱している。また天井石は袖の最手前にあり、左側は袖石上に架かり、右側がずれ落ちている状態である。火床は天井石直下に円形で僅かに残る。支脚石は柱状の河原礫で、燃焼部中央奥に直立している。煙道部は火床面から高さ20cmの位置より水平に掘り込まれ、先端部は攪乱を受けているが、長さ90cmを測る。遺物の出土状況は、天井石奥に長胴甕（27・28）が横に並列して出土し、右側の甕の上部には小型の内黒甕（18）が乗っている。他に燃焼部最奥には甑（19）が完形で残る。また火床上部から煙道部には炭や焼土を含む土が厚く堆積している。

**遺 物** カマド周辺の床面から完形やそれに近い土師器が一括出土している。その分布傾向はカマド左側には甕類（20～22）、カマド右側には球胴の広口甕類（23・24）や小形甕（17）、小形壺（18）、鉢（17）があり、カマド手前には内黒坏（4～6・8～12）や高坏（15）、小型鉢（14）などが出土している状況である。これはカマド内の土器と合わせて、使用時の状態または住居廃棄の一形態と捉えられよう。坏は内面黒色処理が主体で、器形は底部が厚い半球形が大半である。他に底部内外面に稜を持ち、身部に横ハケが施されたもの（7）、浅い身部に外反する口縁部を持つ器形（6）、底部外面に僅かな稜を持って直立気味な身部を持つ器形（1・2）がある。高坏は半球形の坏部に長脚で裾が緩やかに開く器形（15）である。鉢は丸底の身部から緩やかに外反する器形（13・17）と頸部がやや細まる器形（16）がある。小型内黒鉢（14）は湯飲み茶碗に似る器形で、底部内面に朱が残っている。壺（20・21）は球形胴に直立する頸部から口縁部が開く器形である。また甕には広口の器形（23～26）と長胴甕（27～30）がある。出土状況からすると、広口甕が貯蔵用、長胴甕が煮沸用といえよう。他に石器で凹石（203）がある。

**時 期** 重複関係と土器の様相から、6世紀前葉～中葉としたい。




1：暗褐色土（砂質シルト）
2：黒褐色土（1層土に円礫、炭片含む）
3：暗褐色土（砂質シルト、焼土微小含む）
4：黒褐色土（2層土より小礫を多く含む）
5：暗褐色土（砂質シルト、住居周部崩落土）
6：黒褐色土（砂質シルト）
7：黒褐色土（カマド覆土、2層土に炭・焼土を含む）
8：暗褐色土（カマド煙道部覆土、全体に焼土含む）
9：黒褐色土（カマド覆土、7層土より炭・焼土増す）
10：黒褐色土（カマド袖構築土、粘土ブロックを含み被熱してしまる）
11：暗褐色土（カマド掘り方埋土、砂質シルト）

図98　411号住居跡

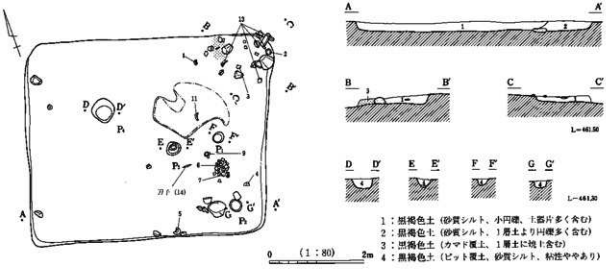



図99 412号住居跡

**412号住居跡**（図99） 位置 U－4

**検 出** Ⅳ層上面にて検出する。黒褐色の覆土と土器片が出土している状態で確認する。411住と4531坑を切る。覆土は河原礫や土器片を含む1層土と、1層土より河原礫を多く含む2層土と大きく2層に分けられる。

**構 造** 平面形態は長方形を呈する。壁は浅いが、垂直気味に掘り込まれている。床は自然面を敲き締めた床面の上に、一部には貼り床面が残る。この状態は二重の床なのか、貼り床面が剥落したものか不明である。ピットは4基確認する。いずれも円形で浅い。柱穴としてP2・4辺りが考えられる。

**カマド** 北東隅に1基付設される。ほとんど原型を止めないが、芯材の河原礫2点の他に、羽釜片や炭化物、焼土が広がる状態である。

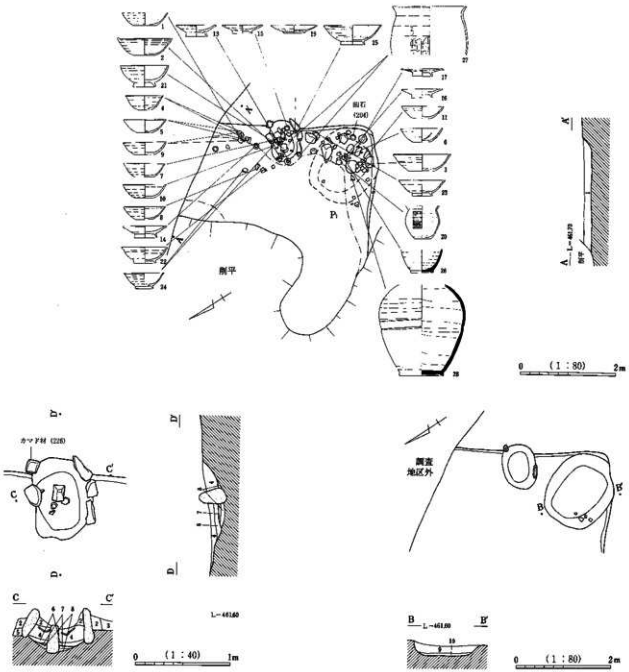
**遺 物** カマド付近や床面から坏（1～4）、内黒坏（5～7）、高台皿（9）、羽釜（13）が出土している。また刀子も床面上から出土している。坏は口径10cm程と小型で、4以外が底部回転糸切り未調整である。内黒坏は底部回転糸切り未調整で、内黒塊（8）は断面三角形の高台から直線的に開く身部を持っている。高台皿（9）は口縁部が極端に外反する。灰釉塊は大原2号窯式の特徴を持つ。羽釜は体部が寸胴の丸底で、鍔は口縁部下で一巡して、水平に伸び、上面がやや被さるようになる。調整は、底部外面には平行タタキ痕があり、内面には押え工具痕が見られる。なおカマド付近から鍛冶滓（22）、床上から刀子（14）、覆土から板状土製品（62）も出土している。

**時 期** 土器の特徴から、10世紀中頃～後葉とする。

**413号住居跡**（図100、PL22・23） 位置 U－4

**検 出** Ⅲb層の検出段階で、カマド袖石が露呈、周囲に平安時代の土器が散乱して見つかる。また北東部分は調査地区外のため、調査できない。北西側も検出状況が悪く、床面の広がりを掴んだだけである。覆土は浅く、黒褐色の粘性シルトの単層である。埋没過程は不明。411・435・438・440住を切る。

**構 造** 平面形態は方形か長方形と推定する。壁は浅く、斜めに掘り込まれる。床はカマド前を中心に堅緻な面が確認される。貼り床かどうかは不明である。ピットはカマド右、住居南隅床下に1基ある。平面楕円形で、長径165cm、深さ24cmを測る。10層に多量の土器片を包含する。床下で検出したが、明確に床下施設とは断定できない。




1：黒褐色土（粘性シルト）
2：にぶい黄褐色土（カマド覆土、堅くしまる砂質シルト、
　　構築土の崩落か）
3：にぶい黄褐色土（カマド覆土、2層土よりもろい）
4：黒褐色土（カマド覆土、シルト、粘性弱い）
5：灰黄褐色土（砂質土）

カマド掘り方とP1完掘状況

6：褐灰色土（カマド覆土、焼土を含む粘性シルト）
7：明赤褐色土（カマド火床、堅くしまる）
8：黒褐色土（カマド掘り方埋土、粘性シルト）
9：黒褐色土（ピット覆土、砂質シルト、土器片多く含む）
10：黒褐色土（ピット覆土、砂質シルト、粘性強い）

図100　413号住居跡

**カマド**　南東壁右寄りに1基付設される。燃焼部は僅かに壁から突出した楕円形に掘り窪め、火床面は床面より低い。両袖に芯材として礫を残している。その配置は右袖に礫を3点直列させ、左袖はやや原位置とずれて2点並んでいる。両袖とも最奥の礫は壁外に出ている。袖石の石材は河原礫のほか、左袖奥に角柱形に切り出した凝灰岩が使われている（図297－226）。支脚石は角礫で、火床最奥部に直立している。火

床は床面から5cmほど低く、その断面は浅い皿状で、掘り方の上に粘性シルトを貼って作っている。カマド覆土には多量の土器が投げ込まれている。また掘り方は燃焼部と袖部に見つかっている。

**遺 物** カマドとP1内から多量の土器が出土している。坏類は内黒坏が主体で、法量に大小があり、口径12.0~13.6／器高3.8~4.5の小形と17.6~18.3／5.3~5.4の大形とに分かれる。皿は全て高台が付き、内黒皿が主体である。塊は断面三角形の高めの高台が付き、口縁部が外反する器形（22・23）とそのまま立ち上がる器形（21）がある。小型甕（20）は外面カキ目調整の回転糸切り未調整の底部である。甕（27）はロクロ成形で体部が膨らむ器形である。また須恵器には大小の壺（26・28）があり、灰釉陶器は塊皿とも刷毛塗り施釉で光ケ丘1号窯式の特徴を持つ。土器以外には床面から土錘（11）、カマド付近から刀子（15）、覆土から凹み石（204）、丸瓦（4・5）、刀子（16）や棒状鉄製品（40）が出土する。

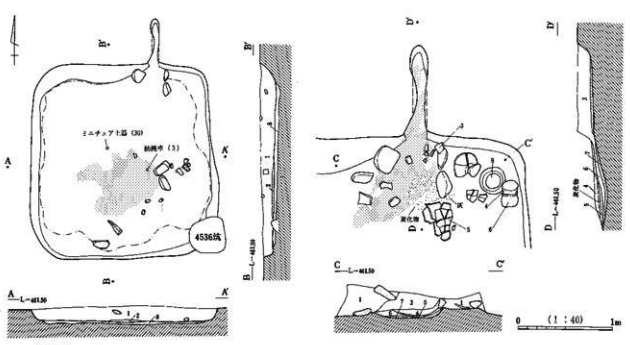
**時 期** 土器の様相から9世紀後葉と位置づける。

**414号住居跡**（図101、PL23） 位置 U－8

**検 出** Ⅳ層上面で黒褐色の落ち込みと煙道の被熱部分を確認する。4536坑に切られる。覆土は床面に燃焼面（2層）を持ち、その上部は1層の黒褐色の砂質シルトである。1層中には円礫が入る。またこの住居跡の床下から、やや規模を小さくするが、ほぼ同軸、同規模の437住が検出された。その状況から拡張・建て直しと判断した。

**構 造** 平面形態は正方形に近い、長方形を呈する。壁の東辺と南辺は比較的急角度に掘り込まれ、北と西辺は緩やかに傾斜する。床はほぼ全体に堅緻な貼り床がある。8層の黄褐色粘性シルトがよく敲き締められている。また床面中央には焼土が厚く溜まる。周辺には炭化材もみられ、何らかの焼失があったと考えられる。ピットや周溝は確認できない。

**カマド** 北壁の右寄りに1基付設される。右袖には芯材とした平坦な河原礫が2点縦列して残る。左袖に




1：黒褐色土（砂質シルト、円礫混入）
2：明赤褐色土（焼土層、床面中央に堆積）
3：黒褐色土（カマド覆土、1層土に焼土含む）
4：橙色土（カマド覆土、焼土ブロック層、炭あり）
5：にぶい赤褐色土（カマド上部の天床、被熱顕著）
6：灰黄褐色土（カマド覆土、二層の天床の崩壊、焼土散る）
7：赤褐色土（カマド天床、広く強く被熱）
8：にぶい黄褐色土（床貼形成層、粘性シルト、堅緻な状態）

図101 414号住居跡

は2点の礫が倒れている。礫以外の構築材はない。火床面は断面観察で2面確認される。地山面が直接被熱した面と、その上に間層（6層）を挟んで、もう1面ある。下面の火床の被熱は弱く、上面は非常に強い。上面の火床が頻繁に利用されたと考えやすく、下面の火床はカマド構築時の防湿を目的としていると推定する。煙道部は上部が消失するが、掘り込み式の形態である。上面の火床面から高さ5㎝の壁を掘り込んでいる。煙道は壁から1ｍ垂直に伸び、緩やかに傾斜して煙出口へ向かう。煙道口から80㎝に渡って底面と側面が被熱している。

**遺　物**　カマド右横に、高坏（3）、甑（4）、長胴甕（5）、小型甕（6）、壺（8）などが出土する。出土状況は、甑（4）が小型甕（6）の上に据えられた状態や壺（8）の上半部が正位に置かれる等、意図的な様相を示している。また、床面の焼土内から土製紡錘車（3）とミニチュア土器（30）が完形で出土している。床面出土の土器の特徴では、内黒高坏（2）は塊状で口唇部がやや外反する坏部を持ち、3は浅い塊状の坏部にハの字に開く脚部を持っている。また甑（4）は小型の多孔で、内面はハケ調整が施されている。小型甕（6・7）は丸底で口縁が外反する器形で共通するが、6は内面ハケ調整で、4と非常に似た胎土焼成であり、7は内黒処理されている。また壺（8）は球形の体部から直立して外反する口縁部を持つ器形で内外面共にミガキ調整である。覆土出土遺物ではＴＫ209型式の特徴の須恵坏があり、底部外面は手持ちヘラ削り調整されている。なおこの遺物は埋没過程の混入と考えたい。

**時　期**　土器の様相から、6世紀前葉～中葉としたい。

**415号住居跡**　　位置　Ｐ－24

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。攪乱の影響強く、遺存状況は非常に悪い。覆土はほとんどなく、床面が露出。413・435住と重複するが、調査時では新旧が不明である。遺物時期から435住を切り、413住に切られると判断する。

**構　造**　形状は不明。壁は極めて浅く、緩やかに立ち上がる。床は堅緻な貼り床で、黄褐色の砂質シルトを薄く掘り方に貼って敲き締めている。ピットは3基確認。カマド火床部両側に2基あり、カマド石の据え穴と推定する。もう一つは床面南側にあり、径60㎝の円形で、断面は半円形を呈する。掘り方は浅く掘られている。

**カマド**　明確ではないが、北側の地区境に焼土の集中があり、その下に床面が焼ける火床部状の燃焼部を確認する。

**遺　物**　奈良時代の長胴甕が出土している。

**時　期**　土器から奈良時代8世紀とする。

**416号住居跡**　　位置　Ｕ－1

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。南側大半が調査地区外に出る。検出段階で焼土分布と床面が露出する。覆土はほとんど残らない。402溝を切る。

**構　造**　調査部分で判断する。平面形態は隅のやや丸い方形を呈する。壁はほとんどない。東壁で床面差7㎝未満で残る。床には東西の壁際を除いて堅緻な貼り床が残る。ピットは4基確認する。主柱穴はＰ1・3と考える。Ｐ2は平面楕円形で土器片が入る。Ｐ4は浅く、用途不明である。

**カマド**　北壁左寄りに1基付設されていたと推定する。検出時には焼土分布しか残らない。

**遺　物**　出土量は少ない。Ｐ2から長胴甕（1）が出土している。

**時　期**　重複関係と土器から6世紀後半～7世紀代とする。

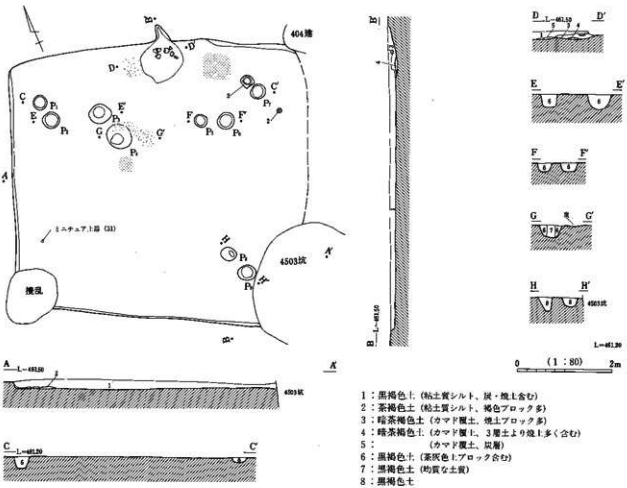



図102 417号住居跡

**417号住居跡**（図102） 位置 U－9

**検 出** Ⅳ層上面。他遺構と重複するが、東辺以外の3辺が明確になり、住居跡と認定する。420・430・441住、4556坑を切り、4503坑、404建に切られる。覆土は黒褐色の砂質シルトの単層である。埋没過程は不明である。

**構 造** 平面形態はほぼ方形を呈する。壁は北辺の残りがよく、深さ14cm。傾斜は緩やかである。床は比較的堅緻であるが、貼り床ではない。ピットは9基確認され、そのうちP1・2・7・8・9が柱穴に関係すると思われる。

**カマド** 北壁中央に1基付設される。遺存状態は悪い。燃焼部は浅く窪み、焼土が散るだけである。煙道部は僅かに残り、北壁に垂直に伸びる。

**遺 物** P7付近床面から、須恵器の擂り鉢（2）、甕（3）が出土し、西壁際からミニチュア土器（31）、その他に羽口（4）が出土している。須恵坏（1）は底部外面にタタキ痕が残る。また擂り鉢（2）は底部が板状で厚く、外面に多数の刺突痕文があり、2の甕は肩が張る体部で、細い頸部に、強く外反する口縁部を持つ。

**時 期** 土器から奈良時代、8世紀代とする。

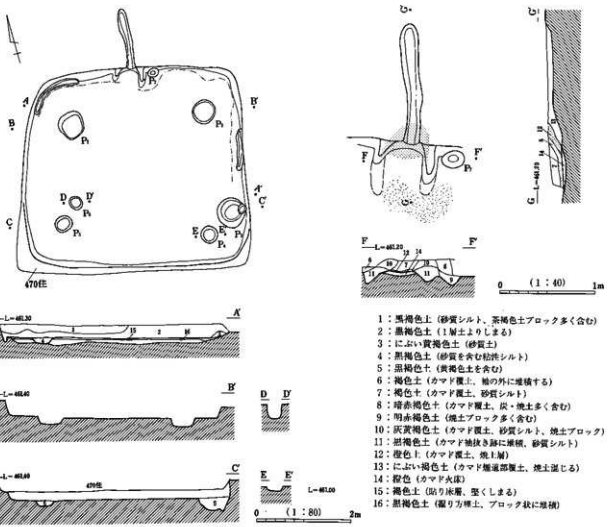



図103　418号住居跡

**418号住居跡**（図103）　　位置　U－2

**検　出**　Ⅳ層上面で煙道部が露出。そこから住居跡を確認。南半分は平成7年度に調査を継続する。本跡上に470住が同軸・同規模で重複する。遺物に大きな時間差はないが、北側では470住が検出できていないため、関連性は不明である。覆土は2層に分かれ、1層より2層がよく締まる。自然埋没と考える。

**構　造**　平面形態は横長の長方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれ、深さ40cmと深い。床は堅緻な床面が全体に広がる。周溝は幅10cm程で、部分的に北西隅と東壁一部にある。ピットは6基確認する。位置と深さからP1・2・3・6が主柱穴とし、4本柱でほぼ方形配列である。P7はカマド右にある小穴で、焼土ブロックが溜まる。貼り床下に掘り方があり、ブロック状に堆積する埋土（16層）がある。

**カマド**　北壁中央に1基付設される。袖には構築材（10層）が焼き崩れて残り、その下に芯材の抜き取り痕がある。火床部は煙道部側で40cm程赤化している。焚き口部周辺の床には炭化物が分布する。煙道部の上部は削平されるが、掘り抜き式で北壁から直角に伸び、底面は水平で現存長120cmを測る。

**遺　物**　床面出土の遺物は少ない。覆土からカエリのある須恵坏蓋（1）、TK209型式の須恵坏（2）、坏部がやや外側に開く内黒坏（3）、体部をヘラケズリして、比較的薄く仕上げた小型甕（4）などが出土している。

**時　期**　土器の様相と重複関係から、7世紀中頃～後葉と考えたい。

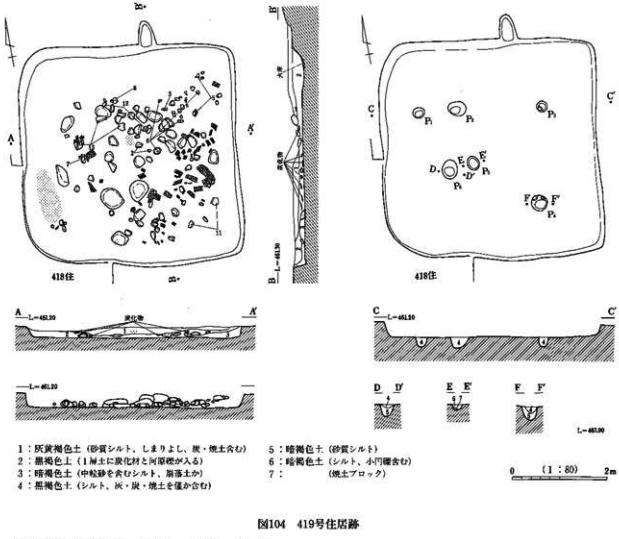



図104 419号住居跡

**419号住居跡**（図104、PL23） 位置 U－2

**検 出** Ⅳ層上面で検出する。418住に切られる。住居中央（覆土2層）には大小の偏平な亜円礫や土器片、炭化物が広く重なり合って分布している。壁際の下には間層（3層）があることから、住居廃絶後に僅かな時間差を持って短期間に投棄されたものと理解する。また炭化物と焼土の分布から同時期に木材も燃やされているといえる。なお最上部の1層は自然埋没である。

**構 造** 平面形態は北西と南西隅が丸みを帯びる方形である。壁は垂直に掘り込まれ、深さ30cmを測る。床は比較的堅緻であるが、貼り床ではない。ピットは6基確認する。いずれも小規模で規則的ではないがP2・3・4・6辺りが主柱穴だろうか。

**カマド** 北壁やや右寄りに1基付設される。床面上に地山の被熱する火床部と壁上部から50cm直角に伸びる煙道部が残る。煙道部は上部が削られ、断面は半円形である。これ以外に痕跡はない。丁寧に片付けられたようである。

**遺 物** 中央の覆土2層に投棄された土器は破片が大きく、接合する個体が多い。提瓶（6）は4か所に散乱している。まさに意図的に投げ捨てた印象が強い。土器の様相は、体部が直立気味の須恵坏（1）、底部が平底気味で口縁部に向かって開く器形の内黒坏（2～4）、丸底の内黒鉢（5・7・8）、小形の甕や壺（9～11）、球形胴の甕（12・13）である。また6の提瓶は鈎状で先端の尖る把手が1対付いている。

**時 期** 投棄された土器の大方の様相から、6世紀前葉～中葉としたい。これは新旧関係にある418住とも整合してくる。住居廃絶との時間差は僅かあるが、住居時期と大きくは違わないだろう。

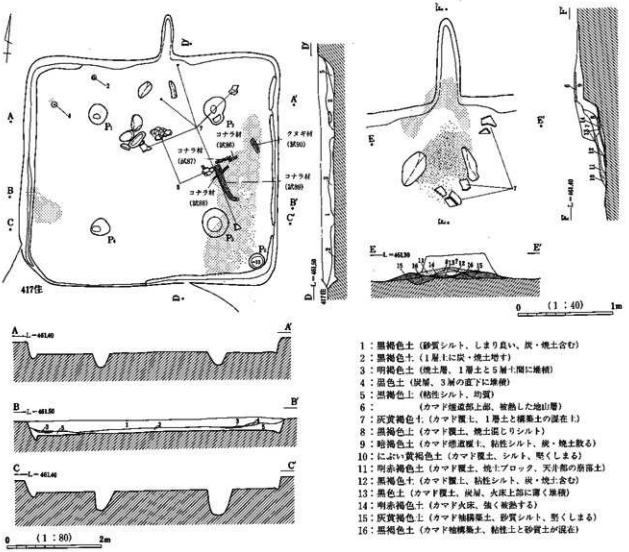



図105　420号住居跡

**420号住居跡**（図105、PL24）　位置　U－9

**検　出**　Ⅳ層上面で、南北に伸びる煙道部を確認。他遺構と重複する住居跡と認識する。417住に切られる。覆土は1層下に堅い面があり、そこに焼土と炭化物が入っている。当初床面と理解したが、本来の床面はその下にあるため、2層土の堆積後、木材が燃やされて、その後1層土が堆積したと思われる。

**構　造**　平面形態は横長の長方形を呈する。壁はほぼ急峻に掘り込まれ、深さは30cmを測る。床は貼り床はなく、地山部分を敲き締めた堅緻な面が確認されている。周溝は全周しないが、壁の直下に西壁全体から南壁東半分にかけてと、北壁西隅から西壁全体にかけての2か所にある。深さは5～10cmで断面はU字状である。ピットは5基確認される。P1～4は方形に配列され、4本柱の主柱穴といえる。また南東隅に小規模なP5があるが性格は不明である。

**カマド**　北壁のほぼ中央に1基付設される。燃焼部の天井は破壊されて、被熱して脆くなった構築土が焼土となって堆積している。また両袖壁際には使用時の状態を残した構築土が被熱している。袖芯材の偏平な河原礫もややずれて1対残る。それ以外の芯材はカマド前の床面に土器片と共に廃棄されている。火床部は壁際から長径60cmに渡って不整楕円形にある。地山に粘性のある砂質シルトを貼って浅い窪みを作っ

て火床に用いている。火床部焼土の上には燃えかすの炭層と天井部の被熱崩落土が順に堆積する。煙道部は掘り抜き式で上半部は削られていて残らない。壁際の地山部分は袖構築土同様に被熱している。煙道口は火床面から高さ22cmのところに、径20cmの横長の楕円形に開口する。煙出口は不明である。残存する状態では、長さ86cm、幅は壁際で30cm、先端で15cmと細まる。煙道口からは水平に近い角度で緩やかに傾斜している。煙道部の覆土には炭化物や焼土が混じるが、煙道部は被熱していない。

**遺　物**　床面から内黒坏（2）、小型壺（4）、長胴甕（7・8）等が出土している。坏には半球形のもの（2・3）と底部外面に稜を持つもの（1・4）があり、長胴甕は寸胴で、底部が突出気味である。他に羽口（5・6）や縄物石（84~95）が出土している。

**化学分析**　床面に残る炭化材を同定した結果、コナラとクヌギであることが判明した（付章第1節参照）。

**時　期**　土器から古墳時代後期、6世紀中頃~後葉頃かと考えられる。

**421号住居跡**（図106、PL24）　位置　U－20

**検　出**　IV層上面で検出する。423住、404建、4517坑を切り、4502坑に切られる。覆土は黒褐色土の砂質シルトの単層である。均質な性状で、自然埋没と考えられる。

**構　造**　平面形態は方形を呈する。壁は全体に浅く、北東の壁は緩やかに、南西壁は急傾斜に掘り込まれている。壁高12cmを測る。床は壁際を除いて堅緻な貼り床が広がる。掘り方を埋めた砂の混じる粘性シルトの上面が敲き締められている。ピットは3基確認し、いずれも浅いが主柱穴と考える。カマド前の東隅のみ柱穴はない。床下には深さ10cm弱の平坦な掘り方がある。

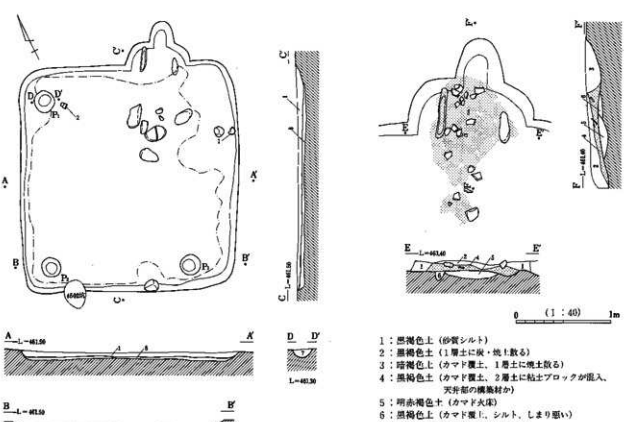



図106　421号住居跡

**カマド**　北壁右寄りに1基付設される。燃焼部は壁を半円形状に掘り込んで作られている。燃焼部上には被熱構築土が覆い、土器片も散乱している。左袖には芯材の抜き取り跡が残り、右袖には芯材らしい偏平で長い河原礫が床から浮いた状態で確認されている。またカマド前の床面には右袖同様の河原礫が数点あり、芯材の廃棄と考えられる。火床部は両袖の間、住居壁から突出する位置にある。赤褐色に地山が被熱している。煙道部としては、掘り方から更に半楕円形に50cm突出して掘り込まれた部分があり、その部分が名残であると思われる。被熱はないが焼土ブロックが混在し、火床面との比高差はない。太くて短いタイプ。

**遺　物**　カマド内や床面から土器片が出土するが、量は少なく、破片である。丸底の内黒坏（1）、全く肩に張りがなく、寸胴でやや薄手の長胴甕（2）、口縁部がくの字に屈曲する東信型の甕（3）がある。

**時　期**　土器から7世紀中葉～8世紀初頭とする。

**422号住居跡**　　位置　V－6

**検　出**　調査区周囲に設けた確認トレンチで、Ⅳ層面から陥ち込む黒褐色土と、それに合う床面が確認されたため住居跡と確認。423住を切る。大半が調査地区外にある。

**構　造**　平面形態は方形と考える。壁は残りが悪く、西壁で壁高10cmを測る。床は423住覆土部分に褐色シルトを貼って作る。それ以外は地山を直接敲き締めている。調査地区内ではカマドは確認できない。

**遺　物**　図化できる資料はない。奈良時代の土器が主体である。

**時　期**　土器と住居軸方向から、奈良時代と考えられる。

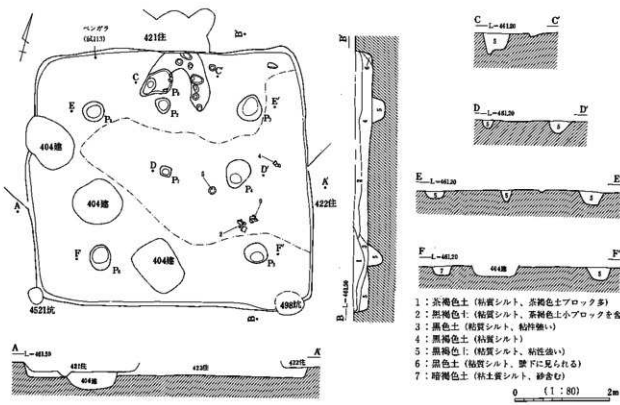



図107　423号住居跡

**423号住居跡**（図107）　　位置　U－10

**検　出**　Ⅳ層上面で、他遺構と重複して確認。調査の結果、421・422住、404建、498坑に切られる。覆土は6層に分けられ、基本的に自然埋没と考えるが、北側の堆積と南側の堆積に相違がある。

**構　造**　平面形態は方形を呈する。壁は垂直に近く掘り込まれ、深さは40cmある。床は堅緻な部分が東壁から中央に広がる。地山の敲き締めた状態といえる。ピットは7基あり、主柱穴はP1・3・5・6の方形配列であるが、P3・5の柱間にあるP4も柱穴と思われる。カマド前のP2はカマドに関連すると推測する。P7は住居中央にある平面方形の小ピットであり、性格は不明である。

**カマド**　北壁の中央に1基付設される。しかし、火床部と袖の掘り方が残るだけである。421住カマドの下にあることから、421住構築時に整理された可能性がある。

**遺　物**　床面に土師器片が散乱している。土器には有段口縁坏（1）、丸底の坏（2～4）、内黒坏（5・6）、無頸で小形の内黒鉢（8）、小形甕（9・10）、偏球形で外反する口縁の内黒鉢（11）等がある。

**化学分析**　内面にタール状の黒色物質が付着した坏（7）は、穀物などのオコゲと化合物の状態が近いとされる（付章第1節参照）。

**時　期**　土器の様相と重複関係から、古墳時代後期、6世紀後葉と考える。

**424号住居跡**（図108、PL25）　位置　V－11

**検　出**　Ⅳ層上面にて、他の遺構と重複して黒色の陥ち込みとして検出する。カマドも被熱部分から確認される。425・426・428住を切り、4529坑に切られる。覆土は黒褐色の粘性シルトの単層である。全体に均質で、自然埋没と考える。

**構　造**　平面形態は横長の方形である。壁は浅いが垂直に掘り込まれている。床は中央部に堅緻な面があるが壁際では不明瞭になる。ピットは確認できない。

**カマド**　北東壁のやや右寄りに1基付設される。方形の土坑状に住居の外側に張り出す。袖や支脚などの施設は残らず、火床が全面に広がる。カマドの覆土も焼土粒を少量含む黒褐色土の単層である。カマド周囲床に河原礫が散っている。

**遺　物**　量は少ない。須恵器の高台坏（1・2）が図化される。そのうち2は硯に転用されている。

**時　期**　奈良時代、8世紀後半である。

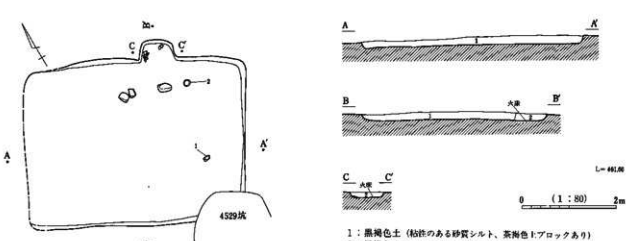



図108　424号住居跡

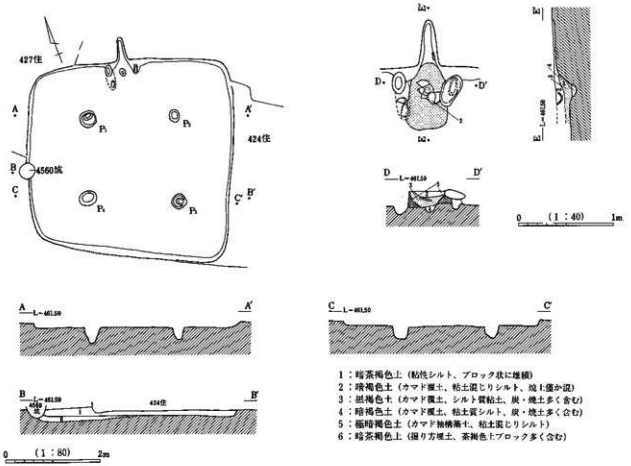



図109　425号住居跡

**425号住居跡**（図109、ＰＬ25）　位置　Ⅴ－11

**検　出**　Ⅳ層上面にて検出する。他の遺構と共に黒色土の陥ち込みとして確認する。調査の結果、426・428住を切り、424・427住、4560坑に切られる。覆土は粘性シルトで粘性が強い。状況から緩やかな土砂の流入で自然埋没したと考えられる。

**構　造**　隅がやや丸い方形の平面形態をなす。西隅がやや歪む。壁は垂直に掘り込まれるが、深さは10cm程と浅い。床は堅くはなっているが、貼り床ほど堅緻ではない。ピットは４基確認され、規模や深さがほぼ均一で、いずれも主柱穴と思われる。４本柱の方形配列を作る。

**カマド**　北壁の中央に１基付設される。住居検出時に煙道部が検出される。遺存状態は悪く、火床部と袖の構築材の河原礫が検出されている。礫はカマド両側から検出され、左側は小さい礫が２点で、右側は大きな礫が１点である。右の礫は床面より浮いた状態で礫の下はピットが検出された。本来はこのピットに埋置されていたと考えられる。左側の同位置にも小ピットがある。また火床部内の中央やや奥には、支脚石の抜け跡と思われる小ピットがある。煙道部は軸線からやや右に傾いて44cm残る。掘り抜き式で上半部は削られている。底面はほぼ水平に伸びている。

**遺　物**　カマド内から土器が少量出土している。尖り気味の丸底の内黒坏（1）、半球形の坏に裾がやや開く脚部を持つ内黒高坏（2）がある。

**時　期**　土器の様相と重複関係から７世紀中葉～８世紀初頭と考える。

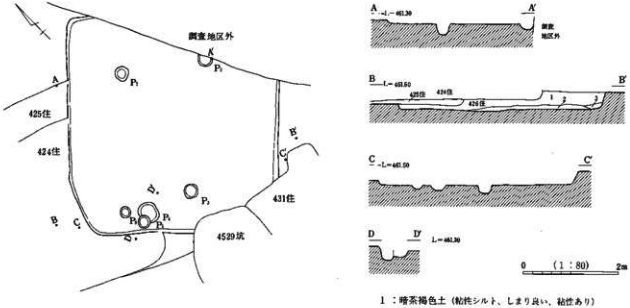



図110 426号住居跡

**426号住居跡**（図110） 位置 V－11

**検 出** 東側の重複関係のない部分は、IV層上面で検出する。それ以外は他の重複する遺構の調査後に形状を確認する。北東隅が調査地区外に出る。428住を切り、424・425・431住、4529坑に切られる。覆土は粒子が細かく、粘性のある暗茶褐色土（1層）下に、茶褐色土ブロックを含む2層が床面まで覆う。この層界は比較的堅かったが、その成因は不明である。

**構 造** 平面形態は方形である。壁は東壁が壁高25cm程に明瞭に残り、垂直に掘り込まれている。他の壁は重複関係のため、よく分からない。床は全体に堅く踏み固められているが、南壁際では堅緻ではない。ピットは床上で5基、床下で1基確認する。P1・2が柱穴の可能性がある。他のピットの性格は不明である。カマドは調査地区外の北壁中央部分に所在すると思われる。

**遺 物** 少なく、図化資料はない。

**時 期** 428住（6世紀前半）を切り、425住（7世紀中葉～8世紀初頭）に切られることから6世紀後半～7世紀前半頃と位置づけたい。

**427号住居跡**（図111） 位置 U－15

**検 出** IV層上面にて他遺構と重複して検出。確認段階で、北東壁にカマドを確認する。425・428・429住を切り、4507坑に切られる。覆土は締まりの良い茶褐色の砂質シルトの単層である。

**構 造** 平面形態は方形を呈する。壁は非常に浅く、北東壁で15cm程の深さである。床はカマド付近は堅く締まるが、他はそれほど堅緻ではない。ピットは6基確認し、そのうちP1～3・5は主柱穴であろう。4本柱で整然と方形に並ぶ。規模は皆同じ位であるが、P2のみ有段で深い。

**カマド** 北東壁中央に1基付設される。北側が攪乱されている。両袖には河原礫が残る。右側が2点、左側が1点である。その中央には火床部があり、強く被熱している。煙道部はない。

**遺 物** 量は少ない。須恵器の坏（1）、高台坏（2）、小形甕（3）、大形甕（4）、ミニチュア土器（32）が出土している。坏にはいずれも底部外面にヘラ記号がある。甕は器形が良く似て、広口の短胴で、丸底である。内面は磨かれている。

**時 期** 土器の様相から奈良時代、8世紀前半といえよう。

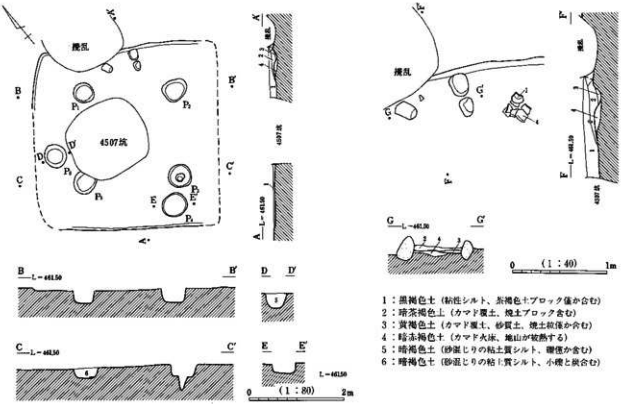



図111　427号住居跡

**428号住居跡**（図112）　　位置　V－11

**検　出**　Ⅳ層上面で検出。東側が調査地区外に出る。425～427住に切られる。覆土は黒褐色の粘性シルトで茶褐色や灰褐色のブロックを少量含む。

**構　造**　残る部分から、平面形態は方形と判断する。壁は深さ15cmと浅いが垂直に掘り込まれる。床は堅く踏み固められている。周溝は北隅から南西壁下に検出される。深さは10cm程と浅い。ピットは5基確認され、配置からP1・4が柱穴の可能性がある。カマドは調査地区内では検出されていない。

**遺　物**　出土遺物は少ない。土器は全て破片である。図化したのは全て土師器坏（1～4）で、口縁部が直立するもの（1・3）と口唇部は外反するもの（2・4）がある。

**時　期**　土器と重複関係から、古墳時代後期6世紀前半と考える。

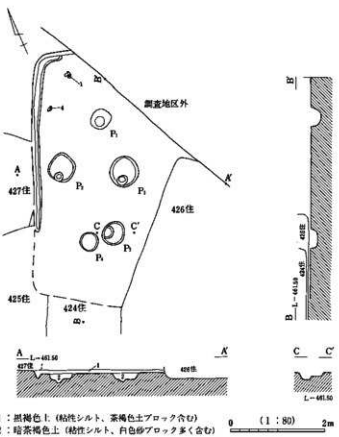



図112　428号住居跡

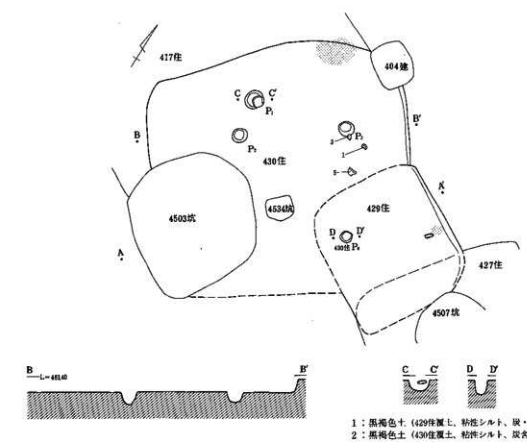



図113 429号・430号住居跡

**429号住居跡**（図113） 位置 U－25

**検 出** 重複する遺構の調査中に、竪穴状の遺構を検出する。430住を切り、427住、4507坑に切られる。覆土は黒色の粘性シルトの単層である。

**構 造** 重複関係から不明確であるが、小型の方形を呈すると推定する。壁は10cmと浅い。床として明確に認識できない。ピットは不明である。北東壁下に直径20cm程の焼土範囲があり、その手前に河原礫が残っている。覆土から鍛冶滓（23）が出土しているが、鍛冶炉跡ともカマドとも判断つかない。

**時 期** 430住（7世紀中葉～8世紀初頭）を切り、427住（8世紀前半）に切られることから、8世紀前後と考えざるを得ない。

**430号住居跡**（図113） 位置 U－15

**検 出** 417住の調査中に確認。検出面はⅣ層上面である。417・429住、404建、4503坑に切られる。4534坑との新旧関係は不明である。覆土は黒褐色の粘性シルトである。

**構 造** 隅がやや丸い方形の平面形態である。壁は残りの良い北東辺では壁高が30cmあり、傾斜を持って掘り込まれている。床はそれほど堅緻ではない。ピットは4基確認され、そのうちP2～4が主柱穴と考えられる。いずれも規模・深さとも均一である。カマドは検出されないが、北東隅部分で焼土が50×80cm程広がり、床面も被熱している。状況からこの部分にカマドがあったと思われる。